

流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書4

— 流山市中中屋敷遺跡 —

平成 29 年 3 月

千葉県教育委員会

流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書4

ながれやま　なかなかやしき
— 流山市中中屋敷遺跡 —



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成 25 年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 20 集として、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市中中屋敷遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査では、旧石器時代の石器集中ブロック、縄文時代早期及び前期の竪穴住居跡や炉穴、土坑、中・近世の屋敷跡など地域の歴史を知る上で貴重な成果を数多く得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成 29 年 3 月

千葉県教育委員会
文化財課長 永沼 律朗

凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、千葉県流山市中字中屋敷に所在する中中屋敷遺跡（遺跡コード 220-034）の第1次から第13次までの成果を収録している。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、平成24年度まで公益財団法人千葉県教育振興財团が実施し、平成25年度からは千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章に掲載した。
- 5 本書の執筆は、以下の通りである。編集は安井が行った。

第1章、第3章、第5章第1節　主任上席文化財主事　安井健一

第2章　主任上席文化財主事　田島　新

第4章、第5章第2節　主任上席文化財主事　糸原　清

- 6 中・近世土坑から出土した人骨の分析・同定については渡辺　新氏に依頼し、成果を掲載した。

- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで以下の機関及び方々からご指導、ご協力をえた。

千葉県県土整備部市街地整備課・流山区画整理事務所、流山市教育委員会、公益財団法人千葉県教育振興財团

井上哲朗、小笠原敦子、小高春雄、北澤　滋、米谷　博、西野雅人、服部智至

- 8 本書で使用した地図の座標値は、日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方針はすべて座標北である。

- 9 本書で使用した地形図は下記の通りである。

第1・2・11・42・80図　流山市発行　1/2,500　流山市都市計画地図

第9・114図　参謀本部陸軍部測量局作成　1/20,000　迅速測図「流山村」

第10図　国土地理院発行　1:25,000「流山」(NI-54-25-1-2)・「松戸」(NI-54-25-2-1)　平成17年発行

- 10 図版1で使用した航空写真（遺跡周辺航空写真）は、昭和48年に京葉測量株式会社が撮影したものである。

【遺構種別記号】

SB：掘立柱建物跡 SD：溝状遺構、区画整形遺構 SE：井戸 SF：炉穴 SH：ピット

SI：竪穴住居跡 SK：土坑、陥穴、地下式坑 SX：焼土遺構

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 調査の方法と調査概要.....	4
第2節 遺跡の位置と環境.....	14
1 遺跡の地理的環境.....	14
2 周辺の遺跡と歴史的環境.....	14
第2章 旧石器時代の遺構と遺物.....	25
第1節 概要.....	25
第2節 遺構と遺物.....	27
1 第1文化層.....	27
2 第2文化層.....	27
3 第3文化層.....	27
4 第4文化層.....	28
5 第5文化層.....	60
6 時期不明.....	60
第3章 繩文時代の遺構と遺物.....	61
第1節 概要.....	61
第2節 遺構と遺物.....	61
1 竪穴住居跡.....	61
2 炉穴・焼土遺構.....	76
3 土坑・ビット.....	90
4 隕穴.....	110
5 遺構外出土遺物.....	113
(1) 繩文土器・土製品.....	113
(2) 繩文時代石器・石製品.....	118
第4章 中・近世の遺構と遺物.....	123
第1節 概要.....	123
第2節 遺構と遺物.....	123
1 地下式坑.....	123
2 方形竪穴遺構.....	128
3 大形土坑.....	130
4 土坑.....	134
5 井戸.....	144

6	溝状遺構	147
7	掘立柱建物跡・ピット群・ピット	153
8	(2)調査区遺構外出土中・近世遺物	159
9	(4)調査区遺構外出土中・近世遺物	163
10	(10)(12)調査区遺構外出土中・近世遺物	163
11	遺構外出土古代遺物	163
	第5章 まとめ	170
	第1節 縄文時代	170
1	遺構の時期と特徴	170
2	遺構群の変遷	172
	第2節 中・近世	173
1	遺構について	173
(1)	土坑	173
(2)	地下式坑	174
2	遺物について	174
3	遺構群の性格について	176
(1)	(2)調査区	176
(2)	(4)本調査区	176
(3)	(10)O50・P50調査区	177
(4)	その他の調査区	177
4	地域史の中での位置づけ	177
(1)	13世紀～14世紀	177
(2)	長福寺と(2)調査区2トレーン一括資料	178
(3)	15世紀～16世紀と18世紀～19世紀前半の屋敷地について	180
(4)	まとめ	181

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 流山運動公園周辺地区土地区画整理事業 地内遺跡	2	第23図 第4文化層第2ブロック疊分布（1）	35
第2図 中中屋敷遺跡の調査次別範囲と地形	3	第24図 第4文化層第2ブロック疊分布（2）	36
第3図 上層確認調査トレンチ配置及びグリッド 配置	5	第25図 第4文化層第2ブロック疊分布（3）	37
第4図 下層確認調査トレンチ配置	6	第26図 第4文化層第2ブロック疊分布（4）	38
第5図 上層遺構全体図（1）	7	第27図 第4文化層第2ブロック出土遺物（1）	39
第6図 上層遺構全体図（2）	8	第28図 第4文化層第2ブロック出土遺物（2）	40
第7図 上層遺構全体図（3）	9	第29図 第4文化層第2ブロック出土遺物（3）	41
第8図 上層遺構全体図（4）	10	第30図 第4文化層第2ブロック出土遺物（4）	42
第9図 遺跡の立地と周辺の地形	15	第31図 第4文化層第2ブロック出土遺物（5）	43
第10図 遺跡の位置と周辺の遺跡	22	第32図 第4文化層第2ブロック出土遺物（6）	44
第11図 旧石器時代遺物出土状況全体図	24	第33図 第4文化層第2ブロック出土遺物（7）	45
第12図 基本土層	25	第34図 第4文化層第2ブロック出土遺物（8）	46
第13図 第1文化層単独出土遺物分布・出土遺物	28	第35図 第4文化層第2ブロック出土遺物（9）	47
第14図 第2文化層単独出土遺物分布・出土遺物	29	第36図 第4文化層第2ブロック出土遺物（10）	48
第15図 第2文化層単独出土遺物分布	29	第37図 第4文化層第2ブロック出土遺物（11）	49
第16図 第3文化層第1ブロック出土遺物分布 ・出土遺物	30	第38図 第4文化層単独出土遺物・出土遺物	57
第17図 第3文化層第2ブロック出土遺物分布	30	第39図 第4文化層単独出土遺物	57
第18図 第3文化層単独出土遺物分布・出土遺物	30	第40図 第4文化層単独出土遺物分布	58
第19図 第4文化層第1ブロック出土遺物分布 （1）	31		
第20図 第4文化層第1ブロック出土遺物分布 （2）・出土遺物	31		
第21図 第4文化層第2ブロック出土遺物分布 （1）	33		
第22図 第4文化層第2ブロック出土遺物分布 （2）	34		

第41図	第5文化層単独出土・時期不明出土遺物	第73図	(10)SH013・014・016・017ピット	111
	59
第42図	縄文時代遺構全体図	第74図	(6)SK001陥穴	111
	62
第43図	(10)SI007住居跡、出土遺物	第75図	(9)SK001・(10)SK048陥穴、出土遺物	112
	63
第44図	(10)SI008住居跡、出土遺物	第76図	遺構外出土土器（1）	115
	65
第45図	(10)SI009A・B住居跡、出土遺物	第77図	遺構外出土土器（2）、土製品	117
	67
第46図	(10)SI011A・B住居跡、出土遺物	第78図	遺構外出土縄文時代石器（1）	119
	69
第47図	(10)SI019住居跡、出土遺物	第79図	遺構外出土縄文時代石器（2）、石製品	121
	69
第48図	(10)SI036住居跡		71
	71
第49図	(10)SI036住居跡出土遺物（1）	第80図	中・近世遺構全体図	124
	73
第50図	(10)SI036住居跡出土遺物（2）	第81図	中世地下式坑（1）	126
	74
第51図	(10)SI036住居跡出土遺物（3）	第82図	中世地下式坑（2）	127
	75
第52図	(4)SF002～005・009炉穴、出土遺物	第83図	中世地下式坑（3）	129
	77
第53図	(4)SF014・(9)SF004炉穴、(9)SX001・002 ・(13)SX001焼土遺構、出土遺物	第84図	中世方形竪穴遺構	131
	79
第54図	(9)SF004出土貝種組成グラフ	第85図	中・近世大形土坑	132
	81
第55図	(9)SF004出土マガキ殻長グラフ	第86図	中・近世土坑（1）	133
	81
第56図	(10)SF031炉穴、出土遺物	第87図	中・近世土坑（2）	135
	82
第57図	(10)SF032・034炉穴、出土遺物	第88図	中・近世土坑（3）	137
	83
第58図	(10)SF039・044炉穴、出土遺物	第89図	中・近世土坑（4）	138
	85
第59図	(10)SF041炉穴、出土遺物	第90図	中・近世土坑（5）	140
	87
第60図	(10)SX016・025・026・028・029・037 ・038・046焼土遺構、出土遺物	第91図	中・近世土坑（6）	141
	88
第61図	(5)SK001～006土坑	第92図	中・近世土坑（7）	143
	91
第62図	(5)SK007～011土坑、出土遺物	第93図	中・近世井戸	145
	93
第63図	(5)SK012～016土坑、出土遺物	第94図	中・近世溝状遺構（1）	146
	95
第64図	(5)SK017～022土坑	第95図	中・近世溝状遺構（2）	148
	97
第65図	(5)SK026土坑、出土遺物	第96図	中・近世溝状遺構（3）	149
	98
第66図	(9)SK003・005土坑、出土遺物	第97図	中・近世溝状遺構（4）	151
	99
第67図	(10)SK010・015土坑、出土遺物	第98図	中・近世掘立柱建物跡（1）	152
	101
第68図	(10)SK014・018土坑、出土遺物	第99図	中・近世掘立柱建物跡（2）、ピット群	154
	103
第69図	(10)SK020・022土坑	第100図	中・近世掘立柱建物跡（3）	155
	104
第70図	(10)SK020・022土坑出土遺物	第101図	中・近世ピット（1）	156
	105
第71図	(10)SK021・023・024土坑、出土遺物	第102図	中・近世ピット（2）	157
	107
第72図	(10)SK027・033・043・045・047土坑	第103図	(2)調査区遺構外出土中・近世遺物（1）	160
	109
				161
				161

第105図 (2)調査区遺構外出土中・近世遺物 (3)	162	第110図 中・近世土坑平面規模散布図	173
.....		第111図 (4)本調査区土坑分類平面図	175
第106図 (4)調査区遺構外出土中・近世遺物	164	第112図 (4)本調査区中世遺物出土遺構・グリッド分布	175
.....		第113図 (10)O50・P50～(10)T49調査区土坑分類平面図	175
第107図 (10)(12)調査区遺構外出土中・近世遺物	165	第114図 市野谷々津周辺集落と関連寺院	179
.....		
第108図 遺構外出土古代遺物	165	
.....		
第109図 (10)調査区縄文時代遺構時期別分布	171	
.....		

表 目 次

第1表 中中屋敷遺跡(1)～(13)調査一覧表	4	第12表 第4文化層第2ブロック出土礫属性表	
第2表 中中屋敷遺跡上層遺構一覧表	11	52
第3表 周辺遺跡一覧表	23	第13表 第4文化層単独出土石器属性表	57
第4表 文化層・ブロック別石器・礫・石材組成表	26	第14表 第5文化層単独出土石器属性表	60
第5表 第1文化層単独出土石器属性表	28	第15表 時期不明石器属性表	60
第6表 第2文化層単独出土石器・礫属性表	28	第16表 (9)SF004出土貝種類名一覧	81
第7表 第3文化層出土石器属性表	29	第17表 (9)SF004出土貝類同定結果	81
第8表 第3文化層出土礫属性表	29	第18表 縄文時代石器属性表	122
第9表 第4文化層第1ブロック出土石器属性表	32	第19表 中・近世ビット計測表	158
.....		第20表 中・近世陶磁器・土器一覧	166
第10表 第4文化層第1ブロック出土礫属性表	32	第21表 古代土器一覧	168
.....		第22表 中・近世土製品計測表	169
第11表 第4文化層第2ブロック出土石器属性表	50	第23表 中・近世石製品計測表	169
.....		第24表 錢貨計測表	169

図 版 目 次

図版1 遺跡周辺航空写真	(4)上層遺構検出状況 (1)
図版2 (4)調査前 (1)	(4)上層遺構検出状況 (2)
(4)調査前 (2)	図版3 (10)SI007
(4)調査前 (3)	(10)SI008
(4)調査前 (4)	(10)SI009
(9)下層本調査状況	(10)SI011
(10)下層本調査状況	(10)SI019

(10)SI036遺物出土状況	(10)SK018
(10)SI036	(10)SK020・022
(4)SF002・003・004	(10)SK021
図版4 (4)SF005	(10)SK023
(4)SF009	(10)SK024
(4)SF014	(10)SK043
(9)SF004具ブロック検出状況	図版9 (10)SK045
(9)SF004	(10)SK047
(13)SX001	(10)SH014
(10)SF031遺物出土状況	(10)SH016
(10)SF031	(10)SH017
図版5 (10)SF032遺物出土状況	(6)SK001
(10)SF032	(9)SK002
(10)SF034	(10)SK048
(10)SF039	図版10 (2)SK001
(10)SF041	(2)SK002
(10)SX037	(4)SK007
(10)SX038	(4)SK008
(5)SK001	(4)SK010・011
図版6 (5)SK002	(4)SK012
(5)SK003・004・013	(4)SK013
(5)SK005	(4)SK016・017・019・020・021、
(5)SK006	(4)SH018・038・040・043・067・068
(5)SK007	・075～079
(5)SK008	図版11 (4)SK046・064、(4)SH056
(5)SK009・010・011	(4)SK087、(4)SH088・089
(5)SK012	(4)SK090～092・094
図版7 (5)SK014・015	(4)SK093・095・096
(5)SK016	(4)SK106～110、(4)SH097
(5)SK017・018	(4)SK111～113
(5)SK021・022	(4)SK115・118・119
(5)SK026	(4)SK099・103
(9)SK003	図版12 (4)SK114
(9)SK005	(4)SK100・117
(10)SK010	(4)SK080
図版8 (10)SK014	(4)SK102
(10)SK015	(4)SK103

- (4)SK105
(4)SK115
(4)SK027
- 図版13 (4)SK100
(4)SE015
(4)SB001・002
(4)SB001・002
(4)SB004
(4)SH047～050・052・053、(4)SD006
(4)SD006
(4)SD006
- 図版14 (9)SK001
(9)SK002
(9)SD001
(10)SK017
(10)SK042
(10)SK006
(10)SK030
(10)SK035
- 図版15 (10)SK050
(10)SE012
(10)SB001
(10)SD013
(10)SD040
(10)SD040遺物出土状況
(10)SD049
(10)SD051
- 図版16 旧石器時代出土遺物（1）
図版17 旧石器時代出土遺物（2）
図版18 旧石器時代出土遺物（3）
- 図版19 旧石器時代出土遺物（4）
図版20 遺構出土縄文土器（1）
図版21 遺構出土縄文土器（2）
 遺構出土縄文土器（3）
図版22 遺構出土縄文土器（4）
 遺構出土縄文土器（5）
 遺構出土縄文土器（6）
図版23 遺構出土縄文土器（7）
 遺構出土縄文土器（8）
図版24 遺構外出土縄文土器（1）
 遺構外出土縄文土器（2）、土製品
図版25 縄文時代石器（1）
 縄文時代石器（2）、石製品
図版26 縄文時代石器（3）
 (9)SF004出土貝類
図版27 出土中・近世陶磁器・土器類（1）
図版28 出土中・近世陶磁器・土器類（2）
 出土中・近世陶磁器・土器類（3）
図版29 出土中・近世陶磁器・土器類（4）
 出土中・近世陶磁器・土器類（5）
図版30 出土中・近世陶磁器・土器類（6）
 出土中・近世陶磁器・土器類（7）
図版31 出土中・近世陶磁器・土器類（8）
 出土中・近世土製品
 出土古代遺物
図版32 出土中・近世石製品（1）
図版33 出土中・近世石製品（2）
 出土中・近世金属製品（1）
 出土中・近世金属製品（2）
図版34 出土錢貨

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県企業庁は、常磐新線（現・つくばエクスプレス）の建設に伴う流山運動公園周辺地区土地区画整理事業を計画し、事業実施に先立って「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会教育長あてに提出した。千葉県教育委員会は、事業予定地内に27か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することを確認して、その旨回答した（第1図）。

その後、両者は事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて慎重な協議を重ね、現状保存及び計画変更が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講じることとした。記録保存のための発掘調査は、財團法人千葉県文化財センター（現・公益財團法人千葉県教育振興財團）が実施することとなり、千葉県企業庁との間に委託契約が締結され、平成9年度から発掘調査が開始された（平成18年度から千葉県県土整備部が事業を引き継ぐ）。

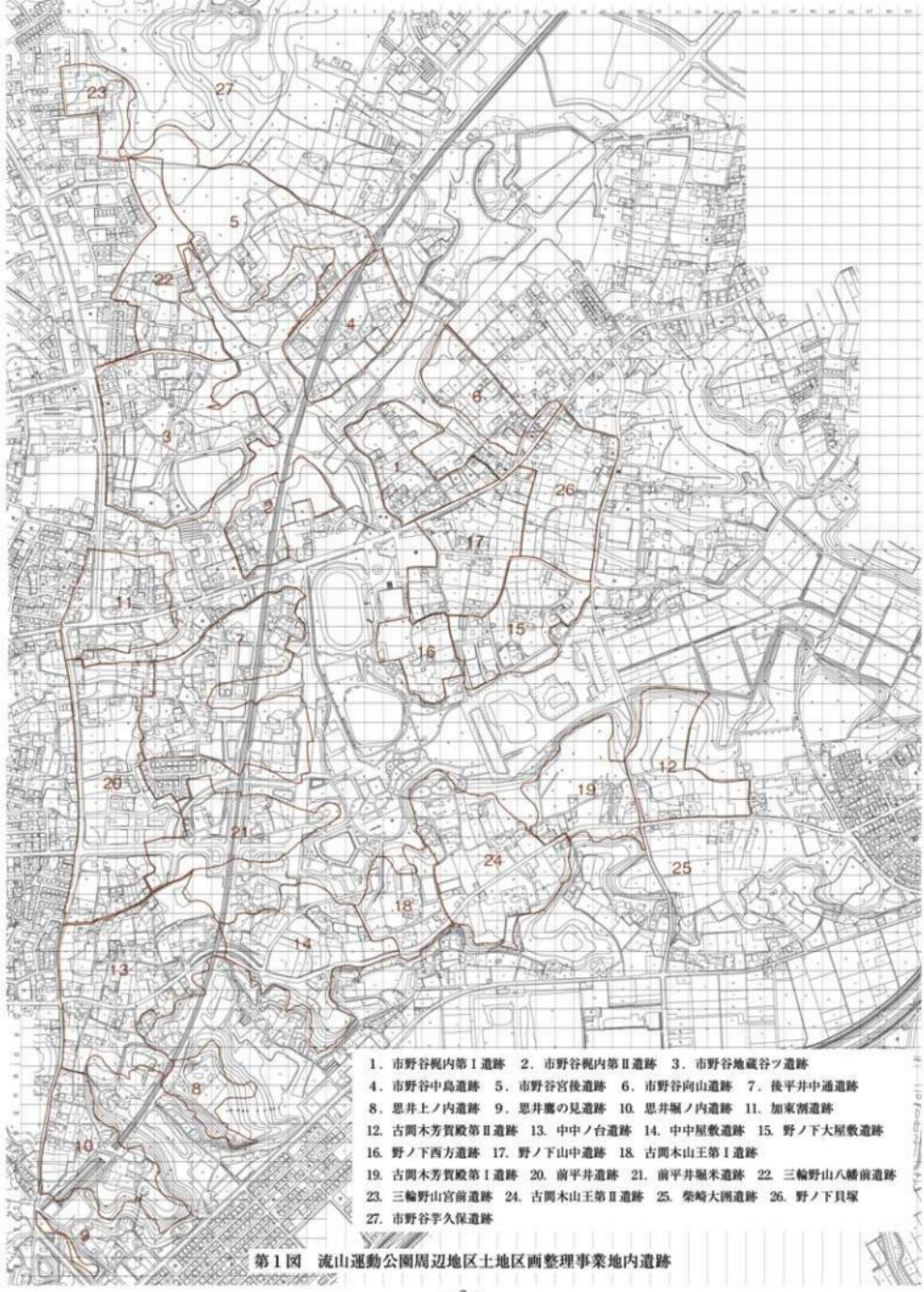
中中屋敷遺跡は、流山市中字中屋敷ほかに所在し、面積は61,000m²を測る。このうち約62%にあたる37,964m²について、平成9年度から平成23年度まで、準備が整った地点から13次にわたって発掘調査を行った（第2図）。なお、包蔵地範囲内のうち1,515m²については既に平成9年度に流山市教育委員会により調査が行われ、報告済みである^{〔1〕}。

発掘調査及び整理作業に関わった各年度の担当職員、作業内容等は第1表のとおりである。上層の確認調査については、各調査区の対象面積に対し10%程度の確認トレンチを設定し、遺構の時期と広がりを確認した。その結果、平成14年度に実施した4次調査において1,385m²、同じく平成14年度に実施した5次調査において745m²、平成20年度に実施した9次調査において244m²、同じく平成20年度に実施した10次調査において2,416m²が本調査となった（第3図）。それ以外の調査区についてはトレンチの拡張等で対応した。

下層の確認調査については、各調査区の対象面積に対し4%程度の確認トレンチを設定し、石器出土地点の層位と広がりを確認した。その結果、平成20年度に実施した9次調査において180m²、10次調査において136m²が本調査となった（第4図）。それ以外の調査区についてはトレンチの拡張等で対応した。なお、7次調査と8次調査においては立川ローム層が流失していることが判明したため、確認調査を全面もしくは部分的に省略している。

区画整理事業地内における遺跡の調査成果としては、これまでに思井堀ノ内遺跡について、中世編及び旧石器～奈良・平安時代編の2冊の報告書が財團法人千葉県教育振興財團（現・公益財團法人千葉県教育振興財團）により刊行され^{〔2〕〔3〕}、思井上ノ内遺跡の報告書が千葉県教育委員会から刊行されている^{〔4〕}。本書はその4冊目となる。

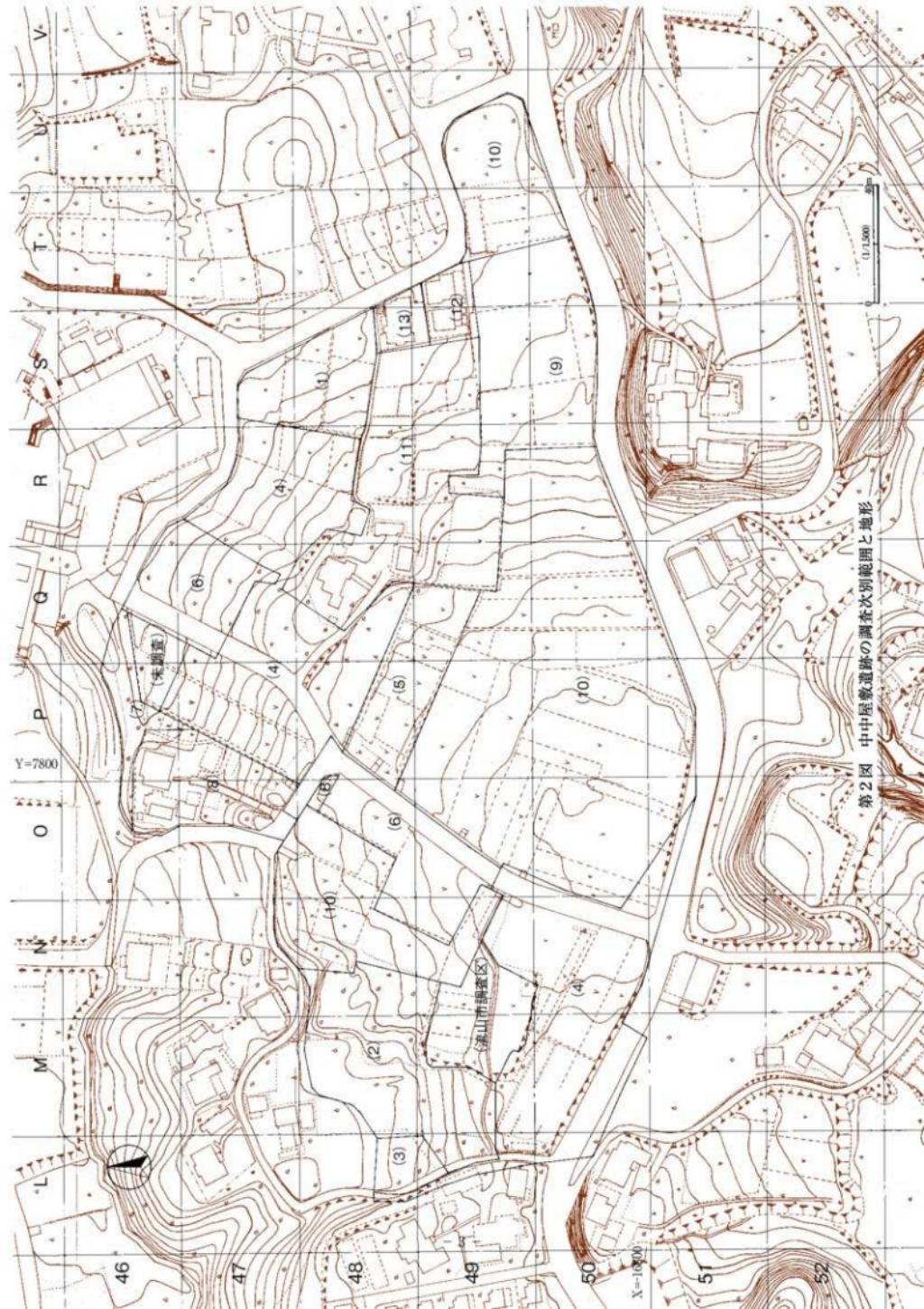
中中屋敷遺跡の整理作業は、平成24年度に公益財團法人千葉県教育振興財團が、さらに平成25年度から平成28年度まで千葉県教育庁教育振興部文化財課が引き継いで実施し、平成28年度に報告書刊行に至った。



1. 市野谷梶内第Ⅰ遺跡
2. 市野谷梶内第Ⅱ遺跡
3. 市野谷地蔵谷ツ遺跡
4. 市野谷中島遺跡
5. 市野谷宮後遺跡
6. 市野谷向山遺跡
7. 後平井中通遺跡
8. 恩井上ノ内遺跡
9. 恩井龜の見遺跡
10. 恩井龜ノ内遺跡
11. 加東削遺跡
12. 古間木芳賀殿第Ⅱ遺跡
13. 中ノ台遺跡
14. 中ノ屋敷遺跡
15. 野ノ下大屋敷遺跡
16. 野ノ下四方遺跡
17. 野ノ下山中遺跡
18. 古間木山王第Ⅰ遺跡
19. 古間木芳賀殿第Ⅰ遺跡
20. 前平井遺跡
21. 前平井掘未遺跡
22. 三輪野山八幡前遺跡
23. 三輪野山宮前遺跡
24. 古間木山王第Ⅱ遺跡
25. 柴崎大塚遺跡
26. 野ノ下貝塚
27. 市野谷李久保遺跡

第1図 流山運動公園周辺地区土地整理事業地内遺跡

第2図 中山遺跡の調査次別範囲と地形



第1表 中屋敷遺跡（1）～（13）調査一覧表
【発掘調査】

遺跡名	年度	事業名	調査期間	調査体制	担当者	対象面積	確認調査		本調査					
							上層							
							確認施設	対象施設	確認施設	対象施設				
中屋敷 (1)	平成9	千葉縣企業厅運動場	H 10.2.20 ～ H 10.2.25	財團法人千葉縣 文教振興財團	北西側査 事務所	調査会員 西山太郎	主任技術 事務所長	1,422	260	1,422	32	1,422	0	0
中屋敷 (2)	平成10	千葉縣企業厅運動場 公園用地地区	H 11.1.15 ～ H 11.1.20	財團法人千葉縣 文教振興財團	東北側査 事務所	調査会員 西山太郎	主任技術 事務所長	2,783	313	2,783	132	2,783	0	0
中屋敷 (3)	平成13	千葉縣企業厅運動場 公園用地地区	H 13.12.3 ～ H 13.12.12	財團法人千葉縣 文教振興財團	西北側査 事務所	調査会員 西山太郎	主任技術 事務所長	324	38	324	12	324	0	0
中屋敷 (4)	平成14	千葉縣企業厅運動場 公園用地地区	H 14.11.8 ～ H 14.11.18	財團法人千葉縣 文教振興財團	南側査 事務所	調査会員 西山太郎	主任技術 事務所長	8,354	858	8,354	168	8,354	1,385	0
中屋敷 (5)	平成14	千葉縣企業厅運動場 公園用地地区	H 15.1.16 ～ H 15.2.22	財團法人千葉縣 文教振興財團	西側査 事務所	調査会員 西山太郎	主任技術 事務所長	1,419	192	1,419	48	1,419	745	0
中屋敷 (6)	平成15	千葉縣企業厅運動場 公園用地地区	H 15.9.1 ～ H 15.9.28	財團法人千葉縣 文教振興財團	調査会員 西山太郎	主任技術 事務所長	2,866	290	2,866	92	2,866	0	0	
中屋敷 (7)	平成15	千葉縣企業厅運動場 公園用地地区	H 16.1.7 ～ H 16.1.27	財團法人千葉縣 文教振興財團	調査会員 西山太郎	主任技術 事務所長	563	35	563	—	563	—	0	
中屋敷 (8)	平成17	運動公園用地地区 (その1)	H 17.11.21 ～ H 17.11.28	財團法人千葉縣 文教振興財團	西北側査 事務所	調査会員 西山太郎	主任研究員 事務所長	1,529	134	1,529	4	1,529	0	0
中屋敷 (9)	平成20	つくばエクスプレス 沿線整備（運動 公園用地）	H 20.08.18 ～ H 20.09.26	財團法人千葉縣 文教振興財團	西北側査 事務所	調査会員 西山太郎	主任研究員 事務所長	2,622	336	2,622	132	2,622	244	180
中屋敷 (10)	平成20	つくばエクスプレス 沿線整備（運動 公園用地）	H 21.01.01 ～ H 21.01.27	財團法人千葉縣 文教振興財團	西北側査 事務所	調査会員 西山太郎	主任研究員 事務所長	12,228	1,500	12,228	652	12,228	2,416	136
中屋敷 (11)	平成21	つくばエクスプレス 沿線整備（運動 公園）	H 21.11.16 ～ H 21.12.31	財團法人千葉縣 文教振興財團	西北側査 事務所	調査会員 西山太郎	主任研究員 事務所長	3,204	238	3,204	160	3,204	0	0
中屋敷 (12)	平成22	つくばエクスプレス 沿線整備（運動 公園）	H 22.03.29 ～ H 22.05.29	財團法人千葉縣 文教振興財團	西北側査 事務所	調査会員 西山太郎	主任研究員 事務所長	327	70	327	8	327	0	0
中屋敷 (13)	平成23	つくばエクスプレス 沿線整備委員会 (運動公園)	H 23.07.25 ～ H 23.07.29	財團法人千葉縣 文教振興財團	西北側査 事務所	調査会員 西山太郎	主任研究員 事務所長	310	310	310	17	310	0	0
合 計								37,964	4,574	37,964	1,477	37,964	4,790	316

【整理作業】

遺跡名	年度	事業名	期間	調査体制	担当者	内容		
中屋敷 (1)	平成24	つくばエクスプレス 沿線整備委員会（運動 公園）	H 24.1.24 ～ H 25.3.4	公設財團法人千葉 県教育振興財團	調査 検査 部長	西山太郎 西山太郎 西山太郎	主任研究員 事務所長	水谷・津谷
中屋敷 (2)	平成25	運動公園用地地区	H 25.4.1 ～ H 26.3.31	公設財團法人千葉 県教育振興財團	発掘調査 部長	西山太郎 西山太郎 西山太郎	主任研究員 事務所長	分類～実測の一部
中屋敷 (3)	平成26	運動公園用地地区	H 26.4.1 ～ H 27.3.31	公設財團法人千葉 県教育振興財團	発掘調査 部長	西山太郎 西山太郎 西山太郎	主任研究員 事務所長	実測の一部～実測の一部
中屋敷 (4)	平成27	運動公園用地地区	H 27.4.1 ～ H 28.3.31	公設財團法人千葉 県教育振興財團	発掘調査 部長	西山太郎 西山太郎 西山太郎	主任研究員 事務所長	実測の一部
中屋敷 (5)	平成28	運動公園用地地区	H 28.4.1 ～ H 29.3.31	公設財團法人千葉 県教育振興財團	発掘調査 部長	西山太郎 西山太郎 西山太郎	主任研究員 事務所長	実測～実測

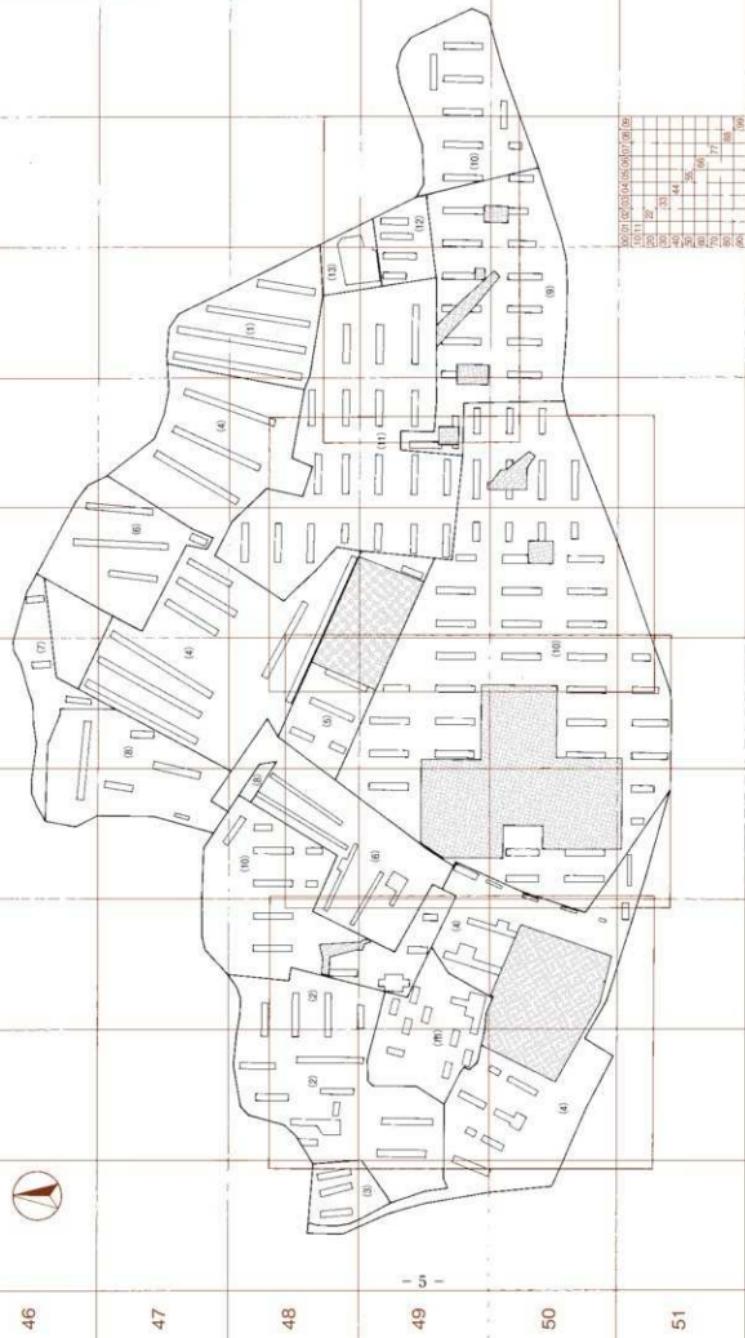
2 調査の方法と調査概要

調査にあたっては、区画整理事業地内の遺跡を網羅するように、日本測地系に基づくグリッド設定を行った。X = -14,800 m, Y = +7,600 mを起点とする40 m × 40 mの方眼を大グリッドとし、北から南へ1～67、西から東へA～Z及びAA～ANとし、大グリッドはアルファベットと数字の組み合わせにより「C 2」「K 11」のように表示することとした。今回報告する中屋敷遺跡（1）～（13）は、大グリッドで示すO 46～R 46・N 47～S 47・L 48～T 48・L 49～U 49・L 50～U 50・N 51～Q 51グリッドの範囲にあたる（第2図）。大グリッドの中は、更に4 m × 4 mの小グリッドに100分割し、小グリッドは北西角から東へ00、01、02…、南へ00、10、20…とし、南東角を99とした。これにより、大グリッドとの組み合わせで、例えば「N 49～25」などのように小地区名を表示することとした（第3図）。

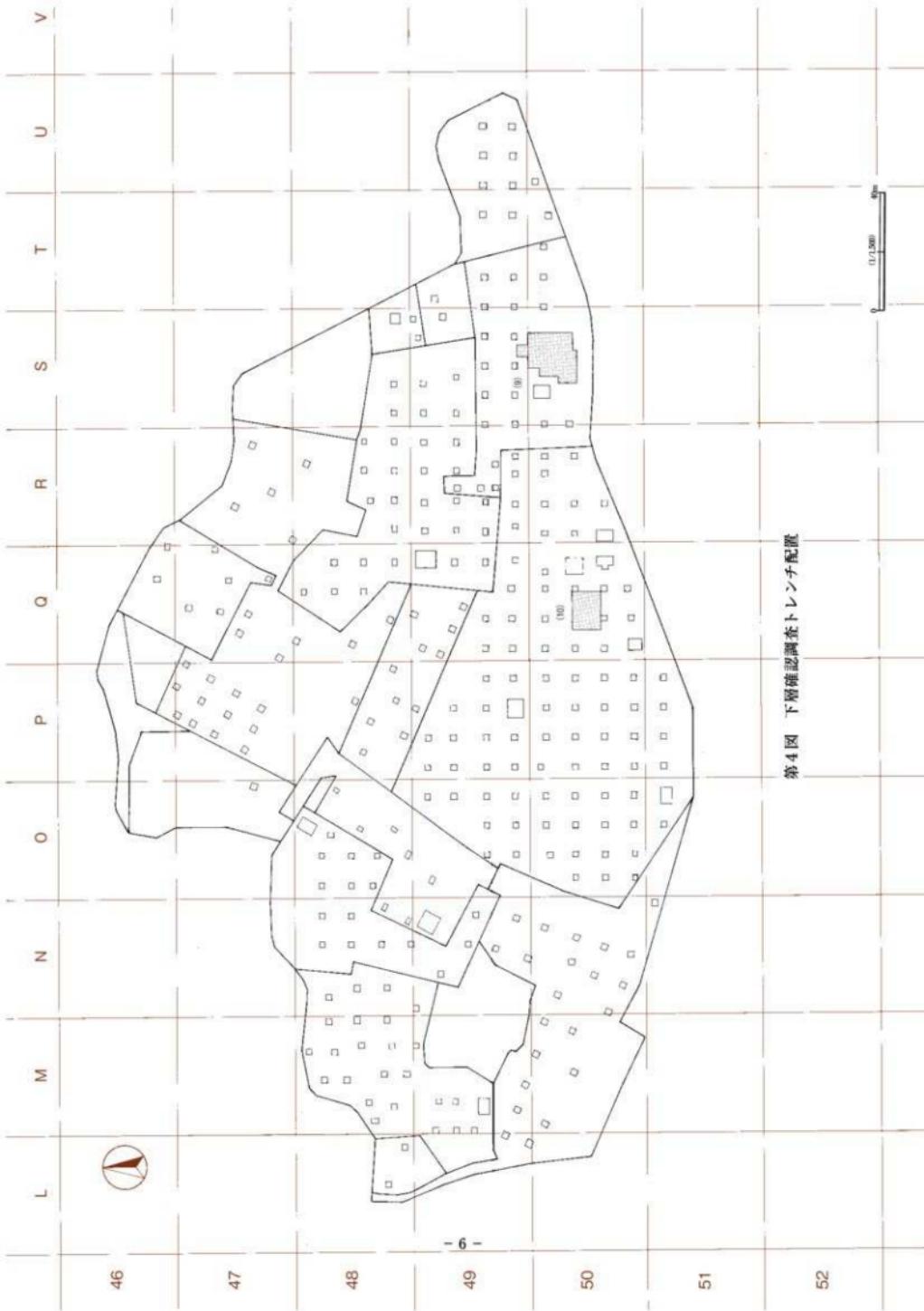
遺構名については、6次調査までは遺構の時代や種別に関係なく3桁の数字の連番とし、9次調査以降は遺構種別記号と3桁の数字とを組み合わせた遺構名を付している（10次調査では両者が併用されている）。遺物への注記は原則調査時の遺構名を行ったが、整理作業を進める中で検出された遺構の検証を行った結果、各調査次に付された遺構名をそのまま報告書に掲載すると混乱を招く一方で、新たな通し番号を付け直すことは大きな労力を要すると判断されたことから、基本的に調査時の番号を踏襲し、遺構種別

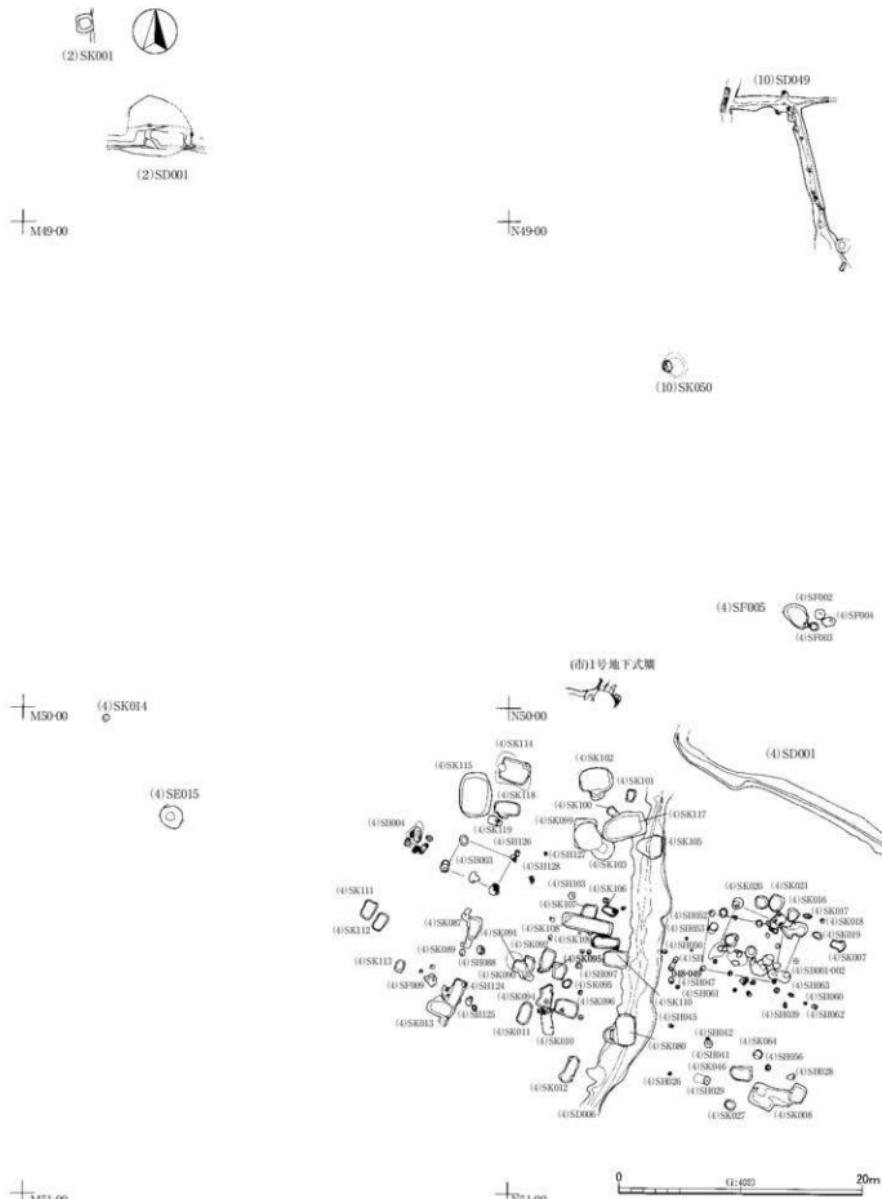
第3図 上層堆積調査トレーンチ配置及びグリッド配置

1/1,500



第4図 下層確認調査トレンチ配置



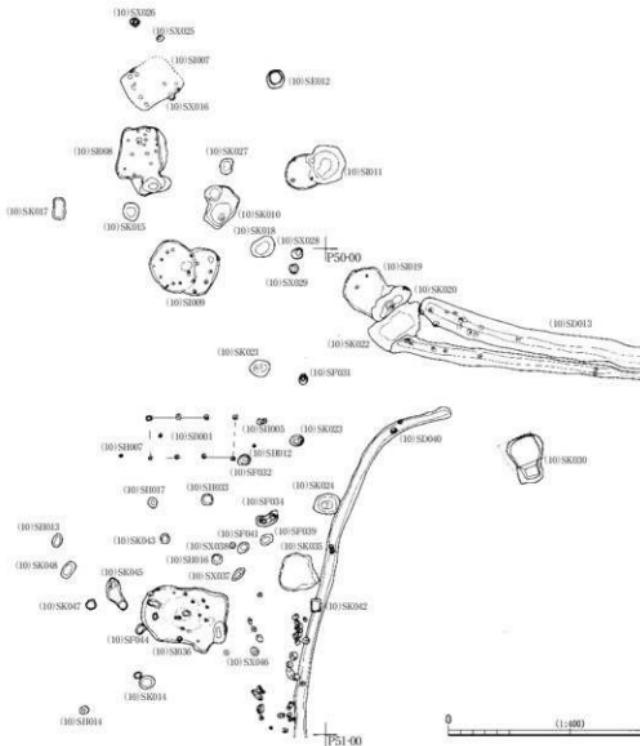


第5図 上層遺構全体図(1)



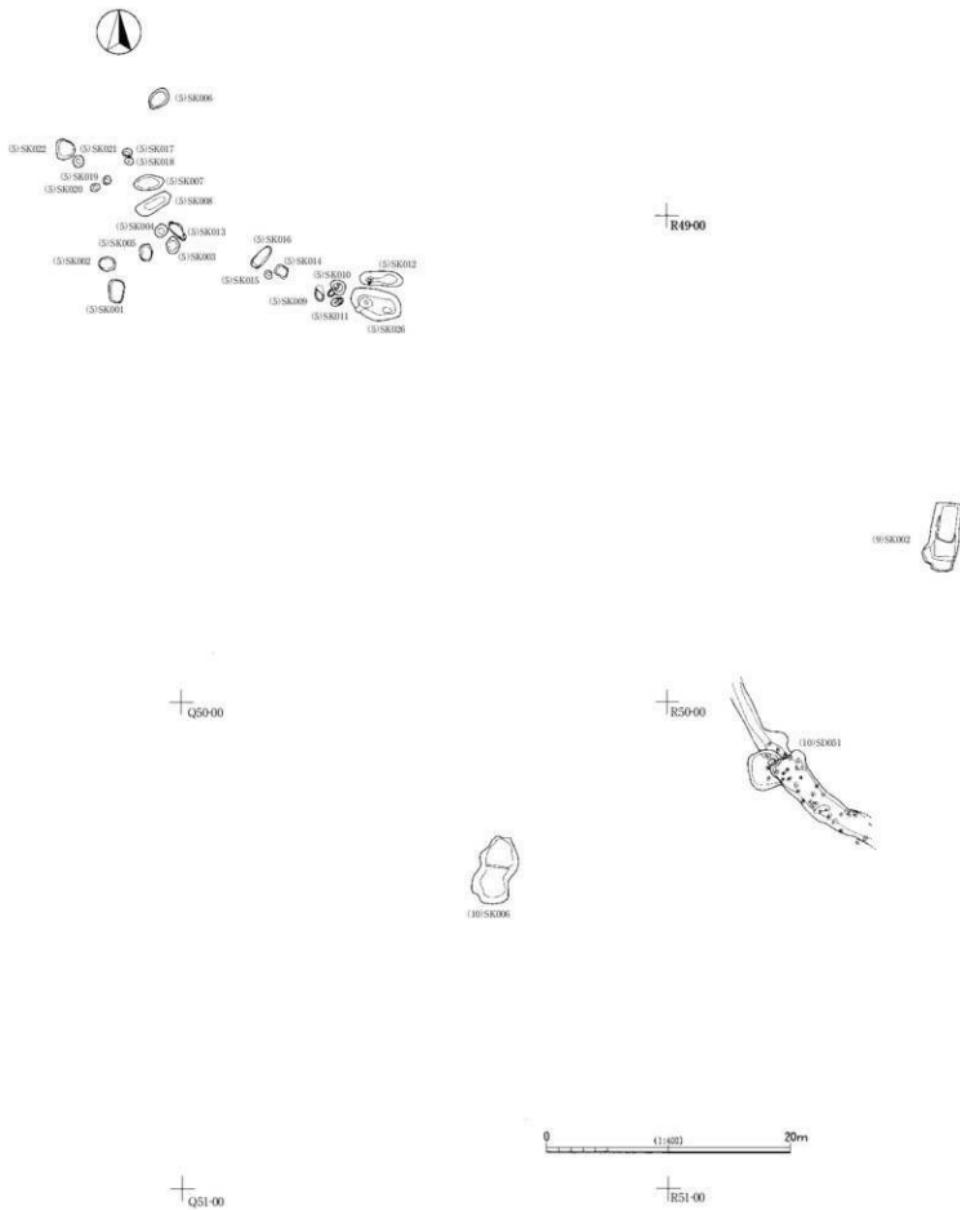
+ 049-00

+ P49-00



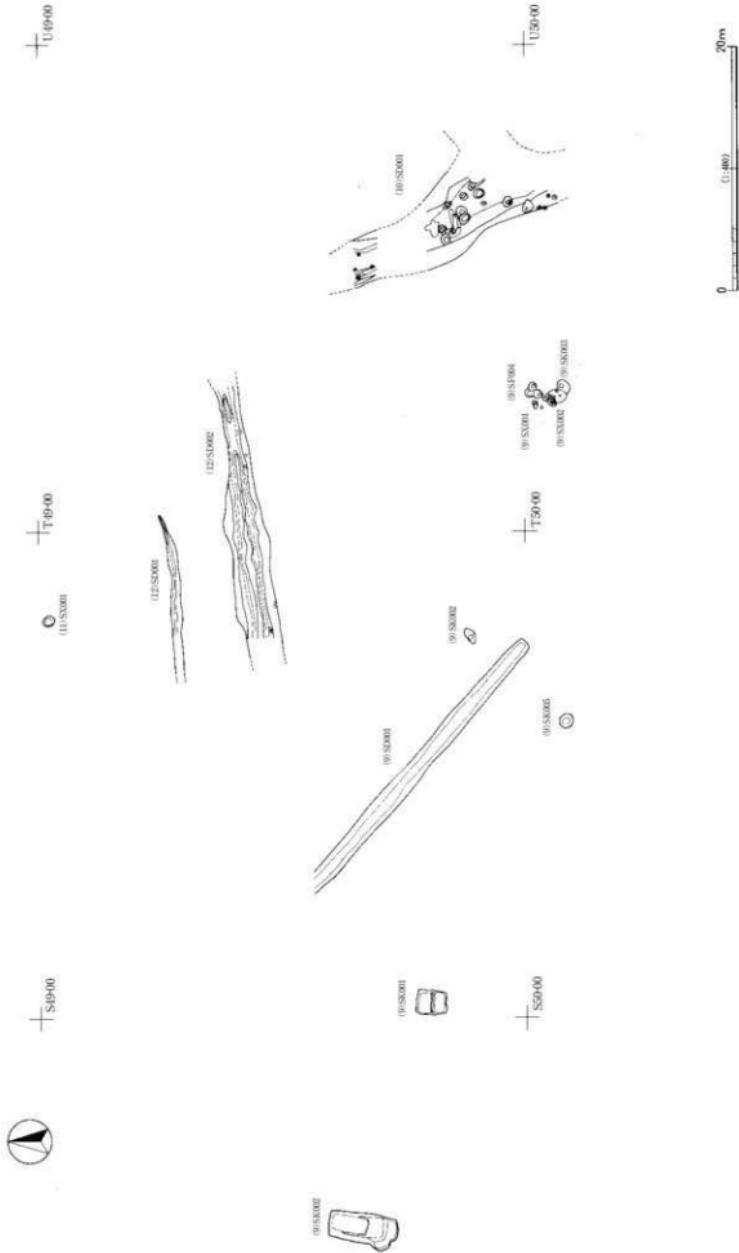
※(10)SX046付近の遺構番号は第99図に記載

第6図 上層遺構全体図(2)



第7図 上層造構全体図(3)

第8图 上层造桥全体图(4)



第2表 中中屋敷跡上層遺構一覧表

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時代	グリッド	備考
(10)	平成20	(10) SI 007	007	埋立住跡	調文	Q49-65 ~ 68	
(10)	平成20	(10) SI 006	006	埋立住跡	調文	Q49-75-76-85-96	
(10)	平成20	(10) SI 009	009	埋立住跡	調文	Q49-66-050-06-07	2軒系附
(10)	平成20	(10) SI 011A+B	011	埋立住跡	調文	Q49-79-80,P49-79-80	住跡跡と上層が重複
(10)	平成20	(10) SI 019	019	埋立住跡	調文	M50-00-01-10-11	(10)SK020と重複
(10)	平成20	(10) SI 006	006	埋立住跡	調文	Q50-66-76-77-86-87	
(4)	平成14	(4) SF 002	002	印穴	調文	N49-76-86	
(4)	平成14	(4) SF 003	003	印穴	調文	N49-86	
(4)	平成14	(4) SF 004	004	印穴	調文	N49-86	
(4)	平成14	(4) SF 005A	005A	印穴	調文	Q49-75-76-85-96	(10)SF005Bと重複
(4)	平成14	(4) SF 005B	005B	土坑	調文	N49-86	(10)SF005Aと重複
(4)	平成14	(4) SF 009	009	印穴	調文	N50-58	
(4)	平成14	(4) SF 014	014	印穴	調文	M50-01	
(6)	平成20	(6) SX 001	001	焼土遺構	調文	T50-02	
(6)	平成20	(6) SX 002	002	焼土遺構	調文	T50-02	
(6)	平成20	(6) SX 004	004	焼土	調文	T50-02-03	且留あり
(10)	平成20	(10) SF 031	031	印穴	調文	Q50-29	
(10)	平成20	(10) SF 032	032	印穴	調文	Q50-48	
(10)	平成20	(10) SF 034	034	印穴	調文	Q50-56	
(10)	平成20	(10) SF 039	039	印穴	調文	Q50-56-68	
(10)	平成20	(10) SF 041	041	印穴	調文	Q50-68	
(10)	平成20	(10) SF 044	044	印穴	調文	Q50-76	
(10)	平成20	(10) SX 016	016	焼土遺構	調文	Q49-66	
(10)	平成20	(10) SX 025	025	焼土遺構	調文	Q49-58	
(10)	平成20	(10) SX 026	026	焼土遺構	調文	Q49-56	
(10)	平成20	(10) SX 028	028	焼土遺構	調文	Q49-99,050-09	
(10)	平成20	(10) SX 029	029	焼土遺構	調文	Q50-09	
(10)	平成20	(10) SX 037	037	焼土遺構	調文	Q50-68	
(10)	平成20	(10) SX 038	038	焼土遺構	調文	Q50-68	
(10)	平成20	(10) SX 046	046	焼土遺構	調文	Q50-88	
(13)	平成20	(13) SX 001	SX-001	焼土遺構	調文	S49-08	
(5)	平成14	(5) SK 001	001	土坑	調文	P49-27	
(5)	平成14	(5) SK 002	002	土坑	調文	P49-06-18	
(5)	平成14	(5) SK 003	003	土坑	調文	P49-99	
(5)	平成14	(5) SK 004	004	土坑	調文	P49-09	
(5)	平成14	(5) SK 005	005	土坑	調文	P49-00	
(5)	平成14	(5) SK 006	006	土坑	調文	P48-79	
(5)	平成14	(5) SK 007	007	土坑	調文	P48-99	
(5)	平成14	(5) SK 008	008	土坑	調文	P48-99	
(5)	平成14	(5) SK 009	009	土坑	調文	Q49-12	
(5)	平成14	(5) SK 010	010	土坑	調文	Q49-13	
(5)	平成14	(5) SK 011	011	土坑	調文	Q49-13	
(5)	平成14	(5) SK 012	012	土坑	調文	Q49-13-14	
(5)	平成14	(5) SK 013	013	土坑	調文	P49-00,Q49-00	
(5)	平成14	(5) SK 014	014	土坑	調文	Q49-02-12	
(5)	平成14	(5) SK 015	015	土坑	調文	Q49-11	
(5)	平成14	(5) SK 016	016	土坑	調文	Q49-01-11	
(5)	平成14	(5) SK 017	017	土坑	調文	Q48-88	
(5)	平成14	(5) SK 018	018	土坑	調文	Q48-88-89	
(5)	平成14	(5) SK 019	019	土坑	調文	Q48-98	
(5)	平成14	(5) SK 020	020	土坑	調文	P48-98	
(5)	平成14	(5) SK 021	021	土坑	調文	P48-87	
(5)	平成14	(5) SK 022	022	土坑	調文	P48-87	
(5)	平成14	(5) SK 026A	026A	土坑	調文	Q49-13-14-23-24	
(5)	平成14	(5) SK 027B	029B	土坑	調文	Q49-13	
(6)	平成20	(6) SK 003	SK-003	土坑	調文	T50-02-03	
(6)	平成20	(6) SK 005	SK-005	土坑	調文	S50-05-06	
(10)	平成20	(10) SK 010A+B	010	土坑	調文	Q49-87-88-97-98	2基重複
(10)	平成20	(10) SK 014A+B	004	土坑	調文	M50-86-96	2基
(10)	平成20	(10) SK 015	SK-005	土坑	調文	Q49-95-96	
(10)	平成20	(10) SK 018	SK-008	土坑	調文	Q49-08,C50-08	
(10)	平成20	(10) SK 020	020	土坑	調文	T50-01-10-11	
(10)	平成20	(10) SK 021	SK-021	土坑	調文	M50-26	
(10)	平成20	(10) SK 022	SK-022	土坑	調文	M50-10-11	
(10)	平成20	(10) SK 023	SK-023	土坑	調文	M50-30-39	
(10)	平成20	(10) SK 024	SK-024	土坑	調文	M50-30,31-40-50	
(10)	平成20	(10) SK 027	027	土坑	調文	M49-80-87	
(10)	平成20	(10) SK 033	033	土坑	調文	M50-52	
(10)	平成20	(10) SK 043	SK-043	土坑	調文	M50-36-66	
(10)	平成20	(10) SK 045	SK-045	土坑	調文	M50-75	
(10)	平成20	(10) SK 047	SK-047	土坑	調文	M50-63-75	
(10)	平成20	(10) SK 053	Y013	ビット	調文	M50-64-65	
(10)	平成20	(10) SK 014	P014	ビット	調文	M50-94-95	
(10)	平成20	(10) SK 016	P016	ビット	調文	M50-25	
(10)	平成20	(10) SK 017	P017	ビット	調文	M50-36	
(10)	平成20	(10) SK 001	009	印穴	調文	N49-31	
(9)	平成20	(9) SK 002	SK-002	土坑	調文	N49-87	
(10)	平成20	(10) SK 048	SK-048	土坑	調文	M50-64	
(4)	平成14	(4) SK 080	080	地下式坑	中世	M50-02	(10)SK006と重複
(4)	平成14	(4) SK 103	102	地下式坑	中世	M50-11	
(4)	平成14	(4) SK 103	103	地下式坑	中世	M50-21	(10)SK009-117と重複
(4)	平成14	(4) SK 105	105	地下式坑	中世	M50-22-23	(10)SK006と重複
(4)	平成14	(4) SK 115	115	地下式坑	中世	M50-19	

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時代	グリッド	備考
100	平成20	SK_000	006	発下式坑	中世	N50-26・36・37	
101	平成20	SK_000	030	発下式坑	中世	N50-43・44	
102	平成20	SK_000	035	発下式坑	中世	N50-40	
103	平成20	SK_000	050	発下式坑	中世	N50-25・33	
104	平成20	SK_000	099	方形堅久葉構	中世	N50-21	
105	平成20	SK_114	111	方形堅久葉構	中世	M50-19・N50-10	HDSK103 と重複
106	平成20	(2) SK_002	27T赤備掘り込み	大型土坑	近世	M49-82・83	
107	平成20	SK_117	117	大型土坑	近世	N50-22	HDSK100・103・SD006 と重複
108	平成20	SK_002	SD-002	大型土坑	中世	N49-65・75	
109	平成20	SK_001	SD-001	土坑	近世	M49-51	
110	平成20	SK_007	007	土坑	中世	N50-46	
111	平成20	SK_008	008	土坑	近世	N50-75	HDSK098B-C と重複
112	平成20	SK_000	009	土坑	近世	N50-75	HDSK098A と重複
113	平成20	SK_010	010	土坑	近世	N50-40	HDSK008A と重複
114	平成20	SK_011	011	土坑	中世	N50-60	
115	平成20	SK_012	012	土坑	中世	N50-71	
116	平成20	SK_013A	013A	土坑	中世	M50-58	HDSK013B と重複
117	平成20	SK_013B	013B	土坑	中世	M50-68	HDSK013A と重複
118	平成20	SK_016	016	土坑	中世	N50-45	
119	平成20	SK_017	017	土坑	中世	N50-46	
120	平成20	SK_019	019	土坑	中世	N50-46	
121	平成20	SK_020	020	土坑	中世	N50-35・45	
122	平成20	SK_021	021	土坑	近世	N50-35・45	
123	平成20	SK_24	024	土坑	近世	N50-44	
124	平成20	SK_027	027	土坑	中世	N50-84	
125	平成20	SK_040	040	土坑	中世	N50-74	
126	平成20	SK_064	064	土坑	中世	N50-75	
127	平成20	SK_069	069	土坑	中世	N50-55	HDSH082 と重複
128	平成20	SK_070	070	土坑	中世	N50-45・55	
129	平成20	SK_071	071	土坑	中世	N50-44	HDSH072 と重複
130	平成20	SK_072	073	土坑	中世	N50-44	
131	平成20	SK_084	084	土坑	中世	N50-55	HDSH-081・083 と重複
132	平成20	SK_087	087	土坑	中世	M50-49	
133	平成20	SK_090	090	土坑	中世	N50-50	HDSK091 と重複
134	平成20	SK_091	091	土坑	中世	N50-50	HDSK090 と重複
135	平成20	SK_092	092	土坑	中世	N50-50	
136	平成20	SK_093	093	土坑	中世	N50-51	
137	平成20	SK_094	094	土坑	中世	N50-50・60	
138	平成20	SK_095	095	土坑	中世	N50-51	
139	平成20	SK_096	096	土坑	中世	N50-61	
140	平成20	SK_100	100	土坑	中世	N50-22	HDSK117 と重複
141	平成20	SK_101	101	土坑	中世	N50-12	
142	平成20	SK_106	106	土坑	中世	N50-41・42	
143	平成20	SK_107	107	土坑	中世	N50-41	HDSK108 と重複
144	平成20	SK_108	108	土坑	中世	N50-41・42	HDSK107 と重複
145	平成20	SK_109	109	土坑	中世	N50-41・42	
146	平成20	SK_110	110	土坑	中世	N50-32	HDSK006 と重複
147	平成20	SK_111	111	土坑	中世	M50-47	
148	平成20	SK_112	112	土坑	中世	M50-47	
149	平成20	SK_113	113	土坑	中世	M50-57	
150	平成20	SK_118	118	土坑	中世	M50-19・29、N50-10・20	
151	平成20	SK_119	119	土坑	中世	M50-20	
152	平成20	SK_001	SK-001(a)	土坑	中世	S49-70・80	
153	平成20	SK_017	017	土坑	中世	O49-94	
154	平成20	SK_042	SK-042	土坑	中世	O50-79	HDSO40 と重複
155	平成20	SE_015	015	舟戸	中世	M50-22・23	
156	平成20	SE_012	012	舟戸	中世	O49-68・69	
157	平成20	SD_001	001	漁获遺構	近世	N50-03・13・16・26・27	
158	平成20	SD_006	006	漁获遺構	近世	N50-12・13・81・82	HDSK080・105・110・117 と重複
159	平成20	SD_001	SD-001 漁(a)	漁获遺構	近世	S49-52・53、62・64、73・75、86・87、96・97	
160	平成20	SD_001	SD-001(b)	漁获遺構	近世	T49-64・65・75・76・85・86・96・97、T50-06	
161	平成20	SD_013	013	漁获遺構	中世	P50-11・15・21・26	
162	平成20	SD_040	SD-040	漁获遺構	中世	P50-31・32・40・50・60、70,030-79・89・99	
163	平成20	SD_049	SD-049	漁获遺構	近世	N48-74・76・85・96、N49-06	
164	平成20	SD_051	SD-051	漁获遺構	近世	R49-91, R50-01・11・12・23・24	
165	平成22	(2) SD_001	SD001	漁获遺構	近世	S49-28・29、T-49-20	
166	平成22	(2) SD_002	SD002	漁获遺構	近世	S49-49・49, T-49-40・42	
167	平成20	SB_001	005	断き柱建物跡	中世	N50-44・45・54・55	HDSH022・025・032・040・051・055・067 の各ピットと、S49-70・80 の各ピットで発見
168	平成20	SB_002		断き柱建物跡	中世	N50-34・44・46・54・55	HDSH022・040・054・065・074・078・081 の各ピットで発見
169	平成20	SB_003		断き柱建物跡	中世	M50-29・38・50N-30	HDSH121・122 のピットで発見
170	平成20	SD_004	SDM-28 ピット群	ピット群	中世	M50-28	
171	平成20	SD_001	P001・P012	断き柱建物跡	中世	O50-26・28、36・39	HDSH121・122 のピット群
172	平成20	SH_018	018	ピット	中世	M50-46	
173	平成20	SH_022	022	ピット	中世	M50-34・34	HDS002 ピット
174	平成20	SH_023	023	ピット	中世	M50-44	HDS001 ピット
175	平成20	SH_025	025	ピット	中世	M50-44	HDS001 ピット
176	平成20	SH_026	026	ピット	中世	M50-73	
177	平成20	SH_028	028	ピット	中世	M50-75	
178	平成20	SH_029	029	ピット	中世	M50-74	
179	平成20	SH_30	030	ピット	中世	M50-54	付帯あり
180	平成20	SH_31	031	ピット	中世	M50-54	
181	平成20	SH_032	032	ピット	中世	M50-54	HDS001 ピット

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時代	グリッド	備考
(0)	平成14	(0) SH1 33	033	ピット	中・近世	N50~54	柱根あり
(0)	平成14	(0) SH1 34	034	ピット	中・近世	N50~55	柱根あり
(0)	平成14	(0) SH1 35	035	ピット	中・近世	N50~54	04SH1036 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 36	036	ピット	中・近世	N50~54	04SH1035 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 027	027	ピット	中・近世	N50~55	
(0)	平成14	(0) SH1 026	026	ピット	中・近世	N50~55	
(0)	平成14	(0) SH1 020	020	ピット	中・近世	N50~65	柱根あり
(0)	平成14	(0) SH1 040	040	ピット	中・近世	N50~55, 65	04SH1031 ～ SH1032 他の複数ピットが重複
(0)	平成14	(0) SH1 041	041	ピット	中・近世	N50~64	04SH1042 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 042	042	ピット	中・近世	N50~64	04SH1041 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 043	043	ピット	中・近世	N50~65	柱根あり
(0)	平成14	(0) SH1 045	045	ピット	中・近世	N50~65	
(0)	平成14	(0) SH1 047	047	ピット	中・近世	N50~65	
(0)	平成14	(0) SH1 048	048	ピット	中・近世	N50~63	04SH1049 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 049	049	ピット	中・近世	N50~63	04SH1048 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 050	050	ピット	中・近世	N50~63	
(0)	平成14	(0) SH1 051	051	ピット	中・近世	N50~54	04SH0001 ピット
(0)	平成14	(0) SH1 052	052	ピット	中・近世	N50~53	
(0)	平成14	(0) SH1 053	053	ピット	中・近世	N50~53	
(0)	平成14	(0) SH1 054	054	ピット	中・近世	N50~55	04SH0002 ピット
(0)	平成14	(0) SH1 055	055	ピット	中・近世	N50~55	04SH0001 ピット
(0)	平成14	(0) SH1 056	056	ピット	中・近世	N50~75	
(0)	平成14	(0) SH1 057	057	ピット	中・近世	N50~54	
(0)	平成14	(0) SH1 058	058	ピット	中・近世	N50~44	
(0)	平成14	(0) SH1 059	059	ピット	中・近世	N50~54	柱根あり
(0)	平成14	(0) SH1 060	060	ピット	中・近世	N50~66	
(0)	平成14	(0) SH1 061	061	ピット	中・近世	N50~53	
(0)	平成14	(0) SH1 062	062	ピット	中・近世	N50~66	
(0)	平成14	(0) SH1 063	063	ピット	中・近世	N50~55	
(0)	平成14	(0) SH1 065	065	ピット	中・近世	N50~44	04SH0002 ピット
(0)	平成14	(0) SH1 066	066	ピット	中・近世	N50~44	04SH0005 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 067	067	ピット	中・近世	N50~45	04SH0001 ピット 柱根あり
(0)	平成14	(0) SH1 068	068	ピット	中世	M50~45	04SH075 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 072	072	ピット	中・近世	N50~44	04SK071 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 074	074	ピット	中・近世	N50~54	04SH002 ピット
(0)	平成14	(0) SH1 075	075	ピット	中・近世	N50~45	04SK068 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 076	076	ピット	中・近世	N50~45	
(0)	平成14	(0) SH1 077	077	ピット	中・近世	N50~45	
(0)	平成14	(0) SH1 078	078	ピット	中・近世	N50~45	04SH002 ピット
(0)	平成14	(0) SH1 079	079	ピット	中・近世	N50~45	
(0)	平成14	(0) SH1 081	081	ピット	中・近世	N50~55	04SH002 ピット, 04SK084 ～ 04SH082 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 082	082	ピット	中・近世	N50~55	04SK084 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 083	083	ピット	中・近世	N50~55	04SK084 と重複
(0)	平成14	(0) SH1 088	088	ピット	中・近世	M50~49	
(0)	平成14	(0) SH1 089	089	ピット	中・近世	M50~59	
(0)	平成14	(0) SH1 097	097	ピット	中世	M50~51	
(0)	平成14	(0) SH1 120A	120A	ピット	中世	M50~39	04SH003 ピット
(0)	平成14	(0) SH1 120B	120B	ピット	中世	M50~39	04SH003 ピット
(0)	平成14	(0) SH1 120C	120C	ピット	中世	M50~38	04SH003 ピット
(0)	平成14	(0) SH1 121	121	ピット	中・近世	M50~28	04SH004 ピット
(0)	平成14	(0) SH1 122	122	ピット	中・近世	M50~28	04SH004 ピット
(0)	平成14	(0) SH1 123	50N~31°F ⑨±E, E'±N	ピット	中・近世	M50~31	
(0)	平成14	(0) SH1 124	50N~65°F ⑨±E, E'±N	ピット	中・近世	M50~69	
(0)	平成14	(0) SH1 125	50N~65°F ⑨±E, 小E'±小N	ピット	中・近世	M50~69	
(0)	平成14	(0) SH1 126	50N~65°F ⑨±E, 小E'±小N	ピット	中・近世	M50~30	
(0)	平成14	(0) SH1 127	50N~30°F ⑨±E, E'±N	ピット	中・近世	M50~30	
(0)	平成14	(0) SH1 128	50N~30°F ⑨±E, E'±N	ピット	中・近世	M50~30	
(0)	平成20	(0) SH1 015	P015	ピット	中世	M50~79	
(0)	平成20	(0) SH1 018	P018	ピット	中世	M50~79	
(0)	平成20	(0) SH1 019	P019	ピット	中世	M50~79	
(0)	平成20	(0) SH1 030	P020	ピット	中世	M50~79	
(0)	平成20	(0) SH1 021	P021	ピット	中世	M50~79	
(0)	平成20	(0) SH1 022	P022	ピット	中世	M50~79	
(0)	平成20	(0) SH1 023	P023	ピット	中世	M50~79	
(0)	平成20	(0) SH1 024	P024	ピット	中世	M50~80	
(0)	平成20	(0) SH1 025	P025	ピット	中世	M50~80	
(0)	平成20	(0) SH1 026	P026	ピット	中世	M50~80	
(0)	平成20	(0) SH1 027	P027	ピット	中世	M50~80	
(0)	平成20	(0) SH1 028	P028	ピット	中世	M50~90	
(0)	平成20	(0) SH1 029	P029	ピット	中世	M50~90	
(0)	平成20	(0) SH1 030	P030	ピット	中世	M50~90	
(0)	平成20	(0) SH1 031	P031	ピット	中世	M50~90	
(0)	平成20	(0) SH1 032	P032	ピット	中世	M50~90	
(0)	平成20	(0) SH1 033	P033	ピット	中世	M50~90	
(0)	平成20	(0) SH1 034	P034	ピット	中世	M50~90	
(0)	平成20	(0) SH1 035	P035	ピット	中世	M50~90	
(0)	平成20	(0) SH1 036	P036	ピット	中世	M50~90	
(0)	平成20	(0) SH1 037	P037	ピット	中世	M50~90	
(0)	平成20	(0) SH1 038	P038	ピット	中世	M50~80	
(0)	平成20	(0) SH1 039	P039	ピット	中世	M50~78	
(0)	平成20	(0) SH1 040	P040	ピット	中世	M50~78	
(0)	平成20	(0) SH1 041	P041	ピット	中世	M50~78	
(0)	平成20	(0) SH1 042	P042	ピット	中世	M50~98	
(0)	平成20	(0) SH1 044	P044	ピット	中世	M50~98	
(0)	平成20	(0) SH1 045	P045	ピット	中世	M50~78	

記号の前に 0 で調査次の番号を付することで区別することとした。その上で 6 次調査までの遺構については調査次と遺構種別記号、3 衔の数字とを組み合わせた遺構名を付け直した。遺構種別記号は凡例に示したとおりであり、調査時と本報告における遺構名対照表は第 2 表のとおりである。

調査の結果、検出された遺構は、旧石器時代石器出土地点 11 か所、石器集中地点 1 か所、縄文時代竪穴住居跡 7 軒、炉穴・焼土遺構 24 基、土坑・ピット 42 基、陥穴 3 基、中・近世地下式坑 9 基、方形竪穴遺構 2 基、大型土坑 3 基、土坑 47 基（うち土坑墓 2 基）、井戸 2 基、溝状遺構 10 条、掘立柱建物跡 4 棟、ピット群 1 箇所、単独ピット 78 基である（第 5 ~ 8 図）。なお、流山市教育委員会の調査区からは中・近世の地下式坑が 1 基検出されているほか、遺構は検出されなかったが縄文時代早期及び後期の土器片が出土している。

第 2 節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の地理的環境

中中屋敷遺跡は、流山市中字中屋敷に所在している（第 9 図）。流山市は千葉県の北西部に位置し、江戸川に沿って南北に長い市域を有しており、北側で野田市、東側で柏市、南側で松戸市と接している。遺跡はこの流山市の南西部、標高 23.5 m の下総台地上に立地している。台地の西側直下には江戸川が流れ東京湾へ注いでおり、南側は松戸市との境をなす支流の坂川が流れている。遺跡の立地する台地は、東側の下総台地を開析して江戸川や坂川の流れる古東京湾沿岸に形成された広い低地へと半島状に突出する形状を呈しており、さらに両河川に注ぐ小支谷によって複雑に開析された舌状台地が連なる。これらの舌状台地上はほぼ全て埋蔵文化財包蔵地であることが確認されており、中中屋敷遺跡は坂川に面した南東向きの舌状台地上に立地する。既に報告済みの思井堀ノ内遺跡は、南西側に隣接する舌状台地上に位置している。背面の台地西側は同様の舌状台地を介して江戸川を望める地形にあり、当遺跡は西側の江戸川と南東側の坂川、そして台地下に広がる低地をあたかも眼下に納める位置にあると言ってもよい。遺跡の南側を流れれる坂川についてみると、遺跡付近から南西へ約 3.5 km の地点で江戸川へと合流する小河川であるが、沿岸の坂川低地はこの地域では最大規模の開析谷であり、東側に広がる下総台地へと複雑に深く入り込んでいる。このためその谷頭は遺跡の北東側約 7.5 km にある手賀沼と、そこに注ぐ小河川に接するような地点にまで延びている。ちなみに遺跡地から東側そして北側の台地へと入り込む坂川の支谷と手賀沼の北西部へと注ぐ大堀川支谷との間は分水嶺をなし、台地の幅がわずかに 300m ~ 500m である。手賀沼は利根川（古鬼怒川）、霞ヶ浦（香取海）を経て太平洋へと通じる水系にあり、その意味ではこの坂川は太平洋水系の手賀沼と東京湾を結ぶ水路のような位置にあると言える。

2 周辺の遺跡と歴史的環境

流山市は高度経成長期から首都圏のベッドタウンとして開発が進められ、数多くの遺跡が調査されている。それらの調査歴を全て網羅すると膨大なものとなることから、ここでは運動公園の事業地とその周辺を中心に、代表的な調査成果を示してこの地域の歴史的環境を俯瞰したい（第 10 図、第 3 表）。

流山市内の旧石器時代の遺跡は近年、運動公園事業地及び隣接する流山新市街地区土地区画整理事業地内（以下、新市街地区と略す）において著しく資料が増加している。思井堀ノ内遺跡（5）^(注3)、思井上ノ内遺跡（16）^(注4)、三輪野山北浦（旧三輪野山第Ⅱ）遺跡（56）^(注5-13)、西初石五丁目遺跡（63）^{(注}



第9図 遺跡の立地と周辺の地形

6-10-11、市野谷入台遺跡 (61) ^(注7-10)、市野谷二反田遺跡 (58) ^(注8)、大久保遺跡 (60) ^(注9)、市野谷向山遺跡 (52) ^(注9-10)、東初石六丁目第Ⅰ遺跡 (79) ^(注9)、東初石六丁目第Ⅱ遺跡 (77) ^(注9)、十夫太第Ⅱ遺跡 ^(注9)、市野谷中島遺跡 (51) ^(注10)、市野谷芋久保遺跡 ^(注11)、市野谷立野遺跡 ^(注12)、地図の外になるが桐ヶ谷新田第Ⅰ遺跡、中野久木遺跡、若葉台遺跡、桐ヶ谷南割（上貝塚）遺跡などで石器群が検出されている。思井堀ノ内遺跡ではⅢ層からⅩ層にかけて11ブロック、思井上ノ内遺跡ではⅣ層からⅨ層にかけて3ブロック、三輪野山北浦遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて6ブロック、市野谷入台遺跡ではⅢ層からⅤ層にかけて26ブロック、市野谷二反田遺跡ではⅣ層からⅧ層にかけて12ブロック、西初石五丁目遺跡ではⅢ層からⅤ層にかけて6ブロック、大久保遺跡ではⅣ層とⅨ層で41ブロック、市野谷向山遺跡ではⅣ層からⅩ層にかけて22ブロック、東初石六丁目第Ⅰ遺跡ではⅣ層からⅧ層にかけて3ブロック、東初石六丁目第Ⅱ遺跡ではⅣ層からⅧ層にかけて5ブロック、十夫太第Ⅱ遺跡ではⅤ層からⅥ層にかけて1ブロック、市野谷中島遺跡ではⅣ層からⅨ層にかけて1ブロック、市野谷芋久保遺跡ではⅢ層からⅩ層にかけて46ブロック、市野谷立野遺跡ではⅣ層中部から下部にかけて4ブロックがそれぞれ調査されている。その他、上層遺構覆土中からの遺物出土事例は数多く報告されている。

繩文時代の遺跡はきわめて多い。草創期は遺構の検出事例はなく、長崎遺跡 (116) ^(注14) で有茎尖頭器の出土が報告されるなどごくわずかな遺物の出土しか確認されていないが、早期になると遺構の検出事例が増え、遺物も多くの遺跡で出土するようになる。思井堀ノ内遺跡では野島式から鵜ガ島台式期を中心とする堅穴住居跡2軒、炉穴35基などが検出され、思井上ノ内遺跡では鵜ガ島台式を中心とする早期後葉の堅穴住居跡2軒、土坑2基、炉穴25基などが検出されている。三輪野山第Ⅲ遺跡 (55) ^(注15) では鵜ガ島台式期の堅穴住居跡1軒と炉穴10基が調査されている。炉穴の検出例は数多く、三輪野山道六神遺跡 (53) ^(注16) や大原神社遺跡 (12) ^(注16)、平和台遺跡 (11) ^(注17-18)、三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡 (42) ^(注19)、三輪野山八重塚遺跡 (43) ^(注20-21)、加北谷津第Ⅱ遺跡 (39) ^(注22)、西平井二階烟遺跡 (3) ^(注26)、市野谷立野遺跡 ^(注11) などで報告されている。市野谷立野遺跡ではこのほか早期と思われる大規模な疊群が検出されている。これらの遺跡は野島式期から鵜ガ島台式期を中心とし、茅山上層式以降の早期末になると遺跡数は急速に減少する。前期は初頭の花積下層式段階では遺跡数の少ない状況が続く。そうした中で坂川を隔てた対岸にある松戸市の幸田貝塚 (83) ^(注27) は、花積下層式期から関山式期を中心とした多数の堅穴住居跡と大規模な貝層が形成されており、当地域における拠点的な集落である。流山市内では同じ時期の遺構は少なく、加町烟遺跡 (26) ^(注22-24-25) で関山式期の堅穴住居跡が検出されている程度であるが、黒浜式期に至ると多数の遺構が確認されている。堅穴住居跡の検出事例では、思井堀ノ内遺跡、西初石五丁目遺跡、下花輪荒井前（旧下花輪第Ⅱ）遺跡 (69) ^(注28)、三輪野山八幡前遺跡（旧下屋敷遺跡）(46) ^(注13-29)、加北谷津第Ⅰ遺跡 (40) ^(注22)、同第Ⅱ遺跡、三輪野山八重塚遺跡 ^(注30-31-32)、三輪野山北浦遺跡、三輪野山道六神遺跡、大畔西割遺跡 (65) ^(注33)、三輪野山宮前遺跡 (54) ^(注13-34) などが挙げられる。三輪野山宮前遺跡では黒浜式から諸磯b式ないしは浮島II式までの堅穴住居跡のほか、完形に近い土器や玉類を伴う土坑群が検出されており、墓域と推測される。なお、新市街地地区でも同時期の遺構が検出されており、市野谷芋久保遺跡や市野谷立野遺跡などで堅穴住居跡が確認されているが ^(注11-12)、内陸部に位置するためか全体に遺構数は少なく密度は希薄である。諸磯・浮島式期ではほかに長崎遺跡で貝層を伴う堅穴住居跡から良好な資料が出土しており、三輪野山宮前遺跡、三輪野山八幡前遺跡では諸磯式期及び浮島式期の堅穴住居跡が検出されている。中期では前半の五領ヶ台式期から阿玉台・勝坂式期までは遺跡が少ないと、中葉か

ら後半にかけて遺跡が増加する。野々下元木戸遺跡（119）^(注35-36)と向下遺跡（121）^(注37)は包蔵地としては別々に扱われているが本来は同一の集落跡と考えられるもので、中期後半から後期前葉までの堅穴住居跡と土坑群、貝プロックを伴うピットなどが検出されている。名都借宮ノ脇遺跡（名都借第Ⅱ遺跡）（129）^(注38)では中期中葉の堅穴住居跡とフ拉斯コ状土坑が検出されている。また地図の外になるが、中野久木谷頭遺跡では中晩式期から加曾利E式前半期にかけての大規模な環状集落が形成されている。中期末から後期初頭にかけては一時的な遺跡数の減少が認められるが、後期前葉の堀之内1式以降は多くの遺跡が所在する。思井上ノ内遺跡では堀之内1式から加曾利B1式にかけての堅穴住居跡11軒、土坑14基、貝プロック8か所、埋葬人骨などが検出されている。中中屋敷遺跡が位置する江戸川と坂川に挟まれた台地の南端（先端）部には鱗ヶ崎（前ヶ崎）貝塚（10）が存在する。1950年代初頭に酒詰仲男氏と岡田茂弘氏に率いられた学習院高等科史学部が調査を実施し、堀之内式期から加曾利B式期にかけての遺構群が濃密に分布することが明らかになっている^(注39)。目を北に転じると、市野谷二反田遺跡^(注40)では後期初頭の称名寺式期を中心とする堅穴住居跡が13軒検出されているほか、大久保遺跡^(注41)ではやはり称名寺式の埋設土器を伴う堅穴住居跡が検出されており、後期初頭は内陸部の遺跡で集落が営まれる傾向にある。古間木茶萸木谷遺跡（37）^(注40)では部分的な調査ではあるが後期の堅穴住居跡が検出され、集落の存在が想定される。三輪野山貝塚（45）^(注41-42-43)では後期から晩期にかけて100軒を超える堅穴住居跡、5箇所の貝層、20基余りの土坑墓群、晩期中葉と考えられる道路状遺構、水場遺構、埋葬人骨などが検出されているほか、環状に構築された堅穴住居跡をはじめとする遺構群に囲まれるようにすり鉢状に削られた窪地が存在する。削られた土砂は周囲に盛り上げられたと考えられ、いわゆる環状盛土と中央窪地の関係をよく示す成果である。三輪野山貝塚に関連すると思われる遺構は周辺遺跡からも検出されており、東側の三輪野山八幡前遺跡では三輪野山貝塚の中央地と一体になっていると思われる窪地が続いている、それを取り囲むように後期前葉から晩期前葉にかけての堅穴住居跡が多数検出されているほか、窪地から集落東側へ延びる道路状遺構が検出されている。三輪野山宮前遺跡などでも同時期の堅穴住居跡や掘立柱建物が検出されている。貝塚も多く形成され、三輪野山貝塚のほか、野々下貝塚（33）^(注44-45)、上貝塚貝塚（139）^(注5)、地図の外になるが上新宿貝塚は大規模な環状貝塚として知られている。いずれの貝塚も後期前葉の堀之内式期あたりから形成が開始され、晩期中頃まで存続するのが確認されているが、晩期終末頃は遺構・遺物ともほとんどみられなくなる。

弥生時代は遺跡の分布が希薄である。流山市域では江戸川流域の三輪野山北浦遺跡で中期の須和田式土器が出土し、加村台遺跡（25）と下花輪荒井前遺跡で宮の台式期の住居跡が検出されている程度である。その中で加村台遺跡では環濠と推測されるV字溝が検出されている。坂川流域では対岸の松戸市内で中芝遺跡（84）、道六神遺跡（85）、原の山遺跡（88）があるだけで、本遺跡の周辺地域は全般的に弥生時代の遺跡の少ない地域として知られている。

これに対して、古墳時代に入ると遺跡数が大きく増加してくる。前期から中期にかけては、江戸川流域では三輪野山地区で三輪野山宮前遺跡、三輪野山第Ⅲ遺跡、三輪野山北浦遺跡、三輪野山道六神遺跡等が、また坂川流域では市野谷地域で市野谷宮尻遺跡（62）^(注46)、市野谷入台遺跡、市野谷向山遺跡等が各々集落群を形成している。三輪野山道六神遺跡では北陸系の土器が、三輪野山宮前遺跡では東海系の土器が出士しており、他地域との交流を示すものと言える。市野谷地区は坂川流域では北側の最も奥まった地で、手賀沼に注ぐ大堀川支谷との分水嶺に近い地域である。市野谷宮尻遺跡は3世紀中頃から始まる集落遺跡

で、前期の竪穴住居跡が 90 軒検出され、そのうちの 1 軒から東日本で最も古い墨書き器が出土している。市野谷入台遺跡では前期から中期にかけての竪穴住居跡が 35 軒検出されているほか、小規模ながら石製模造品の製作跡も検出されており、江戸川流域では最古級に位置づけられる。同じく坂川水系の最奥部に位置する西初石五丁目遺跡では前期の竪穴住居跡が 20 軒検出されており、そのうち 1 軒から小形仿製鏡が出土している。野々下元木戸遺跡と向下遺跡からは前期の竪穴住居跡が 19 軒検出されている。西初石五丁目遺跡や野々下元木戸遺跡・向下遺跡の竪穴住居は比較的短期間の構築にとどまっており、開拓集落的な様相を呈している。中期には遺構数の一時的な減少が認められるものの、後期になると集落規模は拡大し、遺跡も更に増加する。また三輪野山地区や市野谷地区以外にも分布域が広がり、思井上ノ内遺跡に近い江戸川流域の加地区から平和台地区にかけては、加村台遺跡（25）、加町畠遺跡、加北谷津第 1 遺跡、同第 2 遺跡、平和台遺跡等が顯著な集落遺跡群を形成していく。とりわけ加町畠遺跡は後期の竪穴住居跡 74 軒のみならず、奈良・平安時代の竪穴住居跡 126 軒、掘立柱建物跡 17 棟が検出されており、拠点的集落の一つである。一方古墳の分布は顯著ではないが、三輪野山地区に前期方墳の三輪野山向原古墳（64）が、本遺跡の南約 500m には前方後円墳の三本松古墳（鰐ヶ崎塚の越遺跡内）が、そして加地区に終末期古墳の北谷津古墳（加北谷津第 2 遺跡内）が所在している。

奈良時代から平安時代になると遺跡は飛躍的に増大する。思井上ノ内遺跡や思井堀ノ内遺跡の所在する思井地区から前平井遺跡（14）や平和台遺跡、加町畠遺跡、三輪野山宮前遺跡の所在する前平井地区、平和台地区、加地区、三輪野山地区にかけては特に集落遺跡が集中している地域である。思井堀ノ内遺跡からは 8 世紀後半から 10 世紀初頭にかけての竪穴住居跡 26 軒、掘立柱建物跡 6 棟、土器焼成遺構や鍛冶遺構が検出されたほか、「庄」と記された墨書き土器 40 点以上や縁釉陶器、灰釉陶器などが出土しており、当地における拠点集落であるとともに初期莊園であった可能性が強い。思井上ノ内遺跡からは 8 世紀前半から 10 世紀にかけての竪穴住居跡 16 軒、掘立柱建物 10 棟、土器焼成遺構 4 基などが検出され、前平井遺跡は調査継続中であるが、70 軒を超える竪穴住居跡が検出されている。前平井地区的北側は加地区となるが、ここは特に集落遺跡の発達が目覚ましく、既に古墳時代から多数の竪穴住居跡が作られるが、奈良時代前半に一時的に減少するものの後半になって飛躍的に増大する。特に町畠遺跡では竪穴住居のほか掘立柱建物も多数構築され、武藏国から多数の土器が搬入されるなど、当地区の中心的な位置を占めていたと推測される。さらに目を北に転じると、三輪野山地区には式内社比定社の茂侶神社が存在するが、神社の南側に広がる三輪野山宮前遺跡では社殿から南へ約 150 m の地点で 9 世紀前半以前と考えられる掘立柱建物群が検出されたほか、近接する 8 世紀後半の竪穴住居跡からは巡方やガラス玉、耳環などが、9 世紀初頭の竪穴住居跡からは下総国分寺と同范の六葉宝相華文軒丸瓦が出土しており、三輪野山遺跡群の古代集落の中でも中心的な位置にあたると考えられる。神社の西側に当たる三輪野山北浦遺跡では、9 世紀後半の竪穴住居跡から皇朝十二銭の一つである隆平永寶が出土している。神社の南西側に当たる三輪野山道六神遺跡では、鍛冶遺構を伴う竪穴住居跡が検出されている。平和台地区には下総国分寺と同系瓦が出土する流山廃寺（138）^{注47} が、鰐ヶ崎地区には平安時代創建とされる東福寺（10、鰐ヶ崎貝塚と同位置）が立地しているが、茂侶神社を含めたこれらの 3 寺社は下総国府と常陸国府を結ぶ古代東海道ないしはその支路沿いに立地していたと考えられており、奈良・平安時代の集落も 3 寺社の間に集中する。一方で当遺跡が立地する中地区や市野谷地区など、坂川の上流域にあたる地区は遺構の密度も相対的に低くなることから、古道とともに太日川（現江戸川）を利用した水運も重要な役割を果たしていたと考えられる。こ

これらの遺跡群が古代葛飾郡桑原郷の中核をなす集落群であるとする指摘もなされている^{〔注4〕}。

鎌倉時代以降の中・近世遺跡は比較的多い。このうち城郭跡は江戸川流域で本遺跡北方2.3kmの花輪城跡(67)、坂川対岸の南1.7kmの小金城跡(94)、同東1.7kmと2.2kmにある名都借城跡(124)、前ヶ崎城跡(122)があるが、これらは中世後期の戦国時代に小金城を本拠とした高城氏関係の城跡と考えられている。発掘調査された中・近世遺跡の多くが、地下式坑や土坑墓そして屋敷跡と考えられてきている台地整形区画等が検出されている中世後期以降の遺跡であり、鎌倉時代から室町時代前半の遺跡は千葉県内の他地域と同様少ない。このうち思井堀ノ内遺跡^{〔注2-4〕}からは13世紀から15世紀にかけての掘立柱建物群、方形周溝区画墓、土坑群、地下式坑群が検出されている。特に方形周溝区画墓からは青磁碗・皿、白磁皿、和鏡、円形木製品、木櫛、菊花形皿などが副葬された成人女性骨が出土している。時期は13世紀後半から14世紀初頭と考えられ、被葬者は13世紀代に当地を支配していた地頭矢木式部太夫胤家の妻である可能性が指摘されている。なお、掘立柱建物群も同時期と考えられ、矢木氏の居館であると推測される。市野谷入台遺跡では13世紀台と考えられる方形竪穴建物群が検出されている。さらに本遺跡周辺をみると前平井遺跡、前平井堀米遺跡(15)、加東割遺跡(28)^{〔注49-50〕}、加町畠遺跡、西平井根郷遺跡(2)^{〔注36〕}、西平井二階附遺跡(3)^{〔注37〕}、三輪野山宮前遺跡^{〔注52〕}、三輪野山道六神遺跡、三輪野山第Ⅲ遺跡等から台地整形区画、地下式坑、土坑墓等が確認されており、思井地区から西平井、前平井地区、加地区、三輪野山地区が奈良・平安時代に引き続き拠点的な位置を占めていたことを想定させている。

注

- 1 流山市教育委員会 1998「1. 中中屋敷遺跡」「平成9年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」流山市教育委員会
- 2 (財)千葉県教育振興財団 2006『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1 -流山市思井堀ノ内遺跡(中世編)-』(財)千葉県教育振興財団
- 3 (財)千葉県教育振興財団 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2 -流山市思井堀ノ内遺跡(旧石器~奈良・平安時代編)-』(財)千葉県教育振興財団
- 4 千葉県教育委員会 2016『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書3 -流山市思井上ノ内遺跡-』千葉県教育委員会
- 5 (財)千葉県文化財センター 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書-流山市南刻造跡・上貝塚第II遺跡・上貝塚第I遺跡・下貝塚貝塚・下花輪第III遺跡・三輪野山第II遺跡-』(財)千葉県文化財センター
なお、この報告書に掲載されている三輪野山第II遺跡の調査範囲は、現在の三輪野山北浦遺跡と三輪野山道六神遺跡の2遺跡にまたがっている。また、下花輪第III遺跡は現在桐ヶ谷浅間後遺跡と呼称されている。
- 6 (財)千葉県教育振興財団 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書2 -流山市西初石五丁目遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- 7 (財)千葉県教育振興財団 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3 -流山市市野谷入台遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- 8 (財)千葉県教育振興財団 2009『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書4 -流山市市野谷二反田遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- 9 (財)千葉県教育振興財団 2011『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書5 -流山市大久保遺跡(下層)・市野谷向山遺跡(下層)・東初石六丁目第I遺跡(下層)・東初石六丁目第II遺跡・十夫夫第II遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- 10 (公財)千葉県教育振興財団 2013『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書6 -流山市市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡-』(公財)千葉県教育振興財団
- 11 (公財)千葉県教育振興財団 2015『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書7 -流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡(上層)・市野谷向山遺跡(上層)・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第I遺跡(上層)・十夫夫第I遺跡・十夫夫第III遺跡-』(公財)千葉県教育振興財団
- 12 (公財)千葉県教育振興財団 2016『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書8 -流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡(上層)・市野谷向山遺跡(上層)・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第I遺跡(上層)・十夫夫第I遺跡・十夫夫第III遺跡-』(公財)千葉県教育振興財団

- 遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・十太夫第Ⅲ遺跡一』（公財）千葉県教育振興財團
- 13 流山市教育委員会 2015『流山市三輪野山遺跡群発掘調査概要報告書』流山市教育委員会
- 14 流山市遺跡調査会 1985『千葉県流山市長崎遺跡』流山市遺跡調査会
- 15 流山市教育委員会 1988『千葉県流山市三輪野山第Ⅲ遺跡』流山市教育委員会
- 16 山武考古学研究所 1982『大原神社遺跡』山武考古学研究所
- 17 流山市教育委員会 1993『千葉県流山市平和台遺跡発掘調査概報』流山市教育委員会
- 18 流山市教育委員会 2003「I. 平和台遺跡②」『平成13年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 19 流山市教育委員会 1985『千葉県流山市三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡』流山市教育委員会
- 20 三輪野山八重塚遺跡調査会 1982『千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡』三輪野山八重塚遺跡調査会
- 21 流山市遺跡調査会 1985『千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡B地点』流山市遺跡調査会
- 22 流山市教育委員会 1989『加地地区遺跡群I』流山市教育委員会
- 23 流山市教育委員会 1991『加地地区遺跡群II』流山市教育委員会
- 24 流山市教育委員会 1994『加地地区遺跡群III』流山市教育委員会
- 25 流山市教育委員会 2000『加地地区遺跡群IV』流山市教育委員会
- 26 流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室 2004『流山市西平井・鰐ヶ崎地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査概報1』流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室
- 27 古里節夫 2000『幸田貝塚』『千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）』千葉県
なお、ここでは省略したが、この遺跡については主に松戸市教育委員会によって数多くの調査が行われ、概報も多数刊行されている。
- 28 (財)千葉県教育振興財團 2010『流山市下花輪荒井前遺跡—高度浄水施設建設工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書—』
(財)千葉県教育振興財團
- 29 下屋敷遺跡調査会・流山市教育委員会 1986『流山市下屋敷遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 30 流山市教育委員会 1991「III. 三輪野山八重塚遺跡F地点」『平成二年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 31 流山市教育委員会 2002「I. 三輪野山八重塚遺跡I・J地点」『平成12年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 32 (株)東京航業研究所 2015『流山市三輪野山八重塚遺跡K地点—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査—』(株)東京航業研究所
- 33 流山市教育委員会 2003「I. 大畔西割遺跡」『平成14年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 34 流山市教育委員会 2010「II. 三輪野山宮前遺跡A地点8」『平成21年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 35 (株)地域文化財コンサルタント 2009『流山市野々下元木戸遺跡（第3次調査）』(株)地域文化財コンサルタント
- 36 (株)東京航業研究所 2011『流山市野々下元木戸遺跡（第2次調査）』(株)東京航業研究所・流山市教育委員会
- 37 流山市教育委員会・(株)地域文化財研究所 2012『下向遺跡 野々下元木戸遺跡（第4次）』流山市教育委員会
- 38 流山市教育委員会 1989『千葉県流山市名都借第II遺跡発掘調査概報』流山市教育委員会
- 39 酒詰伸男・岡田茂弘他 刊行年不詳（1952～1953?）『千葉県前ヶ崎貝塚発掘調査報告』学習院高等科史料学部
- 40 流山市教育委員会 1997「II. 古閑木茶葉木谷遺跡」『平成8年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 41 (財)千葉県文化財センター 2001『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書—流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前一』(財)千葉県文化財センター
- 42 (財)千葉県文化財センター 2004『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書（2）—流山市三輪野山貝塚・三輪野山宮前遺跡・三輪野山八幡前遺跡—』(財)千葉県文化財センター
- 43 流山市教育委員会 2008『流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書』流山市教育委員会
- 44 (財)千葉県文化財センター 1995『流山市野々下貝塚確認調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 45 流山市教育委員会 2013「III. 野々下貝塚」『平成24年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 46 (財)千葉県教育振興財團 2006『流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書1—流山市市野谷宮尻遺跡—』(財)千葉県教育振興財團
- 47 辻 史郎 1998「II. 流山魔寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県
- 48 流山市教育委員会 2007「V. 思井掘ノ内遺跡」『平成17年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会

- 49 (財)千葉県文化財センター 1997『流山市若宮第Ⅱ遺跡—都市計画道路3・3・2号線（新川南流山線）埋蔵文化財発掘調査報告書一』(財)千葉県文化財センター
なお、調査範囲は若宮第Ⅱ遺跡から加東削遺跡にまたがっており、中世遺構が検出された部分は加東削遺跡の範囲内に当たる。
- 50 (株)地域文化財研究所 2014『加東削遺跡 3次』(株)地域文化財研究所
- 51 流山市教育委員会 2011「Ⅲ. 三輪野山宮前遺跡A地点8-2」『平成22年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 52 北澤 滌 1998「三輪野山遺跡群（三輪野山道六神遺跡B地点）』『千葉県の歴史 資料編 中世1（考古資料）』千葉県

上記以外の参考文献

- (財)千葉県文化財センター 1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V—谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)—』(財)千葉県文化財センター
- (財)千葉県文化財センター 1994『流山上新宿貝塚発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
流山市立博物館市史編さん係編 2001『流山市史 通史編1』流山市教育委員会
流山市立博物館編 2015『ふるさと流山のあゆみ』流山市教育委員会

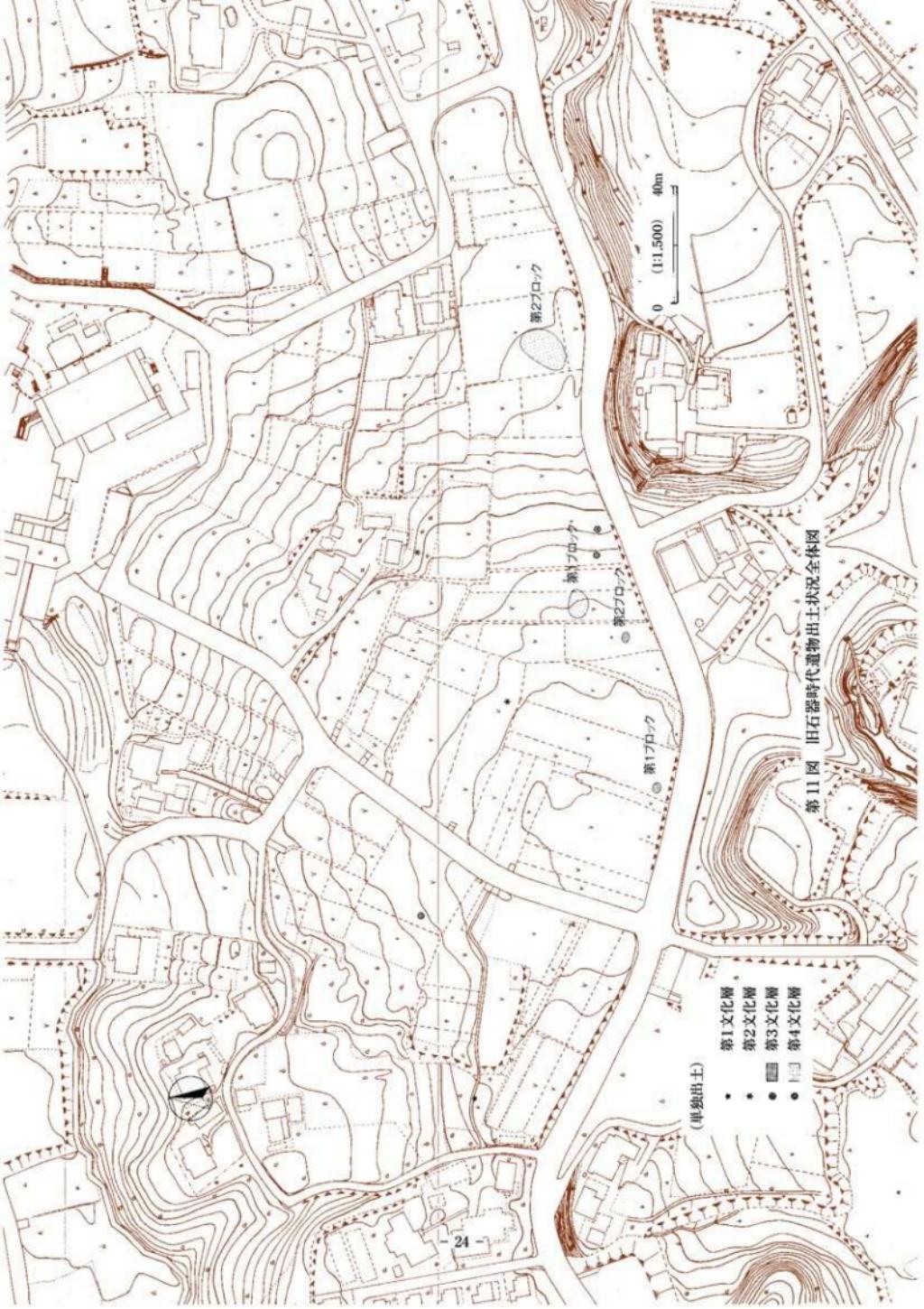


第10図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第3表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	中川屋敷遺跡	縄文(早・古・中・後・晚),奈良・平安,中世	72	上日塚大門遺跡	縄文(前・後),平安
2	西平井根堀遺跡	縄文,中世	73	谷尻周間遺跡	田石器,縄文(前・後),平安
3	西平井二削根遺跡	縄文,中世	74	人町台遺跡	縄文(前),古墳,中世
4	中川屋敷遺跡	平安,近世	75	西初石桜塚遺跡	縄文(前・中・後),近世
5	恩井ノ内遺跡	田石器,縄文(早・古・中・後),古墳(中),奈良・平安,中世	76	在山東遺跡	田石器,縄文,奈良・平安
6	西平井大崎遺跡	縄文	77	東初石6丁目第二遺跡	縄文(後),平安
7	恩井の足跡	縄文(早・前),古墳,近世	78	十夫第一遺跡	縄文(中・後),平安,近世
8	猪・崎塚の船沼遺跡(三本松古墳)	古墳(後)	79	東初石6丁目第一遺跡	縄文(中),平安
9	猪・崎塚の船沼遺跡	古墳(後)	80	十夫第三遺跡	縄文,平安
10	猪・崎塚貝塚	縄文(早・中・後),平安	81	御詔神社遺跡	縄文(中)
11	平和台遺跡	縄文(中),古墳,平安,中世	82	野々山浜訪櫻遺跡	縄文(前)
12	人町神社遺跡	縄文(早),古墳(後),平安	83	幸田貝塚	田石器,縄文(前・中・後),古墳
13	河本道跡	縄文(早),平安	84	中芝遺跡	弥生(後),古墳(前・中・後)
14	南平井遺跡	縄文(中),平安	85	道六神道跡	縄文(早・前・中・晚),弥生(後),古墳(後),奈良・平安
15	南平井堀木遺跡	古墳(後),奈良・平安	86	木口川(中金)遺跡	縄文(前),古墳(中)
16	恩井上ノ内遺跡	田石器,縄文(早・前・中・後),古墳,奈良・平安,中世	87	中杉白道跡	縄文(後)
17	古賀木山第1号遺跡	縄文(前),平安	88	原の山道跡	縄文(早・前),弥生,古墳(中・後),平安
18	古賀木山第1号	古墳	89	吹平賀遺跡	縄文(後)
19	古賀木山第2号遺跡	縄文,古墳(後),奈良・平安	90	吹平賀廻輪遺跡	縄文(中)
20	芝崎第2号墳跡	古墳	91	吹平賀置遺跡	田石器,縄文(前・中・後),中世
21	芝崎大圓墳遺跡	縄文(前・中),古墳,平安	92	吹平賀山山頂遺跡	田石器,縄文(早・前),古墳(前・中・後)
22	芝崎第1号墳遺跡	古墳	93	吹平賀向白道跡	古墳
23	古賀木本芳賀第1号遺跡	縄文(前・中),平安	94	小笠城跡(太谷口小金城跡)	縄文,古墳,平安,中世
24	古賀木本芳賀第2号遺跡	縄文(後),平安	95	小金古墳群	古墳
25	加古村道跡	弥生(中),古墳(後),平安,近世	96	西(小金)・北(小金)遺跡	縄文(前・中・後)
26	加野町道跡	縄文,古墳,奈良・平安	97	坂東前遺跡	田石器,縄文(前)
27	加若宮第1号遺跡	田石器,縄文,平安	98	湖ノ上(湖の脇)遺跡	縄文(前・中・後),古墳(前・中・後)
28	加東前遺跡	縄文(前),中世	99	坂外・北(小金駅付近)(坂外)遺跡	縄文(前・後)
29	後平井中通遺跡	古墳(後),奈良・平安	100	山下通遺跡	縄文(前・中)
30	野ヶ下西方遺跡	縄文(前・中)	101	ノク道跡	縄文(早・前・中)
31	野ヶ下大屋道跡	縄文(後),平安	102	寺谷城跡	中世
32	野ヶ下山中道跡	縄文(前),平安	103	殿内下道跡	縄文(後)
33	野ヶ下貝塚	縄文(前・中・後・晚)	104	浪田道跡	縄文(中・後),平安,近世
34	野ヶ下根野第1号遺跡	平安	105	男城跡	中世
35	野ヶ下根野第2号遺跡	縄文(後),平安	106	上野台(二ツ木向台Ⅱ)遺跡	弥生(後)
36	野ヶ下蘿蔭	縄文(後),近世	107	二ツ木向白(二ツ木)二丁目(木幡)遺跡	縄文(早・前・後),弥生(後),古墳(後)
37	古賀木素木谷遺跡	縄文(早・前・後)	108	夢立前道跡	縄文(早・前),古墳(後)
38	古賀木畠田遺跡	縄文(前)	109	八人道跡	縄文(前)
39	古賀津第2号遺跡(北古賀津古墳)	縄文,古墳,平安	110	高見(見台)I遺跡	縄文(中・後),古墳(中・後)
40	加北古賀津第1号遺跡	田石器,縄文,平安	111	高見大形寺遺跡	縄文(中),古墳(中・後)
41	加若宮第3号遺跡	縄文,平安	112	高見(見台)II遺跡	縄文(中・後)
42	三輪野山八塚塚第2号遺跡	縄文(早),平安	113	長丘五斗代遺跡	縄文(中)
43	三輪野山八塚塚	縄文,古墳,平安	114	長崎塚群	近世
44	三輪野山低地遺跡	縄文(後)	115	長崎五枚割遺跡	縄文(前・中),平安
45	三輪野山貝塚	田石器,縄文(中・後・撫・晚)	116	長崎遺跡	縄文(早・前・中・後)
46	三輪野山小鶴前遺跡	縄文,古墳,平安,云並	117	長崎金乗院遺跡	古墳,平安
47	市野谷砂谷塚遺跡	古墳(後),平安	118	野ヶ下長田遺跡	縄文(早・前・中・後)
48	市野谷桜の宮塚遺跡	縄文	119	野ヶ下元木ノ原遺跡	縄文(中・後),古墳(後),平安
49	市野谷桜の宮内1号遺跡	縄文(前・中),古墳(中・後)	120	野ヶ下土手内遺跡	縄文(中)
50	市野谷宮浅間遺跡	縄文	121	野人道跡	縄文(中・後),平安
51	市野谷中通遺跡	縄文(前・中),平安	122	野々崎城跡	中世
52	市野谷向山遺跡	縄文(前・中),古墳(後)	123	野々崎道跡	縄文(前)
53	三輪野山六神塚遺跡	縄文,古墳,平安,中世	124	石倉城跡	中世
54	三輪野山田舎遺跡	縄文(前),古墳(後),平安,近世	125	西院前遺跡	縄文(前),平安,近世
55	三輪野山第5号遺跡	縄文,古墳(前),近世	126	鹿原(1)遺跡	縄文(中),弥生,古墳
56	三輪野山北通遺跡	田石器,縄文(前・中),古墳(中・後),平安,近世	127	名都備並塚遺跡	縄文(前・中),平安
57	市野谷平久保遺跡	縄文(早)	128	名都備並木道跡	縄文(中),平安
58	市野谷二段田遺跡	縄文(前)	129	名都備官ノ馬道跡	縄文(中)
59	市野谷立野遺跡	縄文(前),古墳(後)	130	那原(1)II遺跡	縄文(中)
60	大久保遺跡	縄文(前)	131	根木内城跡	中世
61	市野谷八ノ通遺跡	古墳(前)	132	根木内遺跡	縄文(前・中・後),中世
62	市野谷宮反通遺跡	古墳(後),奈良・平安	133	行人台遺跡,行人台城跡	縄文(早・前・中),古墳(中・後),中世
63	西若石5丁目遺跡	縄文	134	久保木質(吹平賀向山)遺跡	古墳
64	三輪野山向原古墳	縄文(前),弥生,古墳(前)	135	久保平賀古墳	古墳
65	人町西脇遺跡	縄文(早・中),古墳(後),平安	136	二ツ木通台遺跡	縄文(前)
66	人町ノ中通遺跡	縄文(早・前・中),平安	137	仲通遺跡	田石器,縄文(前・中),古墳(中)
67	花輪林下道跡	中世	138	武山蛇寺遺跡	奈良
68	下花輪林下道跡	縄文(後),古墳(後)	139	上日塚貝塚	田石器,縄文(前・中・後・晚),中・近世
69	下花輪克舟曲道跡	弥生,古墳,平安			
70	下花輪西山遺跡	縄文,古墳,中世			
71	下花輪克舟道跡	縄文(中・後),平安,近世			

第11図 旧石器時代遺物出土状況全図



第2章 旧石器時代の遺構と遺物

第1節 概要（第11・12図）

中中屋敷遺跡の旧石器時代の調査は、平成9年度～10年度・13～15年度・17年度・20～23年度に実施した。調査の結果、5時期の文化層からブロック（石器集中地点）4か所、単独出土（2点以下の石器出土地点）8か所が検出された。

第1文化層は、立川ローム層の最下層であるX b層から単独で出土したチャートの剥片で、県内でも古い石器である。

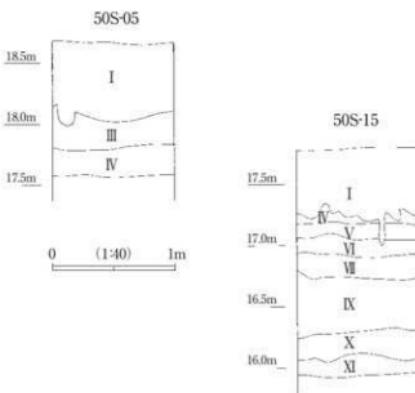
第2文化層は、立川ローム層の第2黒色帯であるⅦ～Ⅸ層の単独出土の石器群で2か所が検出された。1か所からは頁岩の石刃、もう1か所からは流紋岩の礫2点が出土している。

第3文化層は、立川ローム層のAT降灰以前のVI～VII層の石器群で、ブロック2か所、単独出土1か所が検出された。ブロックはホルンフェルスや頁岩の剥片で構成されるものとチャートや流紋岩などの礫のみで構成されるものがある。単独出土からは玉髓の剥片2点が出土している。

第4文化層は、立川ローム層のAT降灰以後のIV～V層の石器群で、ブロック2か所、単独出土4か所が検出された。第1ブロックはチャートの剥片と安山岩・流紋岩の礫で構成される小規模のものである。第2ブロックは安山岩・砂岩・石英斑岩・チャートなどの礫を主体とし、これに半数を占めるトロトロ石やチャートの剥片、これに凝灰岩・ホルンフェルス・頁岩・黒曜石・安山岩などの剥片で構成される大規模なものである。単独出土は上記の各種石材、剥片・石核などが出土している。

第5文化層は立川ローム層のⅢ層上部から単独で出土した黒曜石の尖頭器である。

以上その他に、上層遺構やグリッドから出土した文化層の決定できない時期不明の旧石器時代の石器が出



第12図 基本土層

第4表 文化層・ブロック別石器・礫・石材組成表

文化層	ブロック	石	材	ナイフ形石器			尖頭器			二次加工物			側面削片			石片			石核			漂石			石核合計			漂石			合計		
				小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大			
第1文化層	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.73	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.73		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14.68	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.68		
第2文化層	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14.68	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14.68		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14.68	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14.68		
第1ブロック	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8.22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8.22		
	砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8.22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8.22		
第1ブロック	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.51	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.51		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	8.73	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8.73		
第3文化層	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
第1ブロック	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
第1ブロック	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
第1ブロック	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
第2ブロック	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
第1ブロック	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
第1ブロック	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
第2ブロック	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
第3文化層	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
第4文化層	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
第5文化層	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
不明不明	小・中・大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
合	合	2	8.02	0	0	1	8.98	1	8.20	2	8.47	1	1.98	6	0.122	22	60.84	2	0.27	9	45.20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524		
	粗粒岩	1	8.98	1	4.41	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524			
合	合	0	0	1	17.26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524			
	粗粒岩	0	0	1	17.26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524			
合	合	1	2.60	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524			
	粗粒岩	1	6.60	1	3.20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524			
合	合	2	16.67	2	20.40	1	8.98	3	30.55	2	1.70	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524				
	粗粒岩	2	16.67	2	20.40	1	8.98	3	30.55	2	1.70	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524				
合	合	5	16.67	2	20.40	1	8.98	3	30.55	2	1.70	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.524					

土している。

なお、本遺跡における立川ローム層の堆積状況は、下総台地の東葛地域で広く観察される基本土層と概ね共通しているが、Ⅷ層は分層されず、Ⅹ層は2枚に分層される地点がある。

最後になるが、石材の名称について、これまで報告されてきた名称と異なるものがあり、特に礫については、概ね安山岩・石英斑岩は流紋岩類、片麻岩はホルンフェルスに対応するようである。

図面の縮尺は、出土分布図が1/80、遺物の実測図が1/2である。

第2節 遺構と遺物

1 第1文化層

第1文化層は、立川ローム層の最下層であるX b層から単独で出土したチャートの剥片で、県内でも古い石器である。

単独出土（第13図、第5表、図版16）

M 49-42 グリッドのX b層から出土している。チャートの小型の縦長剥片で自然面か節理と思われる面からの細かい後上調整がみられる。

2 第2文化層

第2文化層は、立川ローム層の第2黒色帯であるⅦ～Ⅸ層の単独出土地点の石器群で、2か所が検出された。1か所からは頁岩の石刃、もう1か所からは流紋岩の礫2点が出土している。

単独出土（第14図、第6表、図版16）

M 49-18 グリッドのⅨ層上部から出土している。比較的珪化度の高い淡い茶灰色の頁岩の石刃で、細かく打面調整が行われている。正面左側縁下部及び右側縁下部と裏面右側中央に細かい剥離痕がみられる。

単独出土（第15図、第6表、図版16）

P 49-86 グリッドのⅨ層中部から出土している。小形の流紋岩の礫である。それぞれ完形で特に被熱の痕跡は見られない。

3 第3文化層

第3文化層は、立川ローム層のA T降灰以前のⅥ～Ⅷ層の石器群で、ブロック2か所、単独出土地点1か所が検出された。ブロックはホルンフェルスや頁岩の剥片で構成されるものとチャートや流紋岩などの礫のみで構成されるものがある。単独出土からは玉髓の剥片2点が出土している。

第1ブロック（第16図、第7・8表、図版16・18）

O 51-18 グリッドで出土しており、調査時の所見によれば出土層位はⅥ～Ⅷ層である。ホルンフェルスの小形の剥片や頁岩の剥片で構成される。1は珪化度の高い若干濃い茶灰色の頁岩の剥片である。正面に自然面を大きく残し、右側が大きく欠損している。

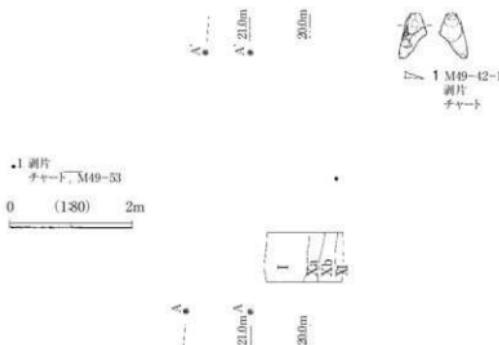
第2ブロック（第17図、第8表、図版18）

Q 50-81 グリッドのⅦ～Ⅸ層上部で出土している。チャートや流紋岩を主体とした礫のみで構成される。

単独出土（第18図、第7表、図版16・18）

R 50-61 グリッドで出土しており、調査時の所見によれば出土層位はⅥ～Ⅷ層である。1は半透明の玉髓の縦長剥片で、下部が欠損している。

Ⓐ M49-43



第13図 第1文化層単独出土遺物分布・出土遺物

第5表 第1文化層単独出土石器属性表

ブロック	検査番号	総合番号	グリッド	遺物番号	柱記	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
単独	第13図	1		M49-42	1	剥片	チャート	18.1	12.1	5.1	0.73	

第6表 第2文化層単独出土石器・礫属性表

ブロック	検査番号	総合番号	グリッド	遺物番号	柱記	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
単独	第14図	1		Q49-18	2	石刃	頁岩	73.7	28.1	8.5	14.68	
単独				P49-86	2	礫	流紋岩				50.47	
				P49-86	3	礫	流紋岩				94.06	

4 第4文化層

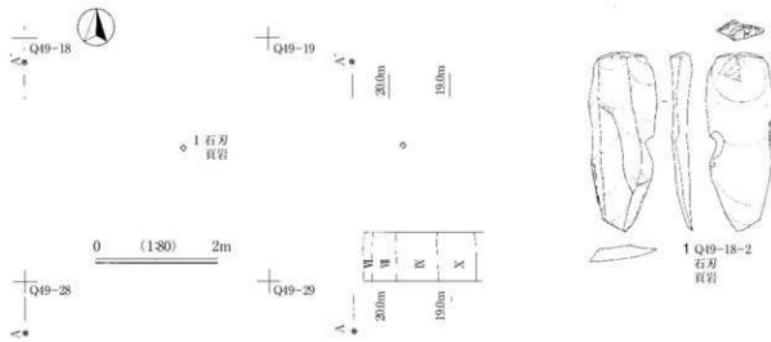
第4文化層は、立川ローム層のA T降灰以後のIV～V層の石器群で、ブロック2か所、単独出土地点4か所が検出された。第1ブロックはチャートのナイフ形石器・剥片などと安山岩・流紋岩などの礫で構成される小規模のものである。第2ブロックは安山岩・砂岩・石英斑岩・チャートなどの礫を主体とし、これに半数を占めるトロトロ石やチャートの剥片・凝灰岩・ホルンフェルス・頁岩・黒曜石・安山岩などの剥片で構成される大規模なものである。単独出土地点は上記の各種石材による剥片・石核などが出土している。

第1ブロック（第19・20図、第9・10表、図版2・16・18）

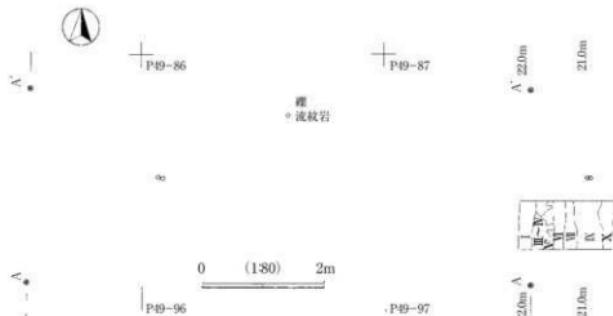
Q 50-33～35・43～45 グリッドで出土しており、出土層位はIV～VI層であるが、主体はIV～V層である。チャートのナイフ形石器・剥片などと安山岩・流紋岩などの小形で不定形な礫で構成される小規模のものである。1はチャートのナイフ形石器の先端部で右側縁に調整痕がみられる。2は黄灰色の不純物を含む半透明な黒曜石の縦長剥片で、両端が欠損している。

第2ブロック（第21～37図、第11・12表、図版2・16～19）

S 50-05～07・13～17・24～27・33～37 グリッドで出土しており、調査時の所見によれば出土層位



第14図 第2文化層単独出土遺物分布・出土遺物



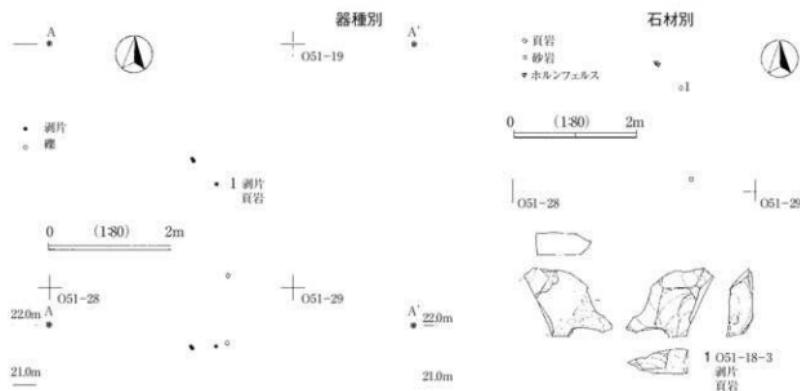
第15図 第2文化層単独出土遺物分布

第7表 第3文化層出土石器属性表

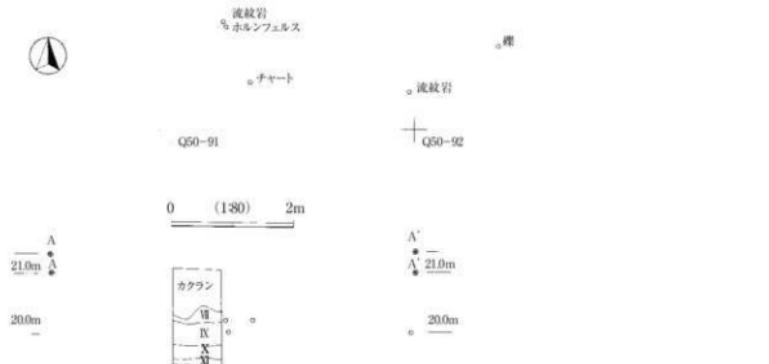
ブロック	接合番号	接合番号	グリッド番号	遺物番号	柱記	器種	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
第1ブロック	第16回	1		O51-18	3	薄片	頁岩	28.3	36.2	11.4	8.22	
				O51-18	2	a 薄片	ホルンフェルス	14.61	6.42	2.46	0.29	
				O51-18	2	b 薄片	ホルンフェルス	8.41	9.72	2.81	0.22	
単独	第18回	1		R50-61	2	薄片	玉隕	23.4	20.1	7.2	2.61	
				R50-61	1	薄片	玉隕	19.49	19.9	4.59	2.15	

第8表 第3文化層出土蝶属性表

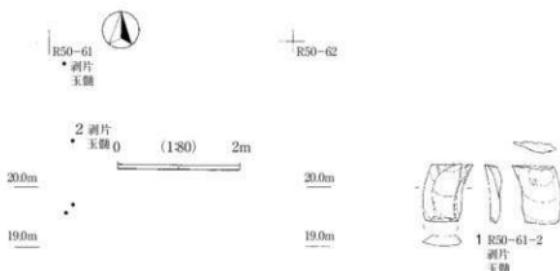
ブロック	接合番号	グリッド番号	遺物番号	柱記	器種	石 材	重量 (g)	備考	ブロック	接合番号	グリッド番号	遺物番号	柱記	器種	石 材	重量 (g)	備考
第1ブロック		O50-81	4	雄	砂岩	41.21			第2ブロック		Q50-81	2	雄	チャート		15.4	
		Q50-81	1	a	雄	チャート	1.13				Q50-81	3	雄	流紋岩		7.4	
		Q50-81	1	b	雄	流紋岩	15.23				Q50-81	4	雄	ホルンフェルス		2.9	
		Q50-81	1	c	雄	流紋岩	26.51				Q50-81	5	雄	流紋岩		6.1	
		Q50-81	1	d	雄	チャート	44.56										



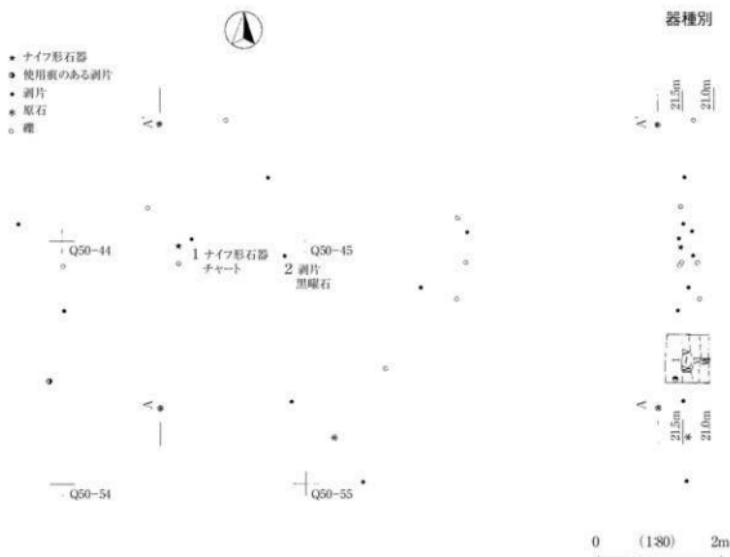
第16図 第3文化層第1ブロック出土遺物分布・出土遺物



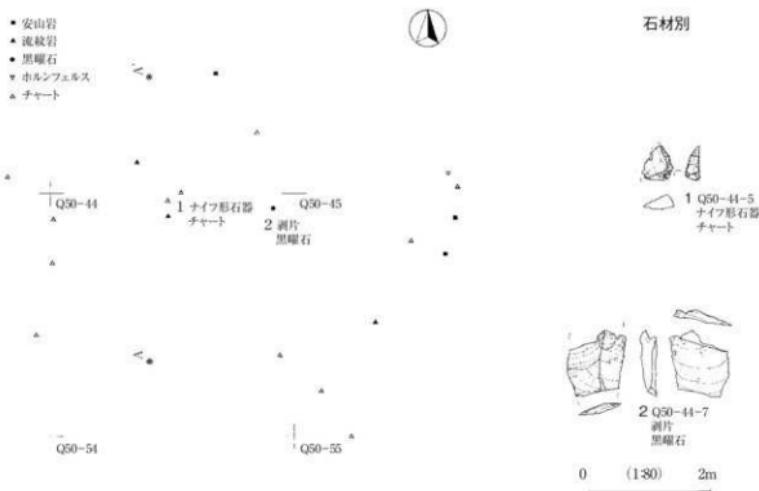
第17図 第3文化層第2ブロック出土遺物分布



第18図 第3文化層単独出土遺物分布・出土遺物



第19図 第4文化層第1ブロック出土遺物分布（1）



第20図 第4文化層第1ブロック出土遺物分布（2）・出土遺物

第9表 第4文化層第1ブロック出土石器属性表

接合番号	接合番号	グリッド番号	遺物番号	枚記	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
第20回	1		Q50-44	5	ナイフ形石器	チャート	13.60	12.80	5.80	0.85	
第20回	2		Q50-44	7	剥片	黒曜石	25.90	24.20	4.50	3.27	
			Q50-33	1	剥片	チャート	18.12	8.41	4.32	0.49	
			Q50-34	2	剥片	チャート	9.93	10.63	2.81	0.28	
			Q50-34	3	剥片	チャート	15.81	7.51	3.98	0.35	
			Q50-35	1	剥片	チャート	11.94	11.28	3.73	0.61	
			Q50-43	1	使用痕のある剥片	チャート	11.79	14.38	3.56	0.62	
			Q50-44	1	剥片	チャート	9.19	11.47	2.61	0.24	
			Q50-44	6	剥片	チャート	17.26	8.09	3.81	0.42	
			Q50-45	2	原石	チャート	42.83	20.78	10.12	13.43	
			Q50-45	3	剥片	チャート	13.60	13.10	1.56	0.22	
			Q50-45	4	剥片	チャート	8.11	11.02	2.13	0.10	

第10表 第4文化層第1ブロック出土礫属性表

接合番号	グリッド番号	遺物番号	枚記	器種	石材	重量(g)	備考	接合番号	グリッド番号	遺物番号	枚記	器種	石材	重量(g)	備考
Q50-34	1		稚	流紋岩		1.82		Q50-44	4		稚	流紋岩		6.64	
Q50-34	5		稚	安山岩		33.20		Q50-45	1		稚	流紋岩		21.08	
Q50-35	2		稚	ホルンフェルス		12.84		Q50-45	5		稚	安山岩		57.10	
Q50-44	2		稚	チャート		2.98		Q50-45	6		稚	安山岩		24.80	

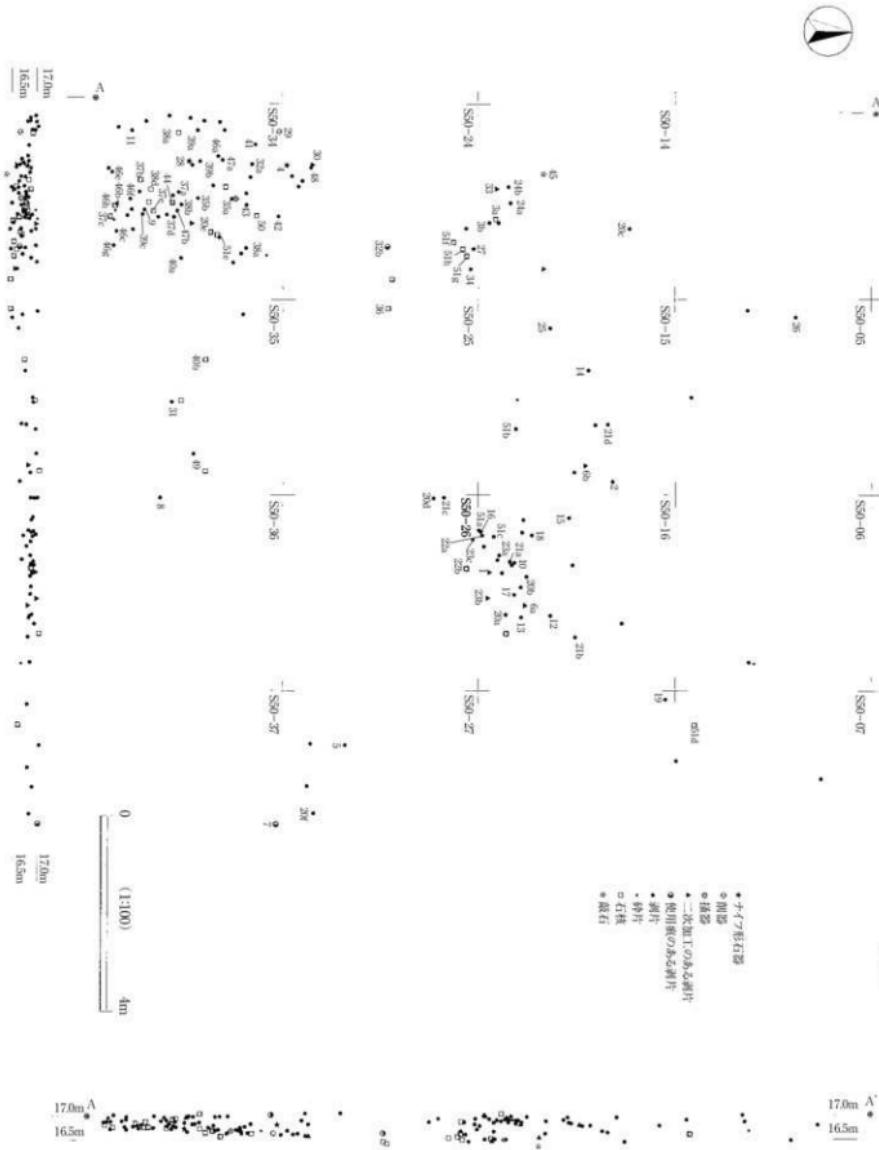
はⅢ～Ⅳ層が主体である。安山岩・砂岩・石英斑岩・チャートなどの比較的大形の礫を主体とし、これに半数を占めるトロトロ石やチャートの剥片、凝灰岩・ホルンフェルス・頁岩・黒曜石・安山岩などの剥片で構成される大規模なものである。

1は黄灰色の不純物を含む漆黒の黒曜石の二次加工のある剥片で、下部が欠損している。正面右側縁の一部に細かい剥離痕がみられる。2は不純物をほとんど含まない漆黒の黒曜石の不定形な剥片である。3は灰白色で半透明な黒曜石の石核と剥片の接合資料である。3 aは剥片を素材とした石核で、3 bは3 aの作業面を打面として小形で不定形な剥片を剥離している。

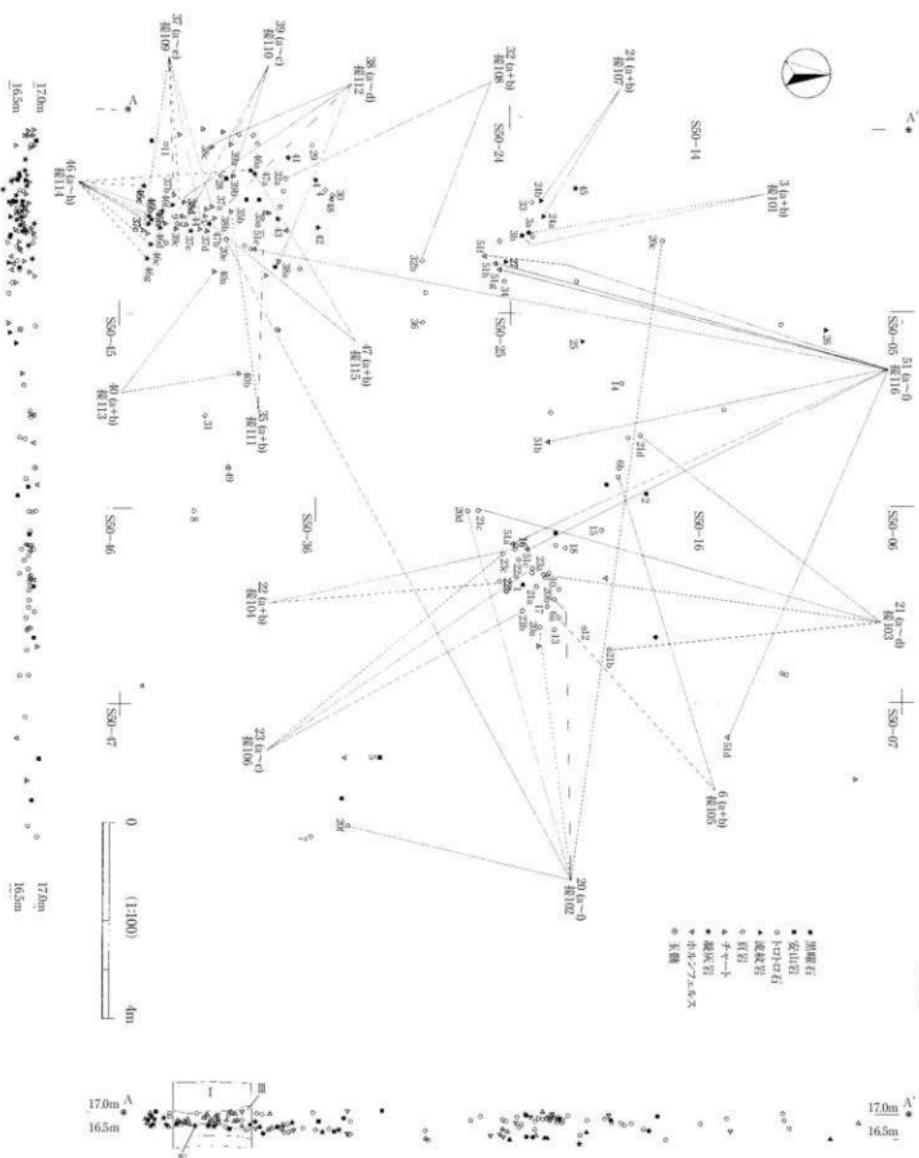
4はいわゆる黒色緻密質安山岩のナイフ形石器である。正面に自然面を残す不定形な剥片を素材とし、正面の左側縁及び裏面左側縁の下部に調整加工を行った基部加工のナイフ形石器としたが、小形で不定形な剥片を剥離した石核の可能性もある。5は安山岩でしたが、ホルンフェルスの可能性の高い中形の縦長剥片である。下端部に自然面あるいは節理が残っている。打面についても他の剥離面に比べ、下端部のように平滑があるので、自然面の可能性が高いかもしれない。

6～23はいわゆるトロトロ石の石器としたが、石材は黒色頁岩の可能性が高い。接合資料から判明したが、同一個体の中で黄灰色～灰色～灰白色の資料と白色的資料があり、色調などに変異が見られた。多少光沢が失われていることなどの表面の状態から、後者が変異を受けたものと考えられ、その原因については被熱による可能性が高いと思われるが詳細は不明である。もし、被熱によるものであるならば、火廻の特定は重要な課題であることから、被熱石器の出土地点=火廻という短絡的な発想ではなく、炭化物や焼土などの分布の分析と併せ総合的に判断してゆくのが不可欠であろう。6は正面に平坦な自然を持つ不定形な剥片である。2点が接合して1個体となる。7は使用痕のある剥片で、正面下端部に細かい剥離痕がみられる。8～19は不定形な剥片である。18を除き、ほぼ全面あるいは一部に自然面が残っている。20は20 f→20 e→90度打面転移して20 d→さらに90度転移して20 c→45度転移して20 b→再び上位から20 aの順に剥離している。接合はしなかったが、自然面の平坦面が類似していることから、6と同一母岩の可能性がある。20 eは縦長剥片の裏面末端側の両側縁に剥離痕がみられる。20 a～20 dは

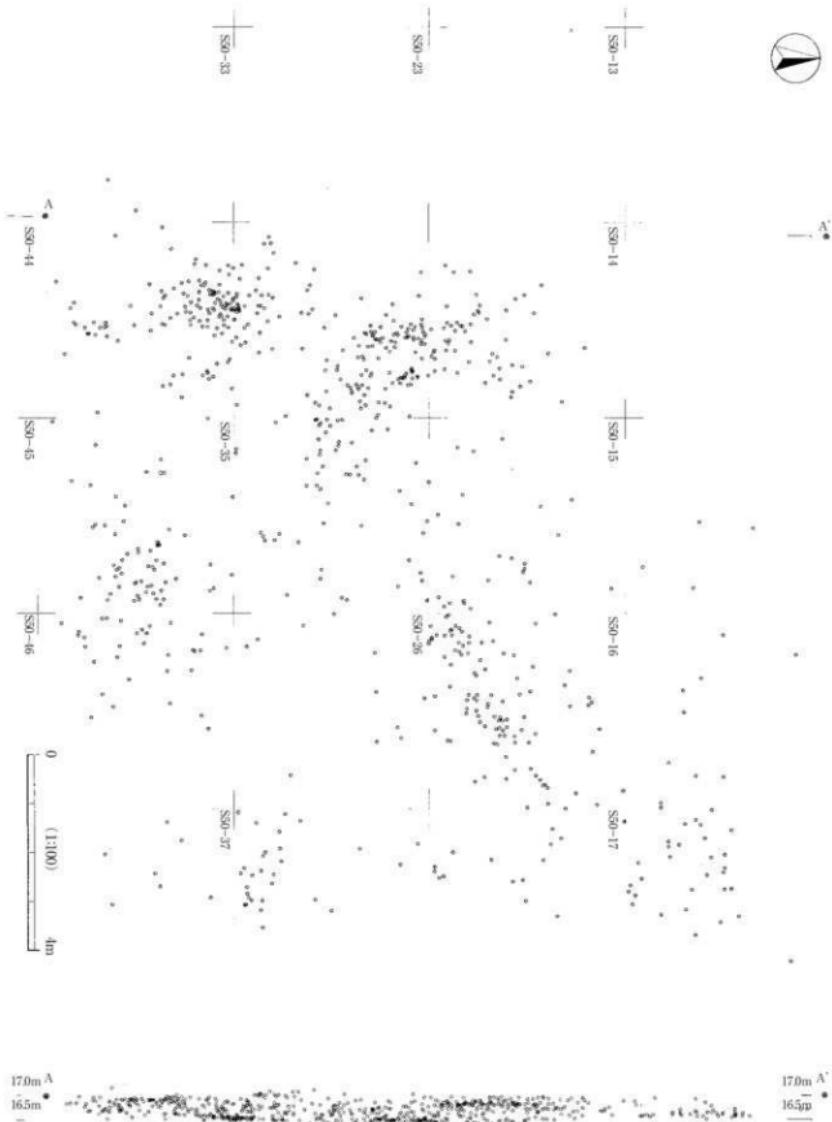
器種別



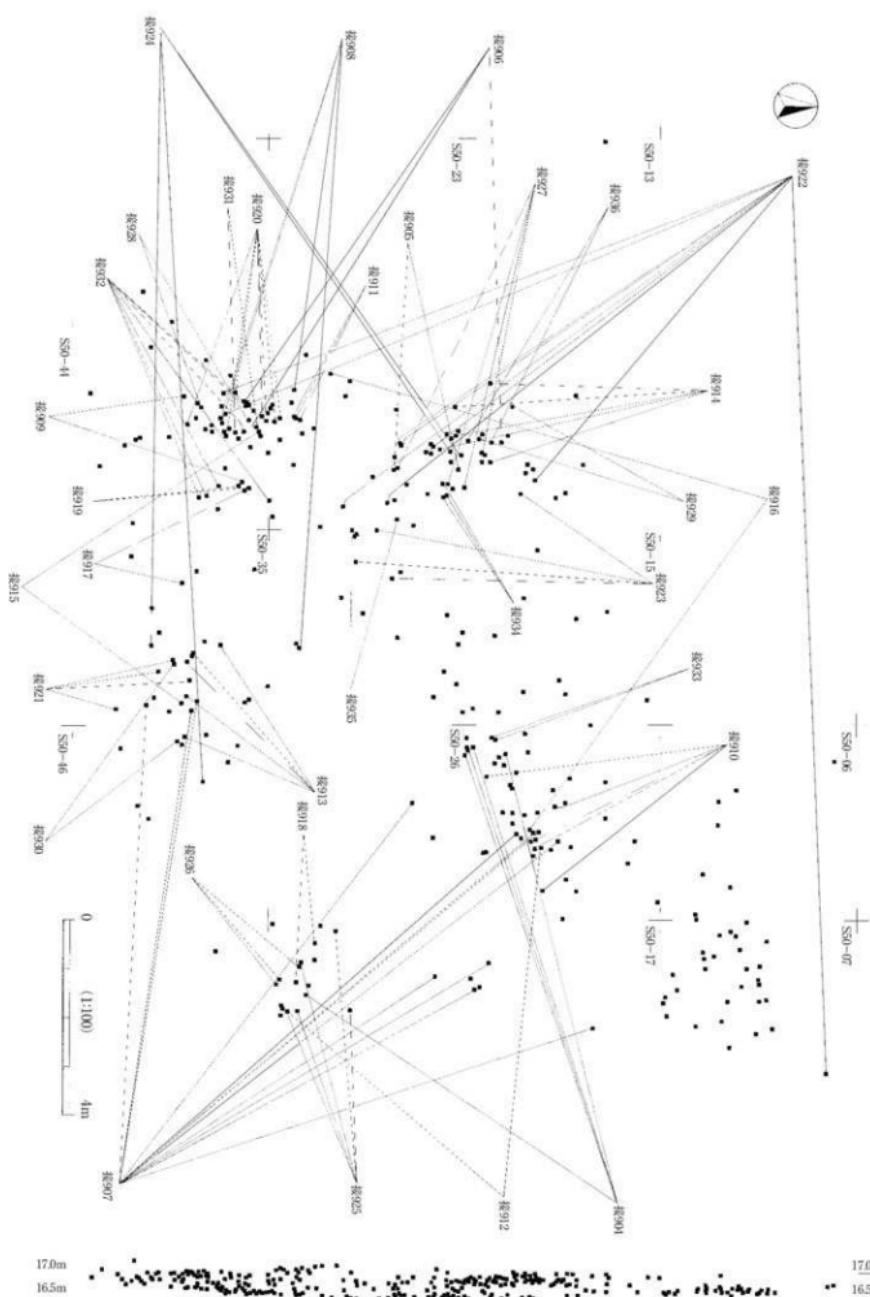
第21図 第4文化層第2ブロック出土遺物分布（1）



第22図 第4文化層第2ブロック出土遺物分布（2）



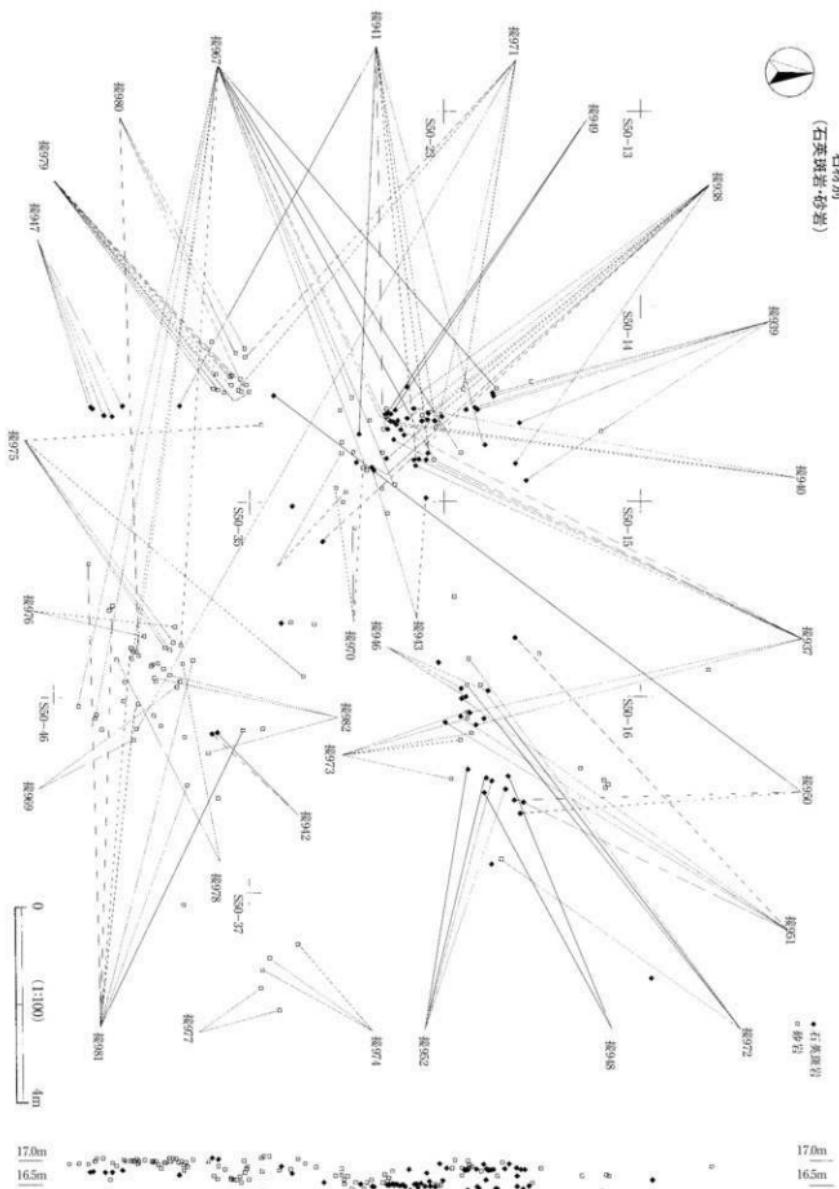
第23図 第4文化層第2ブロック疊分布（1）



第24図 第4文化層第2ブロック礫分布（2）



(石材別
石英斑岩・砂岩)



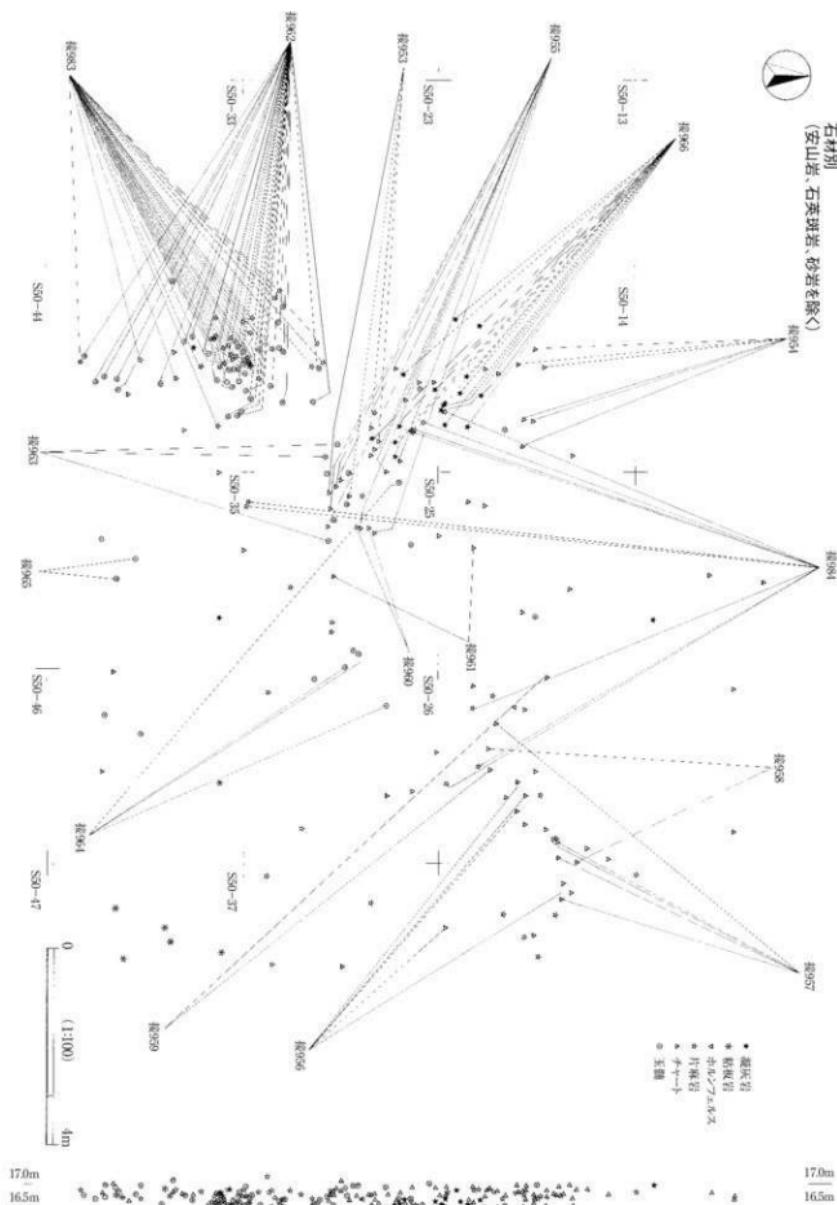
第25図 第4文化層第2ブロック疊分布（3）



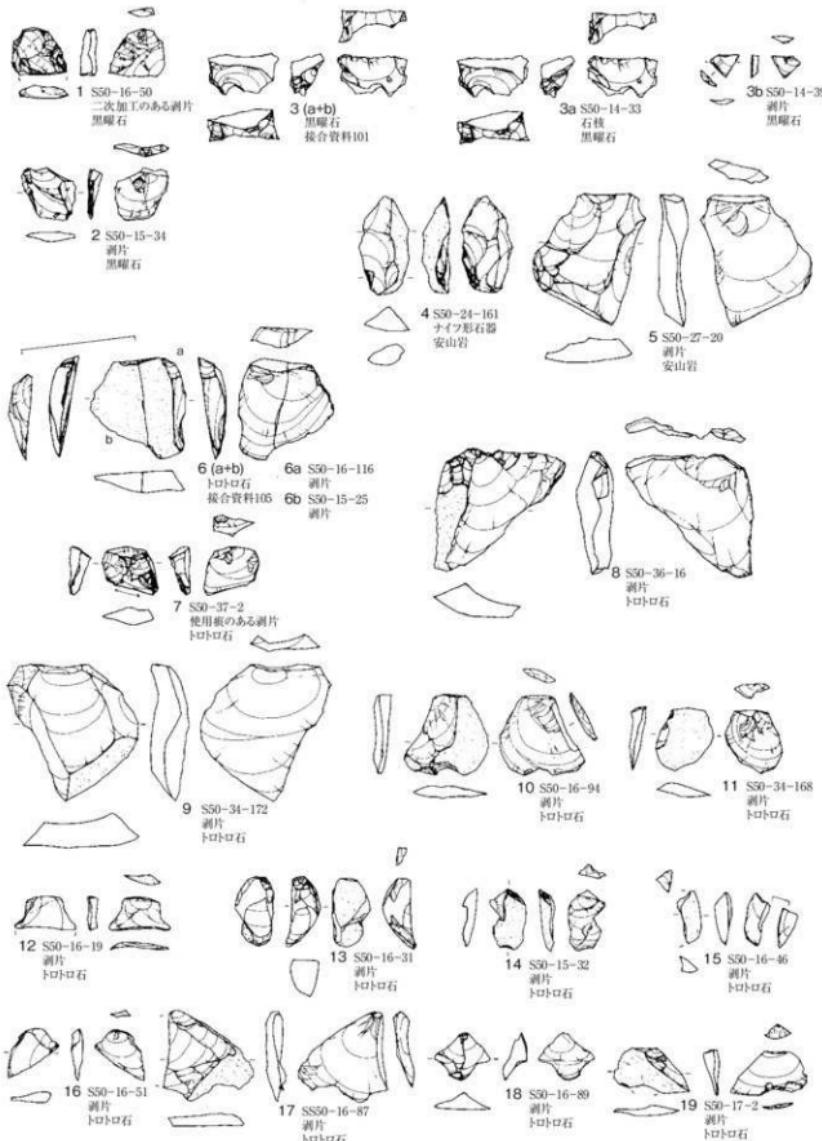
石材別
(安山岩、石英斑岩、砂岩を除く)

長963 長954
長963 長955
長965 長956
長965 長957
長964 長958
長964 長959
長965 長960
長965 長961
長965 長962
長965 長963
長965 長964
長965 長965
長965 長966
長965 長967
長965 長968
長965 長969
長965 長970
長965 長971
長965 長972
長965 長973
長965 長974
長965 長975
長965 長976
長965 長977
長965 長978
長965 長979
長965 長980
長965 長981
長965 長982
長965 長983
長965 長984
長965 長985
長965 長986
長965 長987
長965 長988
長965 長989
長965 長990
長965 長991
長965 長992
長965 長993
長965 長994
長965 長995
長965 長996
長965 長997
長965 長998
長965 長999
長965 長1000

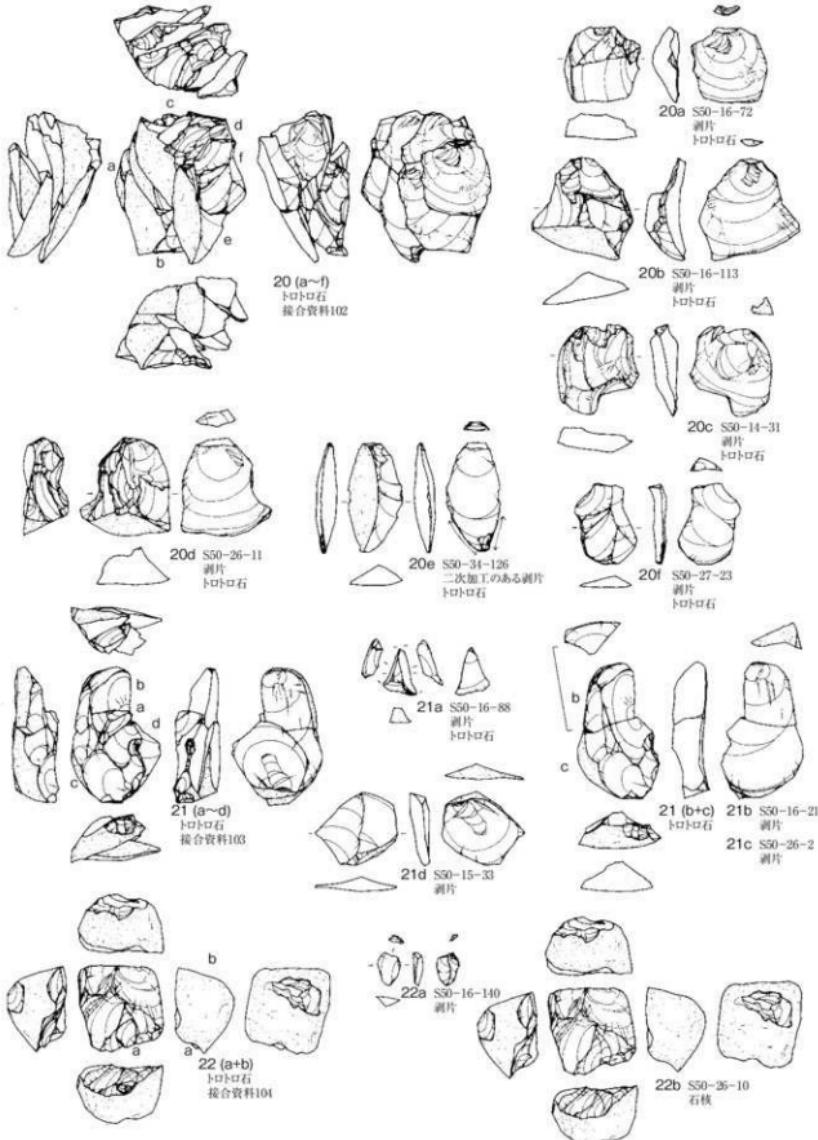
- 灰岩
- ★ 粘板岩
- ▼ カルカフォレックス
- ▲ 片麻岩
- △ チートル
- 玉髓



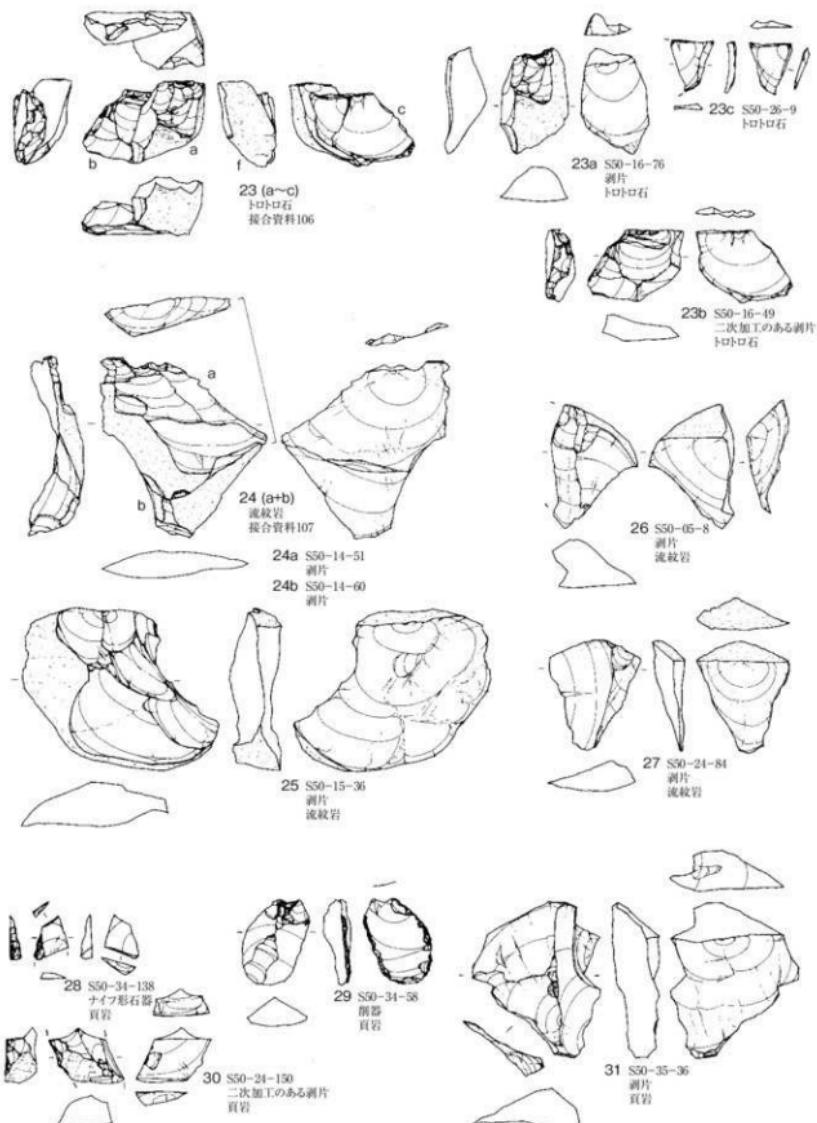
第26図 第4文化層第2ブロック疊分布(4)



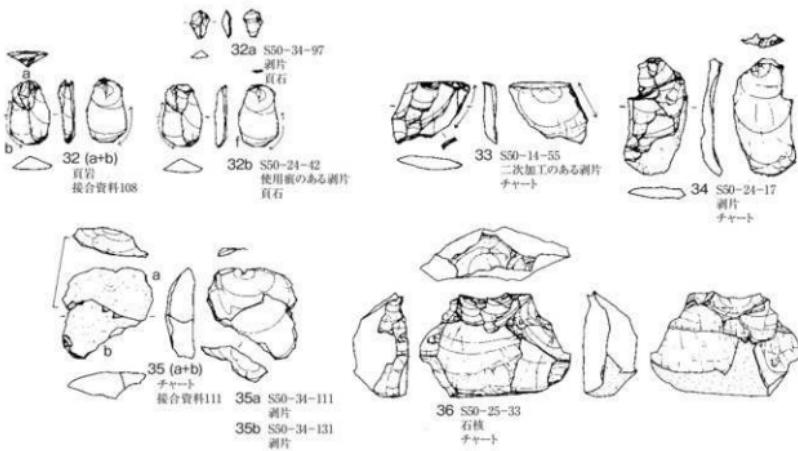
第27図 第4文化層第2ブロック出土遺物（1）



第28図 第4文化層第2ブロック出土遺物（2）



第29図 第4文化層第2ブロック出土遺物 (3)



第30図 第4文化層第2ブロック出土遺物（4）

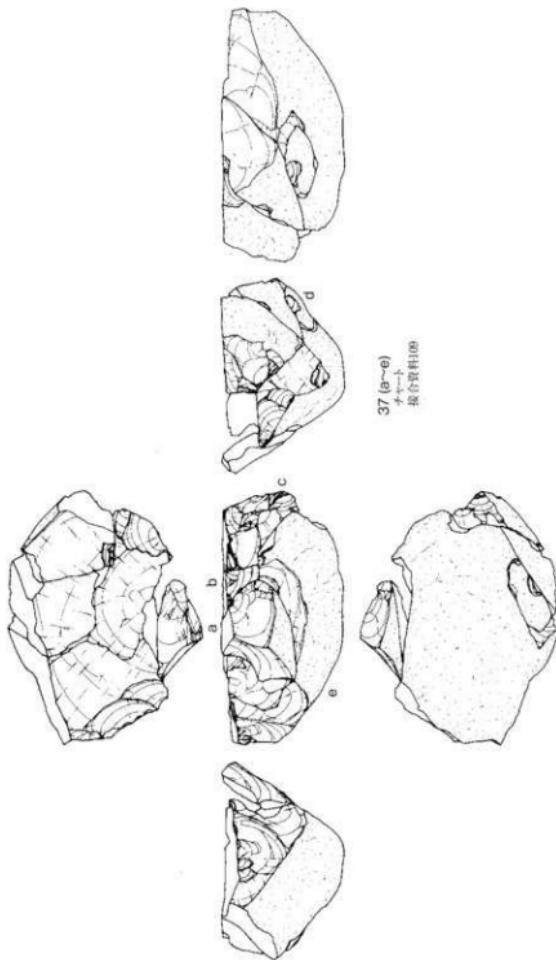
不定形な剥片、20 f は縦長剥片である。この資料は 20 c・20 f とそれ以外で色調などに変異がみられ、21 は剥片 4 点 3 個体の接合資料である。図上右側 21 a → 90 度打面転移して 21 (b + c) → 180 度転移して 21 d は剥離している。21 a は両側の大半が欠損しているが接合状態から横長剥片と考えられる。21 (b + c) は縦長剥片で 2 点が接合して 1 個体となる。ほぼ中间部で欠損しているが、白色化したと考えられる上部 (21 b) と灰色の下部 (21 c) が接合したものである。21 d は不定形な剥片である。この資料は 21 b とそれ以外で色調などの変異が顕著で、前者は白色化しており、後述する 22 に類似する。なお、21 (b + c) を含めそれ以外の資料も分散して分布している。22 は石核 1 点、小型で不定形な剥片 1 点の接合資料である。比較的小型の角礫から求心的な剥離作業により、小形で不定形な剥片を剥離している。23 は二次加工のある剥片 1 点、剥片 2 点の接合資料である。礫の上位の打面から 23 a → 23 b → 23 c の順に剥離している。23 b は不定形な剥片の左側縁に調整加工を行っている。23 a は縦長剥片、23 c は左側が欠損しているが接合状態から横長剥片と考えられる。23 b と 23 c は若干白色化している。

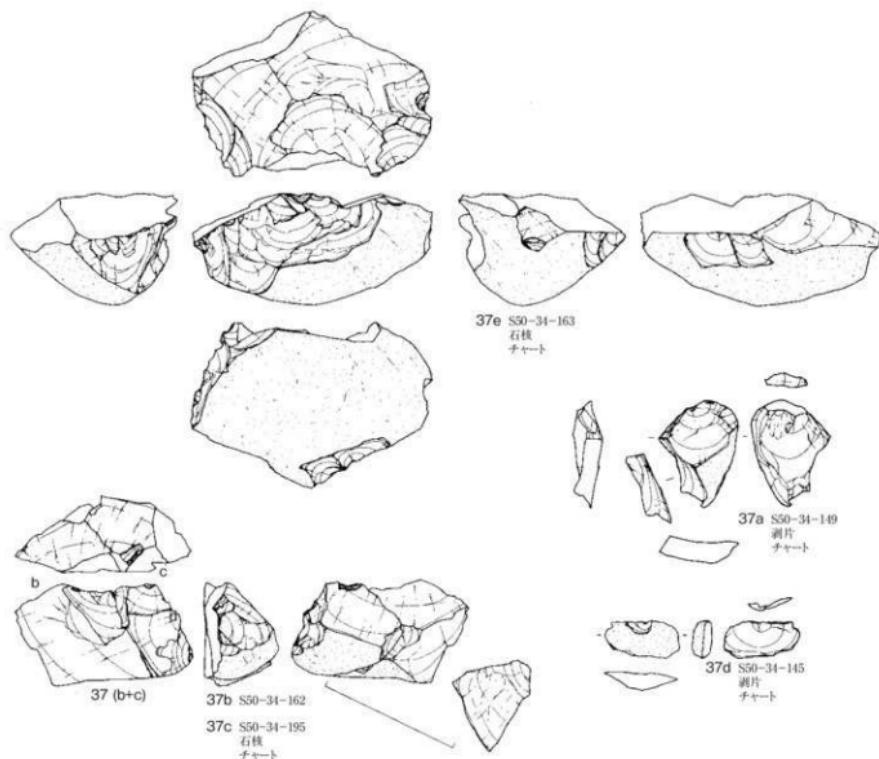
24・26・27 は灰色とは灰白色の縞模様が交互に入る流紋岩、25 は灰色の地に灰白色の部分が大きく混じる流紋岩である。24 は 2 点が接合して 1 個体となる比較的大形で不定形な剥片である。25・26 は不定形、27 は縦長剥片で、それぞれ、正面や打面に自然面が一部残っている。

28・29 は黒褐色、30 は黒灰褐色、31 は黄灰褐色、32 は灰褐色の珪化の高い頁岩である。28 は左側縁に細かい調整加工を行ったナイフ形石器の先端部としたが、二次加工のある剥片の方が良いかもしれない。29 は縦長剥片の両側縁に細かい調整加工を行った削器である。30 は厚みのある不定形な剥片の左側縁に剥離痕がみられる。両端が欠損している。31 は大形で不定形な剥片である。32 は使用痕のある剥片 1 点、小形で不定形な剥片 1 点の接合資料である。上位の打面から 32 a → 32 b の順に剥離している。32 b は縦長剥片の正面左側縁及び裏面右側縁に細かい剥離痕がみられる。

33～40 はチャートの石器である。33 不定形な剥片の両面の右側縁に細かい剥離痕がみられる。34 は

第31図 第4文化層第2ブロック出土遺物（5）

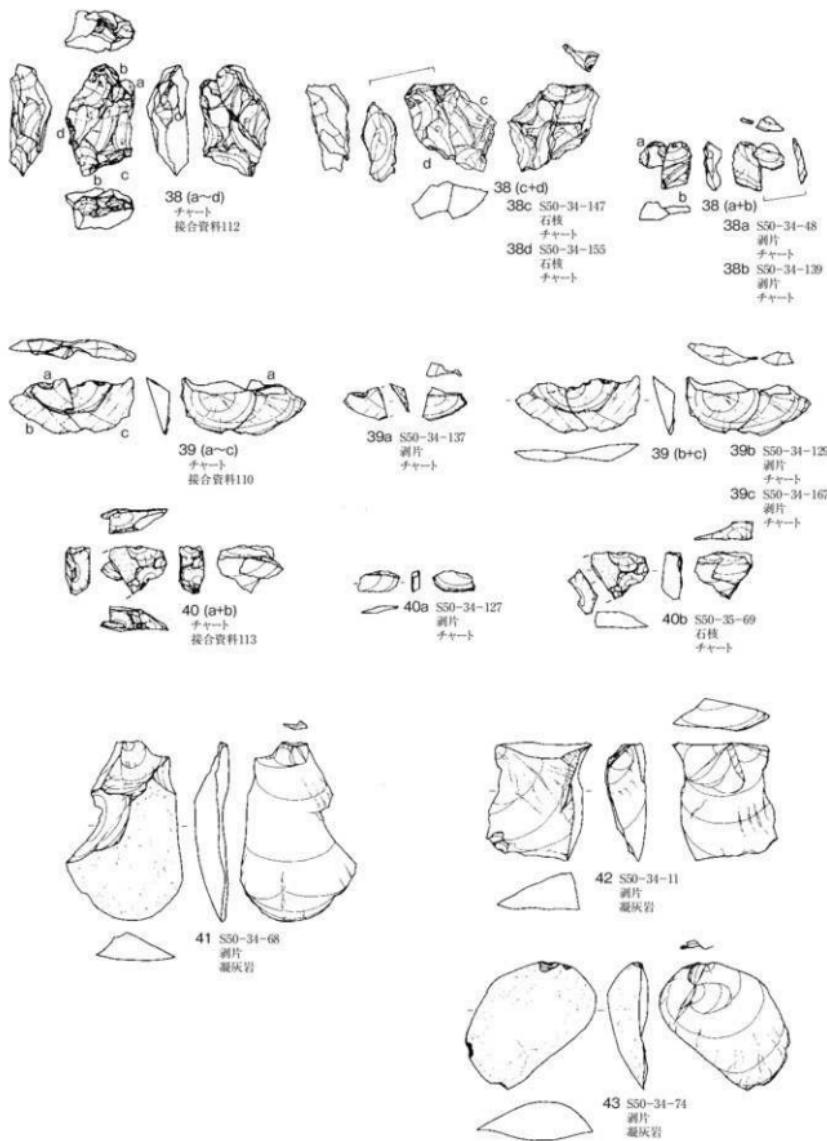




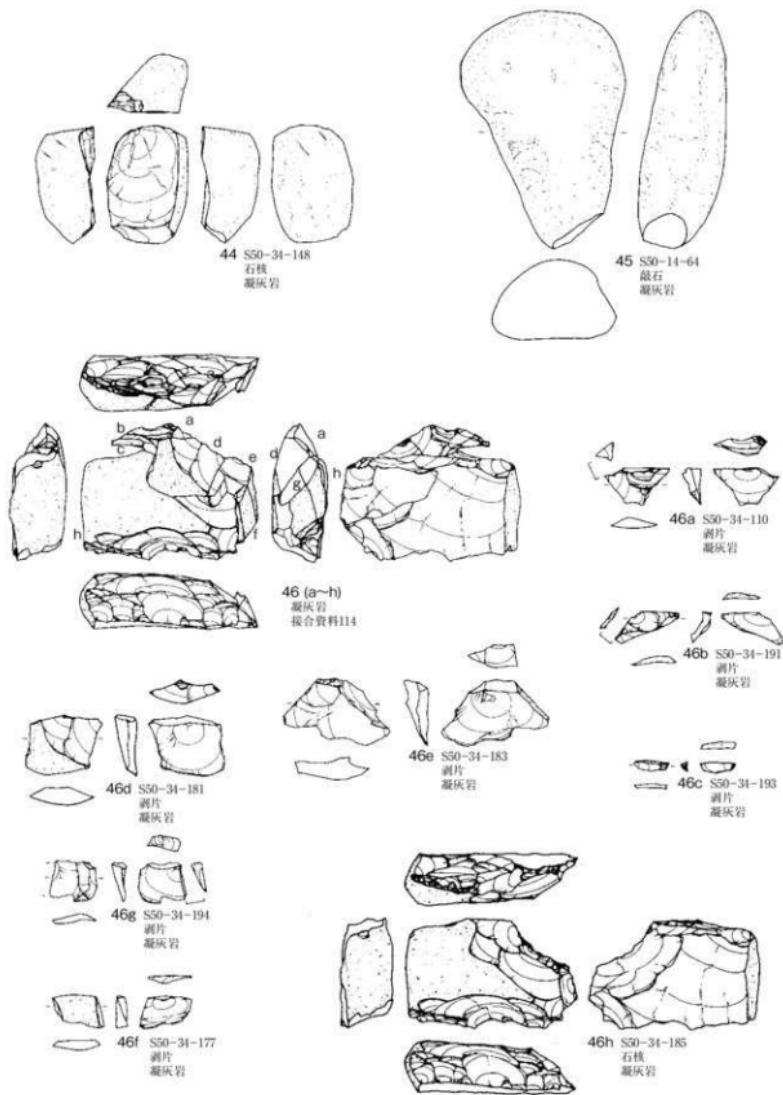
第32図 第4文化層第2ブロック出土遺物（6）

正面の一部に自然面が残る縦長剥片、35は2点が接合して1個体となる不定形な剥片である。36は蝶の両面の上位から小形で不定形な剥片を剥離している。37は石核3点2個体、剥片2点の接合資料である。37 eと37 (b+c)は石核で、37 a・37 dは不定形な剥片ある。大形の蝶を節理で分割し、さらに37 a・37 d・37 eと37 (b+c)に分割して、打面と作業面を入れ変えながら、それぞれ不定形な剥片を剥離している。38は石核2点1個体、打面と作業面を入れ変えながら、38 a・38 bのような剥片を剥離している。39は剥片3点2個体の接合資料である。上位の打面から39 a→39 (b+c)の順に剥離している。なお、39は頁岩の可能性がある。40は石核1点、剥片1点の接合資料である。40 a・40 bが剥離されたあと、主要剥離面を打面として、なお、40 aは40 a・40 bの剥離時に同時に剥落した可能性がある。

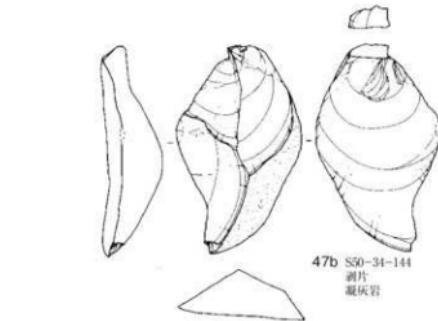
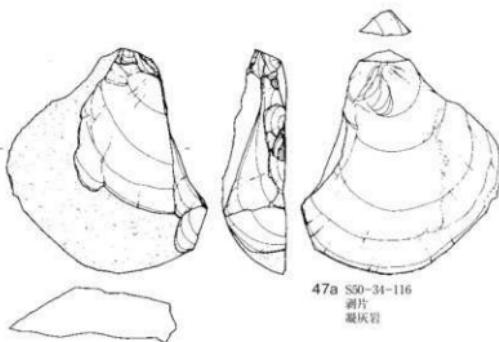
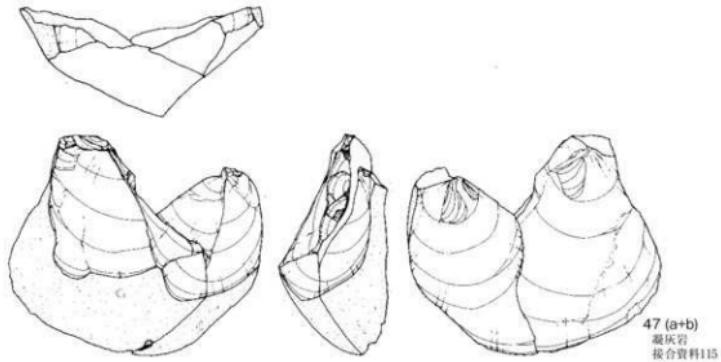
41～47は凝灰岩の石器である。41は縦長剥片、42・43は不定形な剥片で、41・43は表面に自然面が残っている。44は石核で、小形の角蝶を分割したものである。45は下端部に欠損あるいは剥落部があることから、敲石としたが、表面の状態や欠損面の稜線の磨耗状態からは自然蝶の可能性がある。46



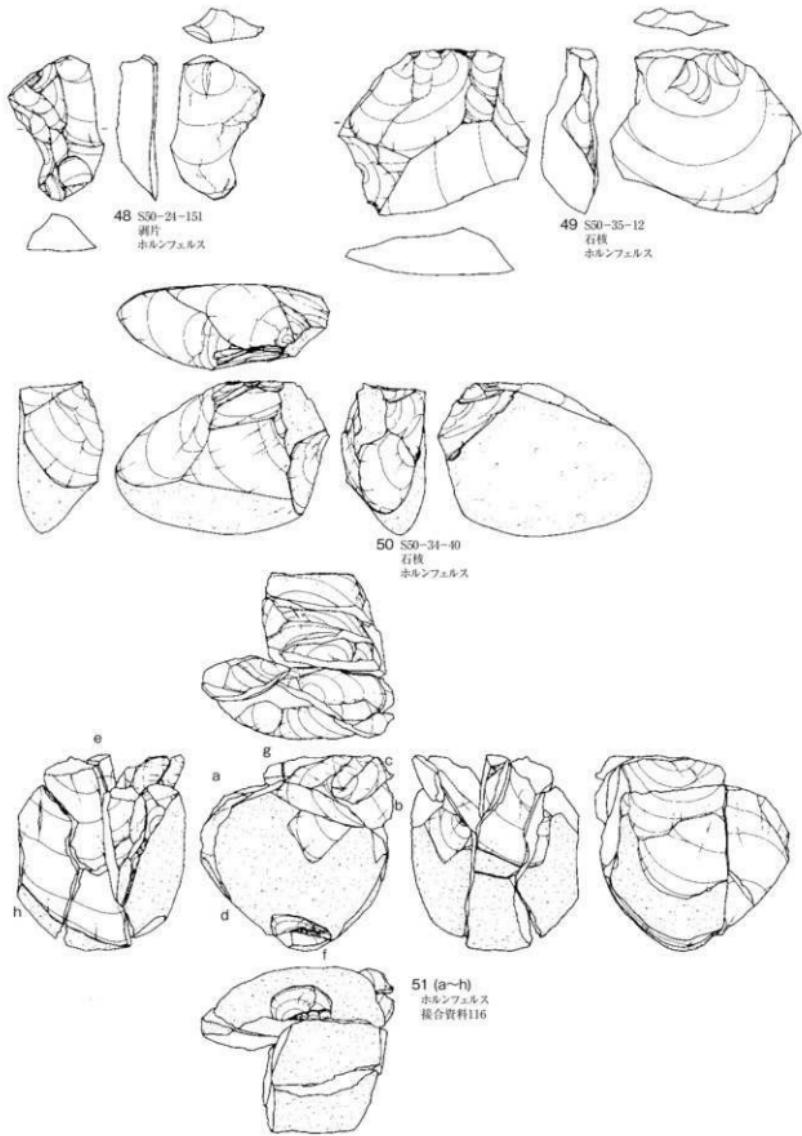
第33図 第4文化層第2ブロック出土遺物（7）



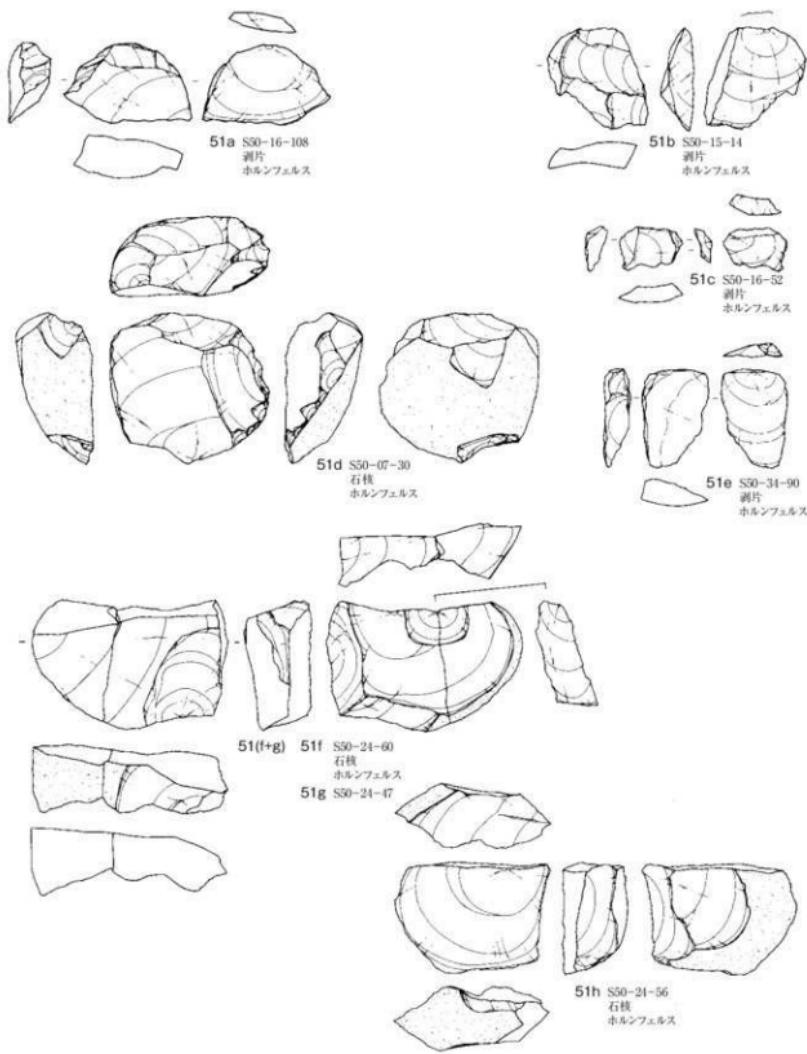
第34図 第4文化層第2ブロック出土遺物（8）



第35図 第4文化層第2ブロック出土遺物（9）



第36図 第4文化層第2ブロック出土遺物 (10)



第37図 第4文化層第2ブロック出土遺物 (11)

第11表 第4文化層第2ブロック出土石器属性表

持因番号	接合番号	グリッド番号	遺物番号	枚記	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
第27回 1		S50-16	50		二次加工のある調片	黒曜石	19.3	22.1	6.6	329	
第27回 2		S50-15	34		調片	黒曜石	20.7	22.1	5.6	203	
第27回 3a	101	S50-14	33		石核	黒曜石	17.7	28.4	12.9	381	
3b		S50-14	39		調片	黒曜石	8.9	11.6	3.1	0.21	
第27回 4		S50-24	161		ナイフ形石器	安山岩	39.9	20.6	11.3	729	
第27回 5		S50-27	20		調片	安山岩	53.3	45.2	11.7	28.00	
第27回 6a	105	S50-16	116		二次加工のある調片	トロトロ石	40.8	17.6	7.7	825	
第27回 6b		S50-15	25		二次加工のある調片	トロトロ石	35.3	21.9	8.7	516	
第27回 7		S50-37	2		使用痕のある調片	トロトロ石	19.1	22.4	8.5	288	
第27回 8		S50-36	16		調片	トロトロ石	50.8	52.5	14.8	25.29	
第27回 9		S50-34	172		調片	トロトロ石	55.3	53.4	15.1	36.86	
第27回 10		S50-16	94		調片	トロトロ石	33.1	34.2	6.5	6.60	
第27回 11		S50-34	168		調片	トロトロ石	25.5	23.1	5.5	290	
第27回 12		S50-16	19		調片	トロトロ石	13.1	24.7	3.9	104	
第27回 13		S50-16	31		調片	トロトロ石	27.9	15.7	12.9	617	
第27回 14		S50-15	32		調片	トロトロ石	24.5	14.6	6.8	169	
第27回 15		S50-16	46		調片	トロトロ石	21.4	9.9	7.1	112	
第27回 16		S50-16	51		調片	トロトロ石	20.1	20.9	4.6	1.46	
第27回 17		S50-16	87		調片	トロトロ石	36.7	36.9	8.4	7.06	
第27回 18		S50-16	89		調片	トロトロ石	18.9	22.5	9.5	1.82	
第27回 19		S50-17	2		調片	トロトロ石	18.1	30.2	6.6	2.43	
20a		S50-16	72		調片	トロトロ石	30.5	30.7	10.9	9.76	
20b		S50-16	113		調片	トロトロ石	41.3	40.8	16.9	15.74	
20c	102	S50-14	31		調片	トロトロ石	36.5	33.2	11.2	11.39	
20d		S50-26	11		調片	トロトロ石	39.8	36.9	18.1	21.57	
20e		S50-34	126		二次加工のある調片	トロトロ石	44.4	21.9	8.5	7.25	
20f		S50-27	23		調片	トロトロ石	32.9	24.8	6.9	4.11	
21a		S50-16	88		調片	トロトロ石	18.6	13.4	10.7	1.17	
21b	103	S50-16	21		調片	トロトロ石	28.8	21.4	13.6	7.72	
21c		S50-26	2		調片	トロトロ石	33.1	32.9	15.3	16.81	
21d		S50-15	33		調片	トロトロ石	29.9	33.4	7.9	6.24	
22a	104	S50-16	140		調片	トロトロ石	13.3	9.3	3.7	0.36	
22b		S50-26	10		石核	トロトロ石	34.8	35.4	24.1	32.97	
23a		S50-16	76		調片	トロトロ石	43.1	27.7	16.6	17.39	
第29回 23b	106	S50-16	49		二次加工のある調片	トロトロ石	29.2	38.2	12.1	13.72	
23c		S50-26	9		調片	トロトロ石	19.9	17.4	3.4	0.97	
24a	107	S50-14	51		調片	流紋岩	60.3	68.9	22.1	35.54	
24b		S50-14	60		調片	流紋岩	39.4	50.7	21.4	18.44	
24c		S50-15	36		調片	流紋岩	67.1	80.3	29.8	96.34	
24d		S50-05	8		調片	流紋岩	50.5	36.0	17.2	25.09	
24e		S50-24	84		調片	流紋岩	46.2	38.2	11.9	12.97	
24f		S50-34	13		ナイフ形石器	頁岩	17.4	14.1	4.8	0.73	
24g		S50-34	58		削器	頁岩	35.5	28.9	11.4	8.20	
24h		S50-24	150		二次加工のある調片	頁岩	22.2	30.5	12.9	7.90	
24i		S50-35	36		調片	頁岩	62.9	52.9	19.7	36.51	
24j	108	S50-34	97		調片	頁岩	11.4	8.3	3.8	0.19	
24k		S50-24	42		使用痕のある調片	頁岩	25.5	16.2	5.3	1.88	
24l		S50-34	55		二次加工のある調片	チャート	25.1	32.3	5.9	4.41	
24m		S50-24	17		調片	チャート	48.2	25.8	9.3	6.94	
24n	111	S50-34	111		調片	チャート	22.5	37.3	11.4	8.33	
24o		S50-34	131		調片	チャート	27.6	32.4	12.1	8.44	
24p		S50-25	33		石核	チャート	43.2	61.0	22.1	55.60	
24q		S50-34	149		調片	チャート	43.9	32.4	12.8	12.94	
31 - 32回	109	S50-34	162		石核	チャート	41.7	59.0	27.8	35.71	
34d		S50-34	195		石核	チャート	38.4	45.5	31.2	42.21	
34e		S50-34	145		調片	チャート	15.2	31.1	8.4	3.40	
34f		S50-34	163		石核	チャート	46.5	97.8	68.4	281.15	
34g		S50-34	48		調片	チャート	10.9	13.0	7.3	0.85	
34h	112	S50-34	139		調片	チャート	19.3	11.8	3.5	1.19	
34i		S50-34	147		石核	チャート	35.7	24.8	14.6	9.99	
34j		S50-34	155		石核	チャート	31.4	21.0	13.9	7.01	
34k		S50-34	137		調片	チャート	13.8	17.2	3.9	0.65	
34l		S50-34	129		調片	チャート	20.5	29.4	5.3	1.95	
34m		S50-34	167		調片	チャート	22.5	29.8	6.8	3.60	
34n	113	S50-34	127		調片	チャート	8.9	17.0	3.6	0.51	
34o		S50-35	69		石核	チャート	20.2	23.4	9.4	4.08	

拂因番号	接合番号	グリッド	遺物番号	枚記	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
第33回	41		S50-34	68	調片	璇灰岩	73.8	48.0	19.2	35.79	
第33回	42		S50-34	11	調片	璇灰岩	49.1	43.1	17.1	30.79	
第33回	43		S50-34	74	調片	璇灰岩	52.7	53.4	16.6	42.10	
第34回	44		S50-34	148	石核	璇灰岩	47.8	33.8	24.3	53.31	
第34回	45		S50-14	63	砾石	璇灰岩	97.4	67.8	36.3	253.20	
	46a		S50-34	110	調片	璇灰岩	15.5	26.4	17.8	1.83	
	46b		S50-34	191	調片	璇灰岩	13.8	26.0	17.8	0.66	
	46c		S50-34	193	調片	璇灰岩	4.3	14.5	2.9	0.15	
第34回	46d	114	S50-34	181	調片	璇灰岩	25.1	30.6	9.8	5.60	
	46e		S50-34	183	調片	璇灰岩	27.7	43.5	9.9	7.10	
	46f		S50-34	177	調片	璇灰岩	13.8	20.9	5.0	1.27	
	46g		S50-34	194	調片	璇灰岩	16.6	19.7	6.1	1.64	
	46h		S50-34	185	石核	璇灰岩	45.2	70.1	21.9	89.45	
第35回	47a	115	S50-34	116	調片	璇灰岩	92.7	82.4	26.7	182.79	
	47b		S50-34	144	調片	璇灰岩	84.4	51.2	25.3	63.13	
第36回	48		S50-24	151	調片	ホルンフェルス	59.8	38.8	17.1	31.29	
第36回	49		S50-35	12	石核	ホルンフェルス	68.0	78.1	23.1	103.93	
第36回	50		S50-34	40	石核	ホルンフェルス	62.6	87.7	34.7	223.59	
	51a		S50-16	108	調片	ホルンフェルス	33.2	51.5	17.7	27.27	
	51b		S50-15	14	調片	ホルンフェルス	42.0	41.4	14.1	19.41	
	51c		S50-16	52	調片	ホルンフェルス	18.1	25.3	8.9	3.64	
第36・ 37回	51d	116	S50-07	30	石核	ホルンフェルス	60.8	65.6	32.9	145.39	
	51e		S50-34	90	調片	ホルンフェルス	40.8	27.8	11.4	12.39	
	51f		S50-24	60	石核	ホルンフェルス	47.4	33.8	27.2	53.17	
	51g		S50-24	47	石核	ホルンフェルス	46.8	52.0	26.1	81.56	
	51h		S50-24	56	石核	ホルンフェルス	46.0	62.8	27.3	94.80	
	S50-05	4	調片		トロトロ石	20.1	9.6	3.7	0.64		
	S50-05	6	調片		トロトロ石	15.7	7.8	4.8	0.90		
	S50-06	3	調片		トロトロ石	17.7	13.8	6.2	1.06		
	S50-06	11	紗片		トロトロ石	5.6	5.5	1.8	0.05		
	S50-07	34	調片		チャート	16.9	19.9	2.8	0.84		
	S50-14	6	二次加工のある調片		頁岩	10.5	17.9	4.1	0.57		
	S50-14	28	調片		チャート	4.0	12.5	3.3	0.17		
	S50-15	6	調片		トロトロ石	13.4	9.2	4.5	0.28		
	S50-15	12	紗片		チャート	7.6	9.3	3.4	0.20		
	S50-15	18	調片		墨曜石	9.3	15.1	4.1	0.61		
	S50-16	3	調片		墨曜石	12.8	16.7	7.6	0.85		
	S50-16	42	調片		ホルンフェルス	18.8	16.5	6.3	1.56		
	S50-16	48	石核		チャート	25.9	29.8	13.2	8.02		
	S50-16	54	調片		トロトロ石	11.7	9.3	4.5	0.27		
	S50-16	55	調片		トロトロ石	17.7	10.3	3.8	1.04		
	S50-16	66	調片		安山岩	47.2	16.3	6.0	3.59		
	S50-16	82	調片		トロトロ石	14.3	9.7	4.3	0.32		
	S50-16	95	調片		トロトロ石	16.1	5.8	4.8	0.24		
	S50-16	123	調片		トロトロ石	15.0	9.1	4.9	0.57		
	S50-16	144	調片		トロトロ石	13.6	11.6	3.9	0.65		
	S50-24	64	調片		チャート	16.4	20.2	4.5	1.23		
	S50-24	120	石核		トロトロ石	55.6	44.7	20.1	42.21		
	S50-24	144	調片		安山岩	41.3	35.5	12.2	14.33		
	S50-24	146	調片		璇灰岩	64.4	42.2	11.8	3.20		
	S50-24	152	調片		頁岩	22.7	23.1	5.2	2.28		
	S50-27	12	調片		ホルンフェルス	28.9	51.6	8.9	11.81		
	S50-27	26	調片		墨曜石	15.7	16.6	3.3	0.66		
	S50-34	21	紗片		トロトロ石	9.4	8.6	3.3	0.13		
	S50-34	43	調片		チャート	10.1	25.5	26.5	5.25		
	S50-34	50	調片		安山岩	10.2	6.7	2.5	0.16		
	S50-34	86	調片		トロトロ石	48.6	29.1	7.5	6.89		
	S50-34	88	調片		トロトロ石	55.4	35.2	17.1	19.76		
	S50-34	91	器		チャート	27.8	25.1	14.9	8.98		
	S50-34	101	石核		頁岩	16.6	25.1	25.9	10.94	頁岩(鬱岡)	
	S50-34	114	石核		頁岩	10.7	22.3	25.6	7.88	頁岩(鬱岡)	
	S50-34	119	石核		墨曜石	13.9	29.4	11.4	4.37		
	S50-34	122	調片		安山岩	11.8	12.3	2.6	0.36		
	S50-34	130	調片		頁岩	8.9	12.4	3.5	0.20		
	S50-34	134	調片		頁岩	14.9	8.7	2.8	0.41		
	S50-34	140	調片		頁岩	12.1	10.5	3.1	0.53		
	S50-34	142	調片		安山岩	43.5	31.3	13.4	18.96		
	S50-34	143	調片		チャート	12.3	26	2.5	0.09		

鉢合番号	接合番号	グリッド	遺物番号	柱記	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
			S50-34	150	調片	チャート	9.9	11.8	9.2	0.43	
			S50-34	151	調片	チャート	10.8	15.7	1.8	0.22	
			S50-34	152	調片	チャート	12.6	18.3	2.6	0.45	
			S50-34	157	調片	ホルンフェルス	30.9	46.8	7.5	11.31	
			S50-34	158	調片	凝灰岩	11.6	11.9	2.7	0.22	
			S50-34	159	調片	チャート	16.5	16.7	4.1	0.89	
			S50-34	166	石核	チャート	20.2	27.8	14.7	8.53	
			S50-34	173	調片	凝灰岩	14.3	12.7	2.8	0.46	
			S50-34	175	調片	安山岩	12.5	32.1	7.3	2.13	
			S50-34	178	調片	トロトロ石	32.1	13.1	7.5	4.41	
			S50-34	187	調片	チャート	17.4	16.4	19.3	2.16	
			S50-34	188	調片	凝灰岩	9.9	8.7	2.5	0.32	
			S50-34	189	調片	チャート	11.5	12.6	3.3	0.31	
			S50-35	27	調片	チャート	8.8	5.6	1.5	0.07	
			S50-35	37	石核	玉琳	13.8	14.3	4.4	0.83	
			S50-35	70	調片	ホルンフェルス	39.4	59.2	24.1	49.56	
						玉琳	15.9	16.1	6.4	0.92	

第 12 表 第 4 文化層第 2 ブロック出土螺属性表

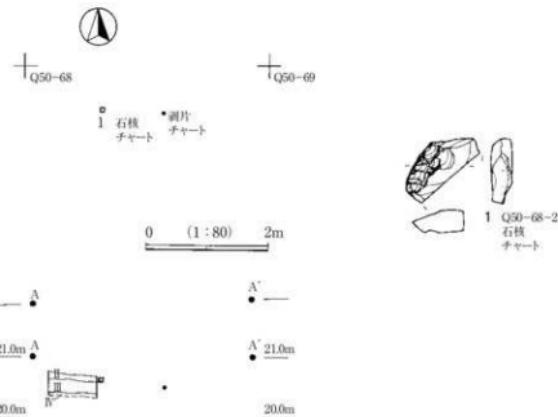
接合番号	グリッド	遺物番号	柱記	器種	石材	重量 (g)	備考	接合番号	グリッド	遺物番号	柱記	器種	石材	重量 (g)	備考
904	S50-16	60	稚	安山岩		38.76		916	S50-24	148	稚	安山岩		176.85	
	S50-16	67	稚	安山岩		18.23			S50-31	14	稚	安山岩		329.60	
	S50-16	71	稚	安山岩		19.49			S50-35	56	稚	安山岩		138.72	
	S50-16	92	稚	安山岩		14.67			S50-27	11	稚	安山岩		33.80	
905	S50-27	10	稚	安山岩		586.20		918	S50-27	19	稚	安山岩		7.57	
	S50-24	50	稚	安山岩		1,021.60			S50-31	23	稚	安山岩		194.37	
906	S50-24	57	稚	安山岩		1,332.70		919	S50-31	28	稚	安山岩		38.52	
	S50-14	38	稚	安山岩		135.48			S50-31	7	稚	安山岩		50.05	
	S50-34	35	稚	安山岩		212.64			S50-31	12	稚	安山岩		50.32	
907	S50-31	94	稚	安山岩		68.45		920	S50-31	19	稚	安山岩		86.22	
	S50-16	18	稚	安山岩		75.82			S50-31	32	稚	安山岩		72.75	
	S50-16	23	稚	安山岩		45.33			S50-31	81	稚	安山岩		69.27	
	S50-16	29	稚	安山岩		57.66			S50-31	98	稚	安山岩		188.12	
908	S50-16	86	稚	安山岩		33.88		921	S50-31	133	稚	安山岩		76.28	
	S50-17	9	稚	安山岩		35.81			S50-35	23	稚	安山岩		7.92	
	S50-17	13	a 稚	安山岩		7.20			S50-35	24	稚	安山岩		54.80	
	S50-17	13	b 稚	安山岩		2.19			S50-35	31	稚	安山岩		4.58	
909	S50-17	14	稚	安山岩		4.81		922	S50-35	53	稚	安山岩		25.26	
	S50-26	5	稚	安山岩		18.91			S50-07	35	稚	安山岩		45.38	
	S50-27	24	稚	安山岩		1.84			S50-14	30	稚	安山岩		32.52	
	S50-35	11	稚	安山岩		42.27			S50-24	8	稚	安山岩		21.22	
910	S50-35	16	稚	安山岩		12.68		923	S50-21	10	稚	安山岩		33.60	
	S50-35	19	稚	安山岩		39.84			S50-21	75	稚	安山岩		61.22	
	S50-24	155	稚	安山岩		18.57			S50-21	76	稚	安山岩		7.34	
	S50-25	11	稚	安山岩		245.91			S50-24	80	稚	安山岩		94.68	
908	S50-31	112	稚	安山岩		40.28		924	S50-31	99	稚	安山岩		77.38	
	S50-31	115	稚	安山岩		187.37			S50-31	105	稚	安山岩		19.78	
909	S50-31	30	稚	安山岩		309.40		923	S50-14	8	稚	安山岩		153.03	
	S50-34	132	稚	安山岩		26.66			S50-25	34	稚	安山岩		117.76	
	S50-16	22	稚	安山岩		110.79			S50-25	48	稚	安山岩		6.96	
	S50-16	25	稚	安山岩		48.08			S50-25	51	稚	安山岩		16.77	
910	S50-16	27	稚	安山岩		100.57		924	S50-21	67	稚	安山岩		21.51	
	S50-16	56	稚	安山岩		76.02			S50-24	70	稚	安山岩		19.97	
	S50-16	119	稚	安山岩		71.61			S50-24	87	稚	安山岩		108.18	
	S50-24	129	稚	安山岩		37.29			S50-36	8	稚	安山岩		56.18	
911	S50-24	140	稚	安山岩		100.19		924	S50-27	9	稚	安山岩		7.95	
	S50-24	142	稚	安山岩		122.32			S50-27	15	稚	安山岩		157.54	
912	S50-16	26	稚	安山岩		34.65		925	S50-27	16	稚	安山岩		16.54	
	S50-27	17	稚	安山岩		68.05			S50-27	22	稚	安山岩		92.67	
913	S50-35	6	稚	安山岩		43.25		926	S50-27	29	稚	安山岩		46.55	
	S50-35	9	稚	安山岩		53.46			S50-27	2	稚	安山岩		16.46	
	S50-35	40	稚	安山岩		22.31			S50-27	3	稚	安山岩		79.5	
	S50-35	54	稚	安山岩		81.55			S50-27	27	稚	安山岩		27.92	
914	S50-35	57	稚	安山岩		47.99		927	S50-14	17	稚	安山岩		61.02	
	S50-35	58	稚	安山岩		3.07			S50-14	27	稚	安山岩		19.52	
	S50-36	3	稚	安山岩		53.11			S50-24	51	稚	安山岩		43.01	
	S50-14	26	稚	安山岩		85.44			S50-24	53	稚	安山岩		35.02	
915	S50-14	66	稚	安山岩		7.36		928	S50-34	56	稚	安山岩		217.81	
	S50-24	86	稚	安山岩		342.40			S50-34	123	稚	安山岩		126.86	
916	S50-24	105	稚	安山岩		11.71		929	S50-14	29	稚	安山岩		6.72	
	S50-24	114	稚	安山岩		4.15			S50-14	61	稚	安山岩		5.94	
915	S50-34	31	稚	安山岩		125.32		930	S50-35	5	稚	安山岩		84.37	
	S50-35	13	稚	安山岩		209.76			S50-36	27	稚	安山岩		30.75	
916	S50-16	17	稚	安山岩		64.45									

接合番号	グリッド 連結番号	柱記	器	機	石	材	重量 (g)	備考	接合番号	グリッド 連結番号	柱記	器	機	石	材	重量 (g)	備考
931	S50-31 29	稚	安山岩				48.70		953	S50-25 54	稚	チャート				2.37	
	S50-31 76	稚	安山岩				50.25			S50-25 26	稚	チャート				2.95	
	S50-31 3	稚	安山岩				42.79			S50-14 12	稚	チャート				9.99	
	S50-31 29	稚	安山岩				45.93			S50-14 16	稚	チャート				4.34	
932	S50-31 66	稚	安山岩				17.66		954	S50-14 42	稚	チャート				4.15	
	S50-31 69	稚	安山岩				15.64			S50-14 48	稚	チャート				3.35	
	S50-31 28	稚	安山岩				80.89			S50-14 53	稚	チャート				7.71	
	S50-31 87	稚	安山岩				141.78			S50-14 59	稚	チャート				3.28	
	S50-31 93	稚	安山岩				49.16			S50-21 3	稚	チャート				2.31	
933	S50-16 97	稚	安山岩				6.01			S50-21 12	稚	チャート				1.69	
	S50-16 106	稚	安山岩				21.36			S50-21 33	稚	チャート				2.49	
	S50-21 22	稚	安山岩				70.07			S50-21 68	稚	チャート				9.31	
934	S50-21 27	稚	安山岩				25.89		955	S50-25 17	稚	チャート				3.19	
	S50-21 45	稚	安山岩				121.80			S50-25 20	稚	チャート				5.09	
935	S50-21 2	稚	安山岩				6.09			S50-25 36	稚	チャート				5.27	
	S50-25 37	稚	安山岩				55.25			S50-25 44	稚	チャート				8.05	
936	S50-14 32	稚	安山岩				10.61			S50-25 52	稚	チャート				7.61	
	S50-14 44	稚	安山岩				5.90			S50-25 55	稚	チャート				12.56	
	S50-16 91	稚	6.灰斑岩				30.87			S50-16 12	稚	チャート				10.11	
937	S50-16 105	稚	6.灰斑岩				206.95			S50-16 20	稚	チャート				22.23	
	S50-21 19	稚	6.灰斑岩				16.05			S50-16 24	稚	チャート				8.01	
	S50-21 38	稚	6.灰斑岩				69.23			S50-17 3	稚	チャート				7.00	
	S50-21 40	稚	6.灰斑岩				40.63			S50-17 10	稚	チャート				19.00	
	S50-21 58	稚	6.灰斑岩				152.77			S50-16 6	稚	チャート				45.24	
	S50-21 71	稚	6.灰斑岩				23.37			S50-16 101	稚	チャート				2.84	
	S50-14 23	稚	6.灰斑岩				55.96			S50-16 117	稚	チャート				70.82	
	S50-21 20	a 稚	6.灰斑岩				72.26 (a+10 72.26g) (a+10 72.26g)			S50-16 118	稚	チャート				1.63	
938	S50-20 b	稚	6.灰斑岩							S50-17 5	稚	チャート				13.40	
	S50-21 31	稚	6.灰斑岩				26.04		956	S50-16 5	稚	チャート				48.83	
	S50-21 97	稚	6.灰斑岩				20.29			S50-16 83	稚	チャート				35.53	
	S50-21 101	稚	6.灰斑岩				7.30			S50-16 85	稚	チャート				10.63	
	S50-21 102	稚	6.灰斑岩				23.38			S50-16 99	稚	チャート				17.10	
	S50-21 116	稚	6.灰斑岩				18.38			S50-25 39	稚	チャート				2.03	
	S50-25 59	稚	6.灰斑岩				9.09			S50-25 40	稚	チャート				7.49	
	S50-14 14	稚	6.灰斑岩				19.81		961	S50-15 37	稚	チャート				9.94	
	S50-14 41	稚	6.灰斑岩				67.17			S50-25 43	稚	チャート				8.87	
939	S50-14 45	稚	6.灰斑岩				36.04			S50-24 124	稚	玉髓				7.95	
	S50-14 54	稚	6.灰斑岩				13.62			S50-24 126	稚	玉髓				29.24	
	S50-14 56	稚	6.灰斑岩				22.42			S50-24 128	稚	玉髓				3.80	
	S50-14 58	稚	6.灰斑岩				10.29			S50-24 129	稚	玉髓				4.80	
	S50-21 78	稚	6.灰斑岩				375.10			S50-24 141	稚	玉髓				6.56	
940	S50-21 81	稚	6.灰斑岩				111.00			S50-24 153	稚	玉髓				2.01	
	S50-21 107	稚	6.灰斑岩				121.15			S50-24 154	稚	玉髓				3.16	
	S50-21 15	稚	6.灰斑岩				14.18			S50-24 156	稚	玉髓				2.58	
	S50-21 26	稚	6.灰斑岩				452.60			S50-24 163	稚	玉髓				25.54	
	S50-21 49	稚	6.灰斑岩				406.60			S50-34 2	稚	玉髓				7.86	
941	S50-21 52	稚	6.灰斑岩				163.75			S50-34 8	稚	玉髓				4.16	
	S50-21 69	稚	6.灰斑岩				115.58			S50-34 9	a	玉髓				2.73	
	S50-21 93	稚	6.灰斑岩				30.06			S50-34 22	稚	玉髓				35.84	
	S50-34 120	稚	6.灰斑岩				178.88			S50-34 24	稚	玉髓				6.47	
942	S50-36 7	稚	6.灰斑岩				78.68		962	S50-34 27	稚	玉髓				4.66	
	S50-36 9	稚	6.灰斑岩				81.65			S50-34 33	稚	玉髓				1.50	
	S50-21 1	稚	6.灰斑岩				17.44			S50-34 38	稚	玉髓				17.14	
	S50-21 16	稚	6.灰斑岩				243.11			S50-34 39	稚	玉髓				12.37	
944	S50-15 15	稚	6.灰斑岩				3.29			S50-34 46	稚	玉髓				4.54	
	S50-15 21	稚	6.灰斑岩				34.86			S50-34 47	稚	玉髓				4.10	
	S50-16 93	稚	6.灰斑岩				43.69			S50-34 67	稚	玉髓				4.26	
	S50-31 160	稚	6.灰斑岩				43.97			S50-34 103	稚	玉髓				8.86	
	S50-31 169	稚	6.灰斑岩				125.37			S50-34 107	稚	玉髓				23.73	
947	S50-31 176	稚	6.灰斑岩				6.52			S50-34 118	稚	玉髓				4.63	
	S50-31 182	稚	6.灰斑岩				71.86			S50-34 125	稚	玉髓				3.36	
	S50-31 384	稚	6.灰斑岩				70.05			S50-34 156	稚	玉髓				7.49	
948	S50-16 80	稚	6.灰斑岩				30.93			S50-34 161	稚	玉髓				26.07	
	S50-16 70	稚	6.灰斑岩				19.74			S50-34 170	稚	玉髓				7.77	
	S50-21 91	稚	6.灰斑岩				110.62			S50-34 179	稚	玉髓				9.55	
	S50-24 92	稚	6.灰斑岩				161.77			S50-34 180	稚	玉髓				3.93	
	S50-16 28	稚	6.灰斑岩				43.33			S50-24 25	稚	玉髓				3.82	
950	S50-16 110	稚	6.灰斑岩				48.97		963	S50-24 122	稚	玉髓				23.08	
	S50-24 143	稚	6.灰斑岩				44.10			S50-25 42	稚	玉髓				2.67	
	S50-15 29	稚	6.灰斑岩				27.73			S50-25 38	稚	玉髓				11.84	
	S50-16 30	稚	6.灰斑岩				42.17			S50-25 4	稚	玉髓				6.74	
951	S50-16 58	稚	6.灰斑岩				33.23			S50-25 18	稚	玉髓				2.67	
	S50-16 62	稚	6.灰斑岩				18.16			S50-26 3	稚	玉髓				10.33	
	S50-16 107	稚	6.灰斑岩				20.50			S50-26 8	稚	玉髓				3.49	
	S50-16 69	稚	6.灰斑岩				33.43			S50-35 35	稚	玉髓				13.33	
	S50-16 77	稚	6.灰斑岩				50.44			S50-35 62	稚	玉髓				8.93	
952	S50-16 96	稚	6.灰斑岩				63.41			S50-14 9	稚	凝灰岩				0.44	
	S50-16 112	稚	6.灰斑岩				68.37			S50-14 13	稚	凝灰岩				0.61	
953	S50-24 18	稚	チャート				23.16			S50-14 14	稚	凝灰岩				1.45	
	S50-24 36	稚	チャート				19.88			S50-14 20	稚	凝灰岩				0.32	

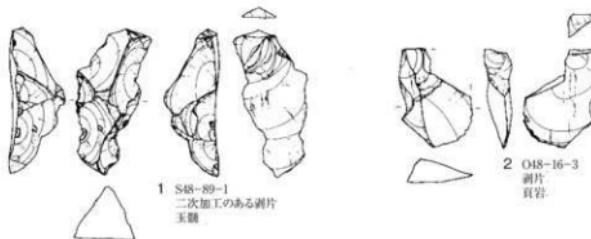
接合番号	グリッド	遺物番号	柱記	器種	石材	重量(g)	備考	接合番号	グリッド	遺物番号	柱記	器種	石材	重量(g)	備考
966	S50-14	25	稚	砾灰岩		5.87		982	S50-36	25	稚	砾灰岩		90.37	
	S50-14	37	稚	砾灰岩		0.12			S50-35	41	稚	砾灰岩		147.36	
	S50-14	64	稚	砾灰岩		0.28			S50-35	43	稚	砾灰岩		122.73	
	S50-14	65	稚	砾灰岩		0.69			S50-36	12	稚	砾灰岩		268.04	
	S50-14	67	稚	砾灰岩		1.57			S50-24	130	稚	片麻岩		26.61	
	S50-21	11	稚	砾灰岩		15.52			S50-24	132	稚	片麻岩		0.74	
	S50-21	21	稚	砾灰岩		19.62			S50-21	133	稚	片麻岩		3.96	
	S50-21	23	稚	砾灰岩		0.93			S50-21	134	稚	片麻岩		4.60	
	S50-21	39	稚	砾灰岩		5.66			S50-21	149	稚	片麻岩		84.56	
	S50-21	59	稚	砾灰岩		4.56			S50-24	166	稚	片麻岩		2.64	
967	S50-21	72	稚	砾灰岩		0.24			S50-21	167	稚	片麻岩		7.05	
	S50-21	104	稚	砾灰岩		33.26			S50-31	4	稚	片麻岩		9.21	
	S50-14	11	稚	砂岩		126.61			S50-34	6	稚	片麻岩		8.60	
	S50-14	49	稚	砂岩		15.35			S50-31	10	稚	片麻岩		35.30	
	S50-21	13	稚	砂岩		2.15			S50-31	15	a	片麻岩		67.76	
	S50-21	14	稚	砂岩		28.38			S50-31	15	b	片麻岩		15.71	
	S50-21	44	稚	砂岩		39.12			S50-34	16	稚	片麻岩		14.49	
	S50-21	83	稚	砂岩		10.26			S50-31	17	稚	片麻岩		12.66	
	S50-21	90	稚	砂岩		233.21			S50-34	18	稚	片麻岩		1.76	
	S50-21	112	稚	砂岩		4.90			S50-34	20	稚	片麻岩		1.46	
983	S50-35	21	稚	砂岩		48.61			S50-34	36	稚	片麻岩		39.79	
	S50-35	25	稚	砂岩		128.06			S50-34	41	稚	片麻岩		26.03	
	S50-35	52	稚	砂岩		21.40			S50-34	42	稚	片麻岩		14.97	
	S50-36	6	稚	砂岩		25.43			S50-34	45	稚	片麻岩		32.46	
	S50-36	22	稚	砂岩		12.49			S50-34	57	稚	片麻岩		46.50	
	S50-21	4	稚	砂岩		26.19			S50-34	62	稚	片麻岩		13.14	
	S50-21	35	稚	砂岩		2.78			S50-34	70	稚	片麻岩		5.06	
	S50-35	20	稚	砂岩		17.46			S50-31	72	稚	片麻岩		25.60	
	S50-36	19	稚	砂岩		14.87			S50-34	75	稚	片麻岩		28.98	
	S50-21	9	稚	砂岩		12.01			S50-34	80	稚	片麻岩		26.03	
970	S50-21	119	稚	砂岩		119.67		984	S50-34	89	稚	片麻岩		90.76	
	S50-21	121	稚	砂岩		32.83			S50-34	95	稚	片麻岩		12.26	
	S50-14	50	稚	砂岩		7.71			S50-34	100	稚	片麻岩		0.95	
	S50-21	79	稚	砂岩		186.07			S50-34	113	稚	片麻岩		2.61	
	S50-21	99	稚	砂岩		27.55			S50-34	146	稚	片麻岩		2.85	
	S50-34	37	稚	砂岩		19.13			S50-34	192	稚	片麻岩		20.79	
	S50-34	65	稚	砂岩		15.69			S50-14	10	稚	片麻岩		2.48	
	S50-36	5	稚	砂岩		92.27			S50-16	80	稚	片麻岩		49.93	
	S50-15	9	稚	砂岩		8.30			S50-16	81	稚	片麻岩		54.96	
	S50-15	16	稚	砂岩		37.92			S50-16	90	稚	片麻岩		1.39	
972	S50-15	22	稚	砂岩		26.26			S50-24	34	稚	片麻岩		44.26	
	S50-16	16	稚	砂岩		27.34			S50-24	48	稚	片麻岩		29.29	
	S50-16	63	稚	砂岩		22.58			S50-24	54	稚	片麻岩		17.12	
	S50-16	73	稚	砂岩		38.41			S50-25	45	稚	片麻岩		96.45	
	S50-16	75	稚	砂岩		65.48			S50-25	49	稚	片麻岩		20.37	
	S50-16	78	稚	砂岩		4.01			S50-05	2	稚	砂岩		2.48	
	S50-16	104	稚	砂岩		15.79			S50-05	3	稚	砾灰岩		3.35	
	S50-27	3	稚	砂岩		161.46			S50-05	5	稚	チャート		0.65	
	S50-27	5	稚	砂岩		13.63			S50-05	9	稚	チャート		0.34	
	S50-27	18	稚	砂岩		411.70			S50-06	2	稚	安山岩		17.70	
973	S50-24	123	稚	砂岩		11.20			S50-06	4	稚	安山岩		41.80	
	S50-25	5	稚	砂岩		2.53			S50-06	5	稚	チャート		0.41	
	S50-35	8	稚	砂岩		4.42			S50-06	6	稚	安山岩		2.72	
	S50-35	22	稚	砂岩		19.87			S50-06	7	稚	安山岩		0.74	
	S50-35	47	稚	砂岩		2.89			S50-06	8	稚	安山岩		0.63	
	S50-35	51	稚	砂岩		29.07			S50-06	9	稚	安山岩		1.03	
	S50-35	4	稚	砂岩		16.65			S50-06	10	稚	安山岩		0.62	
	S50-35	7	稚	砂岩		40.12			S50-06	12	稚	チャート		2.60	
	S50-27	8	稚	砂岩		90.99			S50-06	13	稚	安山岩		1.20	
	S50-27	30	稚	砂岩		101.99			S50-07	2	稚	安山岩		41.20	
978	S50-35	39	稚	砂岩		7.18			S50-07	3	稚	安山岩		2.21	
	S50-35	45	稚	砂岩		2.58			S50-07	4	稚	安山岩		0.01	
	S50-34	5	稚	砂岩		15.36			S50-07	5	稚	安山岩		0.03	
	S50-34	26	稚	砂岩		21.28			S50-07	6	稚	安山岩		0.01	
	S50-34	73	稚	砂岩		26.22			S50-07	8	稚	安山岩		0.23	
	S50-34	77	稚	砂岩		59.26			S50-07	9	稚	安山岩		0.03	
	S50-34	84	稚	砂岩		93.14			S50-07	11	稚	安山岩		0.56	
	S50-34	92	稚	砂岩		23.31			S50-07	12	稚	安山岩		0.01	
	S50-34	102	稚	砂岩		35.15			S50-07	13	稚	安山岩		0.03	
	S50-34	104	稚	砂岩		34.34			S50-07	14	稚	安山岩		0.16	
979	S50-31	51	稚	砂岩		302.40			S50-07	15	稚	安山岩		0.17	
	S50-31	52	稚	砂岩		47.15			S50-07	16	稚	安山岩		0.26	
	S50-31	64	稚	砂岩		50.31			S50-07	17	稚	安山岩		0.12	
	S50-35	14	稚	砂岩		181.32			S50-07	18	稚	安山岩		0.08	
	S50-35	2	稚	砂岩		28.79			S50-07	19	稚	安山岩		11.25	
	S50-35	10	稚	砂岩		49.42			S50-07	20	稚	安山岩		0.04	
	S50-35	34	稚	砂岩		58.83			S50-07	21	稚	安山岩		2.09	
	S50-35	46	稚	砂岩		51.01			S50-07	22	稚	安山岩		0.16	
	S50-36	10	稚	砂岩		10.76			S50-07	23	稚	安山岩		0.79	
	S50-36	23	稚	砂岩		17.75			S50-07	24	稚	安山岩		0.21	

接合番号	グリッド 連物 番号	柱記 器 種	石 材	重量 (g)	備 考	接合番号	グリッド 連物 番号	柱記 器 種	石 材	重量 (g)	備 考
S50-05	25	種	右英麻岩	6274		S50-16	114	種	安山岩	0.52	
S50-07	26	種	安山岩	0.95		S50-16	115	種	チャート	1004	
S50-07	27	種	安山岩	0.28		S50-16	120	種	安山岩	0.22	
S50-07	28	種	安山岩	1.19		S50-16	121	種	安山岩	1.06	
S50-07	29	種	安山岩	0.37		S50-16	124	種	安山岩	9.59	
S50-07	31	種	安山岩	0.13		S50-16	125	種	片麻岩	1.39	
S50-07	32	種	安山岩	0.01		S50-16	126	種	安山岩	0.06	
S50-07	33	種	安山岩	0.26		S50-16	127	種	チャート	0.75	
S50-13	2	種	安山岩	21.91		S50-16	128	種	チャート	0.23	
S50-14	1	種	安山岩	6.69		S50-16	129	種	安山岩	5.79	
S50-14	2	種	安山岩	1.66		S50-16	130	種	安山岩	0.17	
S50-14	4	a 種	安山岩	0.95		S50-16	133	種	砂岩	0.49	
S50-14	4	b 種	安山岩	0.27		S50-16	134	種	砂岩	0.26	
S50-14	5	a 種	玉髓	22.66		S50-16	135	種	砂岩	0.34	
S50-14	5	b 種	玉髓	1.23		S50-16	136	種	砂岩	1.34	
S50-14	5	c 種	玉髓	0.38		S50-16	137	種	安山岩	3.77	
S50-14	5	d 種	玉髓	0.07		S50-16	138	種	チャート	0.14	
S50-14	18	種	チャート	3.50		S50-16	139	種	チャート	1.37	
S50-14	19	種	安山岩	1.63		S50-16	141	種	安山岩	0.28	
S50-14	21	種	安山岩	1.62		S50-16	142	種	チャート	0.21	
S50-14	22	種	安山岩	0.17		S50-16	145	種	安山岩	0.62	
S50-14	24	種	安山岩	0.82		S50-17	4	種	チャート	10.87	
S50-14	35	種	安山岩	1.98		S50-17	6	種	片麻岩	2.26	
S50-14	36	種	安山岩	6.93		S50-17	7	種	チャート	3.18	
S50-14	40	種	砂岩	4.94		S50-17	8	種	片麻岩	1.15	
S50-14	46	種	チャート	0.80		S50-17	11	種	安山岩	386.50	
S50-14	47	種	右英麻岩	26.77		S50-17	15	種	安山岩	0.34	
S50-14	52	種	チャート	0.90		S50-17	16	種	片麻岩	1.12	
S50-14	57	種	砂岩	0.17		S50-17	17	種	片麻岩	3.47	
S50-14	62	種	安山岩	15.42		S50-17	18	種	片麻岩	0.67	
S50-14	68	種	安山岩	3.64		S50-24	5	種	安山岩	12.57	
S50-15	1	種	安山岩	10.05		S50-24	6	種	砂岩	397.90	
S50-15	3	種	安山岩	0.27		S50-24	7	種	チャート	2.17	
S50-15	4	種	安山岩	2.34		S50-24	15	種	安山岩	0.74	
S50-15	5	種	チャート	7.85		S50-24	24	種	安山岩	3.52	
S50-15	7	種	玉髓	14.34		S50-24	28	種	安山岩	0.58	
S50-15	8	種	安山岩	3.11		S50-24	29	種	右英麻岩	6.00	
S50-15	10	種	砂岩	6.54		S50-24	30	種	ホルンフェルス	7.21	
S50-15	13	種	安山岩	3.85		S50-24	32	種	安山岩	1.18	
S50-15	17	種	チャート	4.14		S50-24	37	種	安山岩	10.01	
S50-15	19	種	砂岩	2.39		S50-24	41	種	安山岩	0.60	
S50-15	20	種	安山岩	0.80		S50-24	43	種	砂岩	6.56	
S50-15	23	種	安山岩	1.01		S50-24	46	種	砂岩	1.33	
S50-15	24	種	安山岩	7.05		S50-24	55	種	片麻岩	14.14	
S50-15	26	種	安山岩	0.37		S50-24	61	種	安山岩	1.27	
S50-15	28	種	安山岩	0.79		S50-24	62	種	砂岩	1.75	
S50-15	30	種	チャート	1.55		S50-24	63	種	安山岩	4.81	
S50-15	31	種	チャート	6.98		S50-24	65	種	砂岩	1.52	
S50-15	35	種	チャート	2.91		S50-24	66	種	砂岩	0.40	
S50-16	2	種	安山岩	3.03		S50-24	73	種	砂岩	2.27	
S50-16	4	種	チャート	14.26		S50-24	74	種	右英麻岩	10.39	
S50-16	7	種	安山岩	10.07		S50-24	77	種	砂岩	0.50	
S50-16	8	種	安山岩	41.10		S50-24	82	種	右英麻岩	186.1	
S50-16	10	種	安山岩	1.96		S50-24	85	種	安山岩	1.26	
S50-16	13	種	安山岩	1.68		S50-24	88	種	右英麻岩	178.27	
S50-16	14	種	安山岩	3.21		S50-24	89	種	右英麻岩	0.49	
S50-16	15	種	安山岩	10.21		S50-24	94	種	砂岩	1.02	
S50-16	32	種	チャート	0.46		S50-24	95	種	安山岩	0.25	
S50-16	33	種	安山岩	21.56		S50-24	96	種	右英麻岩	5.63	
S50-16	34	種	安山岩	6.27		S50-24	98	種	安山岩	493.80	
S50-16	36	種	安山岩	6.49		S50-24	100	種	安山岩	14.92	
S50-16	41	種	安山岩	2.40		S50-24	103	種	砂岩	3.58	
S50-16	43	種	安山岩	3.95		S50-24	106	種	チャート	11.98	
S50-16	45	種	安山岩	0.76		S50-24	108	種	チャート	0.94	
S50-16	47	種	安山岩	2.93		S50-24	109	種	チャート	0.35	
S50-16	53	種	安山岩	6.80		S50-24	110	種	安山岩	0.47	
S50-16	57	種	右英麻岩	31.72		S50-24	111	種	右英麻岩	26.46	
S50-16	59	種	安山岩	35.84		S50-24	113	種	土塊	31.00	
S50-16	61	種	安山岩	0.26		S50-24	115	種	安山岩	1.91	
S50-16	64	種	チャート	18.62		S50-24	117	種	片麻岩	1.62	
S50-16	65	種	右英麻岩	13.32		S50-24	118	種	安山岩	5.42	
S50-16	68	種	安山岩	0.61		S50-24	125	種	安山岩	21.12	
S50-16	79	種	安山岩	1.10		S50-24	127	種	安山岩	0.57	
S50-16	84	種	安山岩	0.65		S50-24	131	種	安山岩	0.08	
S50-16	98	種	安山岩	1.32		S50-24	135	種	安山岩	0.51	
S50-16	100	種	ホルンフェルス	9.04		S50-24	136	種	安山岩	198.83	
S50-16	102	種	片麻岩	0.32		S50-24	137	種	安山岩	0.69	
S50-16	103	種	安山岩	1.37		S50-24	138	種	安山岩	3.11	
S50-16	109	種	安山岩	4.41		S50-24	145	種	玉髓	0.84	
S50-16	111	種	安山岩	0.79		S50-24	147	種	安山岩	0.51	

接合番号	グリッド	遺物番号	柱記	器種	石材	重量(g)	備考	接合番号	グリッド	遺物番号	柱記	器種	石材	重量(g)	備考
S50-24		157	稚	安山岩		282		S50-34	63	稚	安山岩			727.70	
S50-24		158	稚	玉髓		769		S50-34	71	稚	安山岩			0.22	
S50-24		159	稚	安山岩		3.12		S50-34	79	稚	安山岩			236.63	
S50-24		160	稚	玉髓		109		S50-34	82	稚	砂岩			0.51	
S50-24		162	稚	玉髓		9.68		S50-34	83	稚	安山岩			33.00	
S50-24	b	163	稚	玉髓		1.47		S50-34	85	稚	チャート			1.67	
S50-24		164	稚	玉髓		0.97		S50-34	96	稚	安山岩			20.21	
S50-24		165	稚	安山岩		3.88		S50-34	106	稚	砾灰岩			0.18	
S50-25		2	稚	石英斑岩		22.34		S50-34	108	稚	安山岩			2.38	
S50-25		3	稚	安山岩		3.29		S50-34	109	稚	安山岩			54.26	
S50-25		6	稚	安山岩		11.92		S50-34	117	稚	安山岩			227.07	
S50-25		7	稚	砂岩		0.25		S50-34	121	稚	チャート			6.16	
S50-25		8	稚	石英斑岩		173.75		S50-34	124	稚	安山岩			4.56	
S50-25		9	稚	安山岩		17.32		S50-34	128	稚	安山岩			274.89	
S50-25		10	稚	玉髓		3.83		S50-34	135	稚	安山岩			3.39	
S50-25		12	稚	安山岩		3.12		S50-34	136	稚	玉髓			1.25	
S50-25		13	稚	安山岩		2.06		S50-34	141	稚	安山岩			0.46	
S50-25		14	稚	安山岩		0.79		S50-34	153	稚	チャート			6.89	
S50-25		15	稚	石英斑岩		11.39		S50-34	154	稚	安山岩			3.35	
S50-25		16	稚	安山岩		1.59		S50-34	164	稚	安山岩			5.41	
S50-25		19	稚	片麻岩		1.79		S50-34	165	稚	安山岩			4.03	
S50-25		21	稚	砂岩		273.95		S50-34	174	稚	安山岩			2.54	
S50-25		22	稚	安山岩		0.32		S50-34	186	稚	安山岩			15.17	
S50-25		23	稚	安山岩		0.54		S50-34	190	稚	安山岩			1.43	
S50-25		24	稚	安山岩		11.96		S50-35	3	稚	安山岩			16.04	
S50-25		25	稚	安山岩		0.47		S50-35	15	稚	砂岩			26.67	
S50-25		26	稚	片麻岩		0.85		S50-35	17	稚	砂岩			216.03	
S50-25		27	稚	片麻岩		0.64		S50-35	18	稚	安山岩			66.18	
S50-25		28	稚	砂岩		0.28		S50-35	26	稚	安山岩			60.21	
S50-25		29	稚	片麻岩		0.82		S50-35	28	稚	砂岩			40.55	
S50-25		30	稚	玉髓		14.60		S50-35	29	稚	砂岩			1.95	
S50-25		31	稚	安山岩		26.33		S50-35	30	稚	安山岩			112.3	
S50-25		32	稚	砂岩		6.16		S50-35	32	稚	安山岩			2.85	
S50-25		35	稚	玉髓		3.19		S50-35	38	稚	安山岩			0.68	
S50-25	a	38	稚	安山岩		2.28		S50-35	42	稚	砂岩			0.51	
S50-25		38	b	稚	安山岩	0.19		S50-35	44	稚	砂岩			54.07	
S50-25		41	a	稚	安山岩	0.79		S50-35	48	a	安山岩			0.15	
S50-25		41	b	稚	安山岩	0.41		S50-35	48	b	安山岩			0.13	
S50-25		41	c	稚	安山岩	0.43		S50-35	49	稚	砂岩			2.40	
S50-25		41	d	稚	安山岩	0.32		S50-35	50	稚	砂岩			0.24	
S50-25		46	稚	玉髓		11.23		S50-35	55	稚	安山岩			1.35	
S50-25		47	稚	玉髓		0.48		S50-35	59	稚	安山岩			5.37	
S50-25		50	稚	安山岩		0.76		S50-35	60	稚	チャート			2.13	
S50-25		53	稚	玉髓		7.15		S50-35	61	稚	砾灰岩			2.24	
S50-25		57	稚	砂岩		1.23		S50-35	65	稚	安山岩			12.39	
S50-26		4	稚	チャート		4.90		S50-35	66	稚	安山岩			11.39	
S50-26		6	稚	チャート		2.63		S50-35	67	稚	玉髓			2.77	
S50-26		7	稚	砂岩		14.72		S50-35	68	稚	チャート			0.55	
S50-26		12	稚	チャート		0.58		S50-35	73	稚	砂岩			0.55	
S50-26		15	稚	片麻岩		1.71		S50-36	2	稚	安山岩			3.28	
S50-26		17	稚	安山岩		0.37		S50-36	4	稚	砂岩			19.29	
S50-26		18	稚	片麻岩		0.50		S50-36	13	稚	砂岩			2.91	
S50-26		19	a	稚	玉髓	1.26		S50-36	14	稚	チャート			0.77	
S50-26		19	b	稚	玉髓	0.19		S50-36	15	稚	砂岩			4.80	
S50-27		6	稚	安山岩		101.13		S50-36	17	稚	砂岩			0.38	
S50-27		7	稚	安山岩		172.65		S50-36	18	稚	玉髓			28.09	
S50-27		13	稚	片麻岩		0.46		S50-36	20	稚	安山岩			1.47	
S50-27		14	稚	安山岩		0.16		S50-36	21	稚	玉髓			2.09	
S50-27		21	稚	チャート		2.24		S50-36	24	稚	安山岩			2.05	
S50-27		25	稚	玉髓		9.51		S50-36	26	稚	安山岩			0.11	
S50-27		28	稚	片麻岩		0.30		S50-36	28	稚	砂岩			61.93	
S50-27		31	稚	安山岩		0.97		S50-36	29	稚	安山岩			0.21	
S50-27		33	稚	片麻岩		0.44		S50-36	30	稚	砂岩			0.25	
S50-27		34	稚	安山岩		0.11		S50-36	31	稚	砂岩			1.08	
S50-27		35	稚	安山岩		0.15		S50-36	32	稚	安山岩			2.66	
S50-33		1	稚	安山岩		0.52		S50-36	33	稚	粘板岩			1.42	
S50-33		2	稚	安山岩		0.63		S50-36	34	稚	安山岩			0.79	
S50-34		1	稚	安山岩		4.07		S50-36	35	稚	チャート			8.10	
S50-34		9	b	稚	玉髓	0.76		S50-37	3	稚	粘板岩			0.42	
S50-34		13	稚	安山岩		27.64		S50-37	4	稚	砂岩			1.98	
S50-34		25	稚	安山岩		0.50		S50-37	5	稚	粘板岩			0.07	
S50-34		34	稚	安山岩		429.90		S50-37	6	稚	粘板岩			1.23	
S50-34		44	稚	砂岩		45.13		S50-37	7	稚	粘板岩			0.23	
S50-34		49	稚	片麻岩		1.59		S50-37	8	稚	安山岩			0.06	
S50-34		53	稚	砂岩		332.25		S50-37	9	a	粘板岩			2.21	
S50-34		54	稚	玉髓		1.91		S50-37	9	b	粘板岩			0.91	
S50-34		55	稚	安山岩		1.79									
S50-34		60	稚	安山岩		1.04									
S50-34		61	稚	安山岩		0.41									



第38図 第4文化層単独出土遺物分布・出土遺物



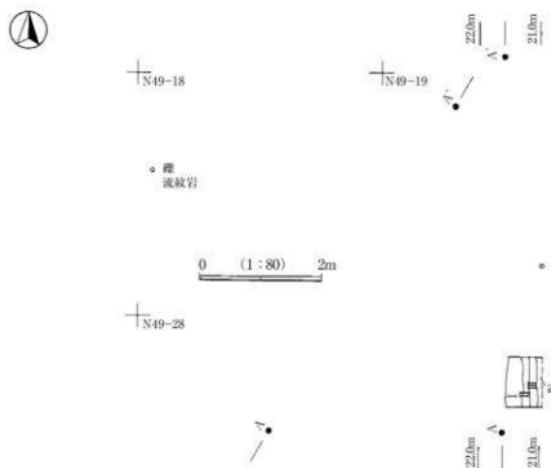
第39図 第4文化層単独出土遺物

第13表 第4文化層単独出土石器属性表

ブロック	牌印番号	総合番号	グリッド	遺物番号	核記	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
単独	第39図	2		OHS-16	3	刃片	頁岩	39.8	29.3	11.1	9.56	
				OHS-07	1	礫	砂岩				0.93	
単独	第38図	1		Q50-68	2	石核	チャート	26.8	30.1	9.5	6.01	
				Q50-68	1	刃片	チャート	30.0	22.1	9.7	7.1	
単独	第39図	1		S48-89	1	二次加工のある刃片	玉髓	59.9	30.1	21.8	23.9	
単独				N49-18	1	礫	泥灰岩				24.66	

は石核1点、刃片7点の接合資料である。分割した刃片を素材にしている。上部は自然面を打面として、46 a → 46 b → 46 c → 90度打面転移して46 d → 元の自然面側に90度打面転移して46 e → 46 dと同じ加撃方向に90度打面転移して46 f・46 gを剥離している。下部は分割した刃片の主要剥離面を打面として小形で不定形な刃片を連続して剥離している。47は刃片2点の接合資料である。上位の打面から47 a → 47 bの順に縱長刃片や不定形な刃片を剥離している。

48・49は泥岩質、50は非常に硬質緻密、51は黄粉状のホルンフェルスの石器である。48・49は正



第40図 第4文化層単独出土遺物分布

面に多方向の剥離痕がみられる剥片で前者は縦長、後者は不定形である。50は石核である。拳大の縫を素材とし、打面と作業面を入れ変えながら、不定形な剥片を剥離している。51は石核4点3個体、剥片4点の接合資料である。初めに大きく①51a～51dと②51e～51g・③51hの2つに分割され、その後、②と③が分割され、②が剥片、③が石核となっている。①は上位の打面から51a～51b～51cの順に剥離している。②は求心的な剥離作業により、51eなどの不定形な剥片を剥離している。

単独出土（第38図、第13表、図版17・18）

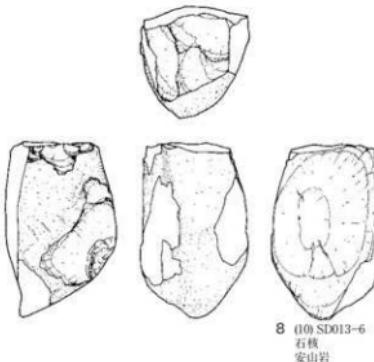
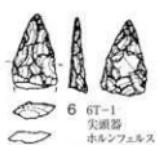
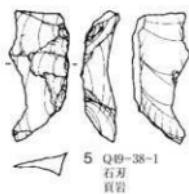
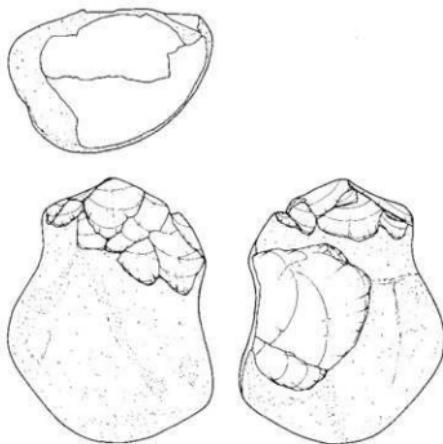
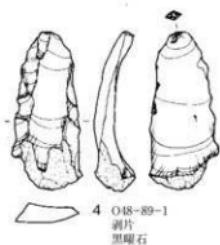
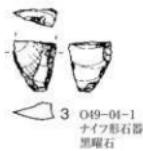
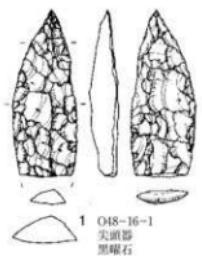
Q 50-68 グリッドで2点土しておき、出土層位はⅡ～Ⅲ層である。調査時の所見でもⅢ層上部であることから第5文化層も含め他の文化層の可能性もある。1は黒灰色の地に黒色の縞が入るチャートの剥片で、下部が欠損している。

単独出土（第39・40図、第13表、図版17・18）

1はS 48-89 グリッドから出土している。半透明の玉髓の二次加工のある剥片としたが、石核の可能性が高い。縦長剥片を素材として、求心的な剥離作業により、小形で不定形な剥片を剥離している。

2はO 48-16 グリッドから出土している。灰色の地に玉髓質の若干薄い黒灰色が混じる珪化度の高い嶺岡産頁岩と考えられる縦長剥片である。

他にN 49-18 グリッドから縫が1点出土している。



第41図 第5文化層単独出土・時期不明出土遺物

第14表 第5文化層単独出土石器属性表

ブロック	神図番号	総合番号	グリッド	遺物番号	柱記	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
単独	第41図	1		O48-16	1	尖頭器	黒曜石	68.3	26.9	12.2	172	

第15表 時期不明石器属性表

調査次数	神図番号	総合番号	グリッド	遺物番号	柱記	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
9	第41図	2		09SK005	1	ナイフ形石器	凝灰岩	53.0	26.5	8.2	6.6	時期不明
6	第41図	3		O49-04	1	ナイフ形石器	黒曜石	20.4	17.3	7.1	2.6	時期不明
5	第41図	4		Q48-89	1	剥片	黒曜石	61.8	29.2	17.8	13.9	時期不明
11	第41図	5		Q49-38	1	石刃	凝灰岩	53.63	25.18	15.2	13.1	時期不明
14	第41図	6		6T	1	尖頭器	ホルンフェルス	30.6	18.7	8.1	3.2	時期不明
13	第41図	7		S49-08	2	石核	安山岩	108.7	85.3	60.8	652.1	時期不明
10	第41図	8		109SD013	6	石核	安山岩	71.5	43.7	45.5	193.2	時期不明

5 第5文化層

第5文化層は立川ローム層のⅢ層上部から単独で出土した黒曜石の尖頭器である。

単独出土（第41図、第14表、図版17）

1は半透明で黒灰色の地に細かい気泡や不純物が多く混じる黒曜石の尖頭器である。末端が欠損している。概ね最終的な剥離痕（仕上げ痕）は両面の右側縁に集中する。裏面の上部及び下部に残る末端方向からの剥離痕は素材剥片の主要剥離面である。相模野V期（前半）・段階Ⅶに帰属しようか。

6 時期不明

上層遺構やグリッドから出土した文化層の決定できない時期不明の旧石器時代の石器が出土している。

単独出土（第41図、第15表、図版17）

1は縦長剥片の正面の左側縁上部と右側縁下部、裏面の左側縁上部に細かい調整加工を行ったナイフ形石器である。石材は凝灰岩としたが、黒色頁岩の可能性がある。第3文化層に帰属しようか。2は素材の末端に細かい調整加工を行ったナイフ形石器である。石材は不透明で黒赤褐色の黒曜石である。部分的に不純物を含む。第3文化層に帰属しようか。3は半透明な地に黒灰色の筋や縞が入る部分と不透明で黒灰色の部分がある信州和田岬周辺産と考えられる黒曜石の石刃で、末端は「しの字状」を呈する。第3文化層に帰属しようか。4は頁岩あるいは凝灰岩の後付き石刃である。第3文化層に帰属しようか。5は若干黄粉状のホルンフェルスの尖頭器である。末端側が欠損している。概ね最終的な剥離痕（仕上げ痕）は正面に集中する。第5文化層に帰属しようか。6は硬質緻密なホルンフェルスの石核である。比較的大形の礫を素材としており、打面と作業面を入れ替えながら、不定形な剥片を剥離している。文化層は不明である。7は黒色緻密質安山岩の石核である。裏面側の大きな剥離痕はポジティブであることから、剥片であることは想定されるが、円錐状に剥離しており打面から末端に抜ける通常の剥離は観察されない。全体的に一部稜線が磨耗していたり、剥離痕もはっきりしない部分がある。文化層は不明である。

第3章 繩文時代の遺構と遺物

第1節 概要（第42図）

繩文時代の遺構の内訳は、竪穴住居跡7軒、炉穴及びその可能性が強い焼土遺構24基、陥穴3基、土坑42基である。遺構の時期は早期後葉から前期中葉がほとんどである。遺構が集中しているのは10次調査区で、それ以外は5次調査区に多少のまとまりがある程度で周縁部は散在している状況である。遺跡の面積は60,000m²を超える広大なものであるが、その中央部にあたる10次調査区の範囲が最も標高が高く、北側はなだらかに傾斜し南側は小支谷があり込んでいる。標高が高い場所に遺構が集中する傾向が看取されるが、遺構の種別による立地の傾向までは判然としない。

図面の縮尺は、竪穴住居跡の全体図が1/80、竪穴住居跡の炉と炉穴、土坑、陥穴は1/40である。遺物の実測図は、土器で器形復元ができるもの及び破片ではあるが大きなものについては1/4、土器の破片は1/3、石器は剥片石器が2/3、礫石器が1/3、土製品は1/3、石製品は1/2である。なお、土器の実測図について、通常は断面図の左側に外面の拓本、右側に内面の拓本を配置するが、本報告では断面の左側に外面を配置し、さらにその左側に内面を配置している。石器については第16表に属性をまとめてある。

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は全て10次調査区から検出されている。図中のP○(-○)はピット番号と深さ(単位cm)を示しているが、現場での付番から変更したものや、新たに付番したものもある。主軸方位は各住居跡のプラン形状及び炉の位置などから判断したが、楕円形プランで炉のないものについては長軸方向で計測した。表記法は、真北(N)を0°として軸の東(E)西(W)への傾きをN-○°-EあるいはN-○°-Wとして表している。

(10)SI007 (第43図、図版3・21・25)

位置 O 49-65・66・67・76

他遺構との重複関係 南東壁に竪穴の内外にまたがるように(10)SX016焼土遺構が検出されている。土層セクションから、焼土遺構が新しく住居跡が古いと判断される。

形状と規模 北側が搅乱により破壊されているものの、残存状況から形状は隅丸長方形とみなされる。規模は長軸で現存長4.44m、短軸は3.52mを測る。主軸方位はN-60°-Eである。

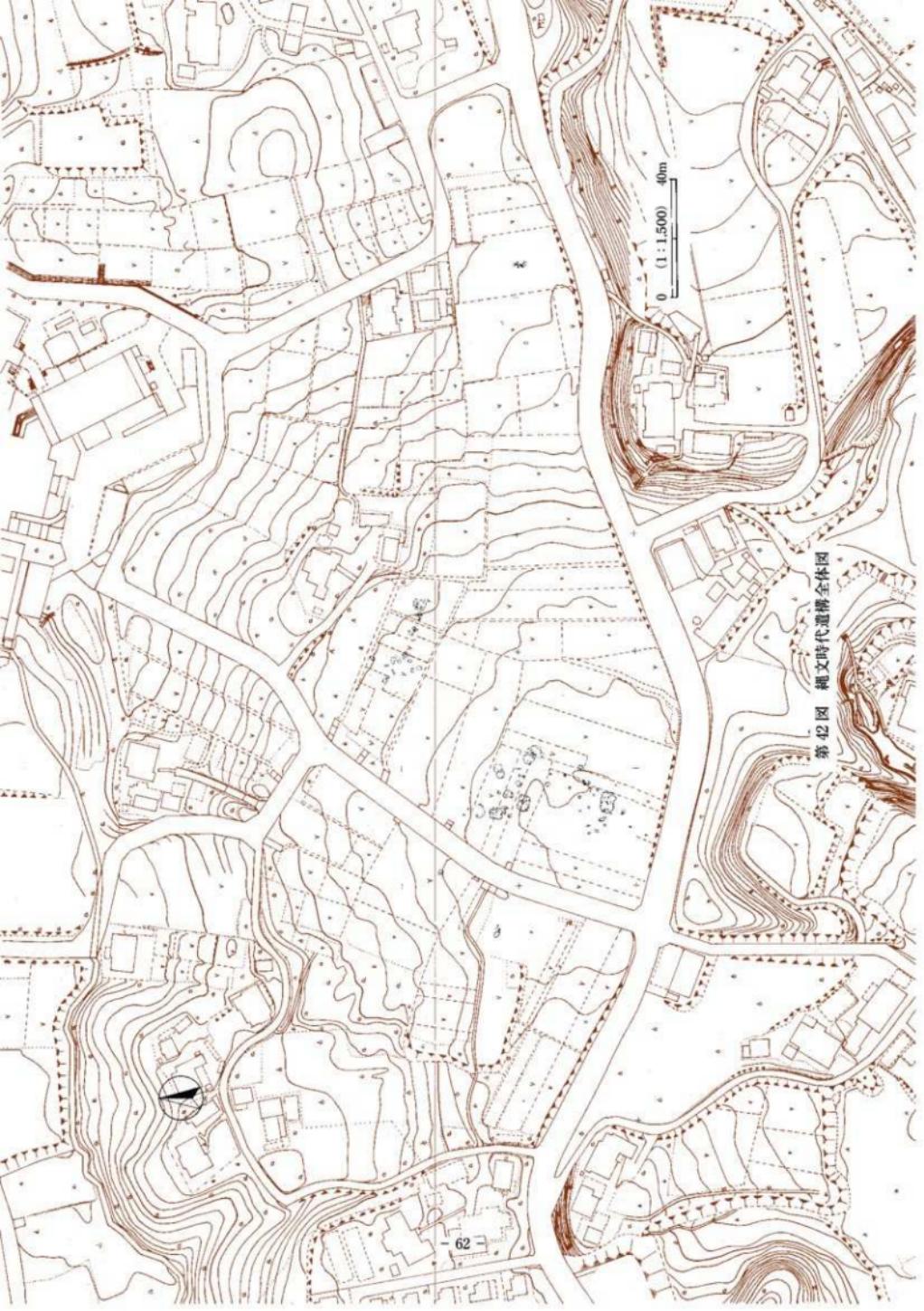
壁の状況と覆土 壁の立ち上がりは緩やかで、壁高は最も高い部分で9cmである。床面の最も深い部分でも確認面から12cmと浅い。畑の耕作で削平されているものと思われる。覆土はローム粒を含む暗褐色土ではほぼ単一層である。

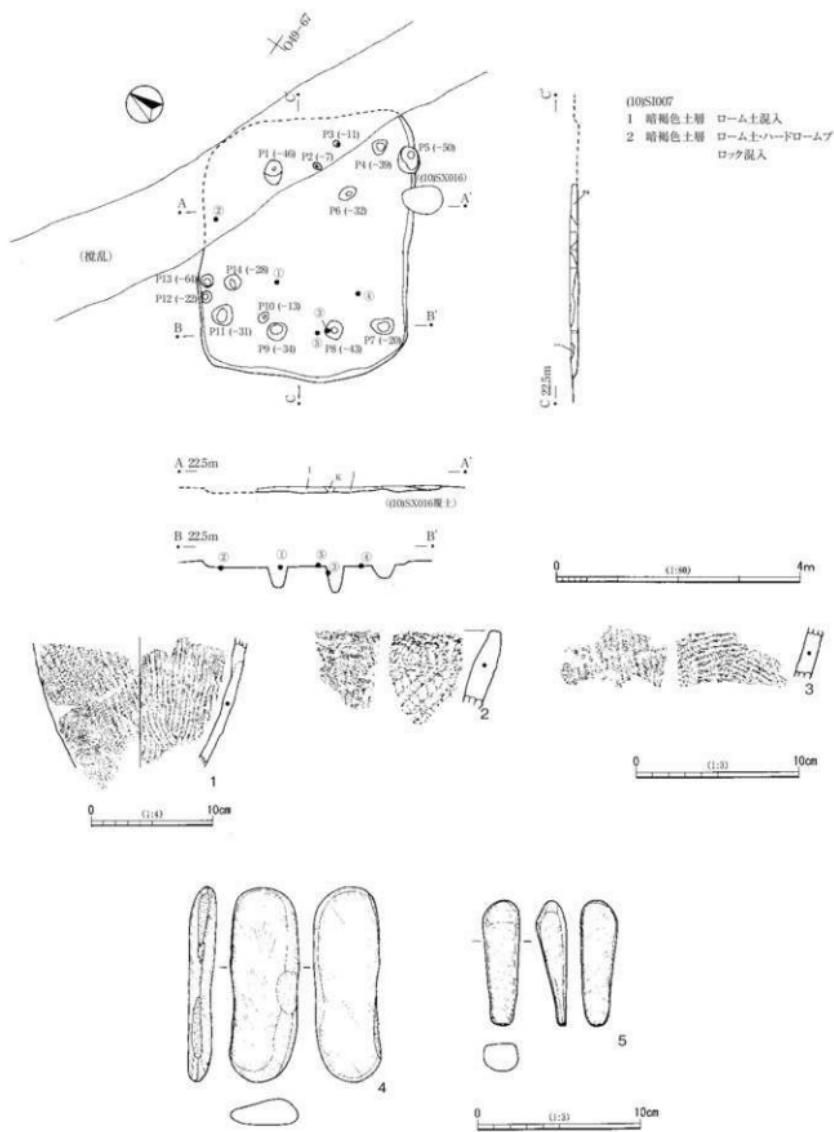
床面 ほぼ平坦である。明確な硬化面は検出されなかった。

炉 検出されなかった。

ピット 全部で14基検出されている。北側の搅乱は住居跡床面より約10cm深いので、P1～3は数値よ

第42図 繩文時代遺構全体図





第43図 (10)SI007 住居跡、出土遺物

り約10cm深くなる。エレベーションポイントBB'付近の4基及び焼土遺構の東側に位置する1基については径30cm、深さ25cm~40cmと規模がそろっており、位置や配置から柱穴と判断される。

出土遺物 図示した遺物はいずれも住居跡床面またはピット中から出土しており、当住居跡に伴うものと判断される。1は器形復元可能な深鉢胴部で、残存高は10.7cm、最大径は推定17.4cmを測る。胎土に植物繊維を含むほか、白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で全体に堅締である。外面はRL単節縄文が横位に施され、内面は貝殻条痕文が縦位に施される。上端側は輪積痕が明瞭に観察される。2は深鉢口縁部で、胎土は全体にやや粗で植物繊維を多量に含む。焼成はやや不良である。外面は口縁直下にRL単節縄文を約1.5cm幅で横位に施し、その下側はLR単節縄文をやはり横位に施す。異原体による羽状縄文であるが、原体の節の大きさは倍以上の違いがある。口唇上にはRL単節縄文が施されるが、この原体は口縁直下のものと同一であろう。3は深鉢胴部で、胎土は粗く植物繊維を多量に含む。焼成は良好である。外面はRL単節縄文が斜位に施され、内面は板状工具によって縦位に調整が施される。4は敲石で、側縁部に敲打痕が認められるほか、表裏面とも研磨されている。5は砥石と考えられるもので、表裏面とも研磨されている。

時期 出土土器は早期末に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(10)SI008 (第44図、図版3・20・21)

位置 O 49-75・76・85・86

形状と規模 隅丸台形のプランと長楕円形の掘込みが結合した状況を呈する。隅丸台形側は長軸4.12m、南側の壁が3.6m、北側の壁が2.8mを測る。南側の掘込みは長径2.9m、短径1.4mを測る。平面的には別々の遺構がたまたま接しているように見えるが覆土で区分することができず、両者が同一遺構であるか別遺構であるかは判断できなかった。隅丸台形プランの東壁外側にはさらに弧状の壁が検出されており、両壁間の最大幅は52cmである。2軒の住居跡が切り合っている可能性があるが、新旧関係などは不明である。主軸方位はほぼ真北である。

壁の状況と覆土 隅丸台形部の壁の立ち上がりは緩やかで、壁高は最も高い部分で15cm、床面の最も深い部分で確認面から23cmである。覆土は粘性の強い黒褐色土層でほぼ單一層である。長楕円形の掘込みは浅い皿形を呈し、深さは確認面から40cmである。覆土は上層側が粘性の強い黒色土層で、下層側はロームブロックが混入する暗褐色土層である。

床面 隅丸台形はほぼ平坦である。明確な硬化面は検出されなかった。長楕円形の掘込みは丸底で、こちらも明確な硬化面は検出されなかった。

炉 壁穴中央よりやや北側に1基構築される。長径56cm、短径46cmの楕円形を呈し、住居床面からの深さは14cmを測る。炉床部は強く熱を受けている。

ピット 全部で14基検出されている。規模にあまり規格性は認められないが、壁穴の北側に集中する傾向があり、円形に配置されているとみることも可能である。その場合、東側に一部残されている弧状の壁を持つ住居跡の柱穴である可能性が指摘できよう。

出土遺物 図示した遺物のうち、2は床面上であるがその他は覆土のかなり上部から出土しており、住居廃絶後投棄されたものと考えられる。1は深鉢胴部で、大きく外反する器形である。胎土は緻密であるが小穂をやや多く含む。焼成は良好で堅締である。細くて先の丸い棒状工具で多条の平行沈線を巡らせ、その下側には斜格子状の文様を配する。上端側は一見すると口縁に見えるが、若干荒れているほか文様構成



第44図 (10)SI008 住居跡、出土遺物

などからも口縁とは考えにくいため輪積痕と判断した。三戸式に相当する。2～7は胎土に植物繊維を含む土器である。2は深鉢口縁部で、胴部から膨らんだ器壁が口縁部に向かって直立する。胎土は粗く植物繊維を多量に含んでおり、焼成はやや不良である。外面にはRL単節縄文を横位に施す。内面は荒れており調整は不明である。3は深鉢胴部でやや外反する。胎土に植物繊維や砂粒を多量に含むが焼成は良好で、器面の状況も良好である。外面は結節をもつRL単節縄文を横位に施す。4～6は器形復元が可能な個体である。4は深鉢で、底部は接合しないが全体の形状は図の通りになると思われる。器壁が底部から一旦絞られるように内傾し、その上側は口縁部に向かって若干膨らみをもたせながら開く形状を呈する。推定口径20.0cm、推定底径6.0cm、残存器高は口縁～胴部側が23.0cm、底部側が4.5cmで、全体の器高は約29cmになると推定される。胎土に植物繊維を多量に含むほか、白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好であるが、熱を受けており器面はやや荒れている。外面は全体にLR単節縄文が施される。5は深鉢である。器形は4と類似するが、口縁部が外反する。推定口径17.2cm、残存器高は17.5cmである。胎土は全体に粗く、植物繊維のほか砂粒、小礫を多量に含む。焼成は良好であるが、熱を受けており器面はやや荒れている。外面は全体に網目状撚糸文が施される。6は深鉢底部である。4と同じく器壁が底部から一旦絞られるよう内傾し、その上側は口縁部に向かって開く。推定底径6.6cm、残存器高は4.5cmである。胎土は植物繊維を多量に含むが全体に稠密である。焼成は良好であるが、熱を受けており器面はやや荒れている。外面にLR単節縄文が施される。

時期 出土した土器の主要なものは前期黒浜式であり、当遺構も該期と考えられる。

(10)SI009A・B(第45図、図版3・21)

位置 O 49-96、O 50-06・07

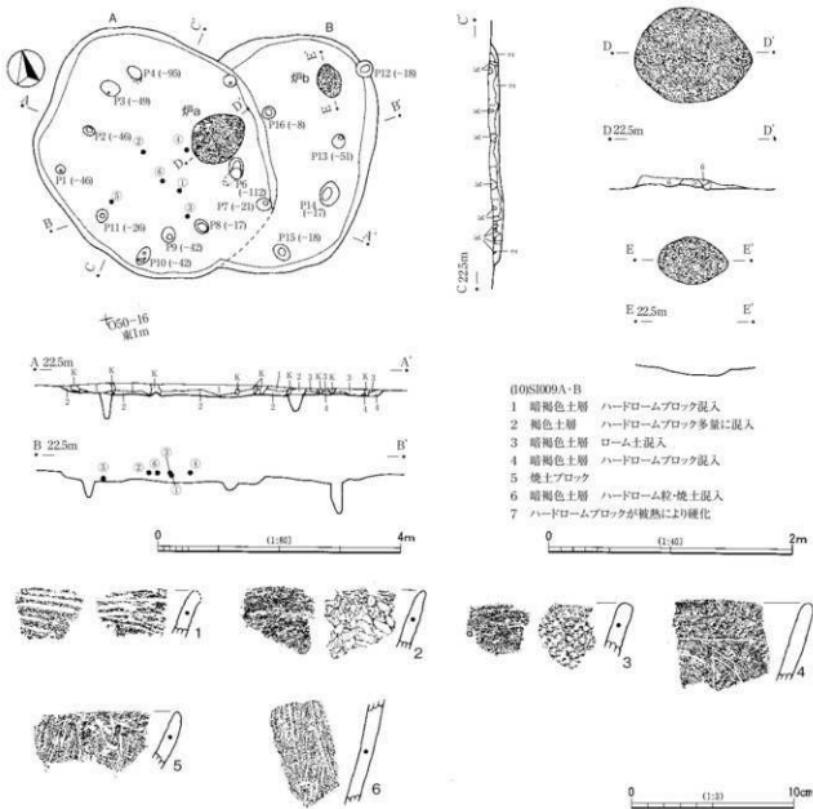
形状と規模 2軒が切り合った住居跡である。ここでは西側をA、東側をBとする。掘込みが深いAは全体形状をおおよそ把握でき、長径4.4m、短径3.7mの楕円形を呈する。一方掘込みが浅いBは西側3分の1程度がAと重なっており、長軸の現存長4.1m、短軸の現存長2.9mを測る。推定復元すると長径約4.2m、短径約3.5mの楕円形を呈すると考えられる。覆土の観察所見から、Bが古くAが新しいと判断される。主軸方位は長軸方向で計測した場合、AがN-35°-W、BがN-30°-Eであるが、炉の位置を考慮すると正面配置は異なっている可能性がある。

壁の状況と覆土 A・Bいずれも壁は緩やかに立ち上がる。Aは最大壁高が16cm、床面の最も深い部分で確認面から22cmである。Bは最大壁高が8cm、床面の最も深い部分で確認面から20cmである。覆土はハードロームブロックが混入する暗褐色土が堆積しているが、Aの覆土がBの覆土を切っているのが観察される。

床面 Aは基本的に平坦ではあるが中央部がやや窪んでいる。Bは平坦である。いずれも明確な硬化面は検出されなかった。

炉 A・Bいずれからも1基ずつ検出されており、それぞれ炉a、炉bとする。いずれも竪穴の東端に寄った位置に構築されている。炉aは長径94cm、短径78cmの楕円形を呈する。掘込みはほとんどなく床面上に焼土が盛り上がるようにならして存在する。炉床部は熱を強く受けている。炉bは長径56cm、短径40cmの楕円形を呈する。深さは住居床面から10cmとごく浅い。

ピット Aからは直径15cm～30cmのピットが11基、壁に近い位置に円弧を描くように検出されており、柱穴と考えられる。ただしP5～8はBに帰属する可能性もある。Bからは直径20cm～40cmのピットが



第45図 (10)SI009A・B 住居跡、出土遺物

5基検出されており、そのうちP12～15は東側の壁に沿っている。これらも柱穴と考えられる。Aの内部から検出されたP4とP8は開口部が壁に向かうように斜めに掘られており、壁材を支える柱であったかもしれない。

出土遺物 図示した遺物のうち、5は床面直上であるがその他は覆土上部からの出土である。いずれの遺物もAの範囲内から出土している。1～3・5・6は胎土に植物繊維を含む土器である。1は深鉢の口縁部で、内・外面とも貝殻条痕文が施される。全体にもろく器面は荒れている。2は深鉢の口縁部で口唇端部は尖頭状である。外面向かって左側にLR単節繩文、右側にR無節繩文がいずれも横方向に施され、全体としては異原体の羽状繩文を構成する。内面はまばらなミガキ調整が施される。3は深鉢の口縁部で口唇部は平らに削ぎ落とされる。外面にはRL単節繩文が縱方向に施される。5は器種が不明で浅鉢の可能性がある。胎土は密で植物繊維はあまり多くなく、赤色スコリア粒を含む。内・外面とも板状工具によ

るケズリ調整が施される。6は深鉢胴部で、胎土は密で植物繊維はあまり多くなく、赤色スコリア粒を含む。外面に貝殻条痕文が施される。4は胎土に植物繊維を含まない土器で、深鉢の口縁部である。地文にLR単節縄文を施し、口縁と平行するように半截竹管による沈線を巡らせ、その下側は同一の施文具によると思われる斜位の沈線を配する。前期後葉に属すると考えられる。

時期 出土した土器は大きく早期後葉の条痕文土器と前期黒浜式土器に分かれる。遺構の観察所見からBが古くてAが新しく、遺物の時期に照合するとAは黒浜式期、Bが条痕文土器に帰属すると推測される。ただし遺物の出土状況からAが黒浜式である可能性は濃厚であるが、Bが条痕文期に属するかは判断できない。

(10)SI011A・B (第46図、図版3・21)

位置 O 49-79・89、P 49-70・80

形状と規模 調査時は單一の遺構番号が与えられていたが、整理時に竪穴状の遺構と土坑と思われる遺構が切り合っていることが判明した。報告にあたりどちらか一方に新番号を付与することも検討したが、混亂を避けるため竪穴状の遺構にA、土坑と思われる遺構にBを付することで区別することとした。記録はないが調査所見ではAが古くBが新しい。AはBによって東側の壁が失われているが、楕円形を呈すると思われる。長径は東北東-西南西方向と思われ、残存長は2.4mを測り、復元すると約3mになると推測される。短径は2.8m、確認面からの深さは15cmを測る。主軸方位はN-70°-Eである。Bは不整円形を呈しており、直径約3.2mを測る。

壁の状況と覆土 壁は緩やかに立ち上がる。最大壁高は12cm、床面の最も深い部分で確認面から15cmとごく浅い。覆土はローム土が混入する暗褐色土で粘性が強い。Bは播鉢状を呈し、壁は直線的に斜めに立ち上がる。床面の最も深い部分で確認面から約110cmである。覆土はロームブックを多量に含む土層が下層側に堆積し、上層側はローム土を主体とした暗褐色土層が堆積する。人為堆積と思われる。

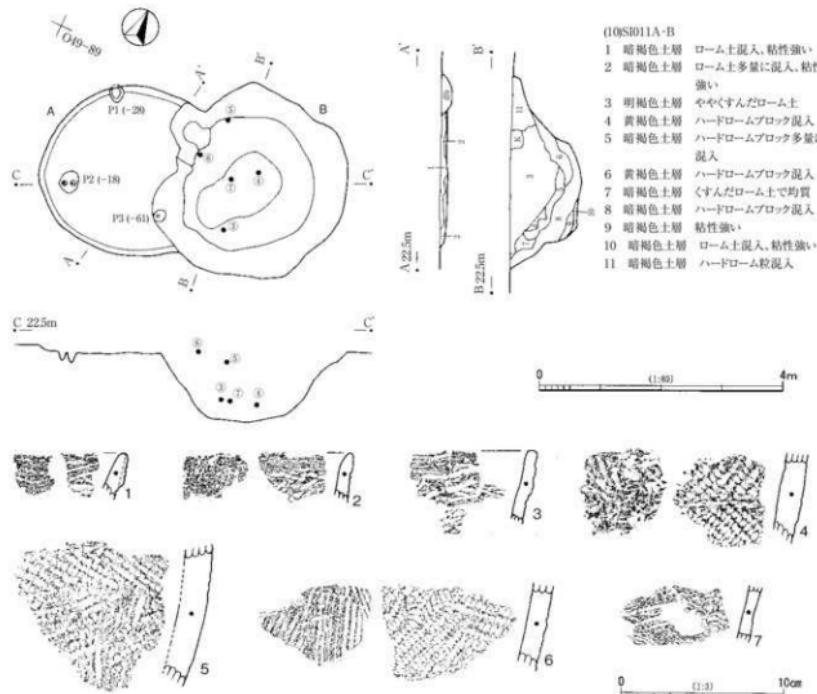
床面 床面は平坦で、明確な硬化面は検出されなかった。Bは緩やかな丸底を呈している。

炉 検出されなかった。

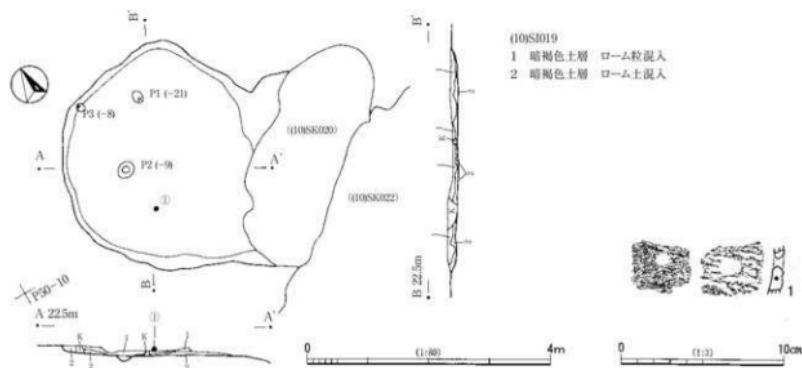
ピット Aからは2基の小ピットが検出されている。Bの内部にも1基小ピットが検出されているが、位置は西端であり土坑内部に他のピットは存在しないことから、Aに伴っていた可能性がある。

出土遺物 図示できる資料は全てBから出土した。いずれも胎土に植物繊維を多量に含む。1~3は深鉢の口縁部である。1は胎土に白色砂粒を多量に含む。口縁部を肥厚させ、棒状工具による平行沈線を斜位に配する。花積下層式に位置づけられる。2は胎土に砂粒を多量に含む。口縁に沿って端部に結節を有するL無節縄文を配する。3は胎土が密で焼成も良好である。結節を多段に配する。4~7は深鉢胴部である。4は胎土に白色砂粒を多量に含み、焼成は不良でかなりもろい。LR単節縄文を上側に、RL単節縄文を下側にそれぞれ横方向に施し、異原体による羽状縄文を構成する。5は胎土が粗で砂粒を多量に含む。然による劣化が著しい。LR単節縄文を原体とし、上側は横方向に、下側は縱方向に施文する。異方向の羽状縄文を構成する。6は胎土に砂粒をやや多量に含む。焼成は良好で堅緻である。LR単節縄文を左側に、RL単節縄文を右側に配し、縦位の羽状縄文を構成する。縄文施文前には器面に貝殻条痕を施しているのが観察される。内面にも貝殻条痕を施す。7は胎土が密であるが焼成はやや不良でもろい。RL単節縄文を施す。

時期 出土土器は早期末~前期初頭に位置づけられるものと、前期中葉黒浜式に位置づけられるものに分



第46図 (10)SI011A・B住居跡、出土遺物



第47図 (10)SI019住居跡、出土遺物

けられる。遺構の観察所見では A が古く B が新しいが、A からは時期が判断できる土器が出土していないため判断はできない。ここでは A が早期末～前期初頭、B が黒浜式に相当する可能性があると指摘しておく。

(10)SI019 (第 47 図、図版 3・21)

位置 P 50-00・01・10・11

他遺構との重複関係 (10)SK020 と切り合っているが、新旧関係は不明である。

形状と規模 南東側の壁が未検出であるが形状は楕円形と判断され、現存長軸は 4.0 m、短軸は 3.5 m を測る。主軸方位は N-15°-W である。

壁の状況と覆土 壁は緩やかに立ち上がる。なお、(10)SK020 側は大きく広がっているが、廃絶後に崩れたものと思われる。最大壁高は 11cm、床面の最も深い部分で確認面から 16cm である。

床面 床面は平坦で、明確な硬化面は検出されなかった。

炉 検出されなかった。

ピット 北西側から 3 基検出されている。いずれも規模は小さい。

出土遺物 ごく少数である。1 は図示できる唯一の資料で、深鉢胴部である。胎土に植物纖維を多量に含むが全体に密であり、焼成も良好である。外面には RL 単節繩文が施される。

時期 出土土器は黒浜式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(10)SI036 (第 48～51 図、図版 3・20・22・25)

位置 O 50-66・76・77・86・87

形状と規模 西壁以外の壁を見ると隅丸長方形を呈するように思われるが、西壁は弧状を呈する。2 軒の竪穴住居が切り合っている可能性がある。長軸 7.0 m、短軸 4.5 m を測る。主軸方位は N-80°-W である。

壁の状況と覆土 壁はおしなべて緩やかな立ち上がりであるが、隅丸長方形側は直立気味であるのに対し、円形プラン側はより緩やかで皿状である。最大壁高は 12cm、床面の最も深い部分で確認面から 20cm である。

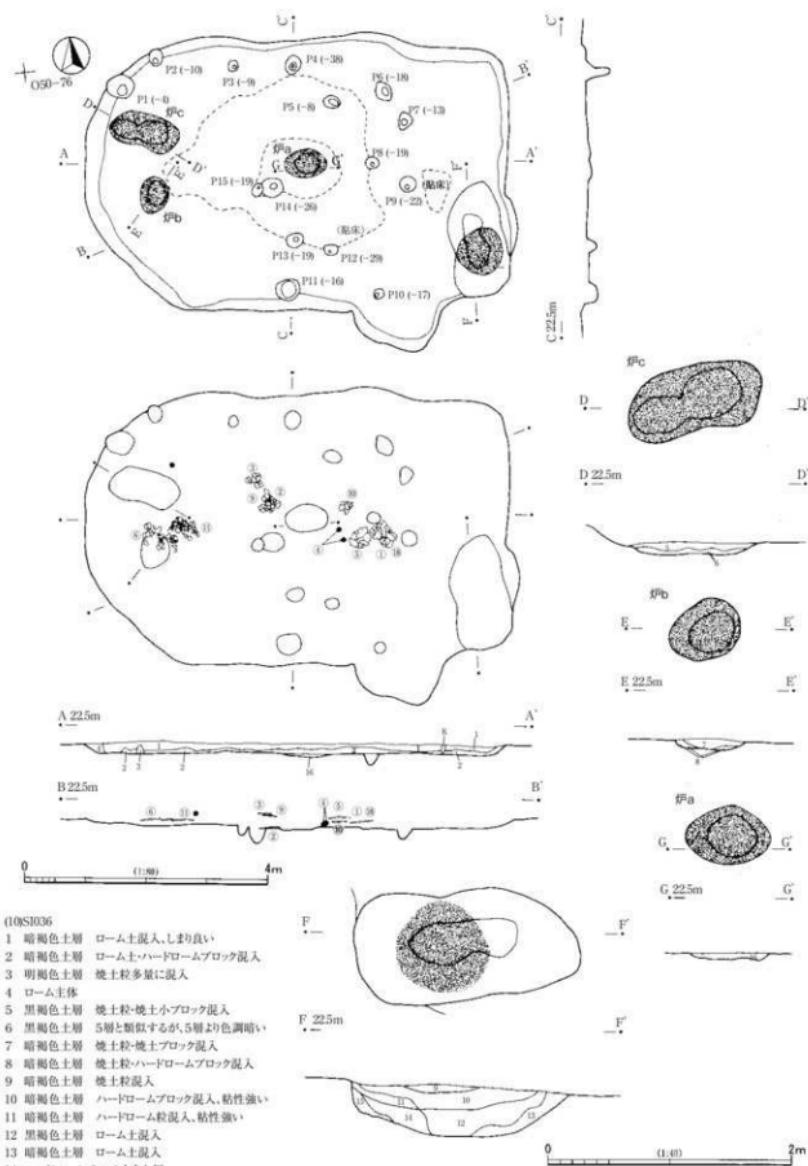
覆土は上層側がローム土を含む暗褐色土、下層側が併せてロームブロックを含む暗褐色土で、竪穴内全体に一様で複数の遺構が切り合っている状況はうかがえない。

床面 全体に平坦である。中央の炉を中心とした東西約 3.6 m、南北約 2.8 m の範囲に貼床が検出されている。

炉 3 基検出されている。ここでは竪穴中央から検出されたものを炉 a、西壁沿いから検出されたものうち南側を炉 b、北側を炉 c とする。炉 a は長径 72cm、短径 48cm の楕円形を呈し、住居床面からの深さは 4 cm を測る。炉 b は長径 62cm、短径 48cm の楕円形を呈し、住居床面からの深さは 8 cm を測る。炉 c は長径 117cm、短径 58cm の長楕円形を呈する。3 基の炉の中では最も被熱が強い。形状から推測すると、竪穴住居構築前に存在していた炉穴の炉床部が残存している可能性がある。住居床面からの深さは 10cm を測る。そのほか、南東隅に焼土を伴う土坑が検出されている。土坑は長径 168cm、短径 92cm の楕円形を呈し、住居床面からの深さは 40cm を測る。焼土は覆土の最上層、竪穴住居の床面と同レベルから検出されている。この竪穴住居に伴うものと判断されるが、炉であるかどうかは不明である。

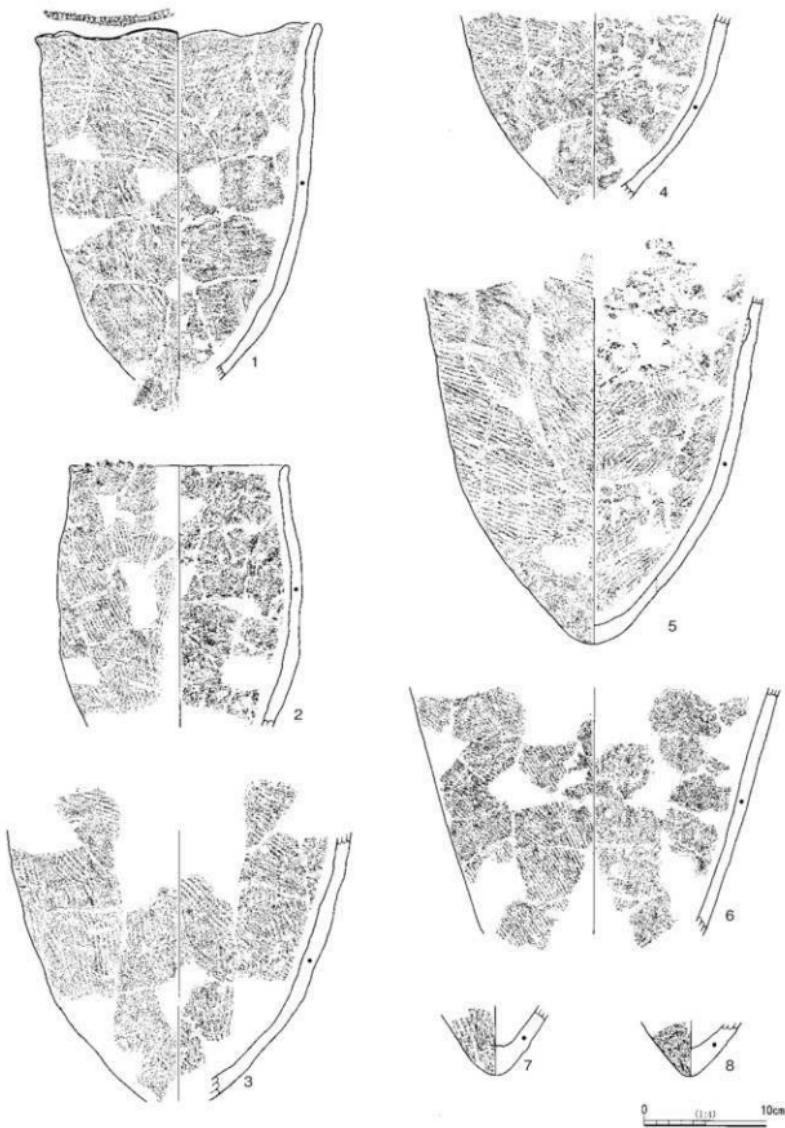
ピット 全部で 15 基検出されている。直径は 15cm～45cm とばらつきはあるが、炉 a を中心とした半径 2.5 m 程度の範囲に概ねおさまる。

出土遺物 多量の遺物が出土している。特に炉の周辺に多い。覆土上部からの出土が多く、確認面より上

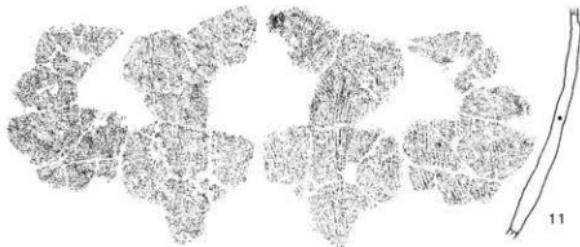
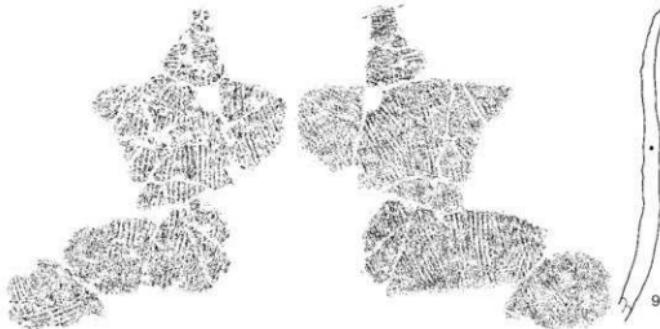


第48図 (10)SI036 住居跡

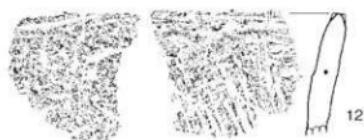
のレベルから出土しているものもあるが、当遺構に帰属するものと判断した。1～6は器形が復元できる深鉢である。1は深鉢で、底部を欠損するものは全体が復元できるものである。口径は23.5cm、残存器高は29.0cmを測る。胎土に植物繊維を多量に含むほか、白色砂粒をやや多く含む。器形は砲弾形で、尖底と思われる底部から器壁が大きく開き、胴部で直立てて口縁部に至る。口縁は少し外反し、ゆるやかな山形の突起が配される。欠損しているため推定となるが、突起は4単位とみられる。外面は貝殻条痕文を施すほか、口唇上には貝殻腹縁を押圧する。内面の調整は不明瞭である。下半分を中心に熱を強く受けしており、外面は磨耗が著しい。2は深鉢で、胴部上半分は比較的遺存度が高い。口径は推定17.4cm、残存器高は21.5cmを測る。胎土は全体に粗く、植物繊維のほか砂粒を多量に含む。器形は砲弾形であるが、胴部中央付近に最大径があり、口縁部側はややすぼまる。外面は貝殻条痕文を施すほか、口唇上には貝殻腹縁を押圧する。ただし口唇上は遺存状況が悪く採拾はできなかった。内面の調整は不明瞭である。下半分を中心に熱を強く受けおり、内・外面とも磨耗が著しい。3は深鉢胴部下半である。胴部最大径は22.2cm、残存器高は28.1cmを測る。胎土は全体に粗く、植物繊維のほか砂粒を多量に含む。器形は砲弾形で、内・外面とも貝殻条痕文が施される。やはり熱を強く受けおり、特に下側は磨耗が顕著である。4は深鉢胴部下半である。胴部最大径は22.0cm、残存器高は15.3cmを測る。胎土はやや細かく植物繊維を多量に含むほか、白色砂粒をやや多く含む。外面は下側にLR単節縄文を、上側にRL単節縄文をそれぞれ横方向に施し、異原体による羽状縄文を構成する。熱を受けているものの磨耗は顕著でなく、内面上半分以外は比較的良好に遺存している。5は深鉢の胴部から底部である。胴部最大径27.8cm、残存器高28.3cmを測る。胎土はやや粗く、植物繊維や砂粒を多量に含む。器形は砲弾形であるが、底部はやや丸みを帯びており、胴部は直立せずゆるやかに開いている。内・外面とも貝殻条痕文が施される。熱を受けており底部付近にススの付着が認められるほか、器面は特に内面の劣化が目立ち、口縁側はほとんど剥落している。6は深鉢胴部破片である。胴部最大径は30.2cm、残存器高は20.4cmを測る。胎土は植物繊維や砂粒を多量に含むほか、小礫がやや目立つ。器形は直線的に開く形状を呈する。外面は貝殻条痕文が施されるが全面ではなく、板状工具による調整のみにとどめている部分も存在する。内面は板状工具による調整のみである。7・8は深鉢底部で、いずれも尖底である。7は残存器高5.7cmを測る。胎土は植物繊維を含むが全体に稠密で遺存状況は良好である。外面には貝殻条痕文が施されるほか、内面は板状工具による調整痕が認められる。8は残存器高4.4cmを測る。胎土はやや粗く、植物繊維や砂粒を多量に含む。全体に熱による磨耗が目立ち、調整は内・外面とも不明瞭である。9～11は器形復元ができなかったものの遺存状況のよい深鉢である。9は口縁部から胴部にかけて、胎土に植物繊維や砂粒を多量に含む。器形はほぼ直立する胴部から口縁部へ向かってやや外反する。内・外面とも貝殻条痕が施されるが、内面は剥落が目立ち、特に口縁直下は遺存状況が悪い。10は口縁部から胴部にかけて、胎土に植物繊維や砂粒を多量に含む。器形は直線的に開く形状を呈し、口縁部が外側に肥厚して口唇上は平らに整形される。外面は口唇直下に貝殻条痕が右上～左下の斜め方向に施され、胴部側は逆方向（左上～右下）の貝殻条痕が施された後、直行する方向にミガキ状の調整が加えられて磨り消されている。内面は貝殻条痕が施されるが、器面は磨耗しており遺存状況は悪い。11は胴部で、胎土に植物繊維や砂粒を多量に含む。器形は底部側から器壁が開き、口縁側に向かって直立する。外面は貝殻条痕が施され、内面は板状工具による調整痕が認められる。12～22は小破片のうち時期が分かるもので、全て深鉢口縁部である。12は胎土に植物繊維や赤色スコリアを多量に含む。口唇部は尖頭状に成形し、部分的に貝殻顶部を押圧する（拓影図上端右）。外面は貝殻条痕



第49図 (1)SI036 住居跡出土遺物 (1)

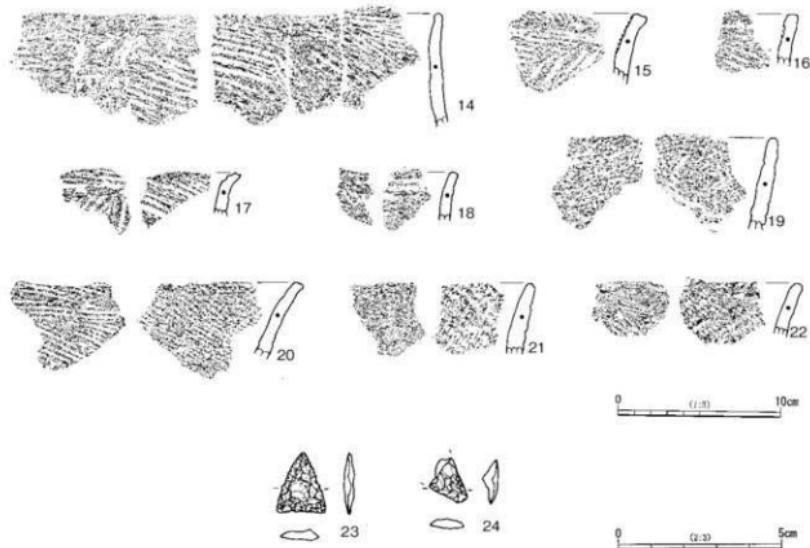


0 1:10 10cm



0 1:10 10cm

第50図 (10)SI036 住居跡出土遺物 (2)



第51図 (10)SI036 住居跡出土遺物 (3)

文を施し、その後波状貝殻文を斜め及び縦に施す。13は胎土に植物繊維や白色砂粒を極めて多量に含む。器形は直線的に立ち上がるが、部分的に外反している。内・外面とも貝殻条痕が施されるほか、口唇上には貝殻腹縁が押圧される。14は胎土に植物繊維を多量に含むが粒子は稠密である。器形は口縁部がややすぼまつて下膨れになっているほか、全体に歪みが目立ち上から見ると多角形を呈する。内・外面と口唇上に貝殻条痕が施される。15は胎土に植物繊維や白色砂粒を極めて多量に含む。器形は直線的に開く器壁が口縁直下で外側へ屈曲しており、口唇上は平らに整形される。外面には貝殻と板状工具と思われる2種類の条痕が施され、口唇上には貝殻背が押圧される。内面は極めて状況が悪く、器面はほとんど残存していない。16は胎土に植物繊維や砂粒を多量に含む。器形は直線的に開く形状を呈し、口唇上は平らに整形される。外面に貝殻条痕が施されるが、内面は遺存状況が悪く器面は荒れている。17は胎土に植物繊維を多量に含むが粒子は稠密である。器形は直線的に立ち上がり口唇直下で強く外反する。内・外面とも貝殻条痕が施され、特に内面は口唇上まで達している。18は胎土に植物繊維や白色砂粒を多量に含む。器形は直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。外面には板状工具による調整痕が認められる。19は胎土に植物繊維を極めて多量に含む。器形は直線的に立ち上がる形状を呈する。器面からの繊維の剥落が著しく、調整等は不明瞭である。20は胎土に植物繊維のほか、砂粒をやや多く含む。器形は口縁部が外反し、口唇上は平らに整形される。外面にRL単節縄文、内面に貝殻条痕が施される。また、口唇上には縄文の原体が押圧される。21は胎土に植物繊維や砂粒を多量に含む。外面にRL単節縄文が施され、内面は横方向の擦痕が観察される。22は胎土に植物繊維や砂粒を多量に含む。全体に熱による劣化が著しく器表面は不明瞭である。外面にRL単節縄文が施されるのがかろうじて観察される。23は抉りが極

めて浅いほぼ平基の石礎で、二等辺三角形を呈しており完形品である。24は抉りの浅い凹基の石礎である。脚部のみの破片であるため全体形状は不明である。いずれも石材はチャートである。

時期 出土土器は早期後葉を主体とし、当遺構は該期に属すると考えられる。

2 炉穴・焼土遺構

この項では、炉穴及び炉穴の可能性が強いとみられる焼土遺構を掲載した。掘込みが浅い皿状の土坑のうち、覆土に焼土がまとまって堆積しているものは炉穴の残欠である可能性が高いと判断して掲載した。遺構番号で区別されるものは全部で24基であるが、言うまでもなく炉穴は炉床部の作り替えを行なうため、実数としてはさらに多くなる。そのうち多くの10次調査区から検出されたが、他の調査区にも散在している。

計測にあたり、足場から炉床部に向かう長軸中心線が真北または真南の方位からずれる角度を「主軸」としたが、遺存状況が悪く主軸方向が判断できないものは長軸の向きを計測し、どうしても判断できないものは省略している。表記法は竪穴住居跡に準じているが、南側へ向く場合は真南(S)を 0° として、東西への軸の傾きをS- $○^\circ$ -EあるいはS- $○^\circ$ -Wとして表している。

(4)SF002 (第52図、図版3)

遺構 N 49-76・86 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径88cm、短径80cmを測る。断面は浅い椀形で坑底は丸底であるが、南西側が段状の平坦面を形成しているため足場側と判断した。確認面からの深さは炉床部で27cm、足場で8cmを測る。焼土主体の層は坑底から約10cmの厚さに堆積する。主軸方位はN-35°-Eである。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(4)SF003 (第52図、図版3)

遺構 N 49-86 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径80cm、短径68cmを測る。断面は浅い椀形で坑底は丸底であるが、北東側の壁が直立しているため奥壁と判断した。確認面からの深さは17cmを測る。焼土主体の層は坑底から約10cmの厚さに堆積する。主軸方位はN-30°-Eである。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(4)SF004 (第52図、図版3)

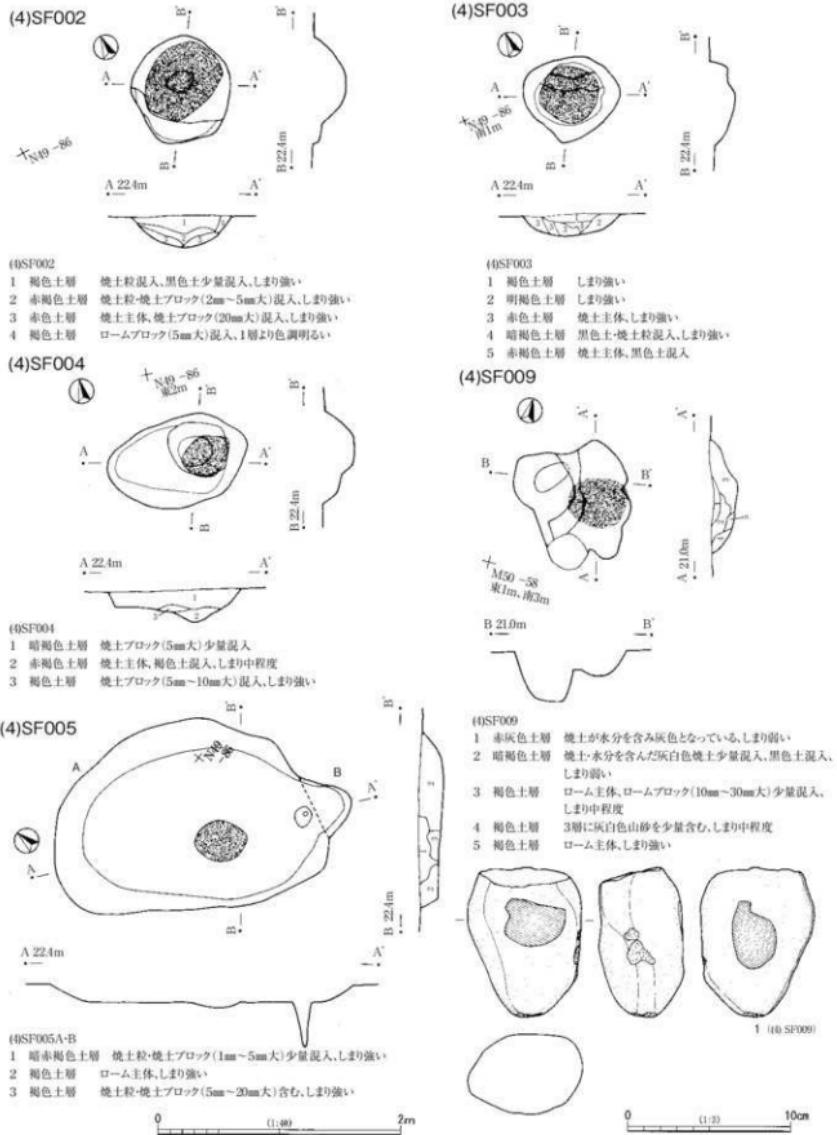
遺構 N 49-86 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径116cm、短径72cmを測る。東側が炉床部、西側が足場と判断される。断面は逆台形で坑底は平坦であるが、炉床部はさらに椀形に掘り込まれている。確認面からの深さは炉床部で22cm、足場で16cmを測る。焼土主体の層は坑底から約5cmの厚さに堆積するが、焼土粒の含有量はやや少なく範囲も狭い。使用頻度は高くなかったと思われる。主軸方向はほぼ真東である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(4)SF005A・B (第52図、図版4)

遺構 N 49-75・76・85・86 グリッドに所在する。長楕円形を呈する炉穴Aと不整円形の土坑Bが切り合っているが、新旧関係は不明である。Aは南東側の壁が不明のため一部推測となるが、長径約220cm、



第 52 図 (4)SF002 ~ 005・009 炉穴、出土遺物

短径160cmとやや規模が大きい。炉床部と思われる焼土はプランのほぼ中央部に位置し、断面形も浅い皿形で特徴的な部分はほとんどなく、足場側がどちらになるかは不明である。確認面からの深さは19cmを測る。炉床部は掘り込みがほとんどなく、焼土を含む土層は坑底に盛り上がるよう残存している状況である。主軸方向は足場の位置が不明なため判断できないが、プランの長軸はN-45°-Wを向いている。Bは遺存度が低く全体の形状や規模は不明であるが、残存している部分は長径（北東-南西）45cm、短径（北西-南東）30cm、確認面からの深さ13cmを測る。主軸方位は判断できない。両者の境付近に存在する小ピットは直径15cmと小さいが、深さはAの坑底から37cmを測る。A・Bどちらに帰属するかは不明である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(4)SF009 (第52図、図版4・25)

遺構 M 50-58 グリッドに所在する。長楕円形の土坑と円形の土坑が接合したような状況を呈するが、木の根による搅乱も多く本来の形状とは大きく異なっている可能性が強い。規模は南北80cm、東西92cmを測る。長楕円形の部分は断面が浅い皿形で、坑底は丸底である。焼土は覆土最上層に堆積する。円形の部分は断面が逆台形で柱穴状を呈する。炉穴とするにはやや不自然であり、2基の土坑が切り合っている可能性があるが、断定はできない。確認面からの深さは長楕円形部が23cm、円形部が42cmを測る。

出土遺物 土器は図示できるものは出土しなかった。1は流紋岩の敲石である。両面に擦痕状の敲打痕、右側面にあばた状の敲打痕がみられる。全体に赤化しており、被熱によると考えられる。

時期 石器のみのため判断できない。

(4)SF014 (第53図、図版4)

遺構 M 50-01 グリッドに所在する。正円に近い楕円形を呈するが、中からより小さいピット状の掘込みが検出されており、南西側に若干出っ張っている。出っ張っている側を長軸方向とすると、規模は長軸55cm、短軸50cmを測る。主軸方位はN-30°-Eである。覆土のうち焼土主体の層は最上層であり、下層側は焼土が拡散したようなしまりの弱い褐色土が堆積する。断面は鍋底形とでも言うべき形状で、坑底は若干丸みを帯びる。さらにピット状に一段深い掘込みが認められる。炉穴とするにはやや不自然であり、先に小ピットが掘削され後から炉穴が構築された可能性があるが、断定できない。確認面からの深さは主部が38cm、ピット状の掘り込みが47cmを測る。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(9)SX001 (第53図)

遺構 T 50-02 グリッドに所在する。2基の楕円形土坑が連結した形状を呈し、長軸74cm、短軸42cmを測る。西側の土坑が深く掘り込まれており、こちらを炉床部と考えるなら主軸方位はN-85°-Wである。確認面からの深さは炉床部で9cmとなるが、足場側は2cmとごく浅い。

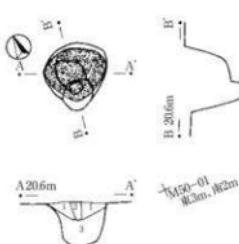
出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(9)SX002 (第53図)

遺構 T 50-02 グリッドに所在する。ほぼ正円形を呈し、径22cm、確認面からの深さ2cmとごく小規模である。足場の位置が不明なため主軸方向は判断できない。

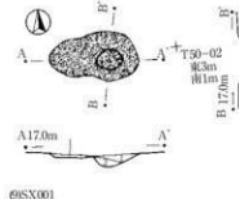
(4)SF014



(4)SF014

- 1 赤褐色土層 燃土粒主体、しまり弱い
- 2 閑色土層 燃土粒・焼土ブロック(5mm大)少量混入、しまり弱い
- 3 閑色土層 燃土粒少量混入、しまり弱い

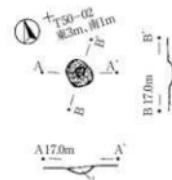
(9)SX001



69SX001

- 1 暗褐色土層 燃土ブロック多量に混入
- 2 暗褐色土層 ハードロームブロック混入

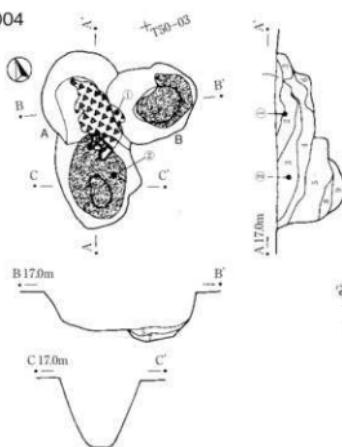
(9)SX002



69SX002

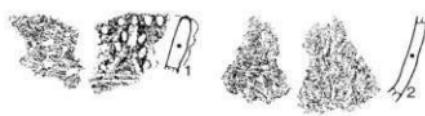
- 1 暗褐色土層 燃土ブロック混入

(9)SF004



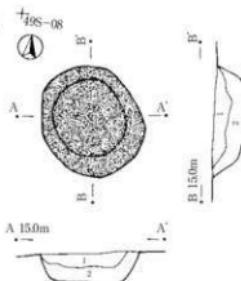
69SF004

- 1 黒褐色土層
- 2 黒褐色泥土貝層 マガキ等主体
- 3 暗褐色土層 ハードロームブロック混入
- 4 暗褐色土層 ローム土・燃土ブロック混入
- 5 暗褐色土層 燃土・焼土ブロック多量に混入
- 6 黄褐色土層 ローム土・ハードロームブロック多量に混入
- 7 黑褐色土層 燃土少量含む
- 8 赤褐色土層 ハードロームが被熱した層
- 9 黑褐色土層



0 (1:3) 10cm

(13)SX001



(13)SX001

- 1 暗黄褐色土層 燃土粒混入
- 2 暗褐色土層 燃土粒混入

0 (1:40) 2m

第 53 図 (4)SF014・(9)SF004 炉穴、(9)SX001・002・(13)SX001 燃土遺構、出土遺物

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(9)SF004A・B (第 53 ~ 55 図、図版 4・21・26)

遺構 T 50-02-03 グリッドに所在する。2 基の楕円形プランが切り合っており、全体の規模は南北 144cm、東西 133cm の範囲に広がる。覆土の観察から西側の炉穴が東側より新しいことが判明している。ここでは西側を A、東側を B とする。A は長軸 145cm、短軸 65cm を測る。南側は椀状に掘り込まれ炉床部を形成し、北側は一段高くなつて平坦な足場を形成する。壁の立ち上がりは炉床部がほぼ直立するのに対し足場側はやや緩やかである。覆土は炉床部直上に焼土ブロックを多量に含む黄褐色土が堆積し、上層には貝ブロックが堆積する。確認面からの深さは炉床部で 47cm、足場で 32cm を測る。主軸方位は S-5° -W である。B は長軸 65cm、短軸 63cm を測る。東側は椀状に掘り込まれ炉床部を形成し、西側は一段高くなつて平坦な足場を形成するが、深さが A の足場とほぼ同レベルであるため境が判別できない。確認面からの深さは炉床部で 42cm、足場で 30cm を測る。主軸方位はほぼ真東である。

出土遺物 図示できる遺物は 2 点である。1 は深鉢口縁部で、胎土に植物纖維を含むが粒子は細かく稠密である。ゆるやかな波状口縁となっており、波頂部から 2 本の隆線を「ハ」の字状に垂下させる。隆線上には断面円形の棒状工具によってキザミが施され、口唇上にも同一の工具によるキザミが施される。内面には板状工具による擦痕が認められる。2 は深鉢の底部直上で、胎土は植物纖維のほか砂粒をやや多く含む。外面には貝殻条痕が施されるが、熱による剥落で不鮮明である。内面は板状工具による調整痕が観察される。

時期 出土土器のうち 1 は早期末葉に位置づけられるものであり、当遺構も該期と考えられる。

貝ブロック 当遺構の覆土には貝ブロックが堆積しており、貝サンプルとして全体を一括取り上げした。水洗にあたり試験篩による分離は実施していない。取り上げ時の重量は未計測であるが、水洗後の重量は 3,567 g である。貝の選別は目視により概ね 4 mm 以上となるものを対象とした。二枚貝類は殻頂部の鉗歯が半分以上遺存するものを左右別に集計し、多い方を最小個体数とした。巻貝類は各軸下端が遺存するものを集計した。同定した貝種一覧は第 16 表、個体数の集計結果は第 17 表の通りで、各貝種の構成比をグラフ化したのが第 54 図である。なお、マガキ 804 点のうち、複数のマガキが付着していたものが 34 点、ウミニナが付着していたものが 3 点、ウミニナあるいはハイガイの付着痕跡が認められたものが 255 点存在する（付着していた貝は個体数に含めていない）。殻長計測についてはマガキの最小個体数として採用した L 段 289 点を対象とし、Microsoft Excel の分析ツールを使用してヒストグラム作成とグラフ化を行った。結果は第 55 図の通りである。

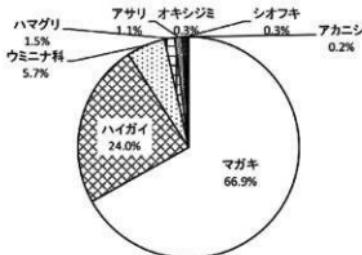
サンプルを構成する貝のうち最大多数はマガキで約 67% を占め、次いでハイガイが約 24% で两者あわせて 90% 以上を占める。早期後半の古奥東京湾沿岸の貝塚の組成としては一般的な在り方と言える。一方で近隣の遺跡と比較すると、思井上ノ内遺跡^(注1) では鵜ガ島台式期を中心とした貝ブロックが検出されているが、マガキが主体である点は一致するもののハイガイはほとんど見られない点で相違する。ハイガイは温暖な海域に生息しており、鵜ガ島台式期に比べ早期末はより海水温が上昇した可能性が指摘できようが、そもそも貝の採取域や方法について不明な点が多いことに加え、遺跡の立地によって貝種が選択された可能性もあり、その要因について概には言えないと思われ今後の検討課題とすべきであろう。なお、三番目に多いウミニナはこの時期から食用を目的とした捕獲が始まるとしているが、マガキに付着していた

第16表 (9)SF004 出土貝種類名一覧

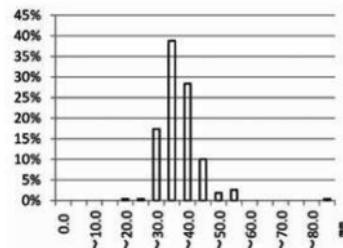
腹足綱	中腹足目	ウミニナ科	ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>
	新腹足目	アキガイ科	アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>
	ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキガイ	<i>Mactra quadrangularis</i>
		マルスダレガイ科	アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
			ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
			オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
計		6科	8種	

第17表 (9)SF004 出土貝類同定結果

種名	個体数	%
ウミニナ科	68	5.7
アカニシ	3	0.2
ハイガイ	288	24.0
マガキ	804	66.9
シオフキ	4	0.3
アサリ	13	1.1
ハマグリ	18	1.5
オキシジミ	4	0.3
合計	1,202	100.0



第54図 (9)SF004 出土貝種組成グラフ



第55図 (9)SF004 出土マガキ殻長グラフ

がうかがえる。特に小形貝は意識して避けていることをよく示している。

以上を簡単にまとめると、縄文時代早期後半から前期にかけて縄文海進が本格化し、流山周辺の低地も内湾砂底種あるいは内湾泥底種の生息に適した環境が出現したことを示すものといえる。

(13)SX001 (第53図、図版4)

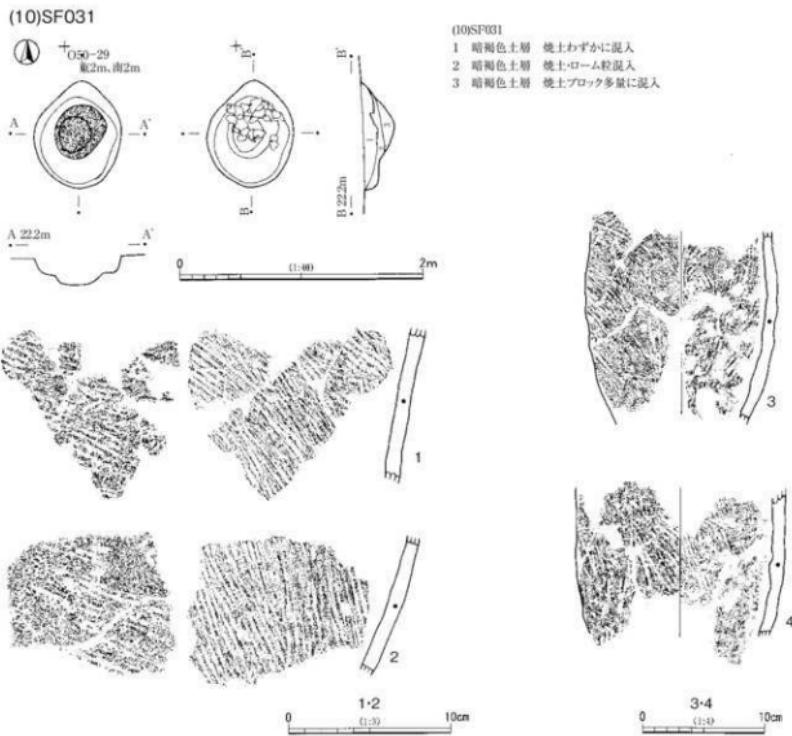
遺構 S 49-08 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径 92cm、短径 84cm、確認面からの深さ 27cm を測る。足場の位置が不明なため主軸方向は判断できないが、長軸の方位は N-35°-W である。断面は皿形を呈し、坑底はほぼ平坦である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(10)SF031 (第56図、図版4・21)

遺構 O 50-29 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径 88cm、短径 72cm、確認面からの深さ 25cm を測る。



第56図 (10)SF031 炉穴、出土遺物

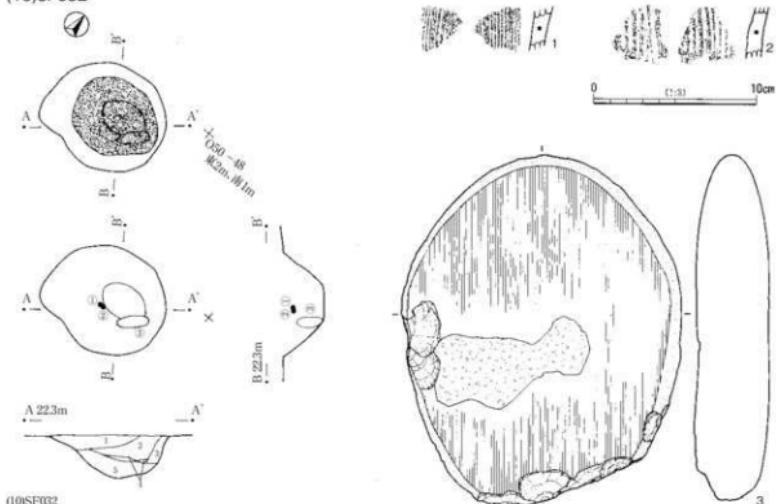
炉床部はプランのやや北寄りに位置しており、足場は南側に位置すると考えられる。主軸方位はN-5°-Eである。覆土最下層の炉床部には焼土ブロックが堆積する。プラン全体に焼土を含む暗褐色土が堆積しており、その上面から土器片が多量に出土した。

出土遺物 1~4は焼土上面から出土した土器で、いずれも深鉢胴部である。ただし現場の図面には遺物番号が記載されていないため、出土位置を特定することはできなかった。1と2はいずれも胎土に植物纖維のほか砂粒を多量に含み、内・外面部とも類似する貝殻条痕が施されるもので、同一個体の可能性がある。1は直線的に開き、2は尖底部から口縁部に向かって湾曲するように立ち上がる器形を呈する。3・4は器形復元ができるもので、胴部最大径は3が15.8cm、4が17.2cm、残存器高は3が15.7cm、4が12.2cmを測る。いずれも胎土に植物纖維のほか砂粒を多量に含み、3は赤色スコリアの混入も認められる。内・外面部とも貝殻条痕が施されるが、内面は指頭整形の痕跡が顕著で凸凹が目立つ。

時期 出土土器はいずれも早期後葉に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(10)SF032 (第57図、図版5・21・26)

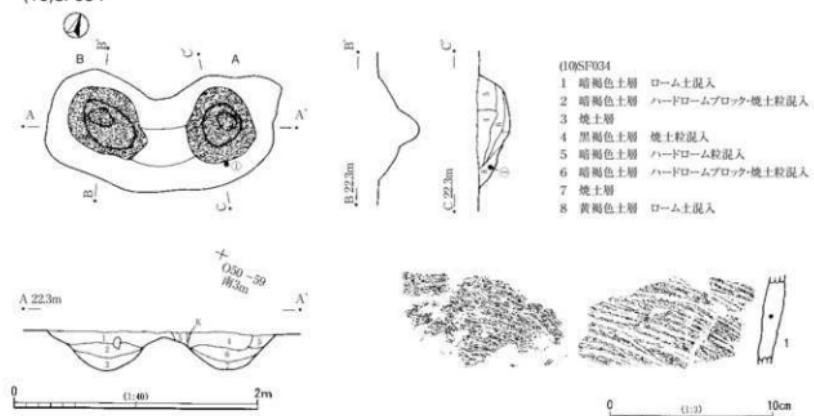
(10)SF032



(10)SF032

- 1 前褐色土層 槌土わずかに混入、均質
- 2 前褐色土層 ローム土・焼土粒混入
- 3 前褐色土層 ローム土多量に含む、燒土わずかに混入
- 4 前褐色土層 燃土ブロック混入
- 5 燃土ブロック主体 黒褐色土少量混入

(10)SF034



第57図 (10)SF032・034 炉穴、出土遺物

遺構 O 50-48 グリッドに所在する。楕円形であるが西側がやや張り出している。長径 104cm、短径 88cm、確認面からの深さ 35cm を測る。主軸方位は張出し部を主軸方向とすると N-60°-E である。覆土最下層の炉床部には焼土ブロックが堆積する。覆土は焼土粒やローム土を含む暗褐色土が堆積しているが、最上層にはそれらをほとんど含まない土層が皿状に堆積しており、壁の立ち上がりも屈曲している。以上の観察所見及び平面形状から、浅い土坑が後から掘り込まれている可能性がある。大形の石皿が坑底に立った状態で出土しており、どのような意味があったのか注目される。

出土遺物 土器はかろうじて 2 点図化したが、いずれも小片である。覆土の上層から出土している。1 は深鉢胴部で、胎土に植物纖維のほか白色砂粒を多量に含む。内・外面に条痕が施されるが目が細かい。施文具は貝殻ではなく木の板かもしれない。2 は深鉢胴部で、胎土に植物纖維のほか砂粒をやや多量に含む。内・外に貝殻条痕が施される。3 は安山岩の比較的薄手の石皿で、両面が使用により磨耗している。

時期 出土土器はいずれも早期後葉に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(10)SF034 (第 57 図、図版 5・21)

遺構 O 50-58 グリッドに所在する。2 基の楕円形炉穴が重なっている。東側を A、西側を B とすると、規模は両者を貫く東西方向で 190cm、A の南北方向で 90cm、B の南北方向で 84cm を測る。確認面からの深さは A が 32cm、B が 30cm である。主軸方位は、A は北東側の炉床部に対し足場が南西側に位置すると考えられ、N-50°-E である。B は西側の炉床部に対し足場が東側に位置すると考えられ、主軸方位は真西である。炉床部の焼土層は A、B ともほぼ同一であるが、A の覆土は確認面まで焼土粒の混入が認められるのに対し、B は炉床部直上までしか認められない。また、A の覆土が B を切っていることも明らかであることから、最初に B が構築され、続けて A が構築されたと判断される。

出土遺物 図示可能な遺物は A から出土している。1 は深鉢胴部で、胎土に植物纖維のほか白色砂粒を多量に含む。外面は貝殻条痕が施され、内面は板状工具による擦痕が認められる。熱によって劣化しており器表面は剥落がやや目立つ。

時期 出土土器は早期後葉に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(10)SF039 (第 58 図、図版 5・21)

遺構 O 50-58・68 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径 104cm、短径 82cm、確認面からの深さ 30 cm を測る。炉床部のみ残存しており足場の位置が不明であるが、長径方向が主軸方向と考えられ、主軸方位は N-55°-E である。炉床部直上に焼土ブロックが多量に混入する層が堆積し、その上側に焼土粒を含む層が堆積する。

出土遺物 かろうじて 1 点図化した。1 は深鉢胴部で、胎土に植物纖維のほか砂粒を多量に含む。外面は貝殻条痕が施され、内面は板状工具による擦痕が認められる。

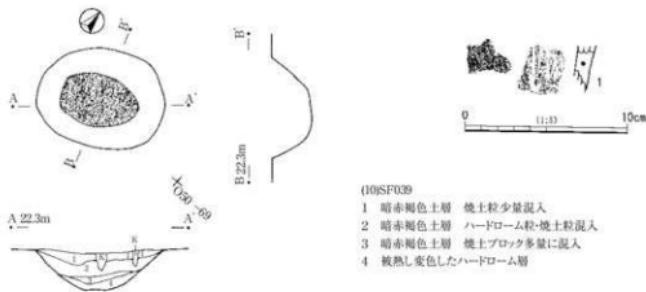
時期 出土土器は早期後葉に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(10)SF044 (第 58 図、図版 22)

遺構 O 50-76 グリッドに所在する。(10)SI036 に接しているが、ほぼ全体が残存している。楕円形を呈し、長径 92cm、短径 62cm、確認面からの深さ 24cm を測る。(10)SI036 との新旧関係は不明である。主軸方向は楕円形プランの長径方向と考えられ、主軸方位は N-35°-E である。覆土最下層の炉床部には焼土ブロックが堆積する。覆土は焼土粒を含む暗褐色土が堆積する。

出土遺物 状態が良好な土器が出土している。1 は深鉢口縁部から胴部にかけてで、器壁は底部側が若干

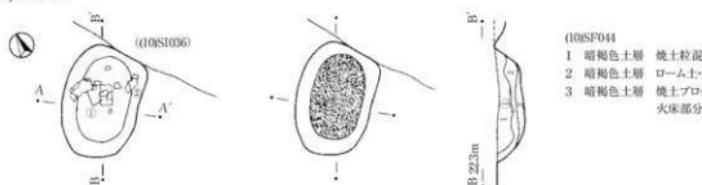
(10)SF039



(10)SF039

- 1 暗赤褐色土層 燃土粒少量混入
- 2 暗赤褐色土層 ハードローム粒・燃土粒混入
- 3 暗赤褐色土層 燃土ブロック多量に混入
- 4 被熱し変色したハードローム層

(10)SF044



(10)SF044

- 1 暗褐色土層 燃土粒混入
- 2 暗褐色土層 ローム土・燃土粒混入
- 3 暗褐色土層 燃土ブロック多量に混入、上面は火床部分



第58図 (10)SF039・044 炉穴、出土遺物

丸みを帯びるもののはば直立する。胎土は植物繊維のほか白色砂粒を多量に含むが、全体に緻密であり焼成も良好である。外面はRL 単節縄文を、条が縦文となるよう斜め方向に施す。内面は擦痕が認められ、口唇上は平らに整形される。2は深鉢口縁部から胴部にかけて、器壁はばば直立して口縁部が若干外反する。胎土は植物繊維のほか白色砂粒を多量に含む。外面は貝殻条痕が施されるが、全体に水平方向に施した後胴部下半分はさらに斜め方向に施す。内面は全体が擦痕で仕上げられているが、口唇下約1cm幅で水平方向の貝殻条痕が施されるほか、胴部各所に磨り消されたような貝殻条痕が観察される。当初は外面と同じく全体に水平方向の貝殻条痕を施し、口唇下を残して磨り消したとみられる。

時期 出土土器は早期後葉に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。ただし1と2が同時期であるかは判断できない。

(10)SF041 (第59図、図版5・22)

遺構 O 50-68 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径102cm、短径76cm、確認面からの深さ19cmを測る。全体が炉床部のような状況を呈しているため足場がどの位置に存在したか不明であるが、壁の立ち上がりが緩やかな南西側であろうと推測される。そうなると主軸方位はN-55°-Eとなる。覆土は全体に焼土ブロックを多量に含む暗褐色土が堆積する。

出土遺物 主に南西よりからまとまって出土している。1と2は同一個体の深鉢で、1は胴部、2は口縁部である。1の胴部側は器形復元が可能で最大径は22.8cm、残存器高は1.7cmを測る。ただし2の口縁側とは接点がなく位置関係が不明なため、別々に図化した。器壁は底部側が若干丸みを帯びるもののはば直立し、口縁部は小波状である。胎土には植物繊維のほか白色砂粒を多量に含むが、焼成は良好で堅緻である。胴下端部は熱による剥落がやや目立つ。外面は板状工具による調整痕によって全体が覆われる。内面は口縁側が板状工具による擦痕が認められるが、胴部は指頭整形痕が顕著に残る。3と4も同一個体の深鉢で、3は口縁部、4は胴部である。器壁はばば直立し、口縁部はやや強く外反する。胎土に極めて多量の植物繊維を含むほか、白色砂粒をやや多く含む。外面に貝殻条痕が施されるほか、口唇上にも貝殻が圧痕される。内面は指頭整形後板状工具による調整が行われる。

時期 出土土器は早期後葉に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(10)SX016 (第60図)

遺構 O 49-66 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径70cm、短径40cm、確認面からの深さ10cmを測る。(10)SI007 住居跡と切り合っており、土層セクションから住居跡が古く当遺構の方が新しいとみられる。主軸方位はN-25°-Wである。極めて浅いが下層に焼土を多量に含む層、上層に焼土を少量含む層が堆積していることが観察されている。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

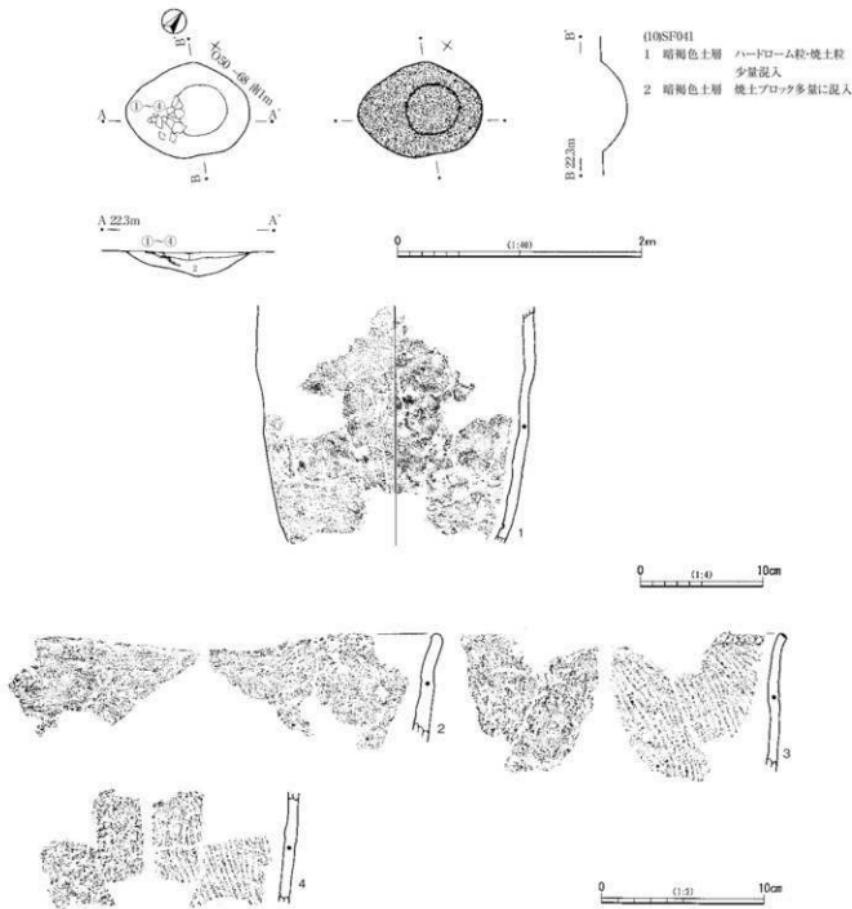
(10)SX025 (第60図)

遺構 O 49-58 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径56cm、短径44cmを測る。掘込みはほとんど認められない。正円に近い形状であるため、主軸方向は判断できなかった。炉床部と思われる熱を受けた地山が直接検出されたため、覆土は確認されなかった。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(10)SF041



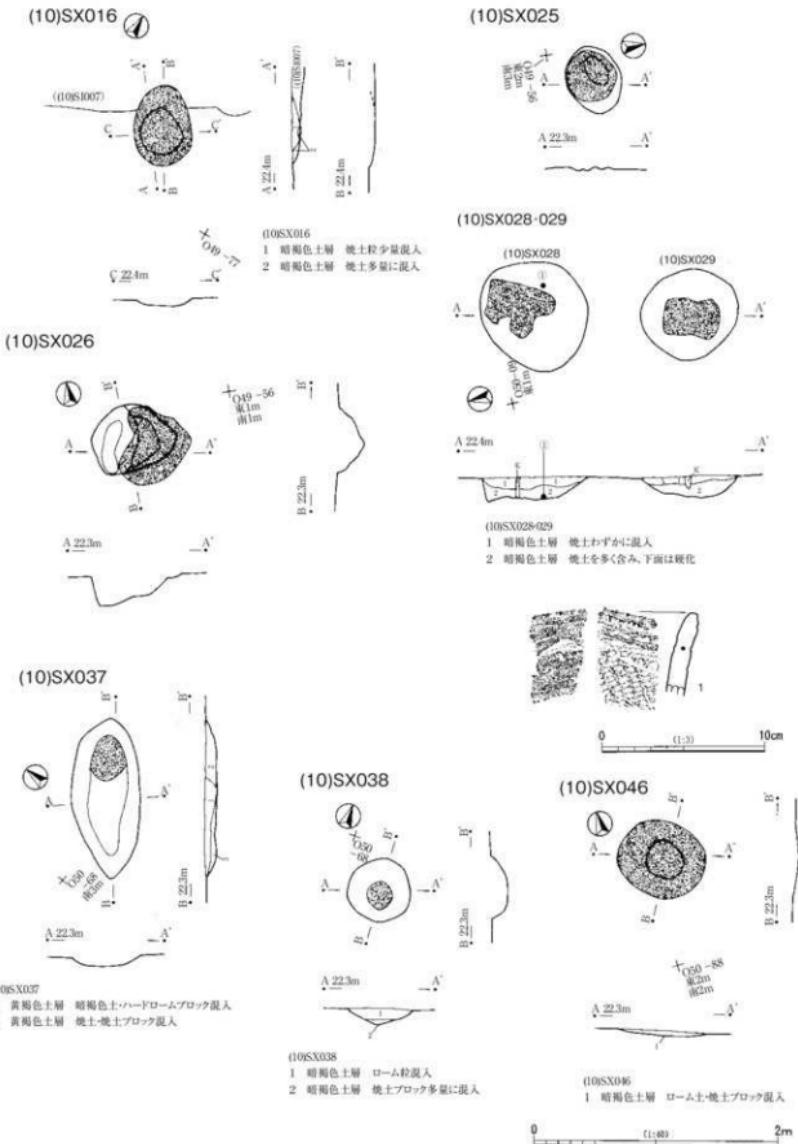
第59図 (10)SF041 炉穴、出土遺物

(10)SX026 (第60図)

遺構 O 49-56 グリッドに所在する。不整円形を呈し、南北 68cm、東西 78cm、確認面からの深さ 28cm を測る。坑底は段状を呈しており、西側が深く東側は浅い。焼土の範囲は深い部分から外れていることから、本来炉穴があった場所に後世別の土坑が掘られ、焼土が搔き出された可能性がある。主軸方向は判断できなかった。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。



第 60 図 (10)SX016・025・026・028・029・037・038・046 焼土遺構、出土遺物

(10)SX028 (第60図、図版21)

遺構 O 49-99、O 50-09 グリッドに所在する。正円に近い不整円形を呈する。径は88cm、確認面からの深さは18cmを測る。炉床部が北側に寄っており、壁の立ち上がりも直立気味であることから、主軸方向は南北になるものと判断される。主軸方位はN-45°-Eである。覆土は熱を強く受けた地山の上に、焼土ブロックを多量に含む暗褐色土が堆積する。上層側は焼土粒が少なく、自然堆積と考えられる。

出土遺物 図示できる遺物は1点のみである。1は深鉢口縁部で、胎土は植物纖維のほか、砂粒、小礫を多量に混入する。器壁は直立し口縁部がわずかに外反するほか、口唇上は平らに整形される。外面は口唇端から約1cm幅で無文帯を設け、その下にRL単節繩文を横方向に施す。無文帯は粘土を薄く貼って微妙に肥厚させており、意図的なものであろう。内面は横方向にミガキ状の調整が施され、器面はかなり整えられている。

時期 出土土器は前期初頭に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(10)SX029 (第60図)

遺構 O 50-09 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径80cm、短径74cm、確認面からの深さ16cmを測る。正円に近い形状で炉床部もほぼ中央に存在するため、主軸方向は判断できなかった。覆土は熱を強く受けた地山の上に、焼土ブロックを多量に含む暗褐色土が堆積する。上層側は焼土粒が少なく、自然堆積と考えられる。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(10)SX037 (第60図、図版5)

遺構 O 50-68 グリッドに所在する。紡錘形に近い長楕円形を呈し、長径130cm、短径56cm、確認面からの深さ29cmを測る。北東側が炉床部、南西側が足場となり、主軸方位はN-50°-Eである。覆土は炉床部側に焼土ブロックを含む土層が堆積し、足場側にはロームブロックを含む黄褐色土層が堆積する。人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(10)SX038 (第60図、図版5)

遺構 O 50-68 グリッドに所在する。ほぼ正円形を呈し、径は52cm、確認面からの深さは14cmを測る。主軸方向は判断できなかった。炉床部直上には焼土ブロックを多量に含む層が堆積するが、覆土は焼土粒が少なく自然堆積と考えられる。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(10)SX046 (第60図)

遺構 O 50-88 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径72cm、短径64cm、確認面からの深さ4cmを測る。足場がどこに存在したか不明なため主軸方向は判断できないが、楕円形のプランの長軸はN-50°-Wである。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

3 土坑・ピット

竪穴住居跡と炉穴、そして陥穴以外の遺構を土坑・ピットとして扱った。遺構番号で区分されるものは全部で42基であるが、複数基の遺構が重複しているものもあるため実数はもっと多い。集中して検出されているのは5次調査区と10次調査区である。主軸方位は遺構本来の向きが不明なため、長軸方向で計測した。表記法は竪穴住居跡に準じている。

(5)SK001 (第61図、図版5)

遺構 P 49-27 グリッドに所在する。隅丸長方形を呈し、長軸 184cm、短軸 132cm、確認面からの深さ 23 cm を測る。坑底はほぼ平坦であるが、確認面が南西から北東へかけて下るように傾斜しているため、西壁及び南壁が高く東壁及び北壁は低い。主軸方位はほぼ真北である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK002 (第61図、図版6)

遺構 P 49-08・18 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径 138cm、短径 116cm、確認面からの深さ 40 cm を測る。覆土はしまりが強く土質はソフトロームに類似する。壁は直立に近いが、坑底は平坦ではなくやや丸底である。主軸方位は N-80° -W である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK003 (第61図、図版6)

遺構 P 48 - 99 グリッドに所在する。やや不整ではあるが隅丸五角形を呈し、長軸 136cm、短軸 108cm、確認面からの深さ 34cm を測る。覆土は大きく二層に分かれ、上層は色調が暗く下層は色調が明るい。断面は逆台形を呈し、坑底はほぼ平坦である。主軸方位は N-5° -W である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK004 (第61図、図版6)

遺構 P 49-09 グリッドに所在する。不整円形を呈し、長径 110cm、短径 92cm、確認面からの深さ 50cm を測る。覆土は水平堆積で、上層は色調が暗く下層へ移るに従っては色調が明るくなる。断面は楕円形で坑底は丸底である。主軸方位は N-50° -E である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK005 (第61図、図版6)

遺構 P 49 - 09 グリッドに所在する。隅丸長方形が基本であるが、東壁はやや張り出しており五角形に近い形状を呈している。規模は南北 140cm、東西は最大 100cm、確認面からの深さは 19cm を測る。断面は逆台形を呈し、壁の立ち上がりは緩やかで坑底は平坦である。主軸方位はほぼ真北である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

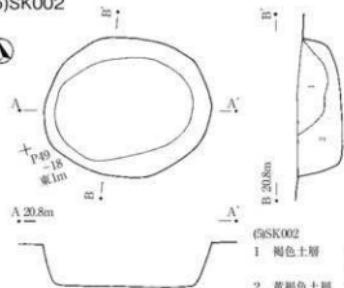
(5)SK006 (第61図、図版6)

遺構 P 48 - 79 グリッドに所在する。やや不整ではあるが楕円形を呈し、長径 192cm、短径 136cm、確

(5)SK001

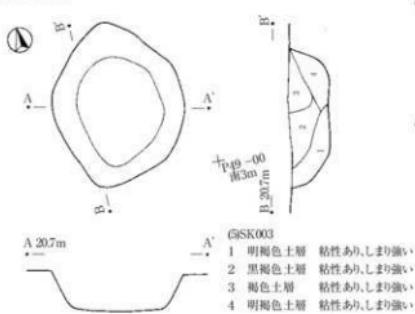


(5)SK002



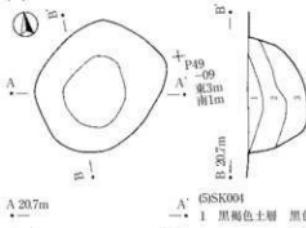
(5)SK002
1 褐色土層 ソフトローム化、
しまり強い
2 黄褐色土層 ソフトローム化、
しまり強い

(5)SK003



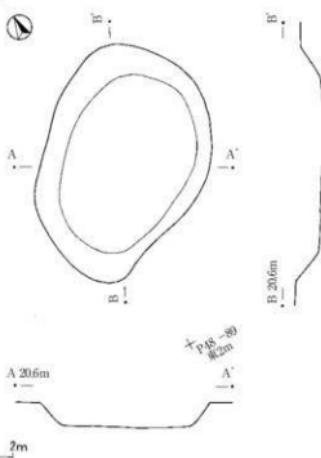
- (5)SK003
1 明褐色土層 粘性あり、しまり強い
2 黒褐色土層 粘性あり、しまり強い
3 褐色土層 粘性あり、しまり強い
4 明褐色土層 粘性あり、しまり強い

(5)SK004



- (5)SK004
1 黑褐色土層 黒色土粒を含む、粘性あり、
しまり強い
2 褐色土層 黒色土粒を含む、粘性あり、
しまり強い
3 灰褐色土層 暗褐色土粒を少量含む、粘
性あり、しまり強い

(5)SK006



(5)SK005



第 61 図 (5)SK001 ~ 006 土坑

認面からの深さ 20cm を測る。断面は逆台形を呈し、壁の立ち上がりは緩やかで坑底は平坦である。主軸方位は N-50° -E である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK007 (第 62 図、図版 6)

遺構 P 48-99 グリッドに所在する。長楕円形を呈し、長径 236cm、短径 120cm、確認面からの深さ 26cm を測る。縱断面は逆台形、横断面は浅い皿形を呈し、壁の立ち上がりは緩やかで坑底は西から東に向かって下り傾斜している。主軸方位は N-80° -E である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK008 (第 62 図、図版 6)

遺構 P 48-99 グリッドに所在する。短辺が弧状の長方形を呈し、長軸 308cm、短軸 122cm、確認面からの深さ 65cm を測る。断面は逆台形を呈するが、壁の立上がりはかなり緩やかで開口部に比べ坑底は狭い。坑底は東から西に向かって下り傾斜している。主軸方位は N-60° -E である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK009 (第 62 図、図版 6)

遺構 Q 49-12 グリッドに所在する。北側が搅乱のため全容はうかがえないが、形状は楕円形と推測される。残存部の長軸は 96cm、短軸は 74cm である。確認面からの深さは 25cm を測る。主軸方位はほぼ真北である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK010 (第 62 図、図版 6・23)

遺構 Q 49-13 グリッドに所在する。2 基の土坑が結合した状況で検出されている。東側の大きい方を A、西側の小さい方を B とすると、A は不整円形を呈し、規模は長軸（エレベーション AA' 方向）で 108cm、短軸（同じく BB' 方向）で 136cm を測る。B は楕円形を呈し、規模は長軸（AA' 方向）で 54cm、短軸（AA' と直交する方向）で 44cm を測る。確認面からの深さは A が 48cm、B が 13cm を測る。断面形状は A が逆台形を呈するものの北西側が柱穴状にやや深く掘り込まれている。B は浅い皿状で坑底は平坦である。覆土が記録されていないため、両者が同一遺構か別遺構かは不明である。主軸方位は A が N-30° -W、B が N-60° -E である。

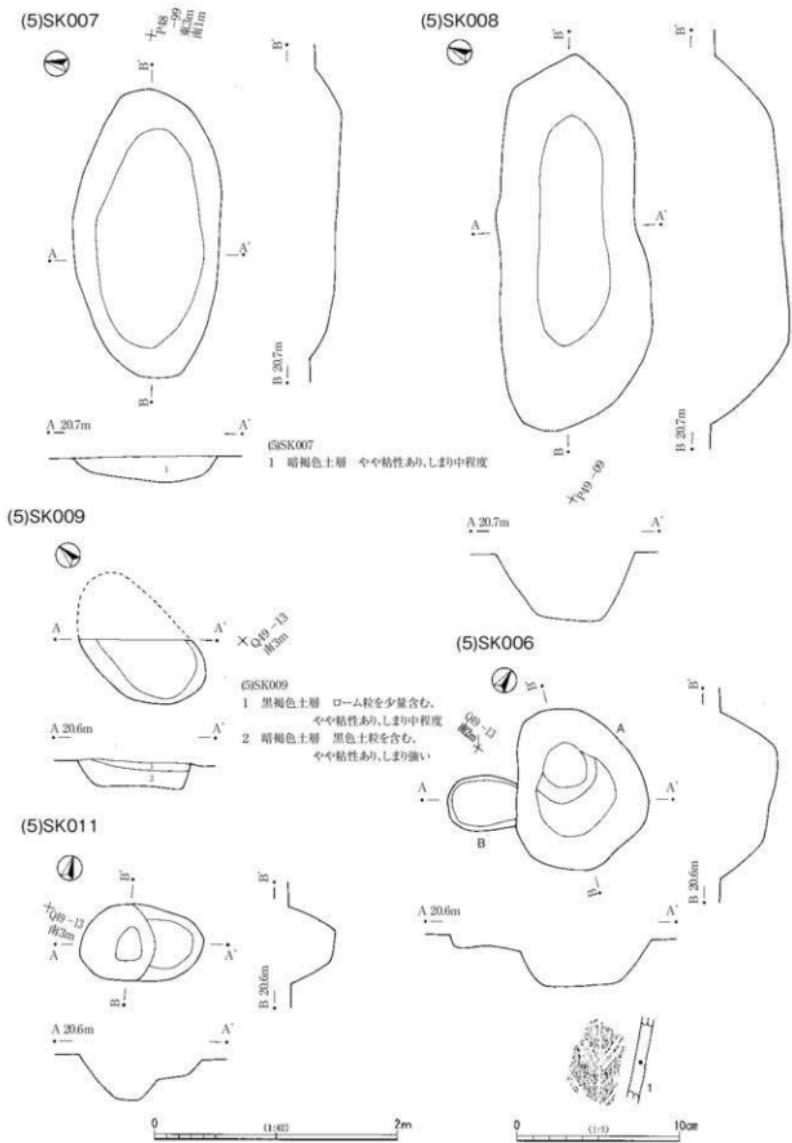
出土遺物 図示できたのは 1 点のみである。1 は深鉢胴部で、胎土に植物繊維を含むがあまり多くなく、焼成も良好で堅緻である。半截竹管で葉脈状のモチーフを描出する。

時期 出土土器は黒浜式に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(5)SK011 (第 62 図、図版 6)

遺構 Q 49-13 グリッドに所在する。断面楕円形の円形土坑と断面皿状の楕円形土坑が結合したような状況を呈する。全体で長軸 102cm、短軸 64cm、確認面からの深さ 37cm を測る。覆土が記録されていないため、同一遺構か別遺構かは不明である。主軸方位は N-75° -E である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。



第62図 (5)SK007～011 土坑、出土遺物

時期 不明である。

(5)SK012 (第 63 図、図版 6)

遺構 Q 49-13・14 グリッドに所在する。短辺が弧状の長方形を呈し、長軸 350cm、短軸 120cm を測る。断面形状は長軸が皿形、短軸は楕形を呈し、開口部に比べ坑底はかなり狭く西端部にはピット状の掘込みが存在する。確認面からの深さは坑底で 59cm、ピット状の掘込みで 67cm を測る。主軸方向はほぼ東西である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK013 (第 63 図、図版 6)

遺構 P 49-09、Q 49-00 グリッドに所在する。長梢円形を呈するが、東壁がやや張り出している。長径 182cm、短径 82cm、確認面からの深さ 23cm を測る。断面は逆台形を呈し、坑底は平坦である。主軸方位は N-40° -W である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK014 (第 63 図、図版 7)

遺構 Q 49-02・12 グリッドに所在する。隅丸長方形を呈し、長軸 108cm、短軸 92cm、確認面からの深さ 18cm を測る。断面は逆台形を呈し、坑底は平坦であるが東側が高く西側が低い。主軸方位は N-50° -W である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK015 (第 63 図、図版 7・25)

遺構 Q 49-11 グリッドに所在する。ほぼ正円形を呈し、径は 62cm、確認面からの深さは 22cm を測る。断面は楕形を呈し、坑底は丸底である。

出土遺物 図示できる土器は出土せず、石器が 1 点出土した。1 は砂岩の敲石である。正面の右側上部に敲打痕がみられる。両面は磨耗面として図示したが、右側面の自然面と特に差はないことから全体が自然面の可能性がある。

時期 石器のみのため判断できない。

(5)SK016 (第 63 図、図版 7)

遺構 Q 49-01・11 グリッドに所在する。短辺が弧状の長方形を呈し、長軸 209cm、短軸 88cm、確認面からの深さ 29cm を測る。縦断面は皿形、横断面は逆台形を呈し、坑底は北東側が高く南西側が低い。主軸方位は N-40° -E である。

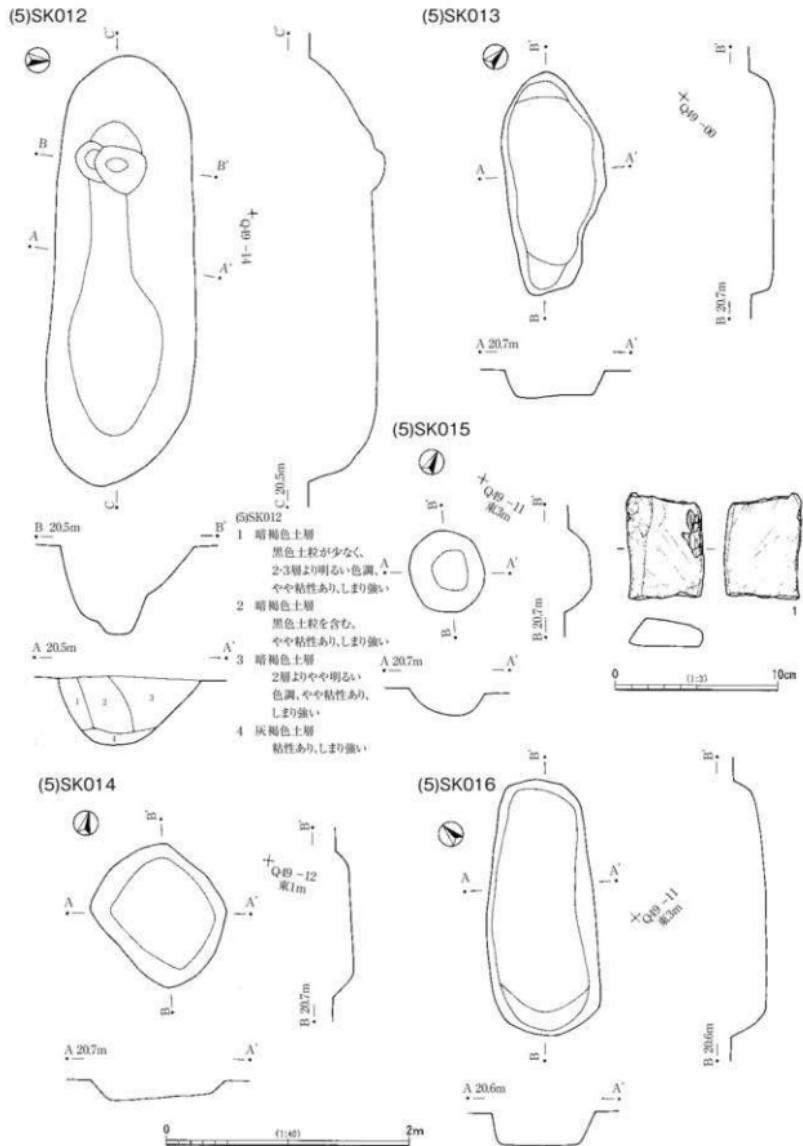
出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK017 (第 64 図、図版 7)

遺構 P 48-88 グリッドに所在する。不整円形を呈し、長軸 76cm、短軸 64cm、確認面からの深さ 31cm を測る。縦断面は逆台形であるが横断面は楕形であり、坑底は狭い。主軸方位は N-70° -W である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。



第63図 (5)SK012～016 土坑、出土遺物

時期 不明である。

(5)SK018 (第 64 図、図版 7)

遺構 P 48-88・89 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長軸 72cm、短軸 60cm、確認面からの深さ 46cm を測る。断面は椀形を呈し、坑底は丸底である。主軸方向はほぼ東西である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK019 (第 64 図、図版 7)

遺構 P 48-98 グリッドに所在する。開口部は不整円形、坑底は隅丸方形を呈し、長軸 76cm、短軸 60cm、確認面からの深さ 18cm を測る。断面は逆台形を呈し、壁の立ち上がりは極めて緩やかである。主軸方位は N-25° -E である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK020 (第 64 図、図版 7)

遺構 P 48-98 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径 84cm、短径 64cm、確認面からの深さ 33cm を測る。断面は椀形を呈し、坑底は狭い。主軸方向は N-55° -E である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK021 (第 64 図、図版 7)

遺構 P 48-87 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径 96cm、短径 84cm、確認面からの深さ 42cm を測る。断面は椀形を呈し、坑底は丸底である。主軸方位は N-25° -W である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK022 (第 64 図、図版 7)

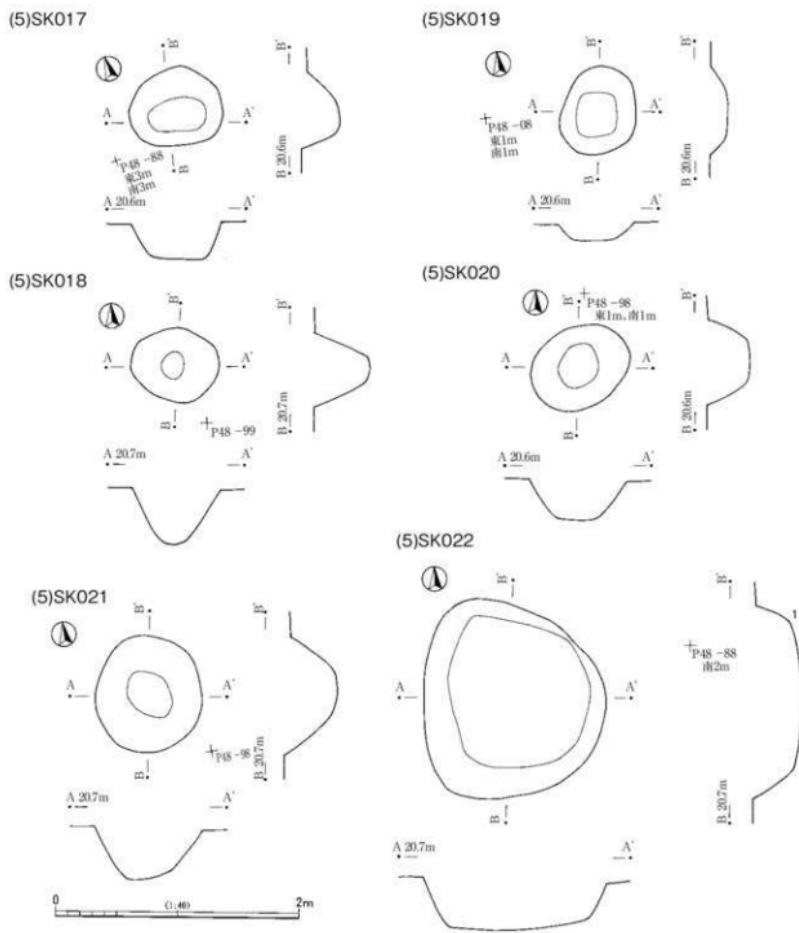
遺構 P 48 - 87 グリッドに所在する。東側が円形、西側が隅丸方形を呈しており、見方によっては隅丸五角形とも捉えられる。長軸は 164cm、短軸は 148cm、確認面からの深さは 42cm を測る。坑底も開口部と同様の形状であるが、中心部がやや低く緩やかな丸底である。長軸はほぼ南北方向であるが、形状からみて東西が主軸方向である可能性もある。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(5)SK026A・B (第 65 図、図版 7・23)

遺構 Q 49-13・14・23・24 グリッドに所在する。大きい長楕円形のプランを A、内部北西側の土坑状の掘込みを B とすると、A は一応長楕円形を呈するが形状は整っていない。長軸は 424cm、短軸は 252cm、確認面からの深さは 69cm を測る。南東端部にピット状の掘り込みが 1 基存在するが、深さは坑底とはほぼ同一である。壁は椀状に立ち上がり、坑底は平坦である。主軸方位は N-70° -W である。B は大小 2 基の楕円形土坑が結合した状況を呈している。長軸は大が 100cm、小が 68cm、短軸は大が 84cm、小が 46cm、確認面からの深さは大が 96cm、小が 64cm を測る。断面は椀形を呈し、坑底は丸底である。主軸方位は大が N-80° -W、小が N-55° -E である。A、B 両者が同一の遺構か別遺構かは不明である。

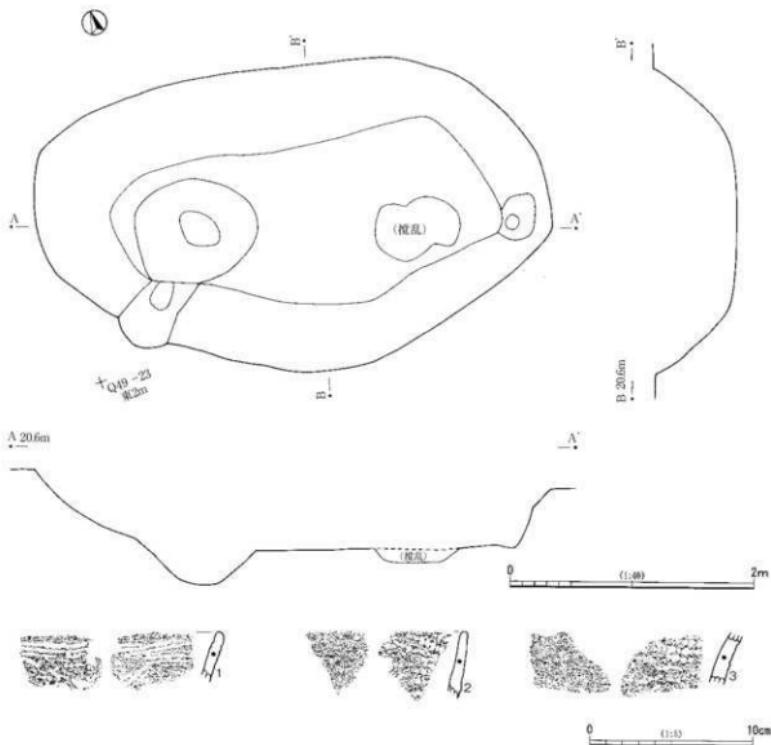


第64図 (5)SK017～022 土坑

出土遺物 図示できる遺物は3点あるが、出土位置は不明である。1は深鉢口縁部で、胎土に植物繊維を極めて多量に含むほか、砂粒、小礫をやや多く含む。器面は劣化しており特に口唇上は剥落が顕著である。内・外面とも貝殻条痕が施される。2は深鉢口縁部で、胎土に植物繊維を多量に含むほか、白色砂粒をやや多く含むが、全体に緻密であり焼成は良好である。外面にRL単節縄文が施される。3は深鉢胴部で、胎土に植物繊維のほか、白色砂粒を多量に含む。外面にLR単節縄文が施される。

時期 出土土器のうち1は早期後葉、2・3は前期黒浜式に位置づけられる。いずれも小破片で出土状況も不明であり、遺構の時期を決定する決め手に欠ける。

(5)SK026



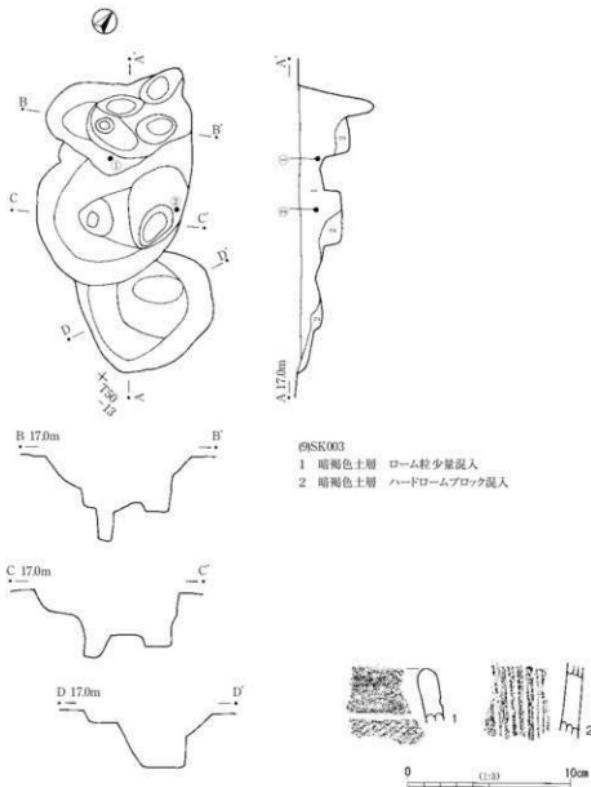
第65図 (5)SK026 土坑、出土遺物

(9)SK003 (第66図、図版7・23)

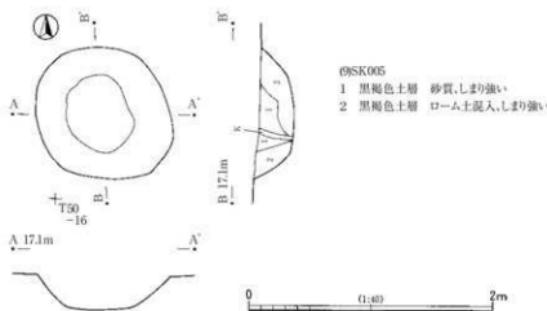
遺構 T 50-02・03 グリッドに所在する。3基の不整円形の土坑が重なり合っており、南北 225cm、東西 215cm の範囲に広がる。北西側のものを A、中間のものを B、南東側のものを C とすると、A は長軸 121cm、短軸 76cm、B は長軸 140cm、短軸 110cm、C は長軸 106cm、短軸 90cm を測る。A と B は内部に柱穴状の掘込みが存在し坑底は安定しない。確認面からの深さは A が 69cm、B が 55cm、C が 47cm を測る。主軸方位は A が N-55°-E、B が N-35°-E、C が N-25°-E である。覆土の観察からは3基に時期差は認められず、少なくとも埋まつたのは同時であると考えられる。

出土遺物 図示できる土器は2点である。1は深鉢口縁部で、胎土は粗く砂粒を極めて多量に含む。器面は劣化が顕著であるが、熱によるものかどうかは不明である。外面は口唇下約1.5cmの位置に口唇と平行に沈線を横走させ、その下側にLR単節繩文を施す。2は深鉢胴部で、胎土は密でスコリア粒を含む。器

(9)SK003



(9)SK005



第66図 (9)SK003・005土坑、出土遺物

面は外面側がやや劣化しているものの、内面側は良好である。外面に櫛羽状条線を継続的に施す。

時期 出土土器はいずれも中期加曾利E式に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(9)SK005 (第 66 図、図版 7)

遺構 S 50-05・06 グリッドに所在する。正円形に近い楕円形を呈し、長軸 118cm、短軸 110cm、確認面からの深さ 34cm を測る。主軸方位は N-55°-W である。断面は皿形を呈し、坑底は丸底である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(10)SK010 (第 67 図、図版 7・23・25)

遺構 O 49-87・88・97・98 グリッドに所在する。2 基の土坑が切り合っている。北西側の土坑を A、南東側を B とすると、A は不整円形を呈するものと思われ、径は 140cm 程度を測ると考えられる。B は隅丸方形を呈するものと思われ、長軸 320cm、短軸 180cm 程度を測ると考えられる。確認面からの深さは A が 29cm、B が 48cm を測る。主軸方位は A は判断できなかったが、B は N-40°-E である。土層観察から、A が古く B が新しいことが確認されている。

出土遺物 図示できる遺物は 3 点あるが、出土位置は不明である。1 は深鉢胴部で、胎土に植物繊維を含むが全体に密で、焼成も良好である。外面に LR 単節縄文を施す。2 は深鉢胴部で、胎土はやや粗く植物繊維を多量に含む。外面に貝殻条痕が施される。3 は抉りが極めて浅いほぼ平基の石錐で、二等辺三角形を呈しており完形品である。石材はチャートである。

時期 土器のうち 1 は前期黒浜式、2 は早期後葉に位置づけられる。古い A が早期、新しい B が前期である可能性が指摘できよう。

(10)SK015 (第 67 図、図版 8・23)

遺構 O 49-95・96 グリッドに所在する。隅丸方形に近い不整円形を呈する。長軸 144cm、短軸 128cm、確認面からの深さ 35cm を測る。主軸方位は N-20°-E である。覆土はローム土が混入する黒褐色土が堆積するが、坑底に近い部分ほどロームブロックの割合が増える。

出土遺物 図示できる遺物は 1 点である。1 は深鉢胴部で、胎土に植物繊維と白色砂粒を含むが全体に密で、焼成も良好である。外面に RL 単節縄文を施す。

時期 出土土器は前期黒浜式に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

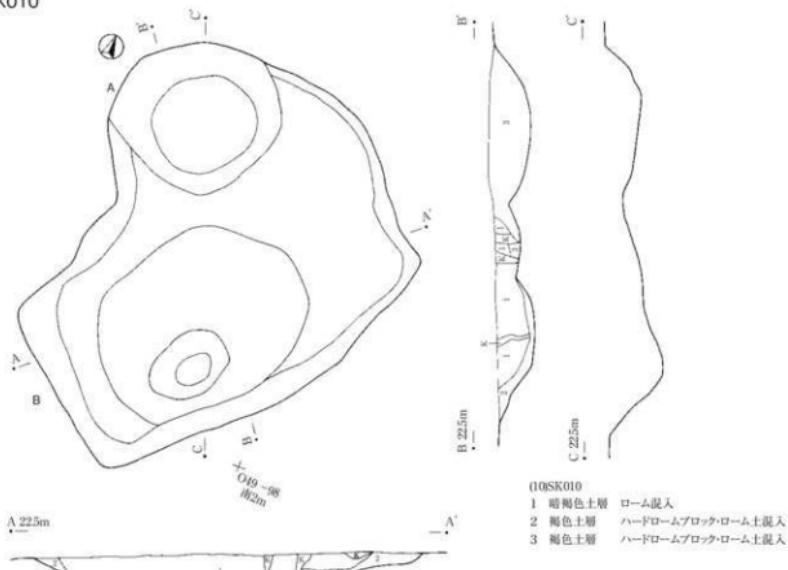
(10)SK014 (第 68 図、図版 8・23)

遺構 O 50-86・96 グリッドに所在する。2 基の土坑からなり、北西側の土坑を A、南東側を B とすると、A は正円に近い楕円形を呈し、長径 60cm、短径 52cm、確認面からの深さ 17cm を測る。B は正円に近い楕円形を呈し、長径 124cm、短径 108cm、確認面からの深さ 45cm を測る。主軸方位は A がほぼ東西、B は N-65°-E である。

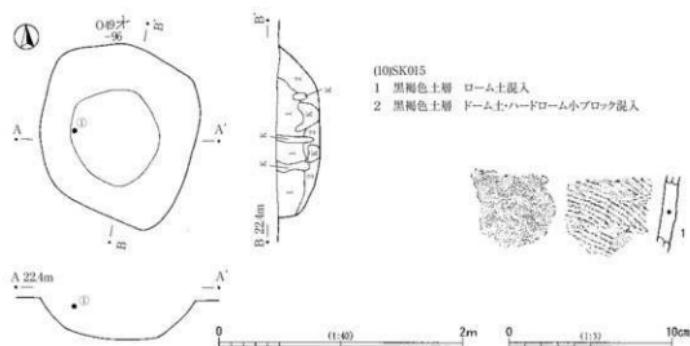
出土遺物 図化できたのは 3 点で、1 は B から、2・3 は A から出土している。1 は深鉢口縁部で、胎土に植物繊維のほか白色砂粒を多量に含む。口唇形状は丸いが指頭押圧により部分的に窪みがある。外面に貝殻条痕が施される。2 は深鉢口縁部で、胎土に植物繊維を多量に含み、ややもろい。口唇上は平らに整形される。外面に RL 単節縄文が施される。3 は深鉢胴部で、胎土に植物繊維のほか石英・長石粒を多量に含む。焼成は良好で堅緻である。外面に R 摺糸文を横方向に施す。

時期 出土土器のうち 1 は早期後葉、2・3 は前期黒浜式に位置づけられる。したがって A は前期黒浜式、

(10)SK010



(10)SK015



第67図 (10)SK010・015 土坑、出土遺物

Bは早期後葉と判断される。

(10)SK018 (第68図、図版8・23)

遺構 O 49-98、O 50-08 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径200cm、短径150cm、確認面からの深さ34cmを測る。主軸方位はN-65°-Eである。覆土は壁側にローム土が混入する暗褐色土が堆積し、中央部に縄文土器を含む暗褐色土がレンズ状に堆積する。

出土遺物 器形復元可能な土器が出土している。1は深鉢胴部で、最大径23.4cm、残存高18.5cmを測る。胎土に植物纖維を多量に含み、やや剥落が目立つものの、焼成は良好で堅緻である。外面はLR単節縄文が施され、部分的に板状工具によるナデが認められる（拓影図では貝殻条痕に見えるがそうではない）。調整を意図したものかどうかは不明である。内面は指頭整形後板状工具によって調整される。

時期 出土土器は前期黒浜式に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(10)SK020 (第69・70図、図版8・23・25)

遺構 P 50-01・10・11 グリッドに所在する。基本的に長楕円形というべき形状であるが、壁には凹凸があり整っているとはいえない。長軸378cm、短軸200cmを測る。主軸方位はN-45°-Eである。南東側に(10)SK022が存在するが、遺構検出時には当遺構の覆土がかぶっているのが確認されており、当遺構の方が新しいと判断される。(10)SK022のプラン上の破線は、確認面上での当遺構の輪郭である。北西側には(10)SI019が存在するが、検出状況や覆土からは新旧関係を把握することはできなかった。坑底は平坦であるが中央部に隅丸方形の土坑状の掘込みがあり、その底部にさらにピット状の掘込みがある。これらの掘込みは直立しておらず、北西方向に開口するように斜めに掘られている。確認面からの深さは、坑底まで50cm、土坑状の掘込みの底まで70cm、ピット状の掘込みの底まで80cmを測る。北東端部にピットが2基存在する。覆土はローム土を含む暗黄褐色土が広く全体を覆っており、人為堆積の可能性が強い。

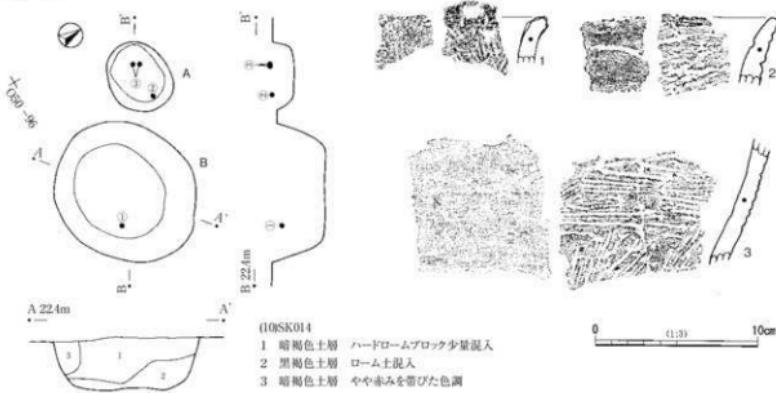
出土遺物 第70図1～5が(10)SK020から出土したものであるが、いずれも確認面に近いレベルである。1は深鉢口縁部で、胎土中の植物纖維は含有量が比較的少ない。焼成は良好で堅緻である。文様はなく内・外面とも擦痕が認められるのみである。2は深鉢口縁部で、胎土に白色砂粒を多量に含む。焼成は良好である。外面に縄文、内面に貝殻条痕文と思われる文様が認められるが、残存範囲が狭く詳細は不明である。3は深鉢胴部で、胎土中の植物纖維は含有量が比較的少ない。外面上部に半截竹管による横走沈線が配され、下側にL無節縄文が施される。4は深鉢胴部で、胎土は粗く砂粒を多量に含む。焼成は良好で堅緻である。外面は原体の異なるRLとLRの単節縄文を段状に交互に配し、羽状縄文を構成する。内面は全面ナデ調整で、植物纖維の剥落が目立つものの状況は良好である。5は抉りが極めて浅いほぼ平基の石礫で、二等辺三角形を呈し先端部が欠損している。石材はチャートである。両面に最終的な仕上げ痕が集中している。

時期 出土土器は1が時期不明で2が早期後葉と考えられるが、3・4は前期黒浜式に位置づけられるものであり、当遺構も該期である可能性が強い。

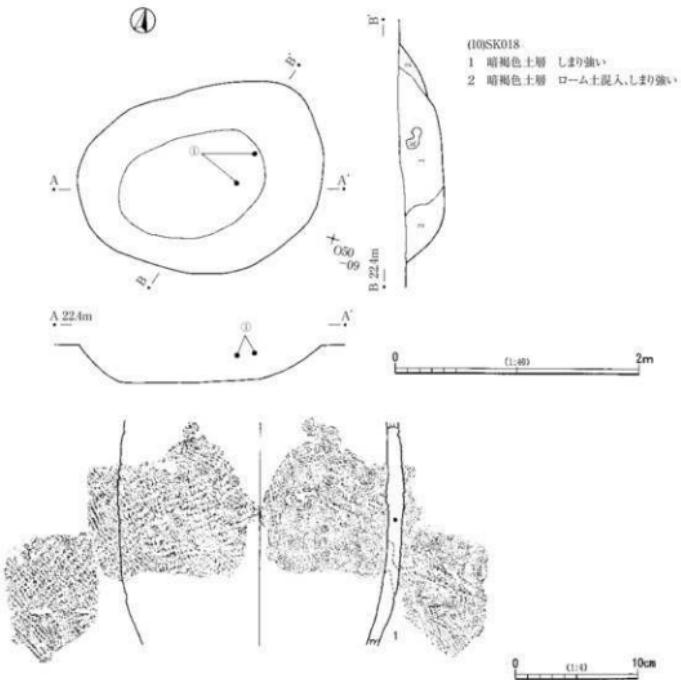
(10)SK022 (第69・70図、図版8・23・25)

遺構 P 50-10・11 グリッドに所在する。基本的に隅丸方形というべき形状であるが、壁には凹凸があり整っているとはいえない。北東側の壁が張り出しており崩落である可能性があるが、その部分を含めて長軸482cm、短軸276cmを測る。主軸方位はN-55°-Eである。北西側には(10)SK020が存在し、当遺構を切っている。南東側には中近世の(10)SD013溝状遺構が存在し、こちらも当遺構を切っている。坑底はほぼ

(10)SK014

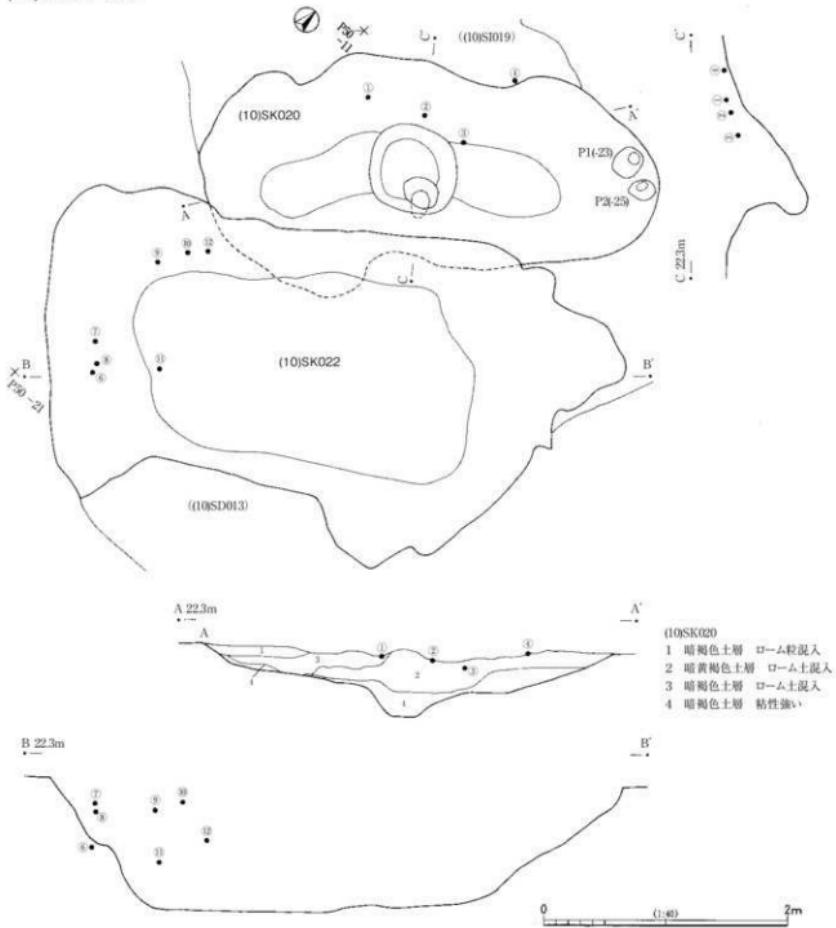


(10)SK018



第 68 図 (10)SK014・018 土坑、出土遺物

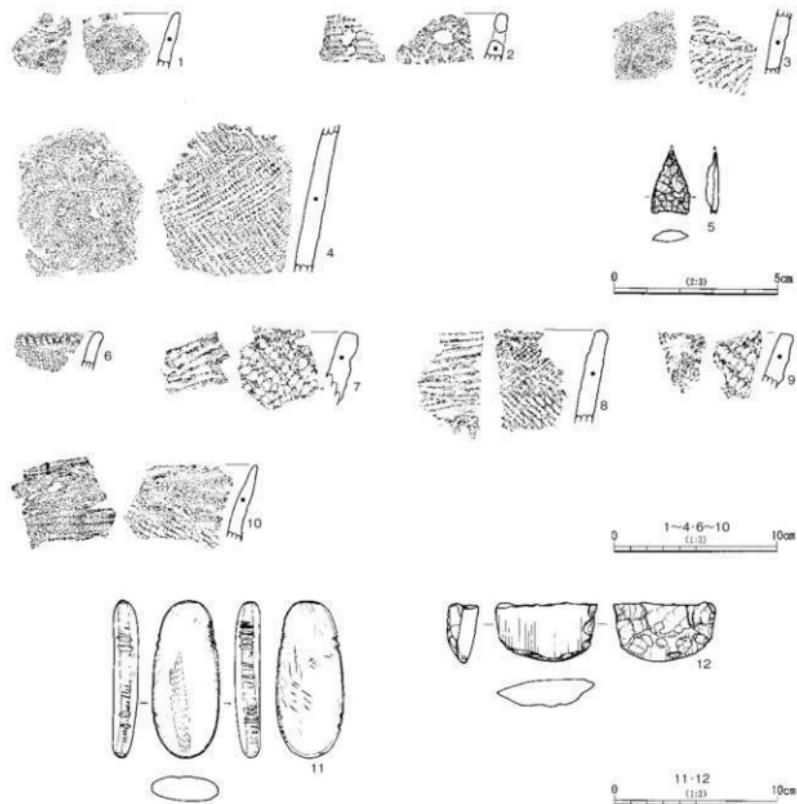
(10)SK020-022



第 69 図 (10)SK020・022 土坑

平坦で、確認面からの深さは 113cm を測る。覆土は実測されていないが、ハードロームブロックを含む暗褐色土層が堆積し、しまりが強いとする調査時の所見がある。

出土遺物 第 70 図 6～12 が (10)SK022 から出土したものである。南東側から集中的に出土している。6 は深鉢口縁部で、胎土に植物纖維を含まず砂粒をやや多く含む。口縁部を外側に肥厚させ、その下側に横方向のナデを入れ、最後に縦位の R 搾糸文を施す。夏島式に位置づけられるものであろう。7・8 は深鉢口縁部で、いずれも外面に縄文、内面に条痕が施されるものである。7 は胎土に赤色スコリアを含み、全体にもろい。口唇上は平らに整形される。外面には RL 単節縄文が施されるが、原体はかなり太い。内



第70図 (10)SK020・022 土坑出土遺物

面は貝殻ではなく板あるいは繩文原体そのものを摺った可能性がある。8は胎土に砂粒を多く含み、全体にもろい。外面は原体の異なるLRとRLの単節繩文を段状に配し羽状繩文を構成するが、それぞれの原体の太さはかなり異なっている。内面は貝殻条痕が施される。9は深鉢口縁部で、胎土は粗く全体にもろい。外面は7に匹敵するような太い原体によるRL単節繩文が施される。内面は剥落が顕著で詳細は不明である。10は深鉢口縁部で、白色砂粒を多量に含むが焼成は良好で堅緻である。口縁部は細く絞られ口唇上には平らに整形される。外面にはRL単節繩文が施され、内面はミガキ状の調整が施される。11は緑色岩の「その他の石器」である。扁平で中型の楕円形の周縁に細かい擦痕及び深い刻みが数条まとまってみられる。器種は不明で、垂飾品の可能性もある。12は極めて細粒の凝灰岩の（局部）磨製石斧である。正面は研磨面として図示したが、他の研磨面とは光沢などの差があり、自然面の可能性がある。先端の狭い範囲が良く研磨されている。また、裏面は両側縁からの調整痕を残し、正面に比べると広い範囲で刃部が研磨さ

れている。刃部のみの遺存である。

時期 出土土器には撲糸文土器や黒浜式があるが、主体となるのは早期末に位置付けられるものである。当遺構も概期と考えられる。

(10)SK021 (第 71 図、図版 8・23)

位置 O 50-28 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径 170cm、短径 136cm、確認面からの深さ 46cm を測る。主軸方位は N-85°-E である。断面は浅い皿形を呈し、坑底は丸い。

出土遺物 土器は点上げしていないが、覆土の中部から上部で出土した。1 は深鉢胴部で、胎土に植物纖維を多量に含み器面の剥落が目立つが、焼成は良好で堅緻である。外面は多段の結節が施されるが、剥落がやや顯著で不鮮明である。

時期 出土土器は前期黒浜式に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(10)SK023 (第 71 図、図版 8・23)

遺構 O 50-39・49 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径 114cm、短径 96cm を測る。主軸方位は N-80°-E である。坑底は東端部が柱穴状に深く掘り込まれており、西側へ向かって段状に浅くなっている。確認面からの深さは最も深い東端で 56cm、中央部で 32cm、西端で 19cm を測る。覆土は全体にハードロームブロックが多量に混入しており、人為的に埋め戻された可能性が強い。

出土遺物 図示できる遺物は 1 点である。1 は深鉢胴部で、胎土に白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で堅緻である。外面に貝殻条痕が施されるが、内面は剥落しており詳細不明である。

時期 出土土器は早期後葉に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(10)SK024 (第 71 図、図版 8・23)

遺構 O 50-59、P 50-50 グリッドに所在する。楕円形を呈し、長径 218cm、短径 166cm を測る。主軸方位は N-75°-E である。断面は播鉢状あるいは漏斗状を呈しており、確認面からの深さは 89cm を測る。

出土遺物 図示できる遺物は 2 点である。1 は深鉢口縁部で、胎土はやや粗く砂粒を多量に含む。口唇端は尖頭状である。外面に貝殻腹縫が斜め方向に 2 か所押圧されるが、小破片のためどのような文様になるかは不明である。2 は深鉢胴部で、植物纖維を多量に含むが胎土は緻密で焼成も良好である。外面は無文で指頭押圧と思われる窪みが横位に配されるのみである。内面は剥落しており詳細は不明である。

時期 出土土器は前期黒浜式に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(10)SK027 (第 72 図)

遺構 O 49-86・87 グリッドに所在する。不整円形を呈し、長軸 134cm、短軸 100cm、確認面からの深さ 30cm を測る。主軸方位は N-15°-E である。断面は皿形を呈し、坑底は丸底である。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

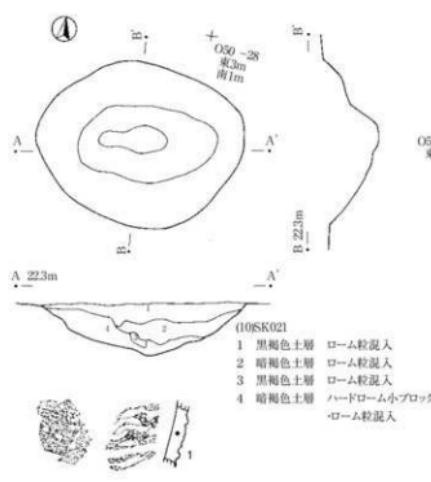
時期 不明である。

(10)SK033 (第 72 図、図版 23)

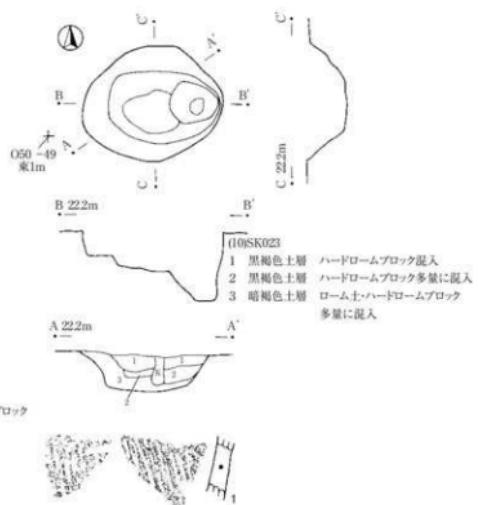
遺構 O 50-57 グリッドに所在する。ほぼ正円形を呈し、径は 92cm、確認面からの深さ 39cm を測る。主軸方位は不明である。断面は円筒形を呈しているが、坑底は西側が高く東側が低い。覆土は全体にローム土、ロームブロックが混入する暗褐色土で、含有量の違いから色調に差が出ている。

出土遺物 図示できる遺物は 2 点である。1 は深鉢胴部で、胎土に植物纖維、白色砂粒とも多量に含む。外面には原体の異なる LR と RL の単節縄文を縦位で区分するよう施し、羽状縄文を構成する。2 は深鉢

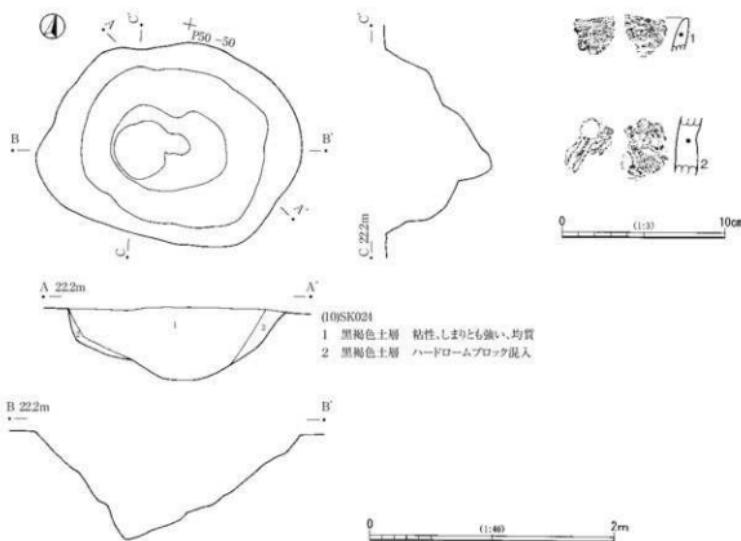
(10)SK021



(10)SK023



(10)SK024



第 71 図 (10)SK021・023・024 土坑、出土遺物

底部で、推定底径 6.0cm、残存高 1.7cm を測る。胎土に白色砂粒を多量に含む。外面には縄文が施されていると思われるが、残存範囲が狭く詳細は不明である。

時期 出土土器は前期黒浜式に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

(10)SK043 (第 72 図、図版 8)

遺構 O 50-56-66 グリッドに所在する。ほぼ正円形を呈し、径は 80cm を測る。断面は円筒形を呈しており、坑底は平坦である。確認面からの深さは 47cm を測る。覆土は最上層を除けばハードロームブロックが多量に混入しており、人為的に埋め戻された可能性が強い。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(10)SK045 (第 72 図、図版 9)

遺構 O 50-75 グリッドに所在する。全体としては不整形であるが、南端はほぼ正円形を呈し一段深く掘り込まれており、正円形の土坑と不整形の土坑が接した状況である可能性が強い。長軸 280cm、短軸 108cm を測り、正円形部分は径 80cm を測る。主軸方位は N-20° -W であるが、これは北側の不整形部分の長軸方位である。坑底は、南端の円形部分は平坦であり、北端の不整形部分は丸底となっている。両者をつなぐ中央部は北側に向かって下っている。確認面からの深さは南端で 41cm、北端で 30cm、中央で 17cm を測る。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(10)SK047 (第 72 図、図版 9)

遺構 O 50-65-75 グリッドに所在する。ほぼ正円形を呈し、径は 84cm を測る。断面は円筒形を呈しており、坑底は平坦である。確認面からの深さは 52cm を測る。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(10)SH013 (第 73 図)

遺構 O 50-55・65 グリッドに所在する。調査時は P-13 という遺構番号を与えられていたが、掘立柱建物などの一部となるものではなく単独の遺構であるため、SH の記号を付すこととした（以下 014・016・017 も同様）。SK の記号を付した他の土坑などと規模や特徴が大きく異なることを意味するものではない。当遺構は楕円形を呈し、長径 116cm、短径 76cm を測る。断面は楕状を呈し、坑底は丸底である。確認面からの深さは 28cm を測る。主軸方位は N-10° -W である。覆土はハードロームブロックが多量に混入しており、人為的に埋め戻された可能性が強い。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

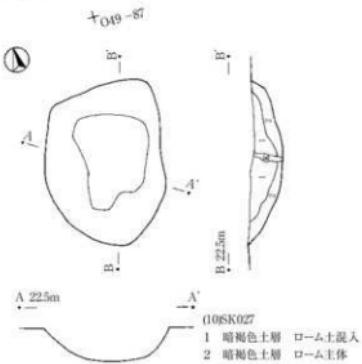
時期 不明である。

(10)SH014 (第 73 図、図版 9)

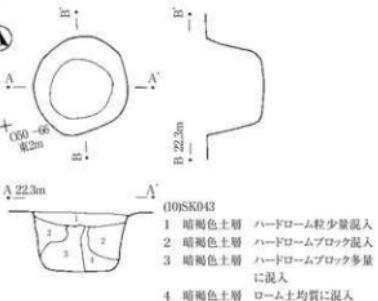
遺構 O 50-94-95 グリッドに所在する。不整円形を呈し、長軸 72cm、短軸 60cm を測る。断面は擂鉢状で、坑底は丸底である。確認面からの深さは 29cm を測る。主軸方向は N-85° -E である。覆土はハードロームブロックが多量に混入しており、人為的に埋め戻された可能性が強い。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

(10)SK027



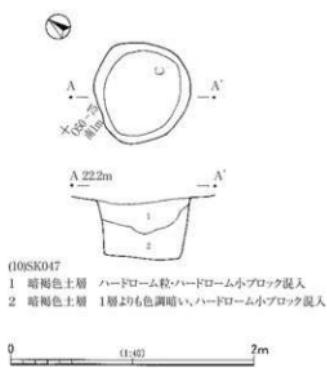
(10)SK043



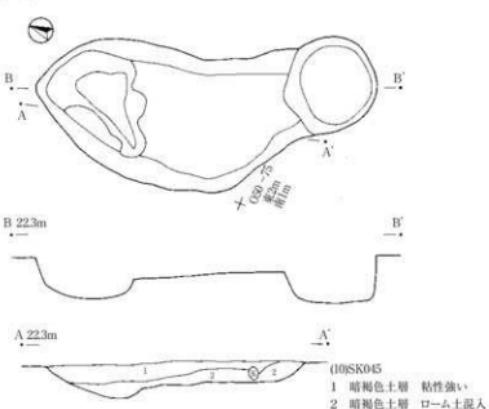
(10)SK033



(10)SK047



(10)SK045



第72図 (10)SK027・033・043・045・047 土坑

時期 不明である。

(10)SH016 (第73図、図版9)

遺構 O 50-57 グリッドに所在する。ほぼ正円形を呈し、径は84cmを測る。断面は円筒形であるが坑底はやや丸みを帯びる。確認面からの深さ47cmを測る。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(10)SH017 (第73図、図版9)

遺構 O 50-56 グリッドに所在する。不整円形を呈し、長軸84cm、短軸72cmを測る。断面は播鉢状で、坑底はV字状である。確認面からの深さは28cmを測る。主軸方向はN-15°-Wである。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

4 陥穴

(6)SK001 (第74図、図版9)

遺構 O 49-31 グリッドに所在する。開口部は不整円形を呈するものの、断面形状を観察すると確認面から深さ約60cm～80cmの部分から上側で壁が大きく広がっており、崩落したためと考えられる。本来の形状は楕円形の坑底の形状と相似していたと推測される。現況で開口部の主軸は176cm、横軸は182cm、坑底は主軸95cm、横軸80cmを測る。確認面からの深さは184cmである。主軸方位はN-60°-Eである。

出土遺物 図示できるものは出土しなかった。

時期 不明である。

(9)SK002 (第75図、図版9・23)

遺構 S 49-87 グリッドに所在する。長楕円形を呈し、主軸132cm、横軸78cm、確認面からの深さ154cmを測る。断面は長軸方向、短軸方向とも逆台形で壁はほぼ直立する。坑底は段状となっているものの高低差は少ない。覆土は記録されていないが、暗褐色土でしまりは良好であったとの調査所見がある。主軸方位はN-60°-Eである。

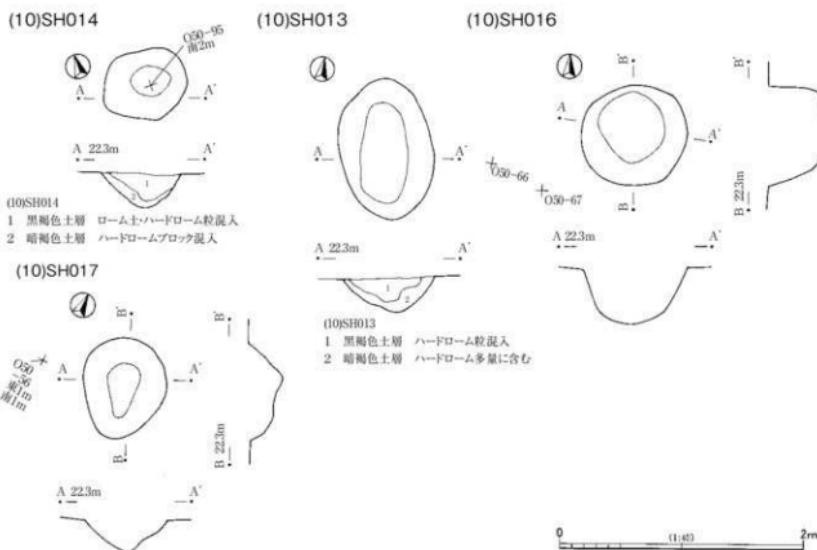
出土遺物 図示できた遺物は3点で、覆土の中下部にかけて出土している。1は深鉢口縁部で、胎土は粗く砂粒を極めて多量に含む。器面の剥落がやや目立つ。内・外とも板状の工具による横方向の擦痕が認められる。2は深鉢胴部で、植物繊維の含有量は比較的少なく焼成も良好で堅緻である。内・外とも貝殻条痕が施されるほか、外面にはわずかであるが半截竹管の刺突が施される。茅山下層式に属すると思われる。3は深鉢胴部で、胎土は粗く砂粒を多量に含みややもろい。内・外とも板状工具による擦痕が認められる。

時期 出土土器は早期後葉に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

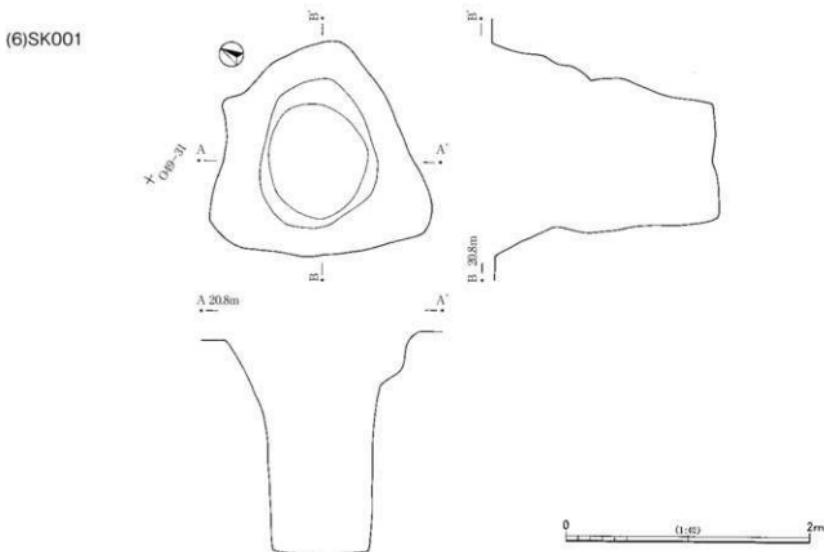
(10)SK048 (第75図、図版9・23)

遺構 O 50-64 グリッドに所在する。隅丸方形を呈し、主軸140cm、横軸80cmを測る。断面は筒形で坑底は平坦である。確認面からの深さは218cmとかなり深い。主軸方位はN-40°-Eである。覆土は下層側がしまりの弱い暗褐色土であり自然堆積である。上層側はロームブロック、ローム土が混入するしまりの強い暗褐色土であり、人為堆積と思われる。

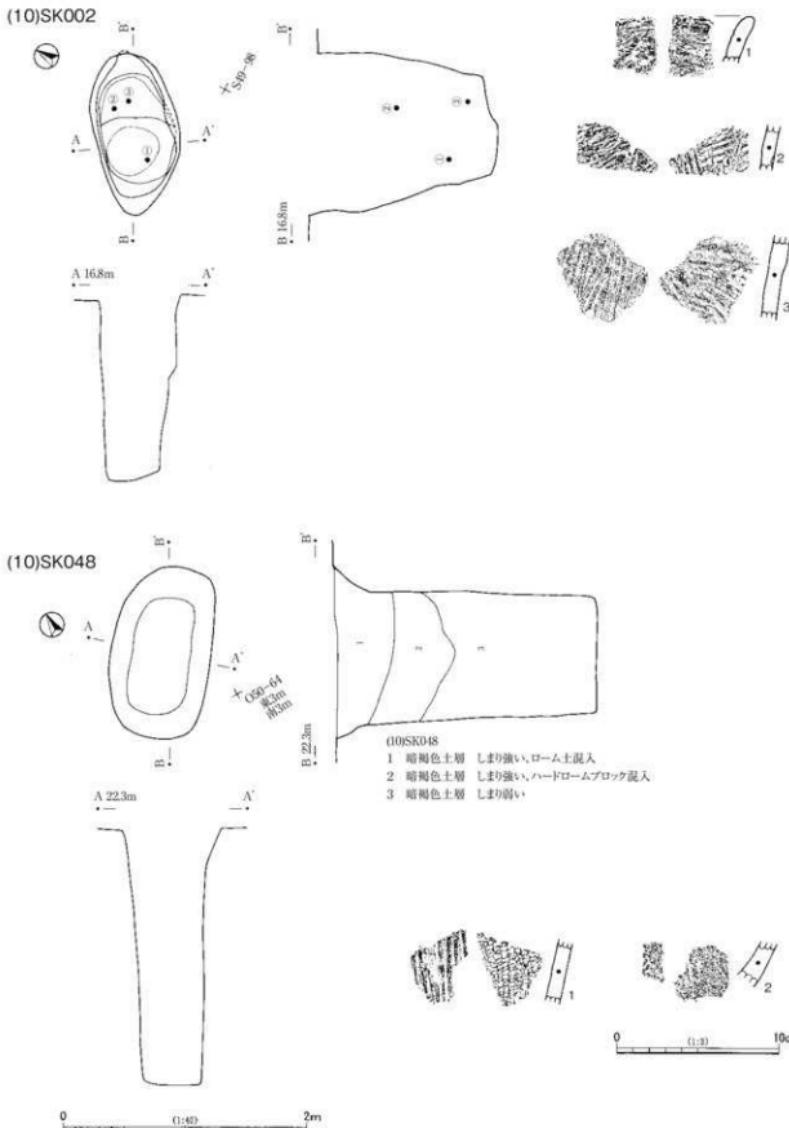
出土遺物 図示できた遺物は2点である。1は深鉢胴部で、胎土は粗く砂粒、小礫をやや多く含むが焼成



第73図 (10)SH013・014・016・017 ピット



第74図 (6)SK001 陥穴



第75図 (9)SK001・(10)SK048 陥穴、出土遺物

は良好で堅緻である。外面に RL 単節縄文を、内面に貝殻条痕を施す。2は深鉢の底部直上で、胎土は粗く砂粒を多量に含む。内・外面とも板状工具による擦痕が認められる。

時期 出土土器は早期末に位置づけられ、当遺構も概期と考えられる。

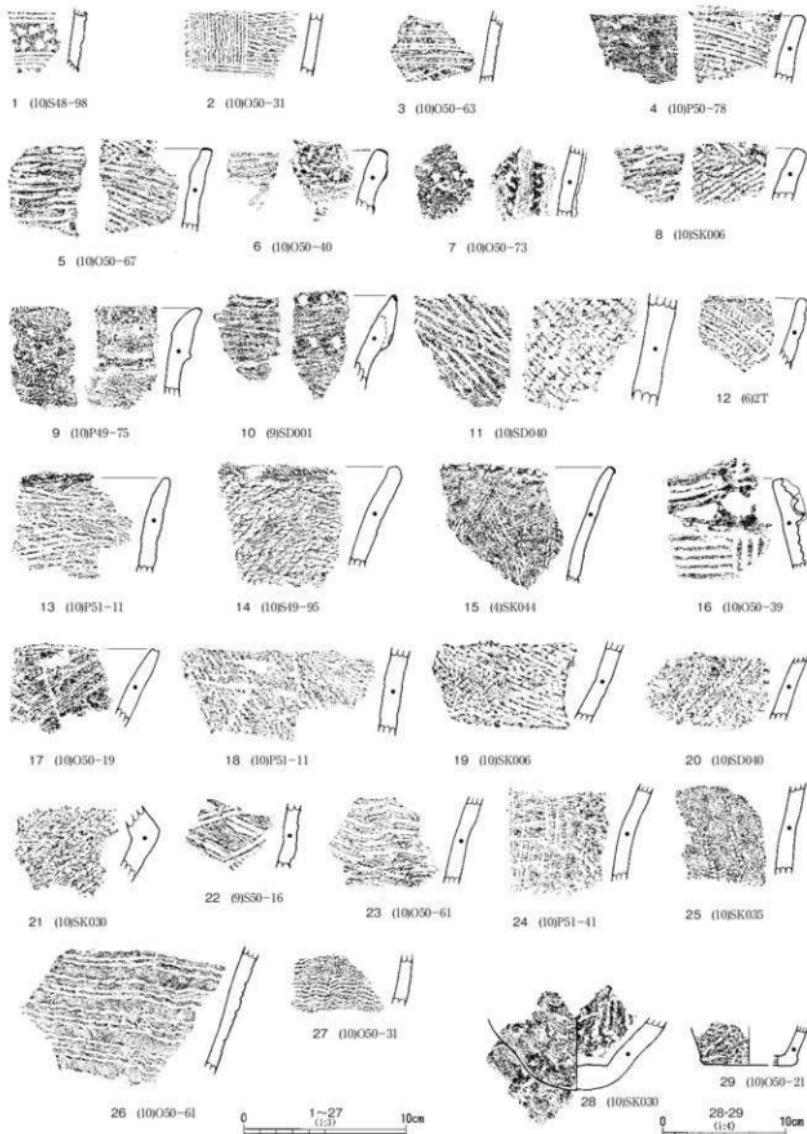
5 遺構外出土遺物

(1) 縄文土器・土製品（第 76・77 図、図版 24）

グリッド及び後世の遺構から出土した縄文土器は、検出遺構数や調査面積を考えると比較的少量である。数値化はしなかったが調査地点別では(10)調査区からの出土が多数であり、次いで(4)調査区が多い。時期別では早期後葉の条痕文土器から前期初頭までが圧倒的多数であり、次いで前期中葉の黒浜式が多い。一方で中期以降はごく少量である。

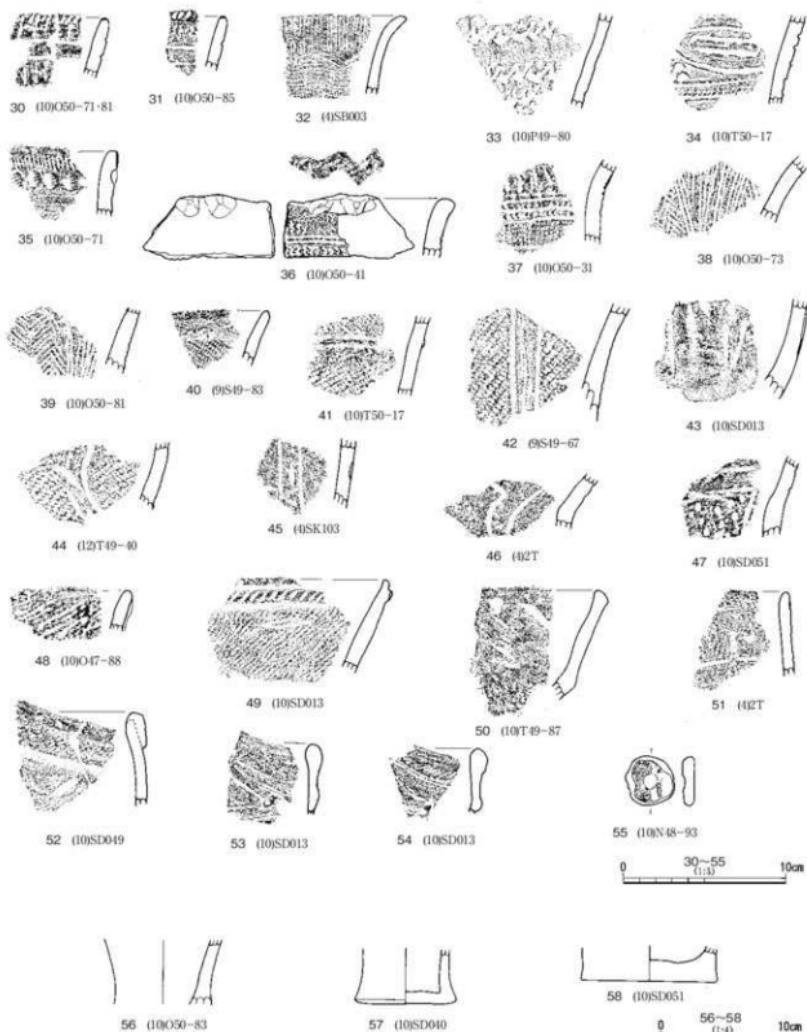
1は深鉢胴部で、胎土に砂粒、小礫を多量に含むものの、焼成は良好で堅緻である。棒状工具による横位の平行沈線と、先端が三角形のベン先状工具による連続刺突とを段状に配する。2は深鉢胴部で、胎土は密で白色砂粒、小礫をやや多く含むものの、焼成は良好で堅緻である。棒状工具によって縱位の沈線を6～7本配して縱に区画し、間を同じ工具による下からの刺突で充填する。両側は斜行沈線で充填する。3は深鉢胴部で、胎土に砂粒、小礫を多量に含むものの、焼成は良好で堅緻である。棒状工具による横位の平行沈線と、同じ工具による斜格子状の文様帶を段状に配する。以上1～3は早期三戸式に位置づけられる。4は深鉢口縁部で、胎土に植物纖維のほか砂粒、小礫を多量に含むが焼成は良好で堅緻である。外面には貝殻条痕文が施されるが、内面は調整痕が認められるのみである。5は深鉢口縁部で、胎土は密で植物纖維の含有量は比較的少なく、焼成は良好で堅緻である。内・外面とも貝殻条痕文が施されるほか、口唇上には貝殻腹縁の圧痕が認められる。6は深鉢口縁部で、胎土には植物纖維のほか砂粒を多量に含む。口縁下約1cmのところで隆線を横位に貼り付け、やや太い断面円形の棒状工具でキザミを施す。さらにその下約1.5cmのところに同様の隆線を配する。7は深鉢胴部で、胎土には植物纖維のほか白色砂粒や小礫を多量に含む。縱位の隆線を2本貼り付け、断面円形の棒状工具でキザミを施す。向かって左側の隆線からは左下に枝分かれするよう隆線らしいものが認められるが、遺存状況が悪く詳細は不明である。8は深鉢口縁部で、胎土に植物纖維を多量に含む。外面にはL無節縄文を、内面には貝殻条痕文を施す。口唇上は縄文原体を押圧する。9は深鉢口縁部で、胎土に植物纖維を多量に含むが、全体に稠密で焼成も良好である。口縁部は外側に肥厚し、口唇を尖頭状に整形する。肥厚部の下端は隆線を貼り付けている。外面に若干の擦痕が認められるほかは文様は施されない。10は深鉢口縁部で、胎土に植物纖維を多量に含むが、全体に稠密で焼成も良好である。口縁部は外側に肥厚するとともに、やや強く外反する。口唇上に断面円形の棒状工具によるキザミが施されるほか、同じ工具によって肥厚部の下端に下から上への刺突が施される。11は深鉢胴部で、胎土に植物纖維のほか白色砂粒を多量に含む。外面は異原体によるLRとRLの単節縄文を上下段状に配し、羽状縄文を構成する。内面は貝殻条痕文が施される。28は深鉢底部で、残存高は6.0cmを測る。胎土に植物纖維のほか砂粒を多量に含むが、全体に熱による劣化が目立つ。内・外面とも指頭整形の後ヘラ状工具による調整が施される。以上4～11・28は早期後葉に位置づけられ、特に6～11は茅山上層式以降の早期末に相当する。12は深鉢口縁部で、胎土は密である。外面にRL+L附加条縄文が施される。13は深鉢口縁部で、胎土に植物纖維や白色砂粒を極めて多量に含む。内面は特に剥落が目立つ。外面にL撚糸文を横方向に施す。14は深鉢口縁部で、胎土は全体に粗く植物纖維のほか砂粒を多量に含む。外面左側はRL+L、右側はLR+R（附加条はいずれも2本）の

附加条縄文を縱方向に施し、羽状縄文を構成する。15は深鉢口縁部で、胎土は密で植物繊維の含有量はあまり多くなく、焼成も良好で堅緻である。口唇上には断面円形の棒状工具によって横方向の押圧が連続して加えられる。外面にはL撲糸文が施される。16は深鉢口縁部で、胎土は密で植物繊維を多量に含む。口縁は内傾し、横位の隆線を2本、口唇に平行させるように貼り付ける。図の中心には2本の隆線を分割するように円文を配し、口唇との間に縱位の隆線を貼り付けている。半截竹管による横位の平行沈線を口唇と1本目の隆線との間に配し、2本目の隆線の下には半截竹管による縦位の沈線を円文から垂下するように配する。その両側は半截竹管による横位の平行沈線を充填する。17は深鉢口縁部で、胎土に植物繊維を多量に含むが焼成は良好で堅緻である。外面右側はごく細い原体を3本まとめたR撲糸文が横方向に施される。左側は不鮮明であるが、同一の原体を縱方向に施し、羽状のモチーフを描出すると思われる。口唇上は棒状工具による沈線が口縁に沿って巡る。18は深鉢胴部で、胎土に植物繊維を極めて多量に含む。内面は特に剥落が目立つ。外面にはRL単節縄文が施される。19は深鉢胴部で、胎土は密で植物繊維の含有量が多いが、焼成は良好で堅緻である。外面はRL単節縄文を施した後、縦に区画するようにLR単節縄文を施し羽状縄文を構成する。ただしLR縄文は部分的な施文であるためモザイク状になっている。20は深鉢胴部で、植物繊維のほか白色砂粒を多量に含む。外面はR撲糸文が施される。21は深鉢胴部で、植物繊維の含有量が多いが胎土は密である。強く内側に屈曲しており、その部分を境に上側は縦位のLR単節縄文が施される。下側はLR+R附加条縄文が横位に施されるが、磨滅しており不鮮明である。22は深鉢胴部で、胎土は密で植物繊維の含有量が多いが、焼成は良好で堅緻である。外面に半截竹管による沈線で菱形のモチーフを描出する。23は深鉢胴部で、植物繊維のほか砂粒を多量に含む。外面に棒状工具による横位の波状沈線が多段に施される。24は深鉢胴部で、胎土は粗く植物繊維のほか砂粒、スコリア粒を多量に含む。外面は向かって右側にRL単節縄文を、左側に棒状工具による格子状の沈線を配する。25は深鉢胴部で、胎土は粗く植物繊維のほか砂粒を多量に含む。外面に貝殻腹縁による圧痕がまばらに施される。29は深鉢底部で、推定底径7.2cm、残存器高3.1cmを測る。胎土は粗く植物繊維のほか砂粒を多量に含む。外面にはLR単節縄文が施される。以上12～25・29は前期黒浜式に位置づけられる。26は深鉢胴部で、胎土は粗く砂粒、赤色スコリアを多量に含む。焼成は不良で器面の磨滅が顕著である。外面は3本一組の櫛羽状工具による波状文を、コンパス文と同様の手法で横位多段に配する。27は深鉢胴部で、胎土は密だが砂粒をやや多く含む。外面は半截竹管による横位の波状文を密に施す。以上の2点は黒浜式に平行する植房式に相当するものと考えられる。30は深鉢口縁部で、胎土はやや粗い。口縁に平行するように沈線を2本巡らし、1本目より口唇側と2本目より胴部側に貝殻腹縁を縦位で押圧して充填する。間は施文せず無文帶としている。口唇上には断面円形の棒状工具でキザミが施される。31は深鉢口縁部で、胎土はやや粗い。焼成はやや不良で内面は器面が磨滅している。文様構成は30とはほぼ同一であるが、2本目の沈線より下側は文様が認められない。32は深鉢口縁部で、胎土はやや粗く砂粒をやや多く含む。口縁部がめくれるように外反するが、その部分は細い半截竹管を用いて縦位の短沈線を配列する。下側はそれより太い半截竹管で波状の条線を横位に巡らす。33は深鉢胴部で、胎土は粗く砂粒を多量に含む。平行する三角文を横位に配する。34は深鉢胴部で、胎土は密だが白色砂粒を多量に含む。焼成は良好で堅緻である。半截竹管による紡錘形状のモチーフの中に平行線を配し、両端を半截竹管による刺突で閉塞する。下側は変形爪形文を横位に配する。35は深鉢口縁部で、胎土は密だが砂粒、赤色スコリアをやや多く含む。口唇直下に縦位の短沈線を配列し、その下に左右から貝殻腹縁を用いて器面を穿



第76図 遺構外出土土器（1）

り返す、一種の刺突列を配する。さらにその下に半截竹管による押し引き文を横位に配する。36は深鉢口縁部で、胎土は密で砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。器表面は外面向かって右側が大きく剥落している。外面は波状貝殻文を密に施す。列の間は半截竹管による横位の沈線を巡らせる。口唇は平坦であるが、上から見て「M」字状を呈するよう内側と外側に屈曲させている。その部分にはし無節繩文が施される。37は深鉢胴部で、胎土は密だが砂粒、小礫を多量に含む。胴部中央付近から強く外反する。横位の平行沈線で上下を区画し、上段は波状貝殻文を配し、下段は同じく貝殻腹縁を押し引きする。以上30～37は浮島Ⅱ式から興津式に位置づけられる。38・39は深鉢胴部で同一個体である。胎土は密であるが小礫、赤色スコリアを多量に含む。半截竹管によって放射状に広がるモチーフを描出し、その脇には山形を縦方向に重ねたモチーフを配する。以上38・39は諸磯c式に位置づけられる。40は深鉢口縁部で、胎土は密であるがスコリアをやや多く含む。RL単節繩文が施されるほか、口縁に沿って結節文が配される。41は深鉢胴部で、胎土に砂粒、小礫を多量に含むが焼成は良好で堅緻である。横位の隆線を貼り付け上側にRL単節繩文、下側にLR単節繩文を施す。以上40・41は諸磯系土器と考えられるもので、40は前期末葉に位置づけられる。42は深鉢胴部で、胎土は密であるが赤色スコリアを極めて多量に含む。RL単節繩文を縦位に施した後、平行沈線を2本縦位に配して間を磨り消す。43は深鉢胴部で、胎土は密で白色砂粒を多量に含む。LR単節繩文を縦位に施した後、平行沈線を2本縦位に配して間を磨り消す。下半分は文様がなく無文となっており、底部直上であることが分かる。44は深鉢胴部で、胎土は密であるが赤色スコリアをやや多く含む。RL単節繩文を縦位に施した後、平行沈線を2本弧状に配して間を磨り消す。以上42～44は加曾利E3式に位置づけられる。45は深鉢胴部で、胎土はやや粗く赤色スコリアを多量に含む。然によって劣化しており、外面は特に磨耗している。平行沈線の間に列点が施される。称名寺2式に位置づけられる。46は深鉢胴部で、胎土は密であるが砂粒を極めて多量に含む。器形はやや強く屈曲しており口縁側へ大きく開いている。沈線のモチーフから称名寺式と考えられるが、繩文も列点も施されない。47は深鉢胴部で、胎土は密であるが砂粒を多量に含む。然によると思われる磨耗が顕著である。器形は若干屈曲しており口縁側へ開いている。沈線による区画の中を棒状工具による刺突で充填する。称名寺2式と考えられる。48は深鉢口縁部で、胎土は粗く砂粒を多量に含む。器面は熱による磨耗が顕著である。小波状となっており、波頂部から縦位の隆線が垂下される。地文はLR単節繩文である。堀之内1式に位置づけられる。49は深鉢口縁部で、胎土は粗く砂粒を極めて多量に含む。器形は口縁に向かって大きく開く。口唇に沿って隆線が貼り付けられ、棒状工具による斜めのキザミが配される。胴部側の地文はLR単節繩文である。口縁内面にもやや太い棒状工具による沈線が口唇に沿って巡る。堀之内2式に位置づけられる。50は浅鉢もしくは鉢の口縁部で、胎土は密であるが小礫を多量に含む。底部から器壁が大きく開き、胴部途中で屈曲してやや上方に向かって立ち上がる。口縁部は外削ぎ状に整形される。器面はミガキ状の丁寧な調整がなされるが無文である。時期は判断しづらいが堀之内式に相当すると考えられる。51は深鉢口縁部で、胎土は粗く小礫を多量に含むが、焼成は良好で堅緻である。ただしカジリが多く遺存状況は悪い。口唇に平行するように2本の沈線を巡らせ、間に先端の尖った棒状工具による刺突列を配する。その胴部側はLR単節繩文を施し、下側の沈線の間を繩文帯とするが、磨消か充填かは判断できない。加曾利B2～B3式に位置づけられる。52は深鉢口縁部で、胎土は密であるが砂粒、赤色スコリアを極めて多量に含む。波状口縁となっており、口縁に沿って帯状に肥厚し、RL単節繩文が施される。約2.5cm下側には平行するように貼り付けられていた隆線が剥落した痕跡が観察される。53・54は同



第77図 遺構外出土土器(2)、土製品

一個体の深鉢口縁部で、胎土は密で砂粒を多量に含む。強く熱を受けたと思われ、外面にはスヌの付着が認められる。全体に磨耗が顕著で文様はわかりにくい。波状口縁となっており、口縁に沿って帯状に肥厚し、LR 単節繩文が施される。その下は口縁に平行に細い隆線が貼り付けられるとともに、横位の隆線も貼り

付けられ三角形を構成する。これらの隆線上にも LR 単節縄文が施される。隆線の交点にはいわゆる「ブタの鼻」状の瘤が貼り付けられる。以上 52 ~ 54 は安行 3 a ~ 3 b 式に位置づけられる。56 は深鉢の底部直上で、胎土は粗く白色砂粒を多量に含む。胴部最大径は推定 9.6cm、残存器高は 5.3cm を測る。下端で底部と接合していたと思われ、器形は立ち上がりややすほまり、口縁に向かって直線的に開く。57 は深鉢底部で、胎土は粗く砂粒を極めて多量に含む。ほぼ全周し、底径 8.4cm、残存器高 4.5cm を測る。器壁は底部直上が絞られてから直立する。58 は深鉢底部で、胎土は粗く砂粒を多量に含む。3 分の 1 ほど残存し、底径は推定 10.8cm、残存器高は 2.9cm を測る。底部周縁から直角に器壁が立ち上がる。以上 56 ~ 58 は無文のため時期の断定はできないが、器形から後期前葉と考えられる。

55 は土器片円盤で、胎土は密であるが砂粒、赤色スコリア粒を多量に含む。全体にごく新しいガシリが多く、特に採拓した側は全体の 3 分の 1 程度が欠損している。長軸 3.0cm、短軸 2.9cm、最大厚 0.8cm、重量 6.4g を測る。周縁は敲打調整後ほぼ全面が研磨されている。中心に穿孔を意図したと思われる敲打痕があるが、途中で中止している。文様がないため素材となった土器片の時期は不明である。

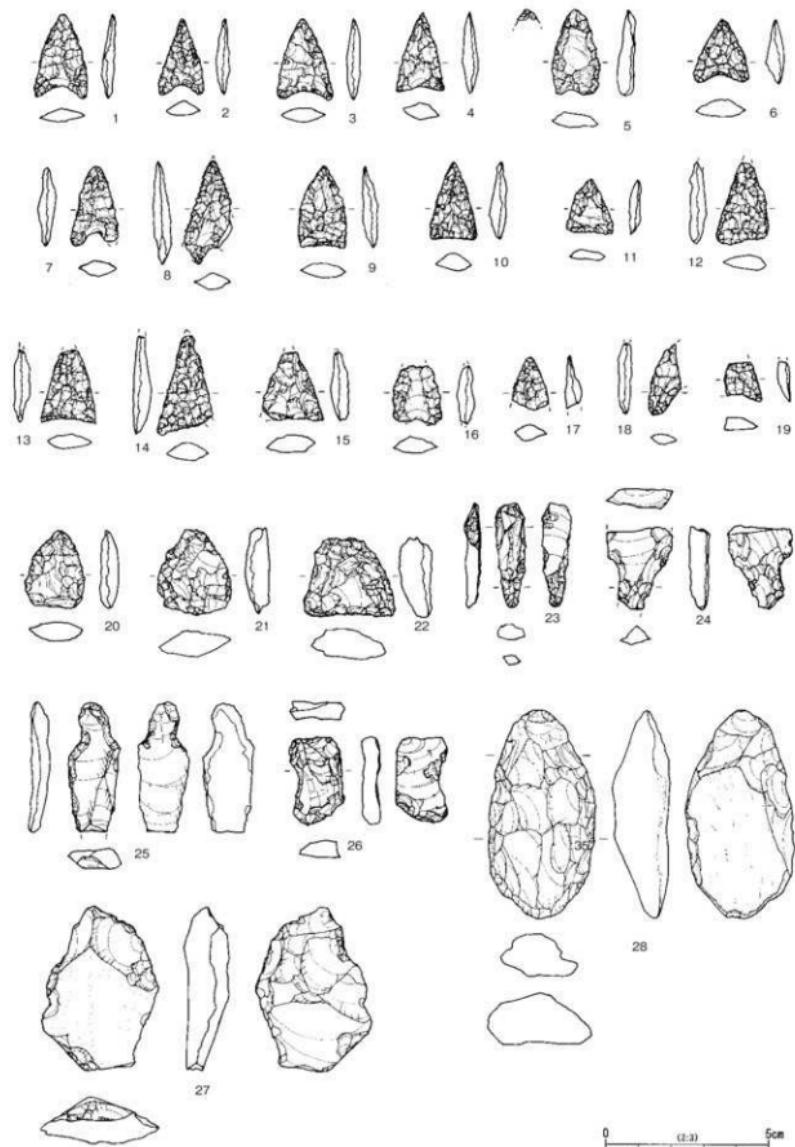
(2) 縄文時代石器・石製品（第 78・79 図、第 18 表、図版 25）

1 ~ 8 は抉りの深い凹基の石鏃である。形状は 1 ~ 5 が二等辺三角形で完形品、6 が正三角形で完形品、7・8 は二等辺三角形で欠損品である。7 は脚部、8 は先端部及び脚部が欠損している。石材は 1・7・8 が黒曜石、2~5 がチャート、6 が石英である。1・2・7 は左側縁と右側縁の一部、3~5 は右側縁と左側縁の一部、6・8 は両面に最終的な仕上げ痕が集中している。5 は正面の先端部に長軸方向に平行する衝撃によるものと考えられる縦溝状の剥離痕が見られ、その剥離痕を切るように両面に長軸方向に直交する調整加工をしていることから完形品（欠損品の再生）と考えた。9~15 は抉りが極めて浅いほぼ平基の石鏃である。形状は 9~10 が二等辺三角形で完形品、11 が正三角形で完形品、12~14 は二等辺三角形で欠損品、15 は正三角形で欠損品である。12 は先端部、13~15 は先端部及び脚部が欠損している。石材はすべてチャートである。12 は両面、13 は左側縁、14 は左側縁と右側縁の一部に、15 は右側縁と左側縁の一部に最終的な仕上げ痕が集中している。16~19 は欠損により形状が不明な石鏃である。16 は胴部のみ、17 は先端部のみ、18・19 は脚部のみが遺存している。石材はすべてチャートである。16 は末端側からの衝撃による縦溝状の剥離痕がみられる。20~22 は未成品としたが、これらは正三角形では平基の似た形状で、完形品の可能性もある。石材はすべてチャートである。なお、22 の先端部の細かい剥離痕は周辺の調整加工に類似していることから、大型の石鏃の欠損品の再加工の可能性がある。

23 は流紋岩の石錐で、断面が平行四辺形のいわゆる「四つ目錐」である。素材剥片の打面側を刃部として、両面の刃部と正面の左側縁上部に細かい調整加工を行っている。24 は珪質頁岩の石錐で、断面が三角形のいわゆる「三つ目錐」である。素材剥片の末端側を刃部として、両面の刃部に比較的大きな調整加工を行っている。刃部と上半部が欠損している。縦型の石匙の可能性もあるが、刃部と考えられる部位の欠損から石錐とした。

25 は多少不純物を含むが半透明な地に灰白色のモヤが入る良質な黒曜石の縦型の石匙である。細かい調整加工を行ってツマミ部を作出している。末端部が欠損している。なお、正面図の左側縁下半部に刃潰し加工状の細かい調整加工がみられることやツマミ部の調整加工と他の部分には光沢に差があることから、おそらく石刃を素材とした二側縁加工のナイフ形石器を転用したものと考えられる。

26 は不定形な剝片を素材とした 1mm 大の黄灰色の不純物を含む黒色の黒曜石の削器である。正面右



第78図 遺構外出土縄文時代石器（1）

側縁から末端部にかけて急傾斜な細かい調整加工を行っている。肉眼観察から黒曜石の産地は栃木県高原山産が考えられ、石材からは旧石器時代の可能性がある。

27は自然面及び剥離面が黄灰色、新鮮な面が灰色の良質な珪質頁岩の石核である。正面に自然面を大きく残す剥片を素材とし、両面に求心的な剥離作業を行って小型で不定形な剥片を剥離している。末端には細かい剥離痕がみられることから搔器からの転用あるいは搔器への転用も考えられる。また、石材からは旧石器時代やヘラ状石器の未成品の可能性もある。

28は硬質緻密な砂岩の石斧である。正面及び裏面の上部に、①器体中央に及ぶ深い調整加工、②側縁から器体中央の1/2までの比較的深い調整加工、③同じく器体中央の1/3までの浅い調整加工が、①→②→③の順番に行われており、周縁には細かい剥離痕と磨耗痕がみられる。また、裏面に大きく自然面を残し、その平坦面を生かすように加工を行っていることから、断面の形状はかまぼこ型となっている。石材や自然面を大きく残す素材の在り方から、磨石や敲石などの欠損品などを再加工したものとも考えられ、形状などからヘラ状石器の可能性もある。なお、石材は細粒の凝灰岩質砂岩かもしれない。

29・30は撥形の完形品、31～34は欠損により形状が不明な打製石斧で、31～33は刃部のみ、34は基部のみが依存している。石材は29～32がホルンフェルス、33・34が緑色凝灰岩である。29は風化した董青石の目立つ泥岩質の石材である。両面のほぼ全面に素材の剥離面、また形状を生かすように左側面上部に自然面及び右側面上部に折断面を残して、周辺に細かい調整加工を行っている。両側縁及び刃部の稜線は磨耗している。裏面の大きな剥離面はポジティブな面であることから素材の主要剥離面と思われる。

30は硬質緻密な石材である。正面に自然面を大きく残す剥片を素材とし、刃部を除いて、両面に粗い調整加工を行っている。また、形状などは27に類似していることから、石核の可能性もある。31は風化した董青石の目立つ硬質緻密な石材である。裏面に自然面を残す剥片を素材とし、周辺に細かい調整加工を行っている。32は硬質緻密な石材である。剥片を素材とし、右側面に自然面を残して、周辺に調整加工を行っている。33は比較的粗粒な石材である。裏面に自然面を残す剥片を素材とし、周辺に調整加工を行っている。34は硬質緻密な石材である。裏面と正面の一部に自然面が残っていることから、2cm～3cm大の比較的厚みのない礫を素材としたことが分かる。周縁部及び頭部の稜線に顯著な磨耗痕がみられる。

35はやや粗粒であるが、28に類似した硬質緻密な砂岩の礫器である。比較的厚みのある中型でかまぼこ型の礫を素材とし、正面の平坦面側に粗い調整加工を行っている。なお、他の面に比べ、上部の表面が荒れていることから、磨石などからの転用あるいは磨石などへの転用も考えられる。

36は角閃石岩あるいは蛇紋岩の磨製石斧である。両刃の小型木工工具（ノミ型）か玉斧の可能性がある。37は粘板岩あるいは黒色頁岩の定角式の磨製石斧である。

38は風化した董青石の目立つ泥岩質のホルンフェルスの敲石である。薄手で扁平な楕円礫の端部に敲打痕、周縁に擦痕状の敲打痕あるいは磨耗痕がみられる。上半部が欠損している。柏市富士見遺跡^(注2)で仮称された側面調整礫の一種であろうか。

39は安山岩の凹石である。両面に磨耗痕、両面中央及び左側面中央に敲打によるものと考えられる凹みがみられる。一部欠損している。

40は安山岩の石皿である。正面に磨耗面、裏面に敲打によるものと考えられる凹みがみられる。

41は砂岩の敲石である。左側縁及び末端に敲打痕がみられる。正面上面の敲打痕は表面の一部が剥落したような状態で、あるいは自然面かもしれない。



第79図 遺構出土縄文時代石器(2)、石製品

42は一部茶褐色の混じる黒色の滑石の勾玉である。全体によく研磨されており上部に両側穿孔による孔がある。両端は欠損している。

第18表 繩文時代石器属性表

博認番号	遺物番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
第43図4	(10SK007-5)	敲石	砂岩	119.2	39.1	16.5	129.4	
第43図5	(10SK007-3)	敲石	砂岩	77.0	22.6	18.7	39.4	
第51図23	(10SK036-5)	石鑿	チャート	18.1	15.1	3.1	0.8	
第51図24	(10SK036-16)	石鑿	チャート	13.6	11.9	4.8	0.4	脚部遺存
第52図1	(4SF009-1)	敲石	流紋岩	91.4	71.6	53.1	431.0	
第57図3	(10SK032-1)	石鑿	安山岩	294.0	232.0	60.0	5,650.0	
第63図9	(10SK015-9)	敲石	砂岩	65.1	46.4	23.5	98.3	
第67図3	(10SK010-6)	石鑿	チャート	21.9	16.1	4.9	1.3	
第70図5	(10SK020-87)	石鑿	チャート	19.1	11.2	3.7	0.7	先端部欠損
第70図11	(10SK022-81)	その他の石器	緑色岩	96.7	41.7	16.7	110.5	側面調整窪の一種か
第70図12	(10SK022-95)	磨製石斧	凝灰岩	36.2	62.3	18.3	51.4	
第78図1	O49-97-1	石鑿	黒曜石	25.8	15.4	4.1	0.9	
第78図2	Q50-35-3	石鑿	チャート	23.1	14.1	4.3	0.9	
第78図3	(10SD040-1)	石鑿	チャート	24.9	17.1	4.5	1.4	中近世遺構
第78図4	T49-65-1	石鑿	チャート	24.2	14.9	5.1	1.2	
第78図5	Q50-44-8	石鑿	チャート	26.1	14.7	5.1	1.9	欠損品の再加工か
第78図6	(10SK030-1a)	石鑿	石英	19.7	17.2	5.5	1.3	中近世遺構
第78図7	P-50-15-2	石鑿	黒曜石	24.1	14.6	4.9	1.2	脚部欠損
第78図8	1T-1	石鑿	黒曜石	31.9	14.9	5.5	1.7	(4), 先端部及び脚部欠損
第78図9	T49-86-1	石鑿	チャート	24.9	14.7	4.9	1.8	
第78図10	O50-68-3	石鑿	チャート	24.4	14.6	5.5	1.3	
第78図11	Q50-66-2	石鑿	チャート	16.6	14.4	3.4	0.7	
第78図12	(10SK030-19)	石鑿	チャート	25.2	15.9	5.1	1.8	中近世遺構、先端部欠損
第78図13	O50-99-1	石鑿	チャート	22.3	16.8	5.0	1.6	先端部欠損
第78図14	Q50-91-1	石鑿	チャート	30.6	16.9	5.6	1.8	先端部及び脚部欠損
第78図15	O50-39-7	石鑿	チャート	21.1	19.1	5.5	1.8	先端部及び脚部欠損
第78図16	Q50-44-8b	石鑿	チャート	18.2	15.1	5.7	1.5	両端欠損
第78図17	Q50-54-1	石鑿	チャート	16.2	11.3	4.9	0.6	先端部遺存
第78図18	Q50-35-13	石鑿	チャート	22.1	10.4	4.1	0.7	脚部遺存
第78図19	O50-33-1	石鑿	チャート	12.1	11.8	3.9	0.5	脚部遺存
第78図20	(10SD013-4)	石鑿	チャート	23.8	18.2	5.9	2.6	中近世遺構、完形品か
第78図21	O50-07-1	石鑿	チャート	26.4	22.4	7.6	4.4	完形品か
第78図22	P-50-40-12	石鑿	チャート	24.5	28.4	10.1	6.5	欠損品の再加工か
第78図23	(10SD013-6)	石鑿	流紋岩	32.1	9.1	4.5	1.5	中近世遺構
第78図24	(10SK006-1)	石鑿	珪質頁岩	25.6	19.8	6.7	3.3	中近世遺構、両端欠損
第78図25	Q50-26-1	石鑿	黒曜石	39.8	16.0	6.4	3.3	末端部欠損、ナイフ形石器の再利用か
第78図26	P50-26-3	刮削器	黒曜石	27.2	17.6	6.5	2.9	刮削器か
第78図27	(10SD051-2)	石核	珪質頁岩	50.5	36.4	14.8	19.5	中近世遺構、旧石器か、孫器に転用か
第78図28	(10SD013-9)	石斧(打製)	砂岩	63.9	33.0	18.0	38.0	中近世遺構、ヘラ状石器か
第79図29	(10SD013-7)	打製石斧	ホルンフェルス	82.6	48.3	15.7	63.9	中近世遺構、擦形
第79図30	E10-28-1	打製石斧	ホルンフェルス	65.0	40.4	20.8	51.3	擦形、右斜か
第79図31	T49-21-1	打製石斧	ホルンフェルス	30.3	38.4	8.2	9.2	刃部
第79図32	O50-66-1	打製石斧	ホルンフェルス	43.1	53.1	18.9	46.4	刃部
第79図33	N50-1	打製石斧	緑色凝灰岩	45.9	53.8	13.8	45.0	刃部
第79図34	(9)表2	打製石斧	緑色凝灰岩	40.8	44.9	19.7	53.1	R49-99 グリッド付近、基部
第79図35	(10SD013-3)	擦器	砂岩	67.1	71.2	40.6	222.2	中近世遺構、敲石の転用か
第79図36	(10SD051-9)	磨製石斧	角閃石岩	45.8	16.4	6.2	8.6	中近世遺構
第79図37	(4)M50-28-1	磨製石斧	粘板岩	45.2	27.4	11.5	21.3	
第79図38	(10SD051-1)	敲石	ホルンフェルス	59.0	34.7	11.0	32.8	中近世遺構
第79図39	(10SD040-1)	凹石	安山岩	89.2	65.2	38.2	325.0	中近世遺構
第79図40	(10SD051-81)	石鑿	安山岩	131.1	60.3	43.2	485.7	中近世遺構
第79図41	(10SD040-1)	敲石	砂岩	106.2	70.5	36.4	403.9	中近世遺構
第79図42	(4)SD001-2	勾玉	滑石	39.1	12.9	6.1	3.9	中近世遺構

グリッド等出土の遺物について(4)以外はすべて(10)

注

- 1 千葉県教育委員会編 2016『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書3—流山市恩井上ノ内遺跡—』千葉県教育委員会
- 2 (公財)千葉県教育振興財團編 2014『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6—柏市富士見遺跡—縄文時代以降編1』(公財)千葉県教育振興財團

第4章 中・近世

第1節 概要（第80図）

当遺跡における中・近世の遺構は、東西に細長い台地上に点在した8か所の調査区から検出された。遺跡北西部にあたる(2)調査区からは、中・近世の土坑2基が検出され、応仁2（1468）年紀年銘の板碑片や17世紀の五輪塔片等が出土した。

(2)調査区から東へ約40m離れた(10)調査のN 48・N 49調査区からは、中・近世の地下式坑1基・溝状遺構1条が検出された。

(10) N 48・N 49調査区から南へ約30m離れた(4)本調査区からは、約40m四方の範囲から、中・近世の地下式坑5基・方形竪穴遺構2基・土坑44基・溝状遺構2条・掘立柱建物跡3棟等がまとまって検出された。この遺構群は、その中央を南北に横断する溝状遺構(4)SD006を境に、その東西で遺構・遺物の出土傾向が異なる。図版13に見られるように、この溝の東側で地面を直に45cm程掘り下げられ、その東側と比べて西側の遺構検出面が40cm～60cm低くなっている。地下式坑・方形竪穴遺構はこの西側で検出され、15世紀～16世紀の遺物が西側を中心に出土した。東側では掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構等が検出され、18世紀～19世紀前半の遺物を中心に出土した。また、この遺構群から西に約18m離れて井戸1基が検出された。

(4)本調査区から東へ約35m離れた(10)調査のO 50・P 50調査区からは、約40m四方の範囲から15世紀主体の遺物と共に、掘立柱建物跡1棟・地下式坑2基・土壙墓2基・井戸1基・溝状遺構3条・ピット28基が検出された。

(10) O 50・P 50調査区から東へ約37m離れた(10)調査のQ 50・R 50調査区から、その東に隣接する(9)調査のR 49・S 49調査区、(12)調査のS 49・T 49調査区、(10)調査のT 49調査区にいたる東西約130m、南北約35mの範囲からは、中・近世の地下式坑1基・土坑2基・溝状遺構5条が点在して検出された。

第2節 遺構と遺物

1 地下式坑

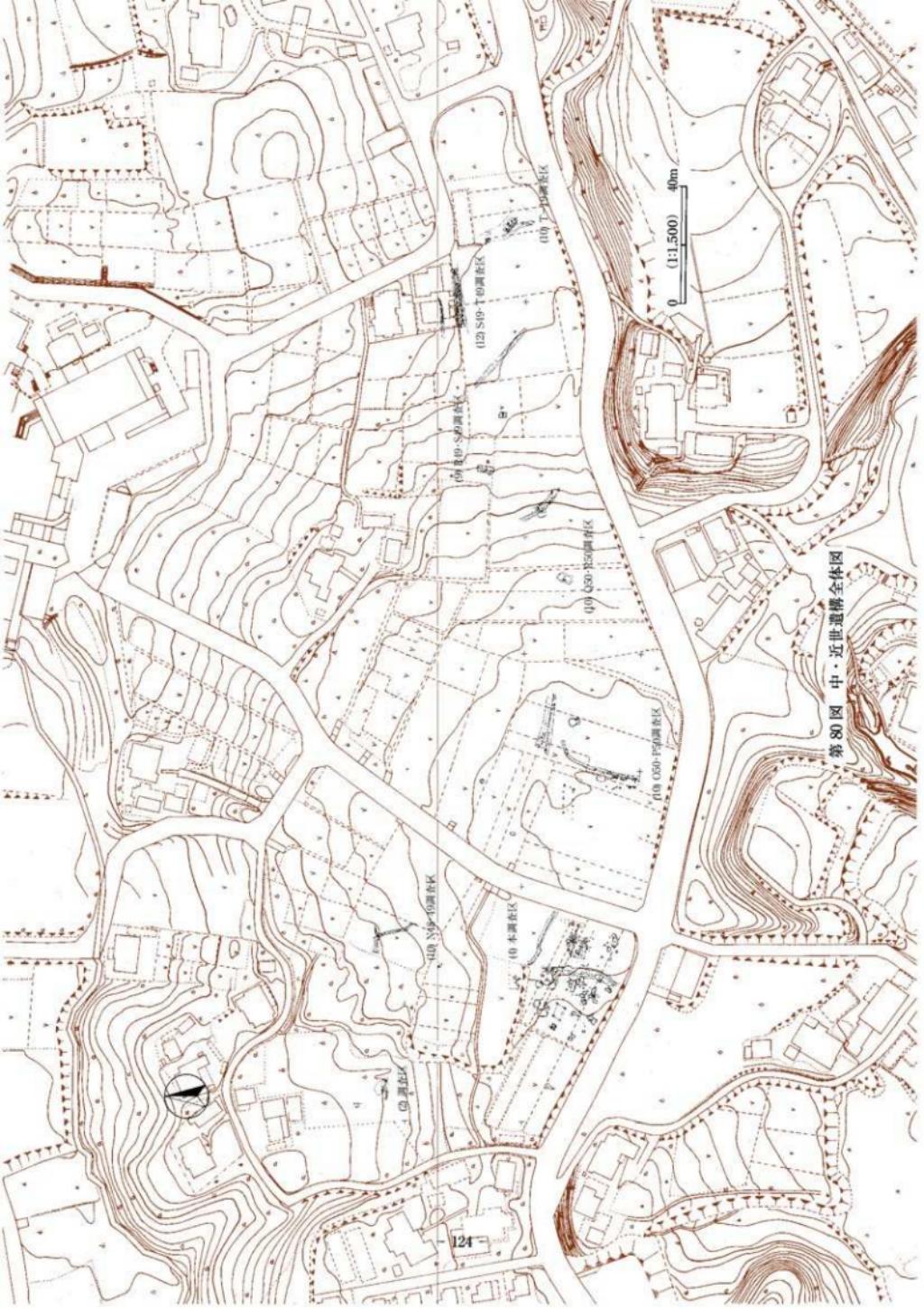
当遺跡からは9基の地下式坑が検出された。(4)本調査区では、その調査区の中央を南北に走る溝状遺構(4)SD006上から2基、その溝の北西側から3基の合計5基の地下式坑が検出された。なお、この(4)本調査区の北側に隣接して流山市調査区があるが、この南東隅で地下式坑1基が検出されている。

このほかに、(10) N 48・N 49調査区では単独で1基、(10) O 50・P 50調査区では溝状遺構(10)SD040と(10)SD013周辺から各1基の合計2基が検出された。また、(10) Q 50・R 50調査区からは、地下式坑の掘削途中で放棄した可能性がある不整形の土坑1基が検出された。

(4)SK080（第81図、図版12・28・33）

N 50-62グリッドに位置し、(4)SD006と重複する。竪坑から地下室への方位は東を向く。すでに天井部が崩落しており土坑状のプランを呈していた。竪坑の位置は地下室西辺のやや南寄りである。竪坑入口部の規模は横幅135cm、縦幅77cmである。竪坑は2つの段を設けながら深さ140cmほど斜めに掘り込み、

第80図 中・近世遺構全体図



地下室西壁に繋がる。2つの段の高さは地下室底面から130cm上と160cm上である。地下室は長方形を呈し、規模は横幅235cm、奥行142cmで、検出面からの深さは220cmである。重複する溝の(4)SD006との新旧関係は不明であるが、地下室は(4)SD006の底面に沿って位置し、竪坑も(4)SD006に直行して開口する位置関係にある。

出土遺物の1はカワラケ底部片で、回転糸切り無調整である。2は産地不明鉢鉢の底部～体部片である。胎土に小石を多く含み、内外面赤褐色である。常滑製品に類似する。擦目は8条である。3は瀬戸美濃産鉛釉捕鉢の底部～体部片で、摺目は18条である。4は土師質の在产地鉢鉢部片で、摺目は5条である。1と3は覆土上部から出土し、その他は覆土一括の出土である。この他に、非掲載であるが覆土一括で棒状鉄製品1点(図版33)とアカニシ1点が出土した。棒状鉄製品は長さ6.7cm、幅0.5cm、厚0.8cmである。

(4)SK102 (第81図、図版12)

N 50-11 グリッドに位置する。竪坑から地下室への方位は北を向く。すでに天井部が崩落しており、土坑状のプランを呈していた。竪坑の位置は地下室南辺中央である。竪坑入口部の規模は横幅110cm、縦幅80cmである。竪坑は斜めに深さ約250cm掘り込まれ、地下室底面に繋がる。地下室底面から150cm上の竪坑壁面に、横幅約80cm、縦幅約15cmの段がある。地下室は長方形を呈し、規模は横幅235cm、奥行170cmで、検出面からの深さは250cm～260cmである。遺物は出土しなかった。

(4)SK103 (第82図、図版12・28)

N 50-21 グリッドに位置する。竪坑から地下室への方位は北西を向く。すでに天井部が崩落しており、土坑状のプランを呈していた。この土坑状プランが方形竪穴遺構(4)SK099の一部を壊している。両者の新旧関係は地下室や竪坑と(4)SK099との位置関係から、(4)SK099→(4)SK103と考えられる。竪坑の位置は地下室南東辺中央である。竪坑入口部の規模は横幅185cm、縦幅140cmである。竪坑は斜めに深さ70cm掘り下げた後、箱型かつ直に60cm掘り込んでいる。竪坑底面の規模は横幅80cm、縦幅50cmで、地下室底面から115cm上に位置する。また、竪坑の北東辺が大形土坑(4)SK117と接する。地下室は竪坑正面である北西辺中央の奥行が深い凸形を呈し、規模は横幅230cm、奥行170cm～200cmで、検出面からの深さは245cmである。

出土遺物の1～3はカワラケ片である。2には直径0.7cm程の穿孔痕と、墨書「□合？」が残る。3の底面は回転糸切り無調整である。4は古瀬戸灰釉直縁大皿口縁部片である。5は青磁盤底部片である。6・7は在地産内耳土器口縁部片で、口唇部から外面にかけて煤が付着する。いずれも覆土一括の出土である。比較的多くの遺物が出土しているが、重複する(4)SK099の遺物が混入している可能性がある。

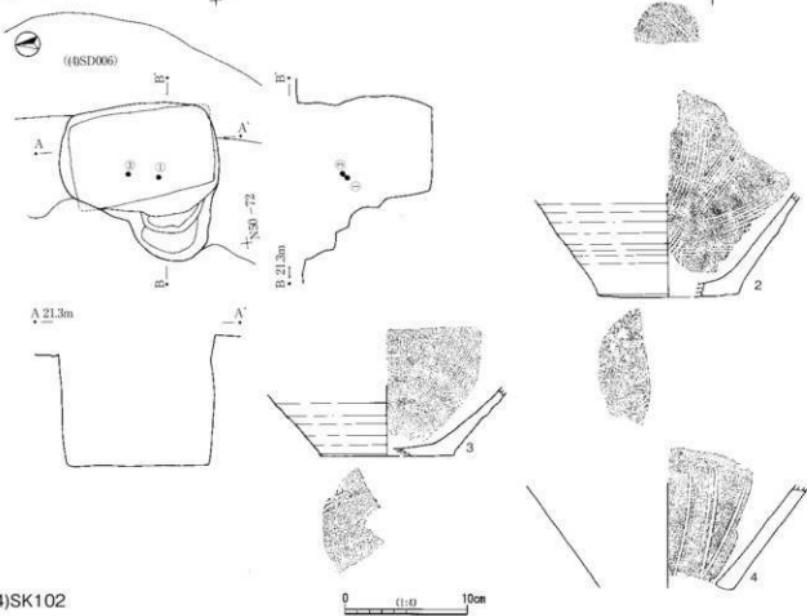
(4)SK105 (第81図、図版12)

N 50-22・23 グリッドに位置する。竪坑から地下室への方位は東を向く。溝状遺構(4)SD006と重複する。すでに天井部が崩落しており、土坑状のプランを呈していた。竪坑の位置は地下室西辺中央である。竪坑入口部の規模は横幅145cm、縦幅104cmである。竪坑は斜めに深さ180cm程掘り込んでいる。竪坑底面の規模は横幅87cm、縦幅25cmで、地下室底面から26cm上に位置する。地下室は長方形を呈し、規模は横幅172cm、奥行98cmで、検出面からの深さは約210cmである。(4)SD006との新旧関係は不明であるが、地下室と竪坑は(4)SD006の東側中段と溝底に沿った位置関係にある。遺物は出土しなかった。

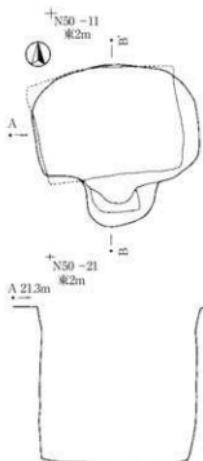
(4)SK115 (第82図、図版12・28)

N 50-21 グリッドに位置する。調査所見で地下式坑とする。底面から高さ100cm付近の壁面に天井残存

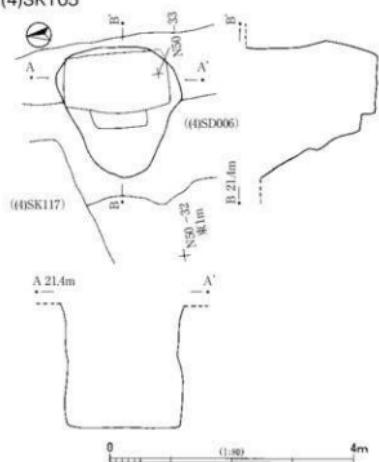
(4)SK080



(4)SK102

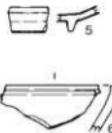
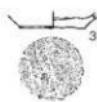
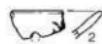
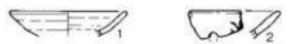
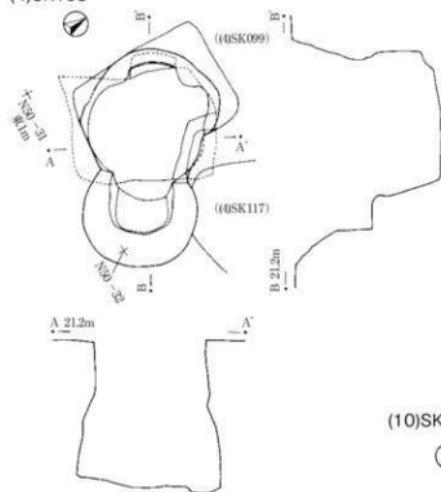


(4)SK105



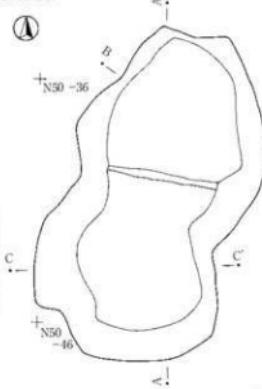
第81図 中世地下式坑(1)

(4)SK103



0 (1:40) 10cm

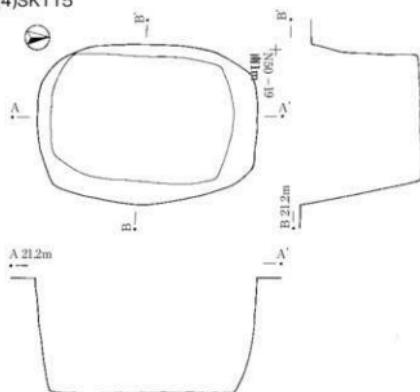
(10)SK006



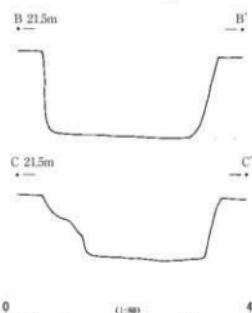
(10)SK006

- 1 暗褐色土層 やや赤みを帯びたような色調、ローム土混入
- 2 黒褐色土層 ハードロームブロック混入
- 3 黑褐色土層 ハードロームブロックローム土
多量に混入
- 4 暗褐色土層 ローム土混入
- 5 暗褐色土層 ローム土少量混入
- 6 黑褐色土層 ハードローム小ブロックを僅かに
混入
- 7 暗褐色土層 ハードローム多量に混入
- 8 黄褐色土層 粘性強・
- 9 暗褐色土層 ハードローム小ブロック混入
- 10 黄褐色土層 ローム土・ハードローム・ブロック
混入
- 11 黑褐色土層 ハードロームブロック混入
- 12 黄褐色土層 ローム土・ハードロームブロック
主体
- 13 暗褐色土層 ローム土混入

(4)SK115



0 (1:40) 10cm



0 (1:80) 4m

第82図 中世地下式坑（2）

部らしき痕跡があるが、その痕跡は薄い。地下室は長方形を呈し、規模は横幅297cm、奥行205cmで、検出面からの深さは195cmである。また、堅坑の痕跡はなく、地下室上に直接開口していた可能性がある。

出土遺物の1は在地産内耳土器口縁部片で、口唇部から外面に煤が付着する。この他に巻貝の小片1点が出土した。いずれも覆土一括の出土である。

(10)SK006 (第82図、図版14)

Q 50-26・36・46 グリッドに位置する。調査所見て、粘性が強い地山層のため掘削途中で放棄した可能性がある地下式坑とする。北側に底面横幅最大215cm、奥行最大210cmの掘込みがあり、25cm～30cmほどの段差を境に、南側に底面横幅165cm～200cm、奥行250cm程のほぼ平坦な掘込みがある。検出面からの深さは北側掘込みが120cm～130cm、南側掘込みが95cm～100cmである。北側が地下室で、南側が堅坑の可能性があるが、風倒木の可能性もある。遺物は出土しなかった。

(10)SK030 (第83図、図版14)

P 50-24・34 グリッドに位置する。堅坑から地下室への方位はほぼ北を向く。すでに天井部が崩落しており、土坑状のプランを呈していた。堅坑の位置は地下室南辺中央である。堅坑入口部の規模は横幅200cm、縱幅162cmである。堅坑は斜めに深さ約185cm掘り込んでいる。堅坑底面の規模は横幅105cm、縱幅68cmで、地下室底面から110cm上に位置する。地下室は長方形を呈し、規模は横幅285cm、奥行222cmで、検出面からの深さは295cmである。高さ165cm付近で天井部に移行したと推測される。

覆土の堆積状態は、地下室の堅坑付近で60cm～120cmの高さまで自然堆積した後、天井崩落が進んだことを示している。遺物は非掲載であるが、在地産土器と古瀬戸製品の可能性がある小片が出土した。

(10)SK035 (第83図、図版14)

O 50-69 グリッドに位置する。堅坑から地下室への方位はほぼ西を向く。すでに天井部が崩落しており、土坑状のプランを呈していた。堅坑の位置は地下室東辺中央である。堅坑入口部の規模は横幅240cm、縱幅130cmである。堅坑は斜めに深さ140cm程掘り込んでいる。堅坑底面の規模は横幅80cm、縱幅64cmで、地下室底面から95cm上に位置する。地下室はほぼ長方形を呈し、規模は横幅265cm、奥行145cm～184cmで、検出面からの深さは235cmである。

覆土の堆積状態は、堅坑からの暗褐色土による自然堆積が始まると、早い段階で天井が崩落したことを見ている。遺物は出土しなかった。

(10)SK050 (第83図、図版15・28)

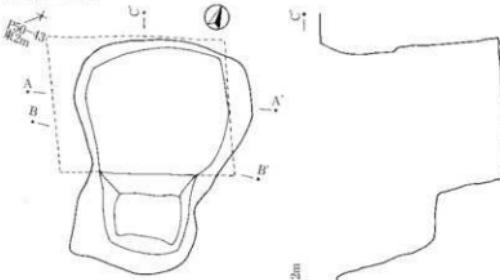
N 49-23-33 グリッドに位置する。堅坑から地下室への方位は東を向く。天井部が残る地下式坑である。堅坑の位置は地下室西辺中央に位置し、堅坑平面の東半分は地下室直上に開口する。堅坑入口部は楕円形で、規模は横幅92cm、縱幅71cmである。堅坑の東側は斜めに掘り込まれ、地下室の天井と一体化している。また堅坑西壁の地下室底面からの高さ165cm上には、横幅60cm、縱幅15cmの段が付き、地下室西壁と繋がっている。地下室は隅丸長方形を呈し、横幅205cm、奥行122cm～145cmである。検出面からの深さは225cmで、高さ110cmで天井部に移行する。覆土は堅坑からの暗褐色土による自然堆積が厚く堆積する。

出土遺物の1は、古瀬戸灰釉端反皿口縁部片である。2は瓦質鉢口縁部片である。ともに覆土一括の出土である。この他に、アカニシ1点が堅坑付近の覆土中層から出土した。

2 方形堅穴遺構

方形堅穴遺構は、(4)本調査区の溝状遺構(4)SD006の北西から2基検出された。

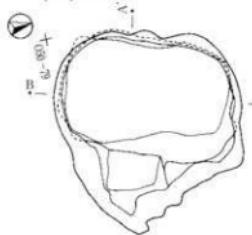
(10)SK030



(10)SK030

- 1 暗褐色土層 ハードローム粒混入
- 2 暗褐色土層 ローム土混入
- 3 黒褐色土層 ハードローム小ブロック混入
- 4 黒褐色土層 ハードロームブロック多量に混入
- 5 ハードロームブロック 均質
- 6 暗褐色土層 ハードロームブロック混入
- 7 暗褐色土層 ハードローム粒混入
- 8 暗褐色土層 ハードローム粒混入

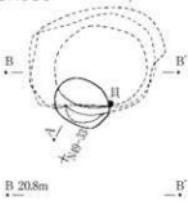
(10)SK035



(10)SK035

- 1 暗褐色土層 ハードローム混入
- 2 暗褐色土層 ハードローム混入
- 3 黑褐色土層 ハードローム小ブロック混入
- 4 黑褐色土層 ハードローム大ブロック混入
- 5 黑褐色土層 ハードローム中ブロック混入
- 6 暗褐色土層 ローム土混入
- 7 暗褐色土層 ローム土多量に混入
- 8 ハードロームブロック主体
- 9 暗褐色土層 ローム土混入、6層よりも明るい色調
- 10 暗褐色土層 ハードローム粒混入

(10)SK050



(10)SK050

- 1 暗褐色土層 ハードブロック混入
- 2 暗褐色土層 ローム土少量混入
- 3 暗褐色土層 ハードロームブロック・ローム土混入
- 4 暗褐色土層 やや粘性のある層

0 (1:80) 10cm

第83図 中世地下式坑（3）

(4)SK099（第89図、図版11）

N 50-21 グリッドに位置する。平面長方形の竪穴遺構である。この坑下に地下式坑(4)SK103の地下室があり、その天井崩落により(4)SK099は大きく壊れている。(4)SK099は北辺と南西隅が残り、規模は長軸240cm、短軸170cm、深さ45cmと復元できる。北辺中央壁際に直径25cm、深さ67cmのピットと、南西隅の壁際に直径25cm、深さ7cmのピットがある。また北東隅の20cm～50cm四方の範囲では、灰と焼土が多く混入した炭化物が底面より約20cmの厚さで堆積していた。遺物は出土しなかった。

(4)SK114（第84図、図版12・28）

N 50-19・M 50-10 グリッドに位置する。平面長方形の竪穴遺構である。規模は長軸242cm、短軸180cmで、深さ75cmである。北東隅の壁際に直径50cm、深さ約5cmの落ち込みがある。また、東辺付近とそこから長軸に沿って底面中央までの約110cmの範囲から炭化材が出土した。

出土遺物の1は、瀬戸美濃産鉄軸塗体部片である。この他に非掲載であるが、カワラケと常滑産甕の小片が出土した。

3 大形土坑

平面形が長軸3m以上、短軸2m前後、深さ1m以上の3基の土坑を、便宜的に大形土坑として報告する。これら3基の平面形は、やや歪みのある長方形である。

(2)SK002（第85図、図版10）

M 48-82・83 グリッドに位置する。部分的な発掘であるが、平面形は西端がやや幅狭な長方形と復元できる。規模は長軸318cm、短軸90cm～190cmである。検出面から深さ1.6mを掘り下げた時点での底面探索を行った結果、さらに40cm以上深いことを確認しそこからの掘り下げは実施していない。また、この土坑は東西溝と北側に掘込みを伴っている。東西溝の規模は、土坑より東側が上幅40cm・下幅10cm・深さ36cmで、土坑より西側が上幅110cm～220cm・下幅30cm～120cm・深さ60cmである。北側掘込みの規模は東西幅5m・南北幅2.2m・深さ38cmである。

土坑の覆土上層は褐色土で、下層は粘性の強い黒色土と粘土、砂が交互に堆積し、下層は自然堆積と考えられる。また東西溝の覆土は、下層は黒色土で、上層は粘土で人為的に埋められている。また②トレンチ一括遺物の板碑・陶器片の多くがこの土坑から出土した。調査所見では井戸の可能性を指摘している。

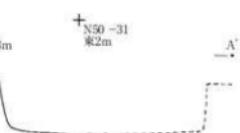
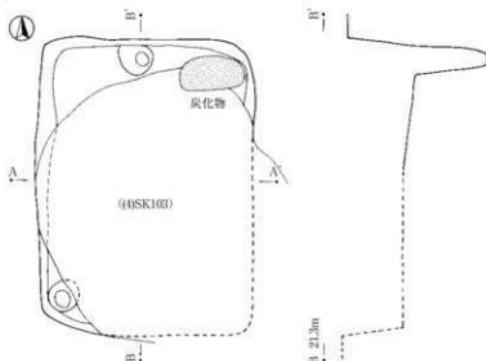
(4)SK117（第85図、図版12）

N 50-22 グリッドに位置する、西辺が幅狭の長方形土坑である。規模は長軸370cm、短軸205cmで、深さ115cmである。周辺の方形竪穴遺構の(4)SK099・114に比べ平面形が大きく、掘り方も深い。また、地下式坑の(4)SK115とはほぼ同規模であるが掘り方が浅い。調査段階では地下式坑としたが、整理段階で見直して土坑と報告する。遺物は出土しなかった。

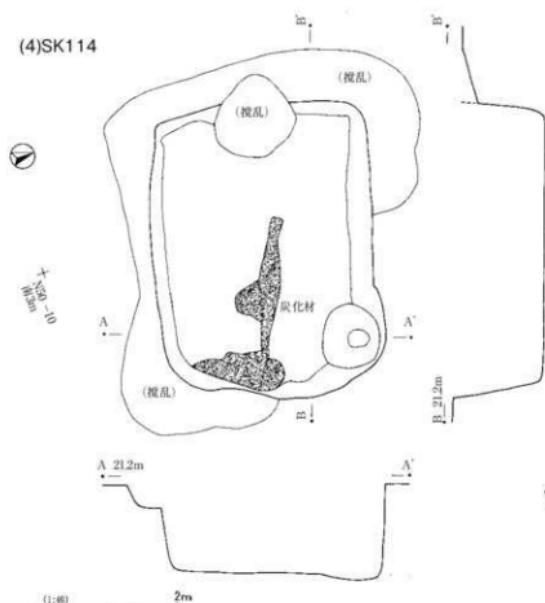
(9)SK002（第85図、図版14）

R 49-65・75 グリッドに位置する長方形土坑で、南と南西に段が2段取り付く。全体の規模は長軸550cm、短軸230cm～280cmである。北側の長方形土坑の規模は長軸290cm、短軸138cm、深さ100cmである。その南に取り付く段の規模は長軸120cm、短軸170cm、深さ90cmである。そして最も南の段の規模は幅140cm・長さ70cm、南西の段の規模は幅120cm・長さ50cmで、共に深さは30cmで段差なく繋がっている。覆土は黄褐色土主体で、人為的に埋め戻した可能性がある。遺物は出土しなかった。

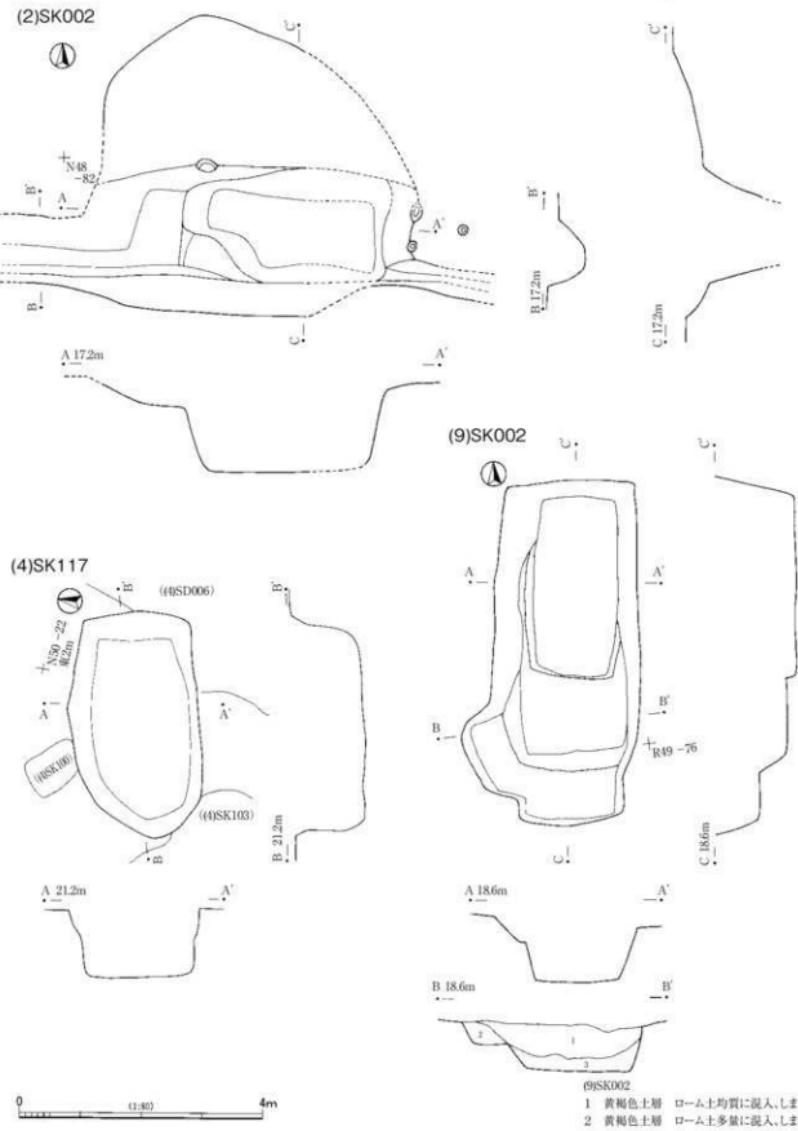
(4)SK099



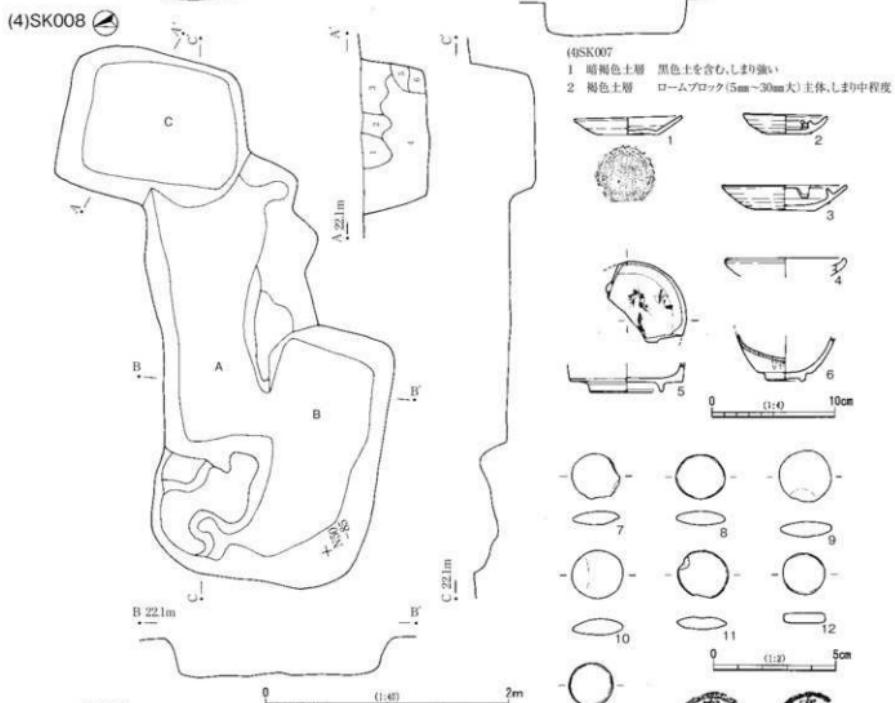
(4)SK114



第84図 中世方形堅穴遺構



第85図 中・近世大形土坑



- (4)SK008
- 1 黒褐色土層 ロームブロック(5mm~20mm大)多量に混入、しまり中程度
 - 2 褐色土層 ロームブロック多量に混入、2層より色調明るい、しまり強い
 - 3 褐色土層 ロームブロック小(5mm~10mm大)多量に混入、ロームブロック大(100mm~150mm大)
少量混入、しまり強い
 - 4 品種色土層 風化物・ロームブロック(20mm大)少量混入、しまり中程度
 - 5 褐色土層 ローム主体で品種色土少量混入、しまり中程度
 - 6 品種色土層 ローム粒を含む、しまり中程度

第 86 図 中・近世土坑 (1)

4 土坑

(2) 調査区と(9) R 49・S 49 調査区からは、それぞれ単独で土坑が1基ずつ検出された。それに対して(4)本調査区からは、溝状遺構(4)SD006の東側から18基、西側から25基の土坑がまとめて検出された。また(10) O 50・P 50 調査区からは、土壤墓が2基検出された。

(2) SK001 (第86図、図版10・28)

M 48-51に位置する長方形土坑である。規模は長軸155cm、短軸130cm、深さ79cmである。東側で南北方向の溝状遺構に切られている。覆土は中層から上層にかけて黄白色粘土ブロック混入等の褐色土・暗褐色土が厚く堆積しており、人為的に埋め戻した可能性がある。

出土遺物の1は在地産内耳土器口縁部片である。内耳が小さく、器厚が薄く、本遺跡出土の内耳土器の中では特徴的な資料である。また煤付着の痕跡もない。2はカワラケ口縁部片である。

(4) SK007 (第86図、図版10)

N 50-46グリッドに位置するT字形土坑である。規模は長軸117cm、短軸60cmを測るが、東端短軸が95cmと南北に拡がる。深さは25cmである。覆土はロームブロック主体の單一層である。遺物は出土しなかった。

(4) SK008A・008B・008C (第86図、図版10・27・28・31・34)

N 50-75・76グリッドに位置する。長方形土坑が3基重複する。(4)SK008Aの規模は長軸240cm・短軸110cm・深さ35cmである。(4)SK008Bの規模は長軸214cm・短軸102cm・深さ30cmである。(4)SK008Cの規模は長軸150cm・短軸124cm・深さ55cmである。(4)SK008Aと(4)SK008Bが接した北西と南東に浅い掘り方が伴う。(4)SK008Cの覆土は暗褐色土主体の土層である。

出土遺物の1はカワラケで、内外面全体に煤が付着し、特に外部底面と内面口唇部はタール状に厚く付着する。ほぼ完形である。2・3は志戸呂產柿輪灯明皿で、2は完形である。4は瀬戸美濃産鉄釉小皿口縁部片である。5は瀬戸美濃産灰釉筒形鉢底部片であろうか、見込みに墨書「九」「九□」がある。6は産地不明磁器小碗体・底部片である。体部外面に松葉模様の鉄絵が残る。7~13はおはじきで、断面形がレンズ形と方形の2種がある。14・15は寛永通寶(第24表)である。この他に鉄錢2枚(図版34)が出土した。この他には非掲載であるが、瀬戸美濃産擂鉢、産地不明青土瓶、徳利などの小片が出土した。18世紀~19世紀前半主体の遺物である。

(4) SK010 (第87図、図版10)

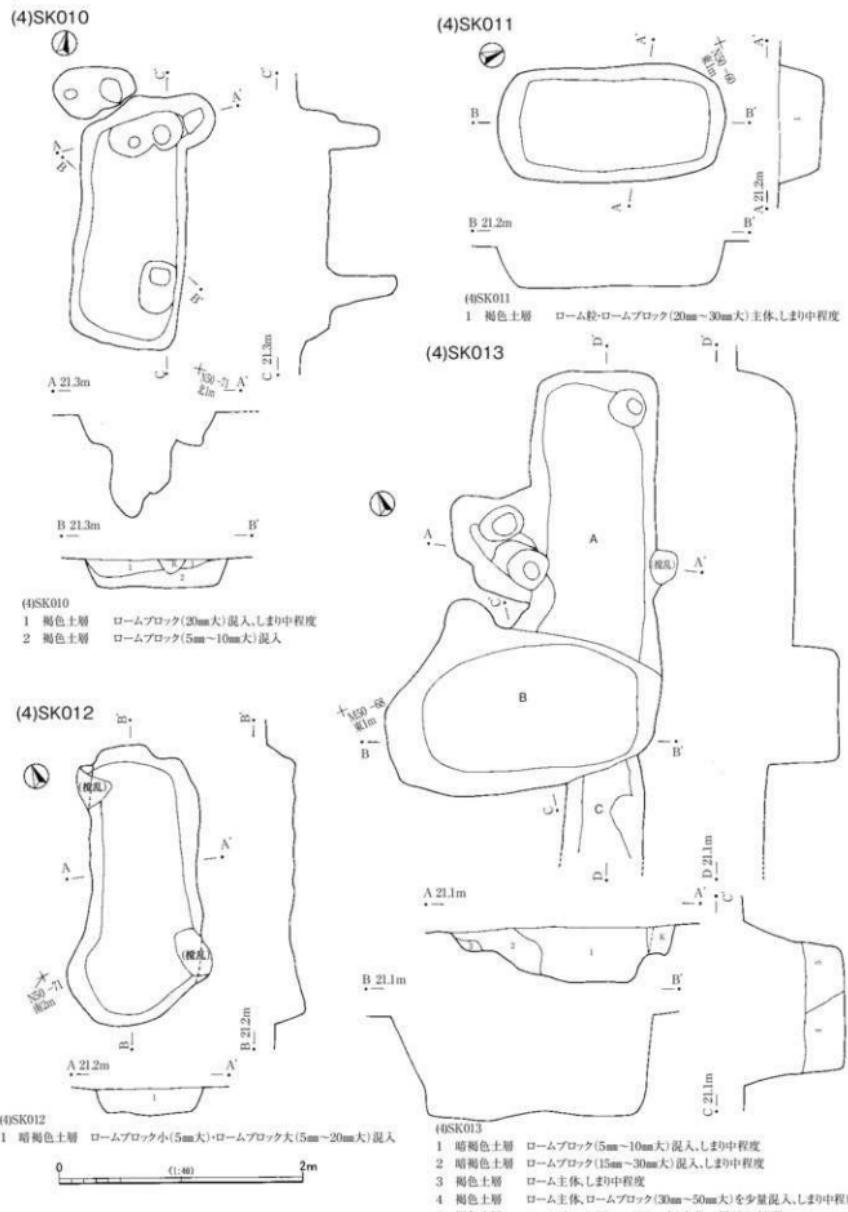
N 50-71グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸205cm、短軸90cm、深さ27cmである。また直径約30cm、深さ57cm~40cmのピット3基が壁際から検出された他、北東隅と北辺に接して直径約40cm、深さ118cm~30cmのピット3基が検出された。覆土はロームブロック混入の褐色土である。遺物は出土しなかった。

(4) SK011 (第87図、図版10)

N 50-60グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸185cm、短軸93cm、深さ32cmである。覆土はローム粒・ロームブロック主体の單一土層である。遺物は出土しなかった。

(4) SK012 (第87図、図版10)

N 50-71グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸228cm、短軸95cm、深さ20cm~25cmである。覆土は暗褐色土主体の單一土層である。遺物は出土しなかった。



第 87 図 中・近世土坑 (2)

(4)SK013A・013B（第87図、図版10）

M 50-58・68グリッドに位置する。(4)SK013Aは長方形土坑で、規模は長軸245cm・短軸103cm・深さ46cmである。(4)SK013Bは平面形がやや丸味を有した長方形土坑で、規模は長軸223cm・短軸133cm・深さ80cmである。(4)SK013Aの壁際に直径30cm～40cm、深さ37cm～80cmのピットが3基検出された。この2基の土坑が重複し、さらに(4)SK013Bの南東は幅66cm、深さ23cmの溝状の落ち込みと重複する。新旧関係は不明である。(4)SK013Aの覆土は暗褐色土主体で、(4)SK013Bの覆土下層はローム主体である。遺物は非掲載であるが、在地産土師質鉢・カワラケの小片が出土した。

(4)SK016（第88図、図版10）

N 50-45グリッドに位置する梢円形土坑である。規模は長軸116cm、短軸97cm、深さ72cmである。覆土の中下層はロームブック混入の褐色土層である。遺物は出土しなかった。

(4)SK017（第88図、図版10）

N 50-46グリッドに位置する長梢円形土坑である。規模は長軸70cm、短軸42cm、深さ15cmである。南側底面に掘り残し状の段がある。遺物は出土しなかった。

(4)SK019（第88図、図版10）

N 50-46グリッドに位置する長梢円形土坑である。規模は長軸79cm、短軸48cm、深さ20cmである。遺物は出土しなかった。

(4)SK020（第88図、図版10）

N 50-35・45グリッドに位置する梢円形土坑である。規模は長軸136cm、短軸114cm、深さ7cmである。遺物は非掲載であるが、古代土師器の小片が出土した。

(4)SK021（第88図、図版10・27）

N 50-35・45グリッドに位置する梢円形土坑である。規模は長軸111cm、短軸103cm、深さ73cmである。覆土下層はローム主体で、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物の1は、在地産の土師質台付灯明皿である。この他に非掲載であるが、瀬戸美濃産灯明皿・碗・播鉢の小片が出土した。近世後半の土坑である。

(4)SK024（第88図、図版12）

N 50-44グリッドに位置する梢円形土坑である。規模は直径62cm、深さ15cmである。

出土遺物の1はカワラケ口縁部～底部片である。この他に非掲載であるが陶磁器の小片が出土した。近世後半の土坑である。

(4)SK027（第88図、図版12）

N 50-84グリッドに位置する梢円形土坑である。規模は長軸88cm、短軸70cm、深さ20cmである。遺物は出土しなかった。

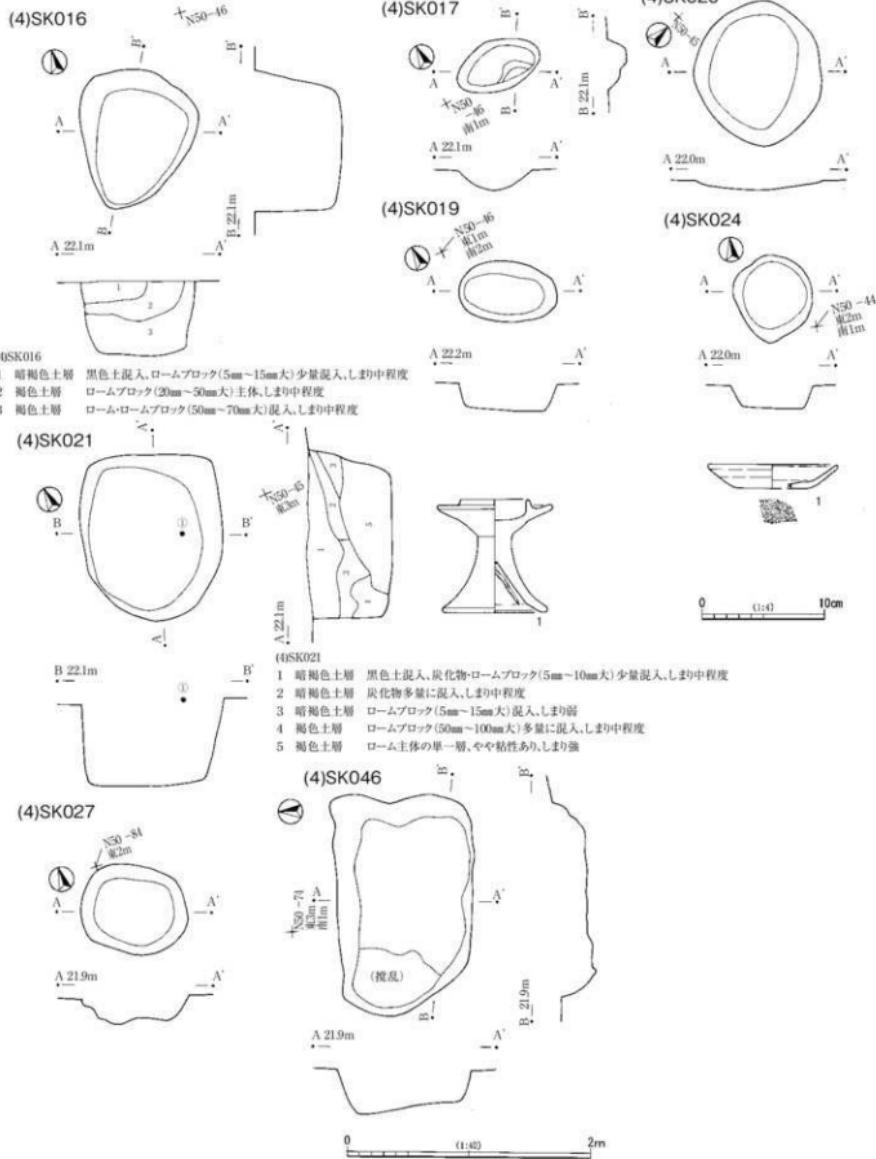
(4)SK046（第88図、図版11）

N 50-74グリッドに位置する。西端が幅狭な長方形土坑である。規模は長軸176cm、短軸110cm、深さは29cmである。遺物は出土しなかった。

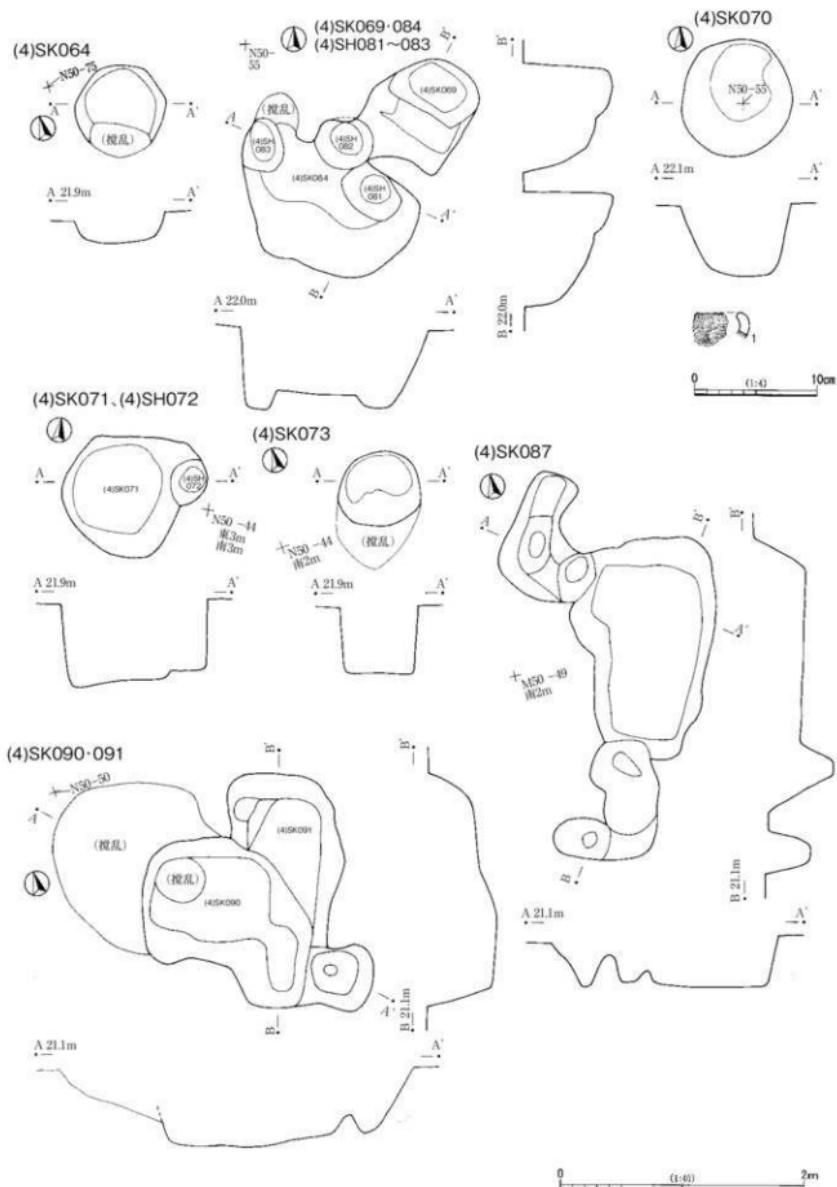
(4)SK064（第89図、図版11）

N 50-75グリッドに位置する円形土坑である。規模は直径71cm、深さ25cmである。遺物は出土しなかった。

(4)SK069・SK084（第89図、図版13）



第88図 中・近世土坑(3)



第89図 中・近世土坑(4)

N 50-55 グリッドに位置する。(4)SK069 は直径 80cm、深さ 72cm の楕円形土坑で、南西側に深さ 52cm の段があり、2 基の土坑の重複である。また、南西側で(4)SH082 のピットを介して(4)SK084 と接している。(4)SK084 は長軸 140cm、短軸 100cm、深さ 56cm の長楕円形土坑で、(4)SH081・(4)SH083 のピットと重複する。遺物は出土しなかった。

(4)SK070 (第 89 図、図版 13)

N 50-44・45・54・55 グリッドに位置する楕円形土坑である。規模は直径 90cm～94cm、深さ 60cm である。出土遺物の 1 は瓦質香炉口縁部片である。

(4)SK071 (第 89 図、図版 13)

N 50-44 グリッドに位置する楕円形土坑である。規模は直径 92cm～106cm、深さ 65cm である。その東端で(4)SK072 のピットと重複する。遺物は出土しなかった。

(4)SK073 (第 89 図、図版 13)

N 50-44 グリッドに位置する楕円形土坑である。規模は直径 60cm～65cm、深さ 55cm である。遺物は出土しなかった。

(4)SK087 (第 89 図、図版 11)

M 50-49 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 174cm、短軸 90cm～110cm、深さ 40cm である。南側と北西側で各 2 基のピットと接する。ピットの規模は直径 40cm～50cm、深さ 36cm～53cm である。遺物は非掲載であるが、在地産土師質土器の小片が出土した。

(4)SK090・091 (第 89 図、図版 11)

N 50-50 グリッドに位置する。(4)SK090 は長軸 140cm、短軸 100cm、深さ 60cm の長方形土坑で、南東隅に張り出し状の掘り方や、直径 50cm、深さ 54cm のピットが検出された。(4)SK091 はその南半が(4)SK090 と重複し、残っている規模は長軸 120cm、短軸 85cm、深さ 40cm である。2 基の土坑の新旧関係は不明である。遺物は出土しなかった。

(4)SK092 (第 90 図、図版 11)

N 50-50 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 177cm、短軸 110cm、深さ 17cm である。南西隅で直径 50cm、深さ 42cm のピットと重複する。遺物は出土しなかった。

(4)SK093 (第 90 図、図版 11)

N 50-50 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 130cm、短軸 90cm～115cm、深さ 27cm である。遺物は出土しなかった。

(4)SK094 (第 90 図、図版 11)

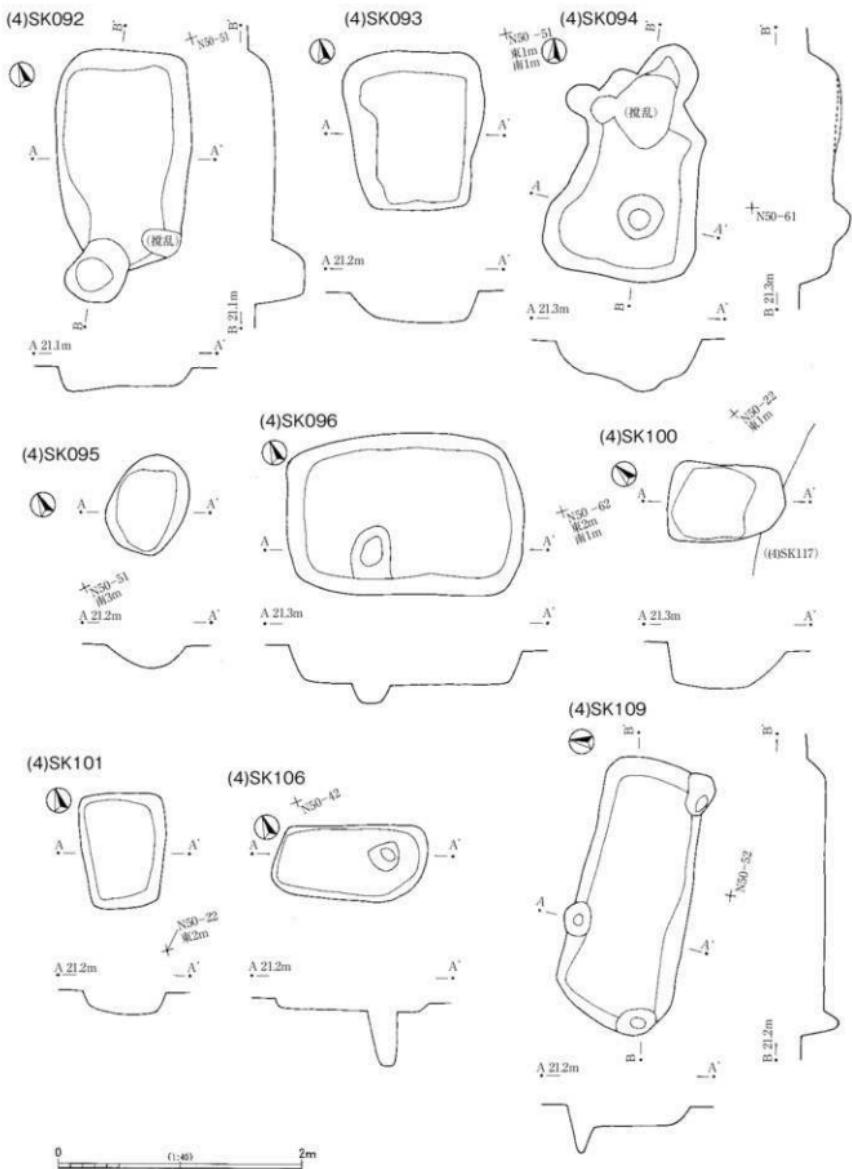
N 50-50・60 グリッドに位置する北側が幅狭な長方形土坑である。規模は長軸 165cm、短軸 95cm～125cm、深さ 27cm である。底面中央付近から直径 35cm、深さ 15cm のピットが検出された。遺物は出土しなかった。

(4)SK095 (第 90 図、図版 11)

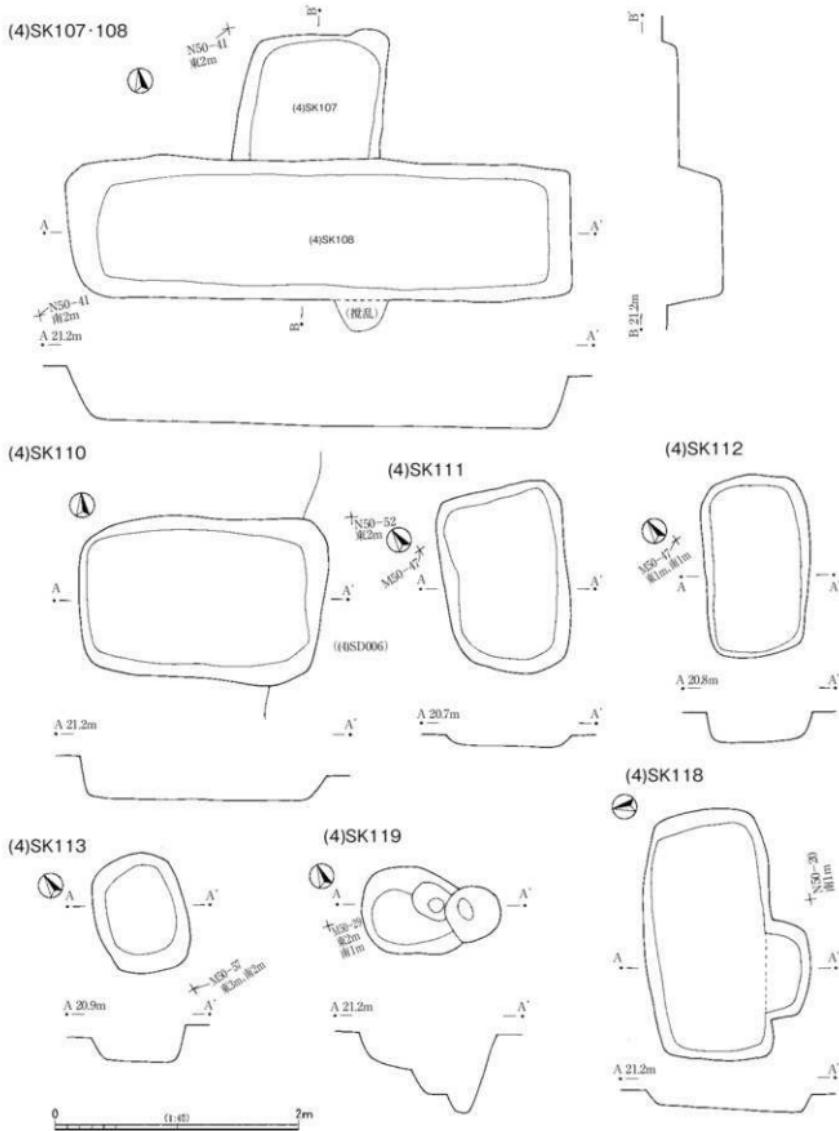
N 50-51 グリッドに位置する楕円形土坑である。規模は長軸 80cm、短軸 62cm、深さ 18cm である。遺物は出土しなかった。

(4)SK096 (第 90 図、図版 11)

N 50-61 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 195cm、短軸 130cm、深さ 30cm である。中央南端に直径 35cm、深さ 14cm のピットが検出された。遺物は出土しなかった。



第90図 中・近世土坑(5)



第91図 中・近世土坑(6)

(4)SK100 (第 90 図、図版 12・13)

N 50-22 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 95cm、短軸 64cm、深さ 33cm である。遺物は非掲載であるが、在地産土師質土器の小片が出土した。

(4)SK101 (第 90 図)

N 50-12 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 95cm、短軸 55cm～70cm、深さ 16cm である。遺物は非掲載であるが、在地産土師質土器の小片が出土した。

(4)SK106 (第 90 図、図版 11)

N 50-41・42 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 123cm、短軸 60cm、深さ 8cm である。東側中央の底面から直径 25cm、深さ 35cm のピットが検出された。遺物は出土しなかった。

(4)SK107 (第 91 図、図版 11)

N 50-41 グリッドに位置する長方形土坑である。南側が(4)SK108 と重複する。残っている規模は長軸 100cm、短軸 116cm、深さ 12cm である。遺物は出土しなかった。

(4)SK108 (第 91 図、図版 11)

N 50-41-42 グリッドに位置する長方形土坑である。(4)SK107 と重複する。規模は長軸 413cm、短軸 115cm、深さ 45cm である。遺物は出土しなかった。

(4)SK109 (第 90 図、図版 11)

N 50-41・42 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 223cm、短軸 90cm、深さ 17cm である。北壁際で直径 26cm、深さ 30cm のピットが、南西隅の壁際で直径 21cm、深さ 14cm のピットが、南東隅の壁際で直径 30cm、深さ 14cm のピットがそれぞれ検出された。遺物は出土しなかった。

(4)SK110 (第 91 図、図版 11)

N 50-52 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 206cm、短軸 130cm、深さ 30cm である。遺物は出土しなかった。

(4)SK111 (第 91 図、図版 11)

M 50-47 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 152cm、短軸 101cm、深さ 13cm である。遺物は出土しなかった。

(4)SK112 (第 91 図、図版 11)

M 50-47 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 148cm、短軸 86cm、深さ 26cm である。遺物は出土しなかった。

(4)SK113 (第 91 図、図版 11)

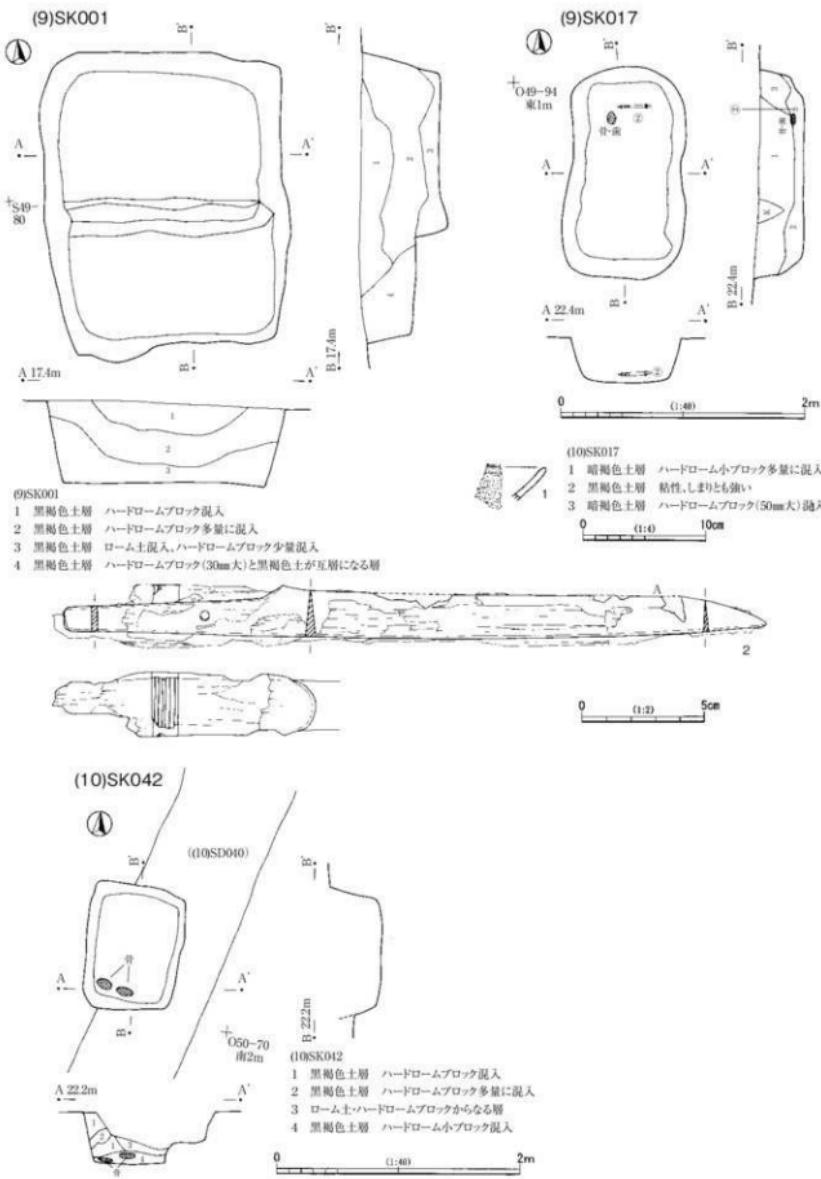
M 50-57 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 96cm、短軸 75cm、深さ 32cm である。遺物は出土しなかった。

(4)SK118 (第 91 図、図版 11)

M 50-19・29、N 50-10・20 グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸 205cm、短軸 104cm、深さ 20cm で、南側に幅 76cm、長さ 34cm の張り出し状の掘り方を伴う。遺物は出土しなかった。

(4)SK119 (第 91 図、図版 11)

M 50-29 グリッドに位置する梢円形土坑である。規模は長軸 94cm、短軸 70cm、深さ 30cm～40cm である。その南東側で、直径 25cm、深さ 50cm と、直径 45cm、深さ 60cm のピットと重複する。遺物は出土しなかった。



第 92 図 中・近世土坑 (7)

(9)SK001 (第92図、図版14)

S 49-70・80グリッドに位置する長方形土坑である。規模は長軸236cm、短軸197cmである。また底面中央に段差を作り、北半の深さは67cm、南半の深さは46cmである。覆土は黒褐色土主体で、ロームブロックが互層に混入する。遺物は出土しなかった。

(10)SK017 (第92図、図版14・28・33)

O 49-94グリッドに位置する長方形土壙墓である。規模は長軸173cm、短軸93cm～101cm、深さ36cmである。覆土は底面付近が黒褐色土で、中下層はロームブロック混入の暗褐色土である。

出土遺物の1はカワラケ口縁部片で、覆土一括の出土である。2は腰刀で、刀長20.6cm・最大幅2.1cm・最大厚0.4cm、柄長8.1cm・幅1.6cm～1.0cm・厚0.25cmである。両面全面に木質鞘片が付着し、柄中央付近の片面に青銅製鞘巻状飾片が付着する。また柄中央付近に目釘穴も確認できる。土壙墓の北側の底面付近から切先を西に、刃先を北に向けた状態で出土した。この他に骨片と歯が腰刀の西側で出土した。

(10)SK017 出土人骨について（渡辺 新）

出土人骨は11点の歯牙と微細な骨片2点にとどまる。微細な骨片は部位同定できない。歯牙は歯冠が形状を留め歯種の同定が可能であるものの、エナメル質は光沢を失い表面が風化して脆弱であり、毀損のおそれがあるので計測は実施しなかった。その観察は主に咬耗の程度を主眼とし、以下列記する。

上C 右：尖頭が咬耗により平坦化し象牙質が斑状に露出。

上P1右：頬側咬頭では象牙質が点状に露出、舌側咬頭ではエナメル質に切子状の耗。

上P2右：耗はエナメル質に局限し軽微。

上M1右：近心舌側咬頭で象牙質が点状に露出するほかは、耗はエナメル質に局限し軽微、hypocone退化傾向4。

上M2右：耗はエナメル質に局限し軽微、hypocone退化傾向3+。

上M3右：耗はエナメル質に局限し極軽微、hypocone退化傾向3+。

下P1右：耗はエナメル質に局限し軽微。

下P2右：耗はエナメル質に局限し軽微。

下M1左：頬側近／遠心咬頭、遠心咬頭では象牙質が点状に露出、舌側近／遠心咬頭ではエナメル質に切子状の耗。

下M2左：耗はエナメル質に局限し軽微。

下M3右：耗はエナメル質に局限し極軽微、第6咬頭。

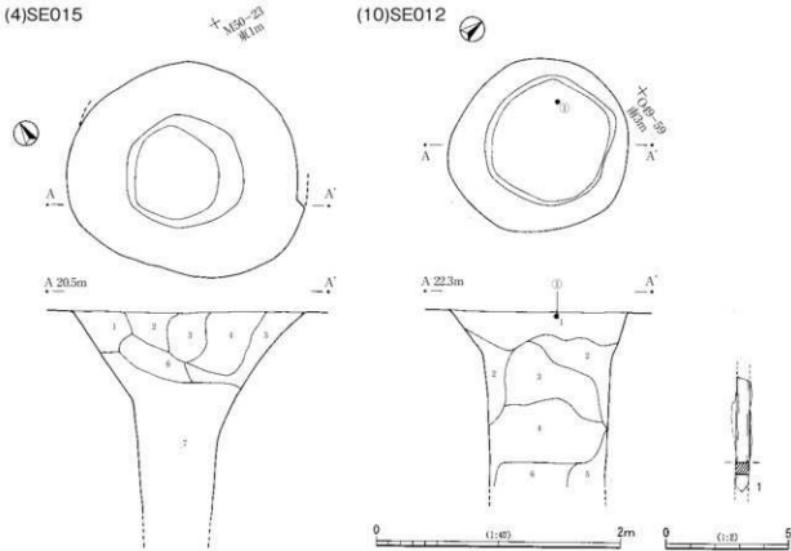
およそ12歳で萌出するM2の咬耗が象牙質に及んでおらず、およそ18歳で萌出するM3の咬耗が極軽微であることを鑑みるならば、壮年であってもかなり若いと推定される。

(10)SK042 (第92図、図版14)

O 50-79グリッドに位置する長方形土壙墓である。規模は長軸100cm、短軸76cm、深さ40cmである。南側の底面付近で骨片出土が確認された。また東側が(10)SD040と重複するが、新旧関係は不明である。覆土はロームブロック混入の黒褐色土主体である。遺物は出土しなかった。

5 井戸

(4)本調査区の地下式坑・方形竪穴遺構・掘立柱建物跡等の遺構群から西に18m離れた地点と、(10)O 50・P 50調査区の掘立柱建物跡から北に26m離れた地点で、それぞれ単独で合計2基の井戸が検出された。



(4)SE015

- 1 暗褐色土層 ローム粒少量混入、しまり中程度
- 2 暗褐色土層 ロームブロック(10mm~50mm大)多量に混入、しまり中程度
- 3 明褐色土層 ロームブロック(20mm~60mm大)多量に混入、しまり中程度
- 4 暗褐色土層 灰化物・黒色土を含む、しまり中程度
- 5 褐色土層 ロームブロック(20mm~30mm大)混入、しまり中程度
- 6 褐色土層 ロームブロック(30mm~50mm大)混入、しまり中程度
- 7 褐色土層 比較的単一、ロームブロック(5mm~10mm大)少量混入、しまり弱い、粘性あり

- (10)SE012
- 1 黒褐色土層 粘性強い
 - 2 黒褐色土層 しまり弱い、ボソボソ
 - 3 黑褐色土層 ハードローム小・ブロック少量混入
 - 4 黑褐色土層 3層と類似するが、3層より色調暗い
 - 5 黑褐色土層 ハードロームブロック混入
 - 6 黑褐色土層 均質

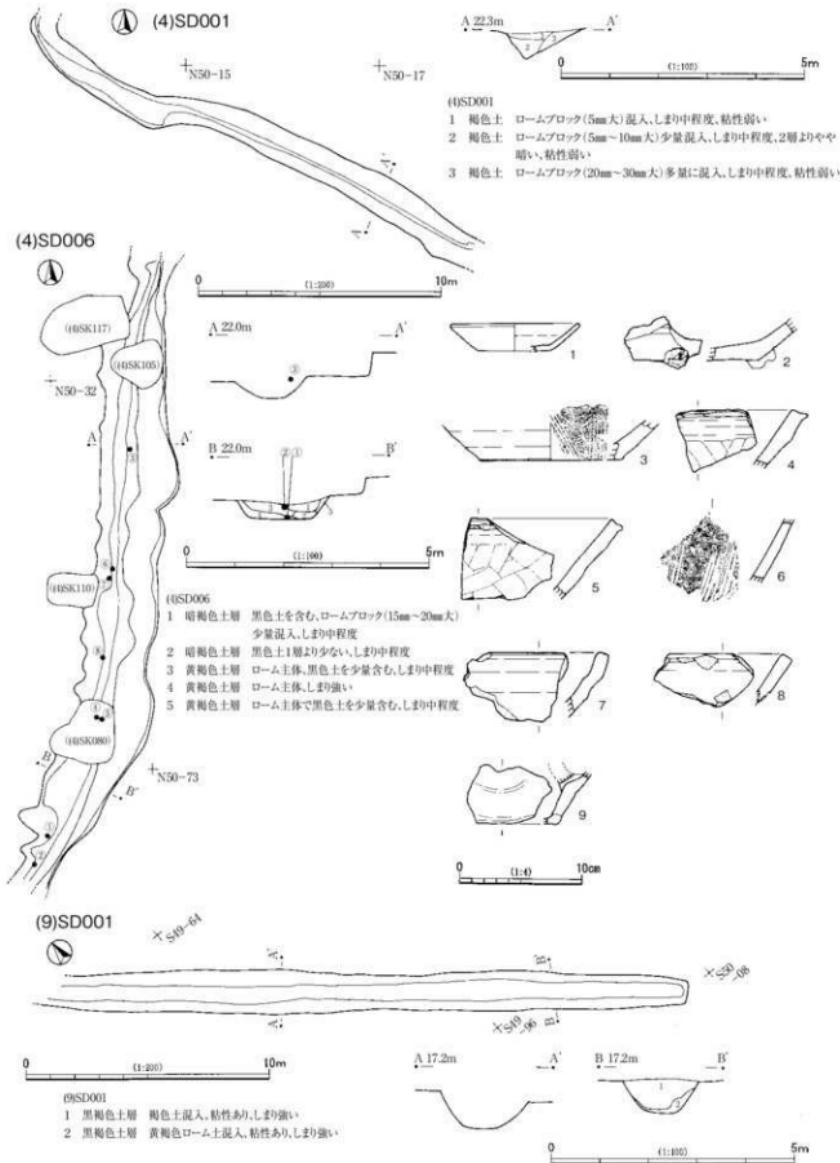
第93図 中・近世井戸

(4)SE015 (第93図、図版13)

M 50-22・23 グリッドに位置する。検出面は直径 170cm~197cm の楕円形で、その下は斜めに掘り込んでいる。検出面から 1m 下は直径 65cm の円形で、それより下はほぼ直に掘り込んでいる。約 1.5 m 掘り下げた時点でボーリング棒を用いて底面探索を行い、さらに 1m 以上深いことを確認し調査を終了した。なお発掘した範囲では、井戸枠など井戸に付帯する施設は存在しない。覆土上層はロームブロックの混入が多く、中層以下は褐色土の單一土層であった。人為的に埋め戻された可能性がある。遺物は非掲載であるが、カワラケ小片が出土した。

(10)SE012 (第93図、図版15・33)

O 49-68・69 グリッドに位置する。検出面は直径 142cm~146cm の楕円形で、その下は斜めに掘り込んでいる。検出面から 40cm 下は直径 106cm の円形で、それより下はほぼ直に掘り込んでいる。検出面から 120cm 下は直径 93cm の円形である。約 1.5 m 掘り下げた時点でボーリング棒を用いて底面探索を行い、さらに 1m 以上深いことを確認し調査を終了した。なお発掘した範囲では、井戸枠など井戸に付帯する施設



第94図 中・近世溝状遺構（1）

は存在しない。覆土は黒褐色土主体である。

出土遺物の1は棒状鉄製品である。長さ4.7cm、幅0.5cm、厚0.5cmである。

6 溝状遺構

(10) N 48・N 49 調査区からは南北溝2条と東西溝1条からなる中・近世溝が単独で検出された。(4)本調査区からは、中・近世の地下式坑・方形竪穴遺構・掘立柱建物跡等を区画する中世の南北溝1条と、近世の東西溝が1条検出された。(10) O 50・P 50 調査区からは中世の掘立柱建物跡・地下式坑・土壤墓・ピット群と接して、中世の東西溝2条と南北溝1条が検出された。(10) Q 50・R 50 調査区と(9) R 49・S 49 調査区、そして(10) T 49 調査区からは、各1条ずつ北西から南東へは直線状に走る中・近世の溝が検出された。このうち2条は道路として使用された痕跡がある。また(12) S 49・T 49 調査区からは中・近世の東西溝が2条検出された。このうち1条は道路として使用された痕跡がある。

(4)SD001 (第94図)

N 50-03・13～16・26～27 グリッドに位置する東西溝で、約20mを調査したが北西側は北へとやや向きを変えて延び、南東側はさらに直線状に延びる。N 50-15より東側の規模は上幅100cm～150cm、下幅10cm、深さ27cm～51cmで、断面形状はV字形である。N 50-14付近の規模は、上幅200cm～270cm、下幅10cm～170cm、深さ7cm～40cmで、断面形状は皿形である。覆土は褐色土主体である。遺物は非掲載であるが、瀬戸美濃産染付け碗や在地産土師質土器の小片が出土した。近世後半の溝状遺構である。

(4)SD006 (第94図、図版13・29)

N 50-12・13～81・82 グリッドに位置する南北溝で、約26mを調査したが南北にさらに延びる。また南北溝の東側には、幅20cm～150cmの平場を挟んで台地を深さ約45cm直に掘り込んだ壁面がある。この台地整形遺構と南北溝は一連の遺構であり、これらを(4)SD006と捉えた。南北溝の規模は上幅70cm～190cm、下幅40cm～120cm、深さ25cmで、断面形状は浅い皿形である。この(4)SD006を境に、西側の遺構検出面は東側よりも40cm～60cm下がっている。なお、直に掘り込んだ壁面は重複する地下式坑の(4)SK103より北側付近で斜めの掘込みに変わり、西側の南北溝と一体化する。また、重複する地下式坑の(4)SK080より南側付近で壁面と南北溝の間の平場の幅が徐々に狭まり、直の壁面と南北溝が一体化する。

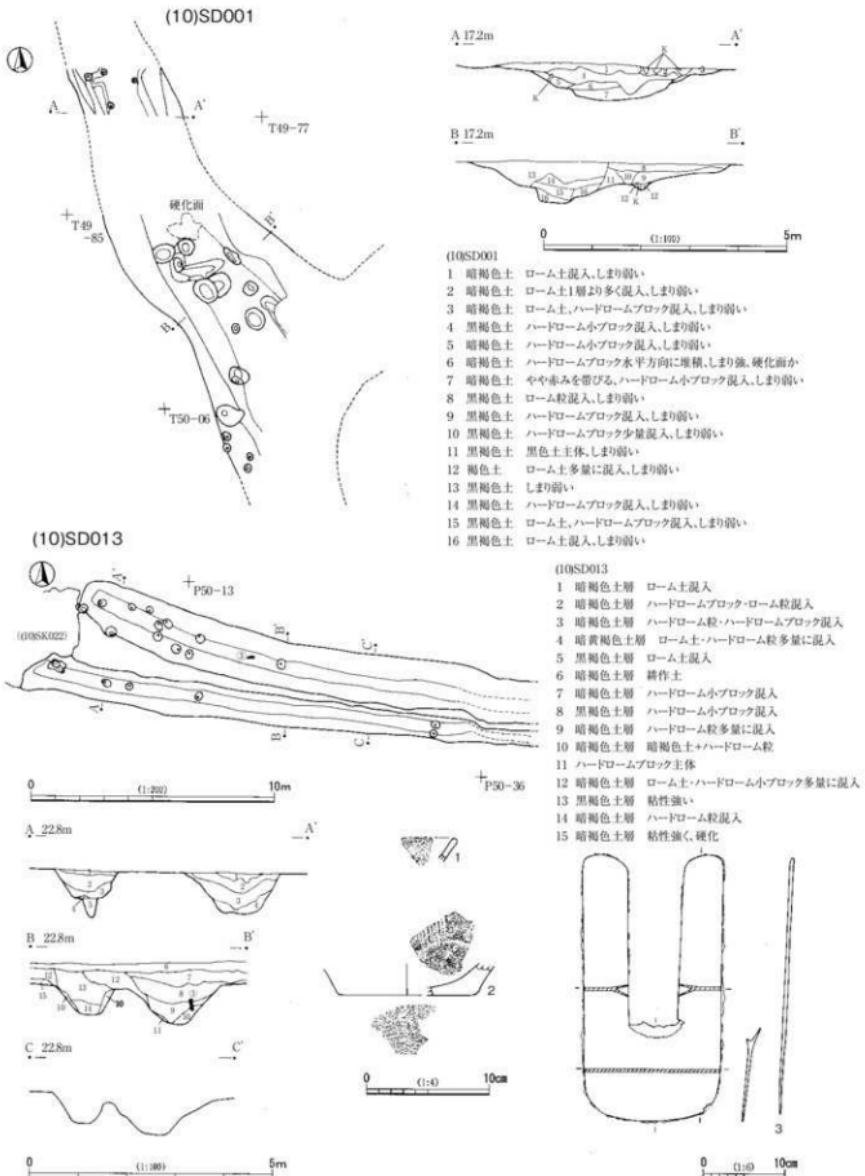
出土遺物の1はカワラケ口縁部～底部片である。2は古瀬戸折縁深皿もしくは直線大皿の底部片である。3は瀬戸美濃産猪軸擂鉢体部～底部片である。4・5は常滑産片口鉢口縁部片である。6・7は在地産土師質擂鉢体部片と口縁部片である。8・9は在地産内耳土器口縁部片と体部片で、外面に煤が付着する。この他に、非掲載であるが常滑産甕と瓦質土器の小片が出土した。

(9)SD001 (第94図、図版14)

S 49-52・53、62～64・73～75、86・87、96・97 グリッドに位置する。北西から南東に延びる直線溝で、25.7mを調査したがさらに北西側に延びる。溝の規模は上幅130cm～160cm、下幅50cm～80cm、深さ60cm～70cmで、断面形状は逆台形である。覆土は黒褐色土主体である。遺物は非掲載であるが在地産土師質土器の小片が出土した。

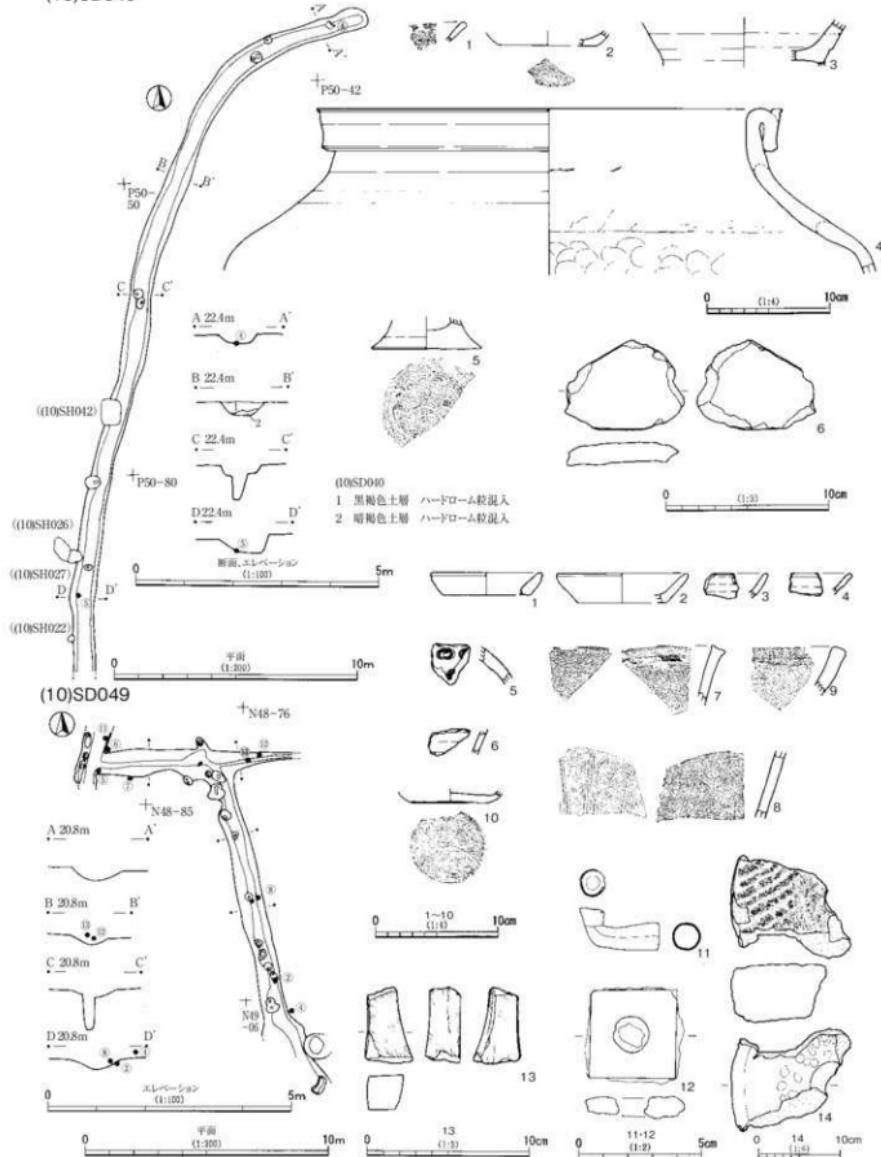
(10)SD001 (第95図)

T 49-64・65・75・76・85・86・96・97、T 50-06 グリッドに位置する。北西から南東に延びる直線溝で、約20m調査したがさらに北西側と南東側に延びる。溝の規模は上幅300cm～550cm、下幅140cm～250cm、深さ50cm～82cmで、断面形状は皿形である。部分的であるが底面に硬化面と深さ約10cm～20cmの凸凹が



第95図 中・近世溝状遺構(2)

(10)SD040



第96図 中・近世溝状遺構（3）

あり、道路としての使用痕跡と考えられる。覆土はロームブックが混入した黒褐色土が主体である。またこの溝と直交し、T 49-97 付近から北東方向に延びる溝 1 条のプランを確認した。遺物は出土しなかった。

(10)SD013 (第 95 図、図版 15・29・33)

P 50-11～15・21～26 グリッドに位置する。断面形状が逆台形の東西溝 2 条である。北側の溝の規模は上幅 200cm、下幅 45cm～60cm、深さ 70cm である。南側の溝の規模は上幅 120cm、下幅 50cm、深さ 30cm～50cm である。約 20m を調査したが両溝とも東側はさらに延びる。また、両溝の西側を中心とした底面と壁面から、直径 30cm～40cm、深さ 20cm～40cm のビットが検出された。両溝の新旧関係は、南側の溝が古く北側の溝が新しい。覆土は両溝とも黒褐色土・暗褐色土主体で、凹レンズ状の堆積であることから自然堆積の可能性がある。

出土遺物の 1 はカワラケ口縁部片である。2 は瀬戸美濃産鉄軸捕鉢底部片である。3 は完形の鉄製釘先で、北側溝の覆土下層から出土した。長さ 32.8cm、幅 17.0cm、厚 0.35cm である。

(10)SD040 (第 95 図、図版 15・27・29・33)

P 50-31・32・40・50・60・70、O 50-79・89・99 グリッドに位置する。南北溝で約 30m を調査したが、南側はさらに延び北側は東に向かって途切れる。溝の規模は上幅 80cm～100cm、下幅 40cm～50cm、深さ 25cm～38cm で、断面形状は浅い皿形である。また、直径 25cm～40cm、深さ 35cm～55cm のビットが溝の底面などに点在する。覆土は黒褐色土主体である。

出土遺物の 1・2 はカワラケ片である。3 は常滑産片口鉢底部片である。4 は常滑産甕口縁部～体部片である。5 は古瀬戸灰釉尊式花瓶底部片である。6 は常滑産甕体部片で、割れ口に 2 面の砥石転用痕跡がある。その他、巻貝小片が 1 点ずつ 2 か所から出土した。

(10)SD049 (第 96 図、図版 15・29・32・33)

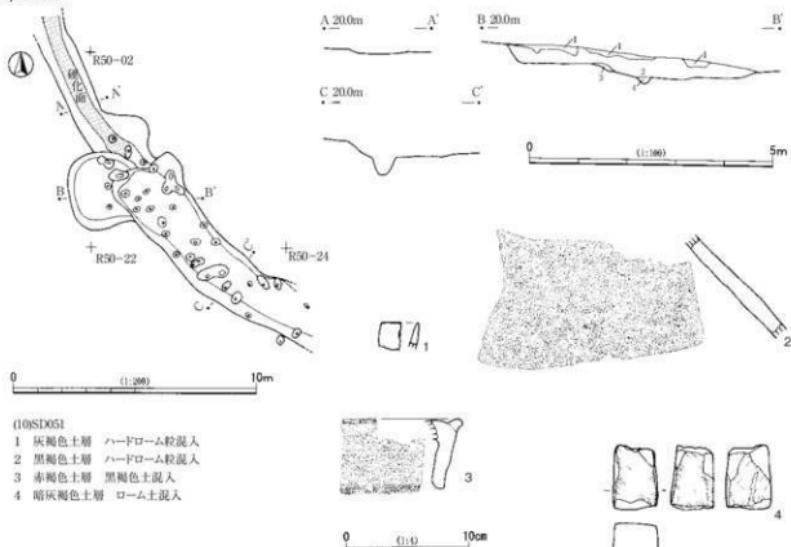
N 48-74～76・85・96、N 49-06 グリッドに位置する。南北溝 2 条と東西溝 1 条が繋がり、さらに南北と東に延びる。南北溝は約 2.5m と約 15m を、東西溝は約 8.5m を調査した。溝の規模は各溝に大きな違いはない、上幅 90cm～100cm、下幅 20cm～50cm、深さ 20cm～30cm で、断面形状は浅い皿形である。ただし東西溝の東側は徐々に幅狭になり、調査区端では上幅 20cm、下幅 6cm である。また、各溝の底面等から直径 25cm～50cm、深さ 7cm～63cm のビットを多く検出した。

出土遺物の 1・2 はカワラケ口縁部片である。3～6 は瀬戸美濃製品で、3 は灰釉丸皿口縁部片、4 は志野丸皿口縁部片、5 は縁軸壺体部片、6 は鉄軸天目茶碗体部片である。7・8 は在地土師質捕鉢口縁部片で、8 の掘口は 5 条である。9 は在地内耳土器口縁部片で、外面に煤が付着する。10 はカワラケ底部片で、底部は静止糸切り無調整である。11 は青銅製キセル雁首で、長さ 3.25cm、高さ 1.7cm、雁首径 1.1cm、吸口径 1.1cm である。12 は板状鉄製品で、幅 3.5cm × 3.6cm、厚さ 0.25cm である。中心に丸穴が開いている。13 は砥石で 4 側面に使用痕跡がある（第 23 表）。14 は安山岩製の下白片で、上面の 7 条の副溝や貫通する芯棒孔の一部が残る。復元径 27.0cm、厚さ 6.4cm～7.1cm である。この他にアカニシ等の巻貝小片が 4 か所から 1 点ずつ出土した。

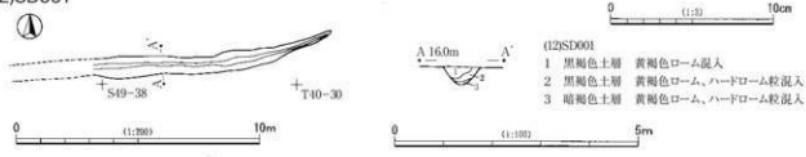
(10)SD051 (第 97 図、図版 15・29・33)

R 49-91、R 50-01・11・12・23・24 グリッドに位置する。北西から南東に延びるほぼ直線の溝で、約 17m を調査したがさらに北西と南東に延びる。調査した北西部の規模は上幅 110cm、下幅 60cm、深さ約 3cm の浅い溝で、約 60cm 幅の硬化面があり道としての使用痕跡がある。また、中央付近から南東部分の

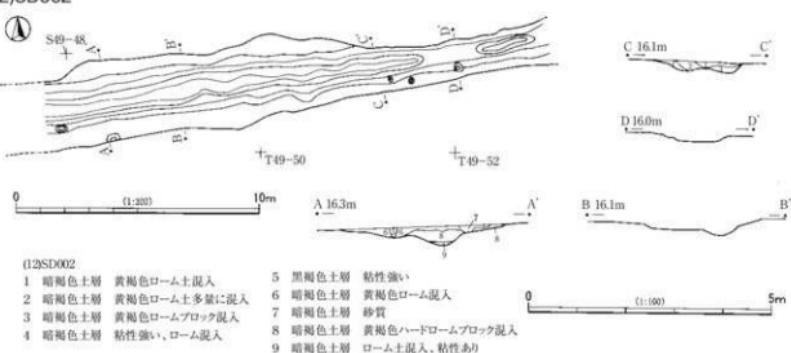
(10)SD051



(12)SD001

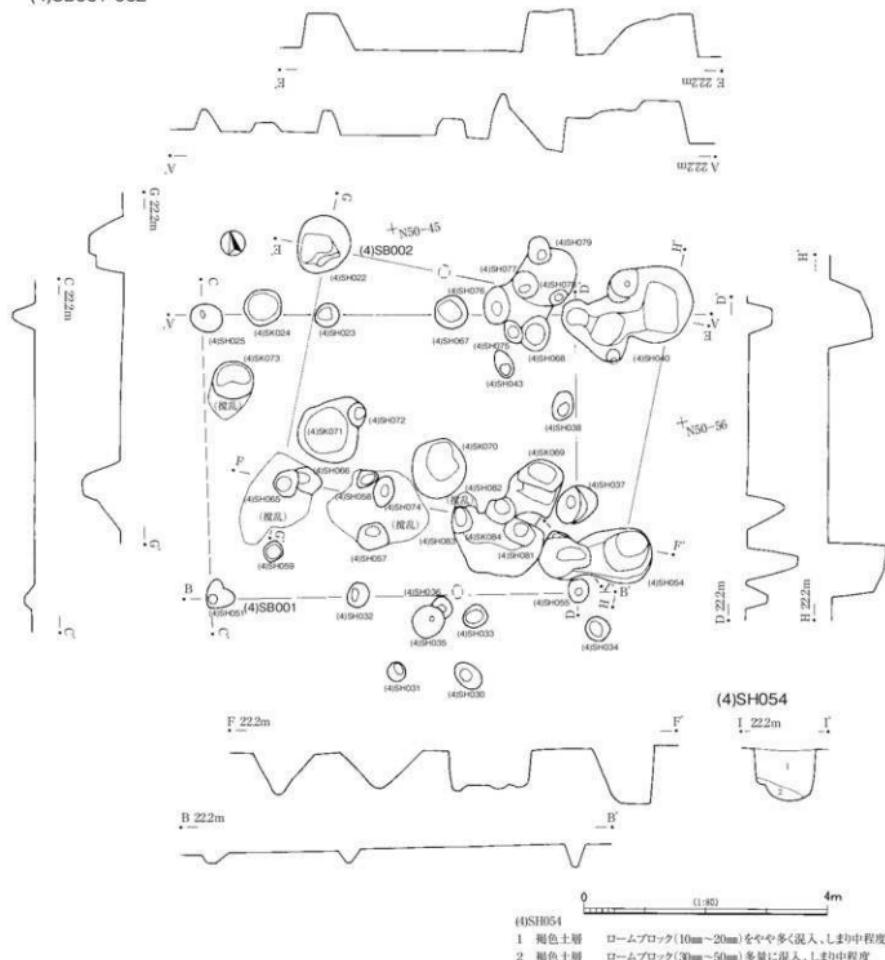


(12)SD002



第97図 中・近世溝状構(4)

(4)SB001-002



第98図 中・近世掘立柱建物跡（1）

規模は上幅 200cm～240cm、下幅 120cm～180cm、深さ 10cm～15cmで、断面形状は浅い皿形である。溝の底面から直径 20cm～50cm、深さ 5cm～30cm のピットを多く検出した。覆土は黒褐色土主体である。

出土遺物の 1 は瀬戸美濃産天目茶碗口縁部片である。2・3 は常滑産窯の体部片と口縁部の折り返し部分の破片である。4 は砥石で 4 個面に使用痕跡がある（第 23 表）。

(12)SD001 (第 97 図)

S 49-28・29、T 49-20 グリッドに位置する東西溝で、約 10m を調査したがさらに西に延びる。また、東側は徐々に浅くなって途切れる。溝の規模は上幅 26cm～84cm、下幅 10cm～20cm、深さ 8cm～23cm で、断面形状は底部が丸味を帯びた三角形である。覆土は黒褐色土主体である。遺物は出土しなかった。

(12)SD002 (第 97 図)

S 49-47～49、T 49-40～42 グリッドに位置する。(12)SD001 から南に 5m 離れてほぼ平行する東西溝である。約 21m を調査したがさらに東西に延びる。溝の規模は上幅 160cm～300cm、下幅 60cm、深さ 15cm～35cm である。断面形状は浅い皿形であるが轍状の凹凸が認められ、道としての使用痕跡がある。また、溝の南側に直径 30cm～50cm、深さ 10cm～30cm のピットが点在する。覆土はロームブック混入の暗褐色土が主体である。遺物は出土しなかった。

7 挖立柱建物跡・ピット群・ピット

(4) 本調査区で(4)SD006 の東側から 2 棟、西側から 1 棟の中・近世の掘立柱建物跡を検出した。調査段階では掘立柱建物跡 1 棟、柵列 1 条に復元したが、整理段階で 3 棟の掘立柱建物跡に見直した。(10) O 50・P 50 調査区からは、中世の掘立柱建物跡 1 棟が検出された。また、この他にピット群が 2か所と(4) SB001・002 周辺等から多くのピットを検出した。

(4)SB001 (第 98 図、図版 13)

N 50-44・45・54・55 グリッドに位置する。桁行 3間 (6m) × 梁間 1間 (4.6m) の建物跡である。各柱穴の直径は 35cm～50cm、深さは 16cm～37cm で、掘り方は全体的に小さい。また、(4)SB002 と重複するが新旧関係は不明である。柱穴から遺物は出土しなかった。

(4)SB002 (第 98 図、図版 13)

N 50-34・44～46・54・55 グリッドに位置する。桁行 3間 (5.8m) × 梁間 1間 (3.8m) の建物跡である。各柱穴の直径は 30cm～110cm、深さは 53cm～93cm で、掘り方は全体的に深い。柱穴から遺物は出土しなかった。

(4)SB003 (第 99 図、図版 34)

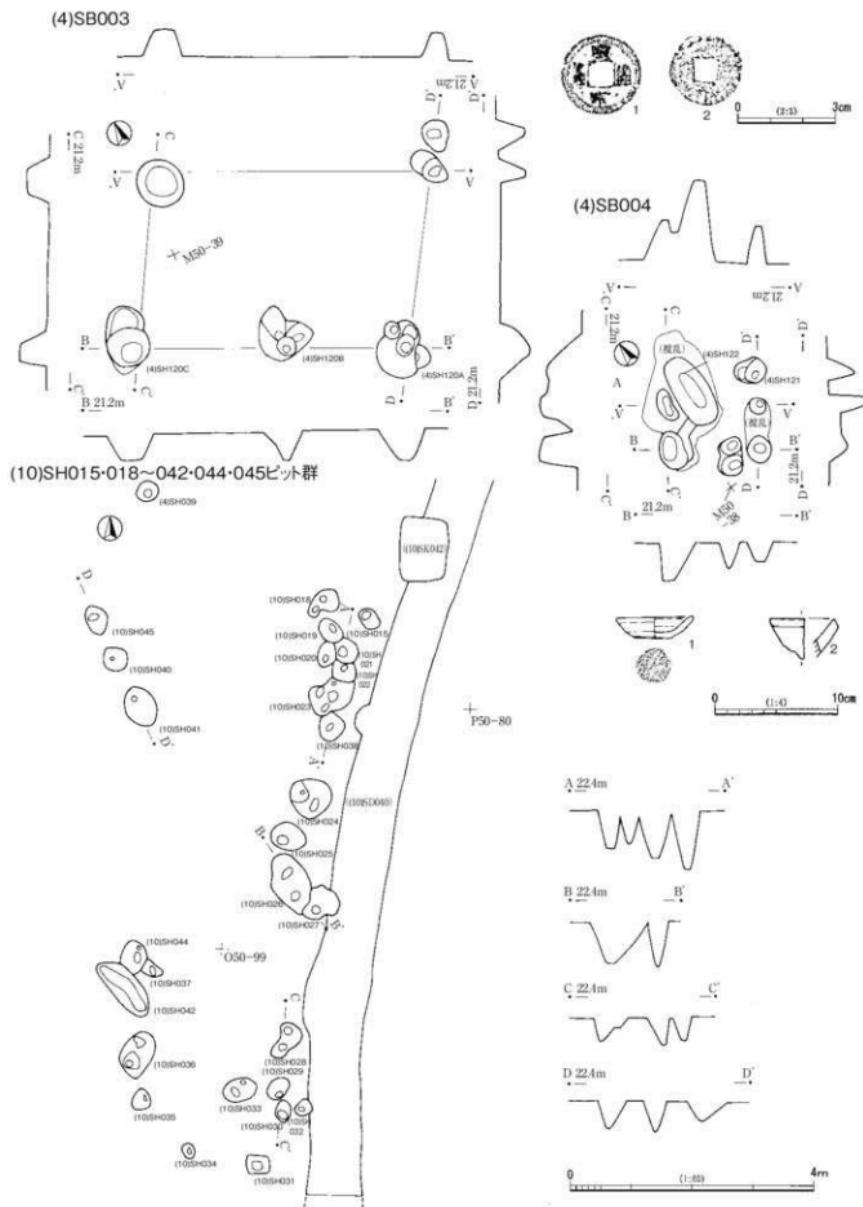
M 50-29・38～N 50-30 グリッドに位置する。桁行 2間 (4.5m) × 梁間 1間 (2.9m) の建物である。各柱穴の直径は 30cm～80cm、深さは 42cm～48cm である。

出土遺物の 1 は(4)SH120B から出土した皇宋通寶（第 24 表）である。2 は(4)SH120C から出土した無文銭（第 24 表）である。

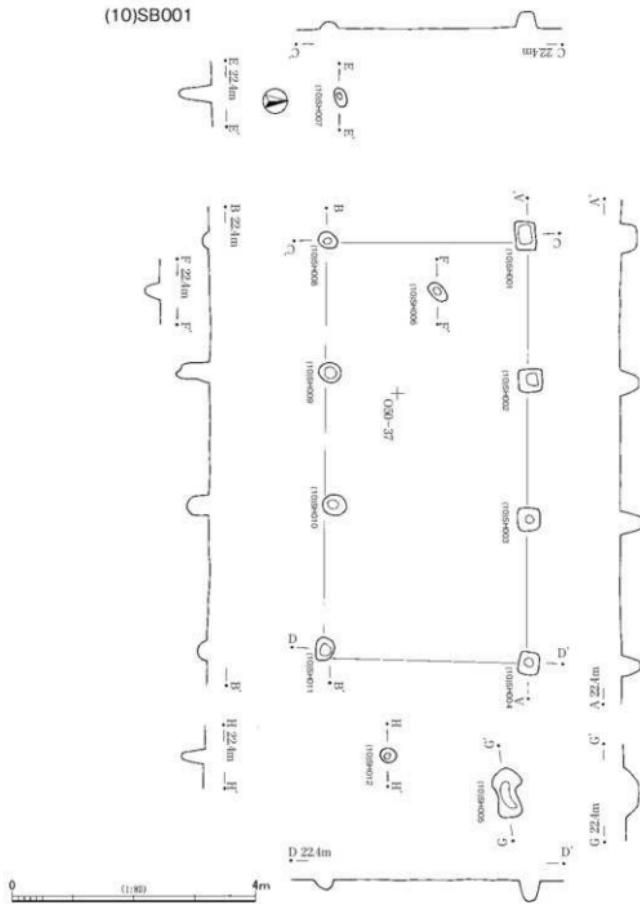
(4)SB004 (第 99 図、図版 13・27・29)

M 50-18・28 グリッドに位置する。直径 25cm～60cm、深さ 30cm～60cm のピットが 170cm 四方に 8 基集中して検出されたピット群である。長方形土坑の(4)SH122 が隣接する。その規模は長軸 123cm、短軸 56cm、深さ 130cm である。

出土遺物の 1 は完形のカワラケで、(4)SH121 からの出土である。底部は回転糸切り無調整である。2



第99図 中・近世掘立柱建物跡(2)、ピット群



第100図 中・近世掘立柱建物跡（3）

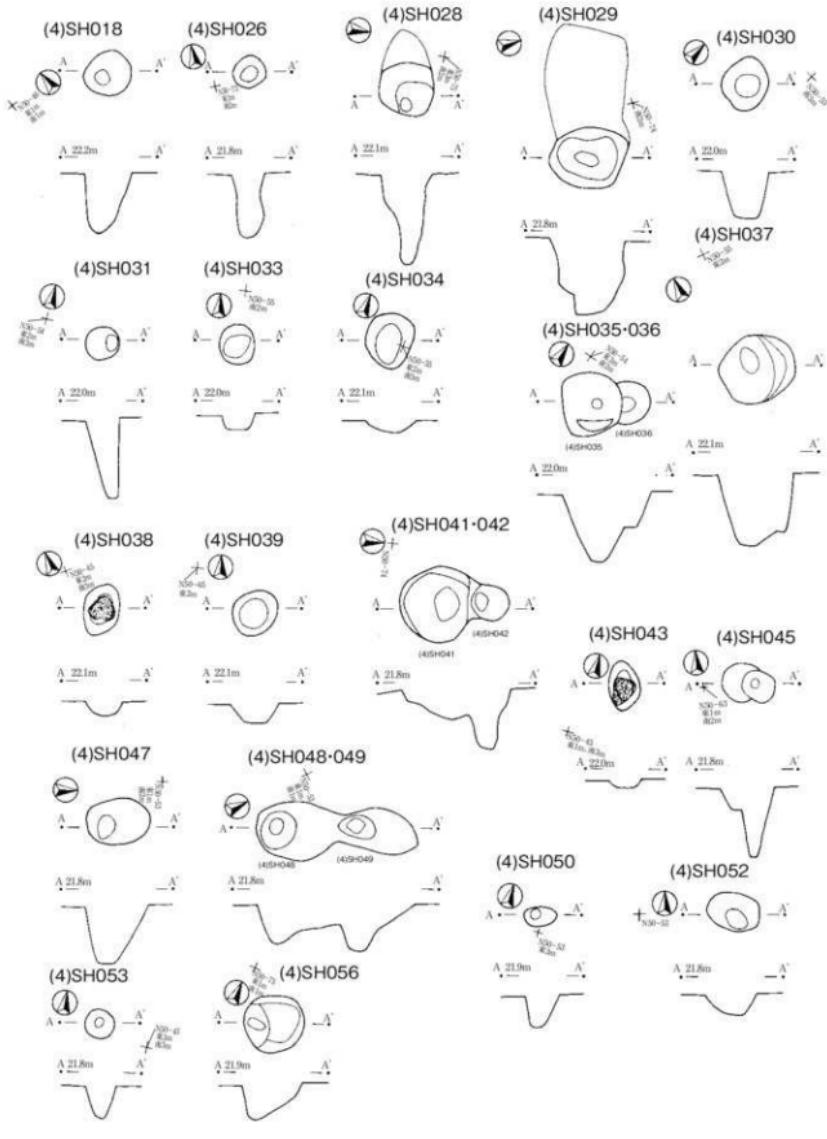
は常滑産片口鉢口縁部片で、(4)SH122からの出土である。

(10)SB001 (第100図、図版15・31)

O 50-26 ~ 28-36 ~ 38 グリッドに位置する。桁行3間 (6.8 m) × 梁間1間 (3.4 m) の建物跡である。各柱穴の直径は30cm~65cm、深さは13cm~55cmで、深さにバラツキがある。

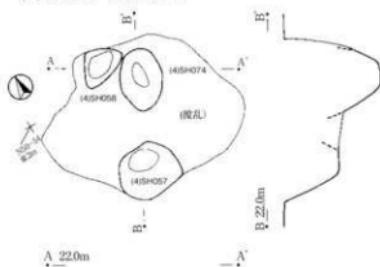
柱穴からの出土遺物は(10)SH007からの古代土器高台付壺片（第108図3）のみである。

(10)SH015・018~042・044・045 ピット群（第99図）



第101図 中・近世ビット(1)

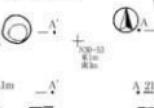
(4)SH057・058・074



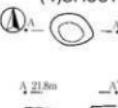
(4)SH059



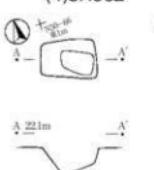
(4)SH060



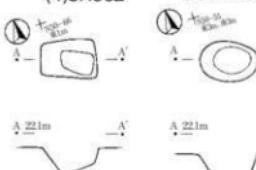
(4)SH061



(4)SH062



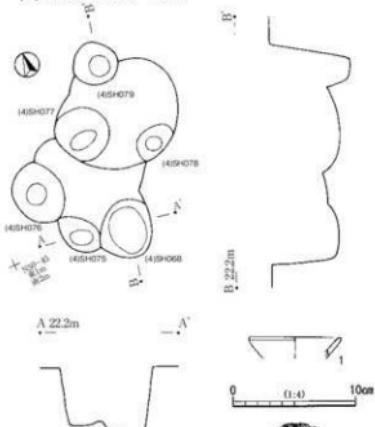
(4)SH063



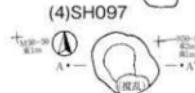
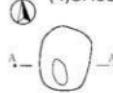
(4)SH088



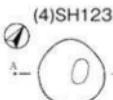
(4)SH068・075～079



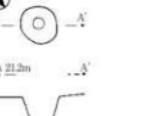
(4)SH089



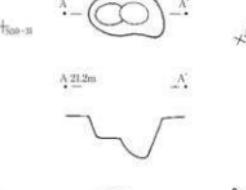
(4)SH124



(4)SH127



(4)SH128



第102図 中・近世ビット(2)

第19表 中・近世ピット計測表

(単位: cm)

遺構名(右は旧称)	長径 (長軸)	短径 (短軸)	深さ	遺構名(右は旧称)	長径 (長軸)	短径 (短軸)	深さ
(4) SH 018	40	37	50	(4) SH 120B	92	90	50
(4) SH 022	98	85	55	(4) SH 120C	112	70	45
(4) SH 023	38	35	39	(4) SH 123	56	55	73
(4) SH 025	47	46	37	(4) SH 124	76	58	54
(4) SH 026	28	25	53	(4) SH 125	48	35	20
(4) SH 028	45	43	70	(4) SH 126	54	43	45
(4) SH 029	67	50	63	(4) SH 127	34	29	31
(4) SH 030	46	39	50	(4) SH 128	63	36	39
(4) SH 031	30	28	66	(10) SH 015	40	28	49
(4) SH 032	38	37	23	(10) SH 018	60	38	43
(4) SH 033	33	26	15	(10) SH 019	48	32	23
(4) SH 034	44	40	12	(10) SH 020	42	34	31
(4) SH 035	51	47	57	(10) SH 021	42	38	63
(4) SH 036	35	27	30	(10) SH 022	42	44	58
(4) SH 037	64	55	58	(10) SH 023	82	50	81
(4) SH 038	43	29	13	(10) SH 024	68	66	52
(4) SH 039	40	33	19	(10) SH 025	60	44	61
(4) SH 040	219	134	67	(10) SH 026	106	66	72
(4) SH 041	62	55	25	(10) SH 027	62	56	75
(4) SH 042	31	29	48	(10) SH 028	60	40	40
(4) SH 043	40	25	7	(10) SH 029	40	32	44
(4) SH 045	43	30	57	(10) SH 030	36	26	37
(4) SH 047	53	39	47	(10) SH 031	36	34	46
(4) SH 048	66	50	30	(10) SH 032	30	23	
(4) SH 049	66	35	40	(10) SH 033	54	38	53
(4) SH 050	27	15	25	(10) SH 034	26	20	32
(4) SH 051	45	42	16	(10) SH 035	34	33	48
(4) SH 052	44	30	16	(10) SH 036	78	52	66
(4) SH 053	24	23	27	(10) SH 037	34	24	
(4) SH 054	187	90	96	(10) SH 038	50	44	95
(4) SH 055	40	35	39	(10) SH 039	38	30	26
(4) SH 056	50	45	31	(10) SH 040	42	40	52
(4) SH 057	53	41	45	(10) SH 041	72	52	31
(4) SH 058	49	29	65	(10) SH 042	114	45	57
(4) SH 059	35	33	6	(10) SH 044	58	44	36
(4) SH 060	25	24	17	(10) SH 045	50	34	48
(4) SH 061	35	25	10	(10) SB 001 P001	46	31	29
(4) SH 062	45	31	22	(10) SB 001 P002	39	38	31
(4) SH 063	50	30	22	(10) SB 001 P003	39	38	35
(4) SH 065	46	39	21	(10) SB 001 P004	39	34	30
(4) SH 066	50	40	52	(10) SB 001 P005	82	50	25
(4) SH 067	57	53	24	(10) SB 001 P006	36	22	26
(4) SH 068	52	47	56	(10) SB 001 P007	32	20	55
(4) SH 072	41	28	62	(10) SB 001 P008	30	27	13
(4) SH 074	51	34	30	(10) SB 001 P009	38	36	56
(4) SH 075	41	26	46	(10) SB 001 P010	40	32	36
(4) SH 076	51	40	78	(10) SB 001 P011	39	28	17
(4) SH 077	45	41	67	(10) SB 001 P012	26	36	36
(4) SH 078	34	22	73	(4) SB 004 (4)SH121	53	42	47
(4) SH 079	37	35	69	(4) SB 004 (4)SH122-1	124	56	116
(4) SH 081	51	36	72	(4) SB 004 (4)SH122-2	65	41	61
(4) SH 082	47	42	72	(4) SB 004 (4)SH122-3	55	24	26
(4) SH 083	43	34	67	(4) SB 004 M50-28 ピット群	30	28	61
(4) SH 088	74	54	51	(4) SB 004 M50-28 ピット群	46	42	33
(4) SH 089	55	42	67	(4) SB 004 M50-28 ピット群	36	25	43
(4) SH 097	57	49	30	(4) SB 004 M50-28 ピット群	49	35	49
(4) SH 120A	94	90	50				

O 50-78・79・88・89・98・99 グリッドに位置する。(10)SD040 より西に 40cm~80cm 付近と 3m~4m 付近で、約 10m の南北の範囲から直径 30cm~60cm、深さ 16cm~95cm のビットが 28 基検出された。ビット群との位置関係から、(10)SD040 と同時期と推測される。

その他のビット（第 101・102 図、図版 29・34）

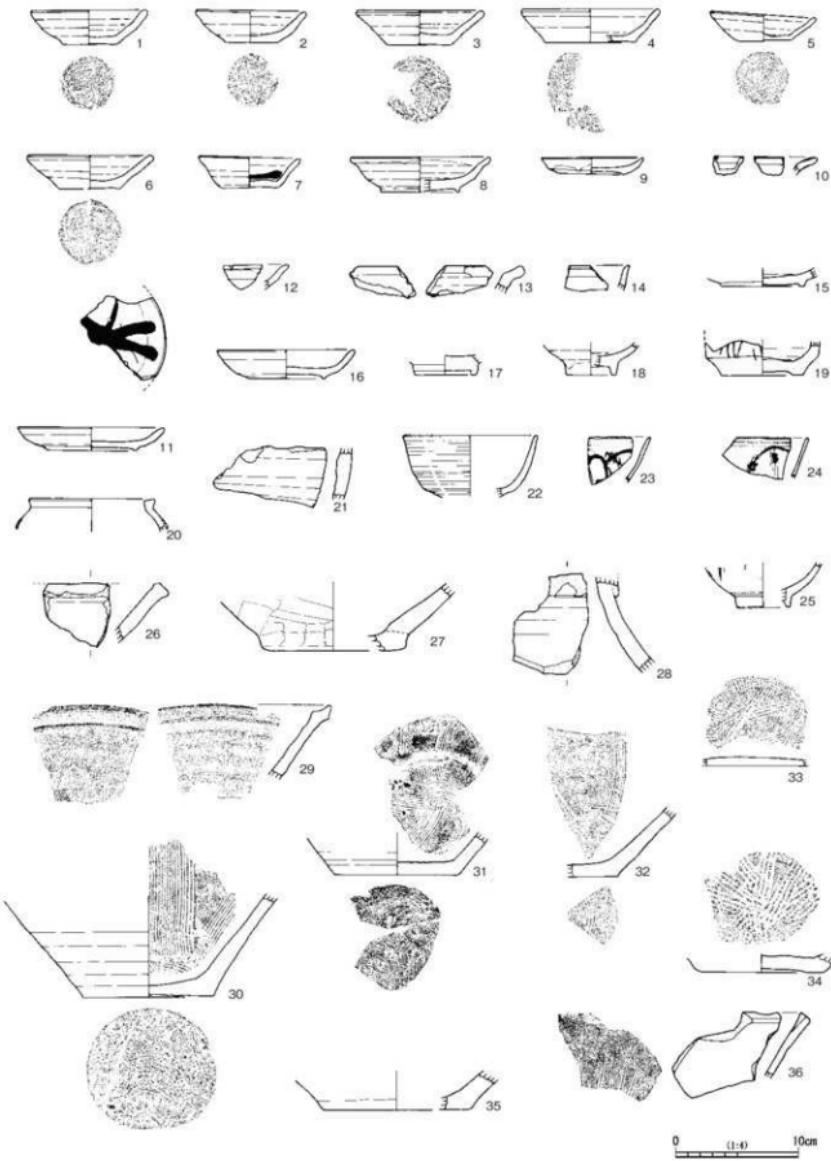
その他のビットについては個別の記載を省略し、計測値を第 19 表に示した。

(4)SH068 からは 2 点遺物が出土した。1 はカワラケ口縁部片である。2 は皇宋通寶である（第 24 表）。その他に非掲載であるが、(4)SH053 から瀬戸美濃陶器片が出土した。

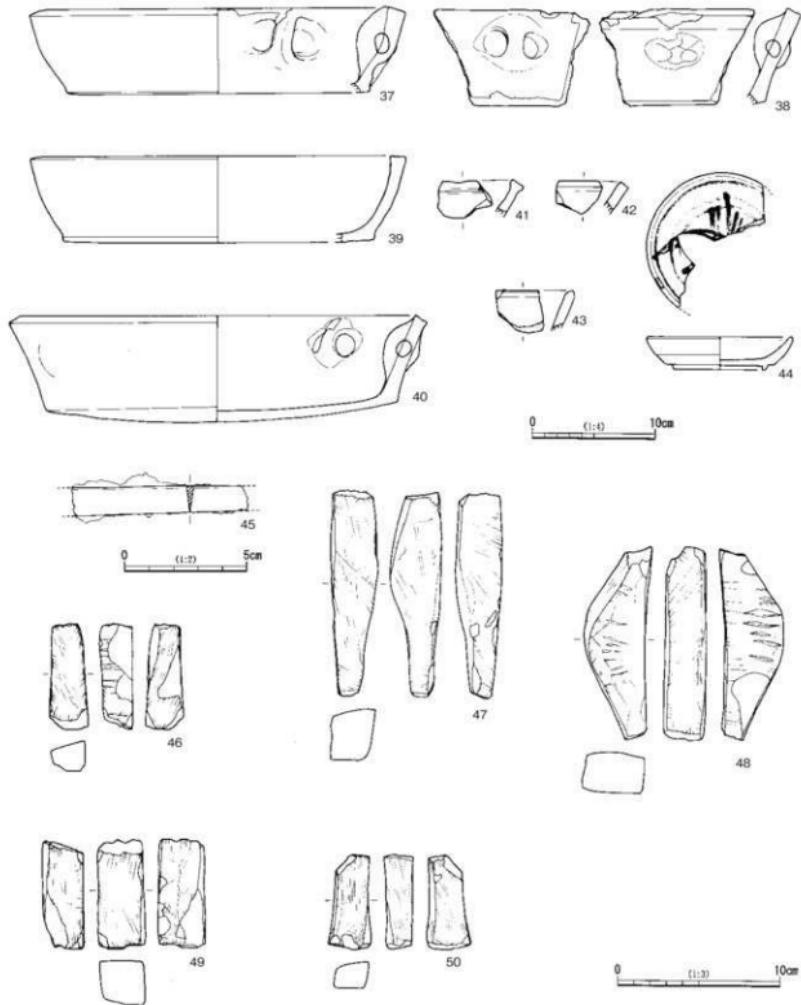
8 (2) 調査区遺構外出土中・近世遺物（第 103~105 図、図版 27・29・30・32・33）

1~43、46~50、52~62 は (2) 調査区 2 トレンチ一括遺物である。ただしその多くは (2)SK002 からの出土である。44 は 4 トレンチ、45 は 12 トレンチ、51 は 1 トレンチの一括遺物である。

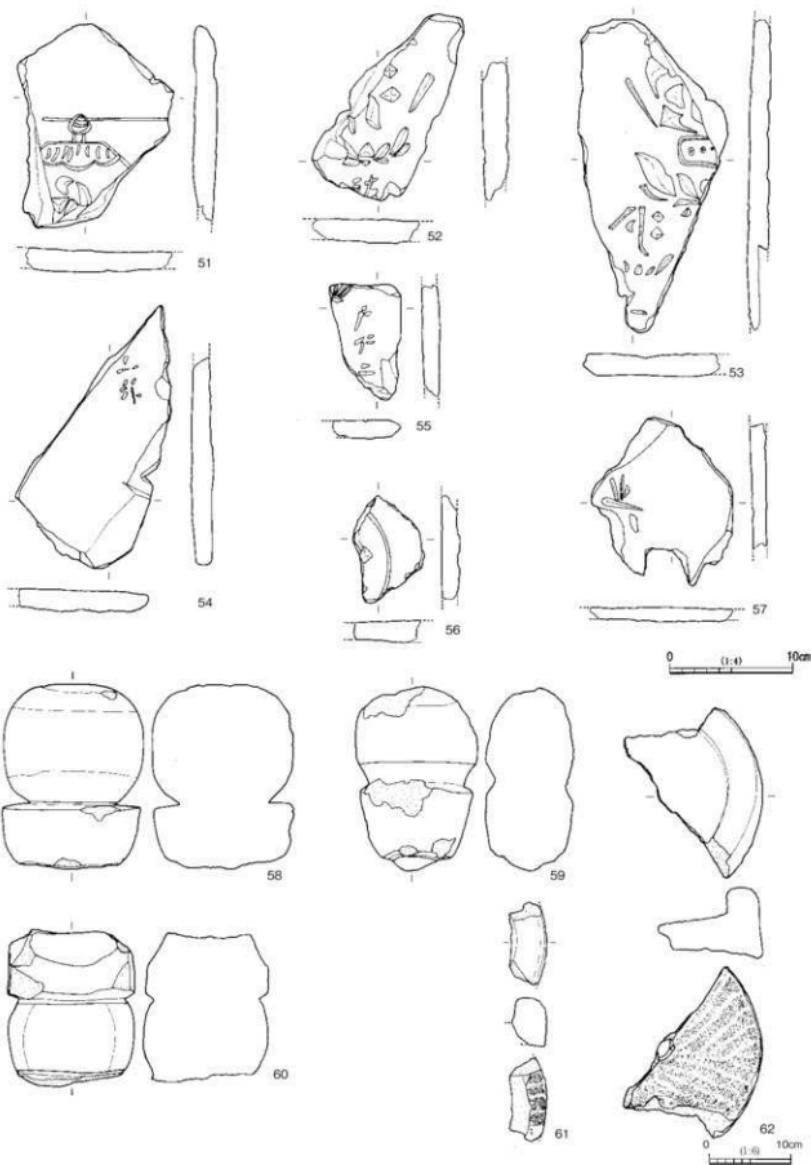
1~7 はカワラケ底部～口縁部片で、1~6 の底部はいずれも回転糸切り無調整である。1・2 は体部が内湾する。3~6 は体部が直線的に立ち上がる。7 は体部が外反し、底部内面から体部内面下半にかけて油煙が付着する。8~11 は瀬戸美濃製品である。8 は口唇部に灰釉が掛かる付高台の反り皿底部～口縁部片で、見込みに鉄絵を花弁柄を描き、煤が薄く付着する。9 は削込み高台の灰釉小皿で、ほぼ完形である。10 は灰釉折縁皿口縁部片である。11 は長石釉の鉄絵皿底部～口縁部片で、見込みに蘭竹文が描かれる。12 は古瀬戸の灰釉縁釉小皿口縁部片である。13 は古瀬戸の折縁深皿口縁部片で、被熱している。14 が瀬戸美濃産鉄釉天目茶碗口縁部片である。15・16 は瀬戸美濃産志野丸皿底部片と底部～口縁部片で、削り出し高台である。17 は中国龍泉窯系の青磁碗底部片である。18 は肥前産白磁碗底部片である。19~25 は瀬戸美濃製品である。19 は志野箱形徳利と考えられる底部片である。体部外面に鉄絵を描く。20 は鉄釉短頸壺口縁部片である。21 は鉄釉壺体部片である。22 は灰釉丸碗体部～口縁部片である。23~25 は同一個体と考えられる、柳柄の呉須絵が描かれた透明釉染付碗の口縁部片と底部～体部片である。26・27 は常滑産片口鉢の口縁部片と底部～体部片である。28 は常滑産甕体部片である。29~32 は瀬戸美濃産銷釉擂鉢の口縁部片と底部～体部片である。擂目は 30 が 16 条、31 が 11 条である。33~36 は在地産土師質擂鉢の底部片と口縁部片である。33・34・36 の擂目は 4 条程度で、外面に煤が付着する。また 36 の口唇部が 1 か所片口状につままれている。37~41 は在地産内耳土器の体部～口縁部片、底部～口縁部片と口縁部片である。37~40 は内面見込みと外面に煤が付着する。41 は第 86 図掲載の (2)SK001 の 1 と類似し、器厚が薄く口唇部の内外面が広がり、外面に煤の付着が見られない。42・43 は瓦質土器口縁部片で、擂鉢の可能性が考えられるが器種不明である。44 は瀬戸美濃産灰釉鉄絵皿底部～口縁部片で、見込みに蘭竹文が描かれる。45 は刀子の刃部片で、長さ 3.2cm、幅 1.0cm~1.2cm、厚さ 0.25cm である。46~50 は砥石で、それぞれ 4 個面の使用痕跡がある（第 23 表）。ただし、48 は広く残った 2 面の使用痕跡が薄く、砥石制作時の切出し痕跡が残る。51~57 は緑泥片岩製の武藏型板碑片である（第 23 表）。51 は頭部の山形側縁と一条線、天蓋、主尊種子キリークの一部が残る。52 は主尊種子キリーク、蓮坐と文字の痕跡が残るが、文字内容は不明である。53 は左側縁と主尊種子キリーク・蓮坐、脇侍種子サク・蓮坐の一部が残る阿弥陀三尊種子板碑片である。54 は右側縁が残り、文字痕跡があるがその内容は不明である。55 は「応仁二」の祈年銘文が残る。56 は月輪と主尊種子の一部が残る。57 は部位不明である。58・59 は安山岩製五輪塔空風輪の完形である。58 は空輪高 14.9cm、最大幅 17.7cm、風輪高 7.9cm、最大幅 17.5cm、總高 22.8cm である。59 は空輪高 12.0cm、最大幅 15.0cm、厚 11.0cm、風輪高 9.0cm、最大幅 13.8cm、厚 10.9



第103図 (2) 調査区遺構出土中・近世遺物 (1)



第104図 (2) 調査区遺構外出土中・近世遺物 (2)



第105図 (2) 調査区遺構出土中・近世遺物 (3)

cm、ホゾ高1.8cm、総高22.8cmで、風輪下部にホゾがあり、全体の断面形がやや扁平である。60は安山岩製五輪塔火水輪片で、地輪が欠ける。火輪高8.6cm、最大幅15.7cm、水輪高9.5cm、最大幅15.6cm、総残存高19.4cmである。61・62は共に安山岩製上白片であるが、別個体である。61は残存長10.1cm、最小厚2.8cm、側縁高6.0cmで、下面の溝4条が確認できる。62は復元径26.0cm、最小厚2.7cm、側縁高8.8cmで、下面に主溝・副溝と貫通していない軸受けの一部が残る。

9 (4) 調査区遺構外出土中・近世遺物 (第106図、図版31・33・34)

1～5・8・18・19・21は(4)SD006の西側から、15・17・20・22・23は(4)SD006の東側からの出土である。その他は大グリット一括もしくは(4)SD006周辺の検出面より上層を確認調査した6トレンチ一括の遺物である。

1は古瀬戸灰釉平碗底部～体部片である。高台脇を削込み、高台内部を浅く削り出している。2は古瀬戸灰釉縁小皿口縁部片である。3は瀬戸美濃産志野丸皿底部～口縁部片で、削出し高台である。4はカワラケ底部片で、底部は回転糸切り無調整で、見込み中央に指押し痕がある。5は常滑産窯体部片で、割れ口2面に砥石使用痕跡がある。6～8はカワラケ底部～口縁部片と底部片で、7～9の底部は回転糸切り無調整である。9は瀬戸美濃産灰釉丸皿底部～口縁部片で、削込み高台である。10は瀬戸美濃産鉄釉天目茶碗体部～口縁部片である。11は古瀬戸灰釉平碗口縁部片である。12は瀬戸美濃産灰釉菊皿口縁部片である。13・14は在地産内耳土器口縁部片と体部～口縁部片である。14は器高が11.0cm以上で、本遺跡出土の内耳土器の中で最も器高が高い資料である。また、器厚も比較的薄く内耳部分の長さが短く断面形が横長形で、当遺跡出土品の中では(2)SK001の1の資料と共に特徴的で比較的古い特徴が有する。外面に煤が付着する。15は青銅板2枚を折り曲げ重ねた筒状製品である。長さ4.7cm、幅1.4cm～2.15cm、最大厚0.95cmである。16は在地産内耳土器体部片を平面円形に加工した土製品で、砥石としての使用痕跡はないことから、おはじきと推測する。直径3.3cm、厚さ1.3cmである。17は外面が部分的に黒く磨きと推測する。直径1.9cm～2.1cm、最大厚1.2cmである。18は外面黒色の丸玉で、直径1.7cm～1.8cmである。表面に皺状の筋がある。19は粘板岩製鏡片で、幅一寸五分の長さ三寸五分の「三寸五分タビ」程度の小鏡と推測される(第23表)。20・21は砥石である(第23表)。20は側面4面と楔状先端部に使用痕跡がある。21は側面5面に使用痕跡がある。22・24・25・26は寛永通寶、23は文久永宝である(第24表)。この他に写真のみ掲載あるが、(4)SD006の東側から鉄錢が1点出土した(図版34、第24表)。

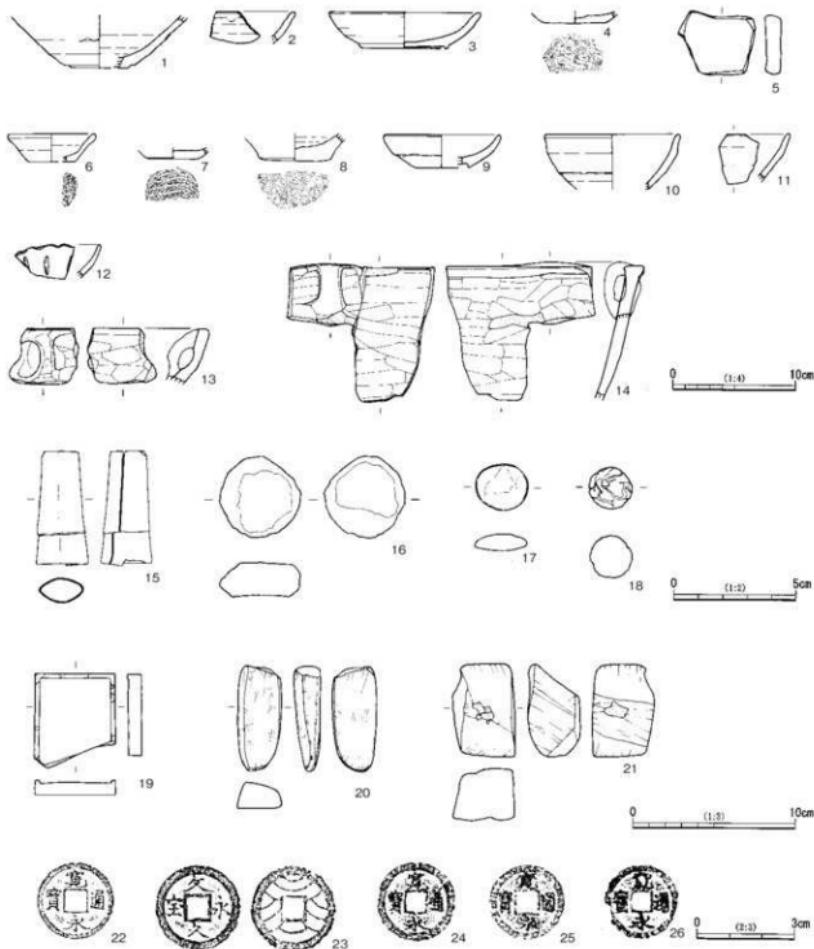
10 (10)(12) 調査区遺構外出土中・近世遺物 (第107図、図版31・33・34)

1～5は(10)O50・P50調査区、6は(12)S49・T49調査区、7は(10)T49調査区、8は(11)Q48調査区、9は(9)調査表採資料である。

1は古瀬戸灰釉平碗底部片で、削出し高台である。2は古瀬戸縁小皿底部片である。3は腰刀で長さ21.3cm、最大刀幅1.9cm、刀厚0.4cmである。両面に鞘材木質が付着する。O50-26からの出土で、土壤墓の副葬品と推測されるが、遺構の痕跡は確認できなかった。4は古瀬戸瓶子体部片である。5は在地産土師質捕鉢体部片で、捕目は6条程度である。6は古瀬戸卸皿底部片である。7はカワラケ口縁部片で、油煙が付着する。8・9は寛永通寶で、9の裏面には鋳付文字があるが、文字内容は不明である。

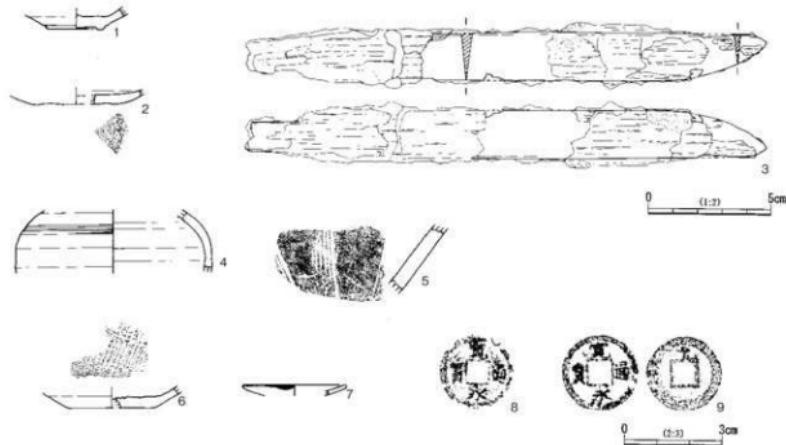
11 遺構外出土古代遺物 (第108図、図版31)

1・2は(4)24トレンチから、3・4は(10)O50・P50調査区から、5は(10)Q50・R50調査区からの出土である。

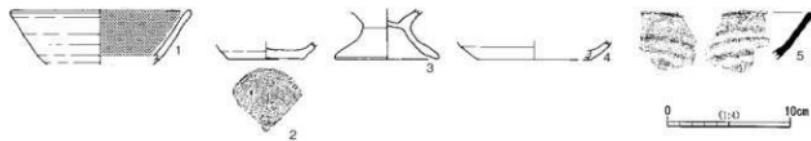


第106図 (4) 調査区遺構外出土中・近世遺物

1は土師器坏体部～口縁部片で、内面を黒色処理している。2は土師器坏底部片で、底面は回転糸切り無調整である。3は土師器高台付坏の高台部片である。4は土師器坏底部片である。5は須恵器坏口縁部片である。



第107図 (10)(12) 調査区遺構外出土中・近世遺物



第108図 遺構外出土古代遺物

第20表 中・近世陶磁器・土器一覧

機団	番号	通構番号	産地	器種	時期	遺存度	法量 (括弧付値は推定)		釉薬	色調	胎土	備考
							口縁	底盤				
81	1	4JSK080	在地産	カワラケ		底部約50%	6.6			にぶい黄褐色	浅黄色	
81	2	4JSK080	不明	埴鉢		体部～底盤片 約25%	(11.0)			赤褐色	明赤褐色	模様8条、小石混入
81	3	4JSK080	瀬戸美濃	埴鉢	(大窯)	体部～底盤片 約25%	(11.0)		薄釉	外面灰赤色、内面黑褐色	浅黄色	瀬戸18条
81	4	4JSK080	在地産	埴鉢		体部片				外面暗灰黃色、内面灰黃色	橙色	模様5条
82	1	4JSK103	在地産	カワラケ		口縁部約15%	6.6			橙色	橙色	
82	2	4JSK103	在地産	カワラケ		口縁部片				黄褐色	黄褐色	穿孔・墨書「□合?」
82	3	4JSK103	在地産	カワラケ		底部は半彌形	5.4			褐色	褐色	
82	4	4JSK103	古瀬戸	直線大皿	後期Ⅱ	口縁部片			灰釉	灰オーラー色	灰白色	
82	5	4JSK103	中国	青磁盤		体部～底盤片			青釉	綠灰褐色	灰白色	
82	6	4JSK103	在地産	内耳土器		口縁部片				黑褐色・にぶい褐色	褐色	雲母・白色砂粒混入
82	7	4JSK103	在地産	内耳土器		口縁部～底部片				外面黒褐色、内面橙色	橙色	雲母混入
82	8	4JSK115	在地産	内耳土器		口縁部片				にぶい黄褐色	雲母混入	
83	1	10JSK050	古瀬戸	(端反盤)	後期	口縁部約15% (6.8)	6.8		灰釉	浅黄色・灰白色	灰白色	
83	2	10JSK050	瓦質土器	鉢		口縁部片				黑色	浅黃褐色	
84	1	4JSK114	瀬戸美濃	盆		体部片			鉄釉	暗赤褐色	灰白色	
86	1	(2SK001)	在地産	内耳土器		口縁部片				にぶい橙色・灰褐色	橙色	白色粒・石英混入
86	2	(2SK001)	在地産	カワラケ		口縁部～底部 約15%	6.0	6.6	2.2	橙色	橙色	
86	1	4JSK008	在地産	カワラケ		口縁部～底部 約85%	8.8	4.8	1.4	橙色・黒色	浅黃褐色	内外面・断面に油煙付着
86	2	4JSK008	志戸呂	幻明鏡	18世紀～ 19世紀	定形	7.0	3.0	1.7	柿釉	にぶい赤褐色	浅黄色
86	3	4JSK008	志戸呂	幻明鏡	18世紀～ 19世紀	口縁部約65%～ 底部定形	10.2	5.0	2.0	柿釉	にぶい赤褐色	浅黄色
86	4	4JSK008	瀬戸美濃	小瓶	(18世紀)	口縁部約12% (6.6)	6.6		铁釉	褐色・明青灰色	浅黃褐色	体部外側に重ね焼き痕、底部板ハラ削り調整
86	5	4JSK008	瀬戸美濃	(筒形鉢)	(18世紀)	体部～底部 50%	6.6		灰釉	灰白色	灰白色	成都内面に墨書「九」 「九〇」
86	6	4JSK008	産地不明	小瓶	17世紀～ 18世紀	体部～底部完 形	3.2		灰釉	灰白色	灰白色	削出し高台・体部外 面に松葉模様の鉄紋
88	1	4JSK021	在地産	無袖有脚受 付盤	(18C中盤)	口縁部～底部 約45%	8.6	9.3		にぶい橙色	淡黄色	
88	1	4JSK024	在地産	カワラケ		口縁部～底部 約20%	(10.5)	6.6	2.0		にぶい黄褐色	橙色
89	1	4JSK070	瓦質土器	火鉢		口縁部片				浅黃褐色・黒色	浅黃褐色	
92	1	10JSK017	在地産	カワラケ		口縁部片				褐色	褐色	
94	1	4JSD006	在地産	カワラケ		口縁部～底部 約20%	(10.4)	6.6	2.3	橙色	橙色	
94	2	4JSD006	古瀬戸	折腰深皿 or 直線大皿	後期Ⅲ・IV	底部片				淡黄色	灰白色	
94	3	4JSD006	瀬戸美濃	埴鉢	(大窯)	体部～底部片 約15%			薄釉	黑褐色・灰褐色	にぶい黄褐色	
94	4	4JSD006	常滑	片口鉢	常滑9型式	口縁部				にぶい褐色	灰褐色	
94	5	4JSD006	常滑	片口鉢	常滑8型式	口縁部				褐灰褐色・にぶい褐色	褐灰褐色	
94	6	4JSD006	在地産	埴鉢		体部				橙色・にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
94	7	4JSD006	在地産	埴鉢		口縁部				にぶい黄色・にぶい 黄褐色	浅黃褐色	
94	8	4JSD006	在地産	内耳土器		口縁部				にぶい褐色	灰褐色	雲母・白色砂粒混入
94	9	4JSD006	在地産	内耳土器		体部～底部				褐灰褐色・にぶい褐色	褐灰褐色	雲母・白色砂粒混入
95	1	10BSD013	在地産	カワラケ		口縁部片				浅黃褐色	浅黃褐色	
95	2	10BSD013	瀬戸美濃	埴鉢	(大窯)	底部約15% (11.4)			薄釉	暗赤褐色	灰白色	
96	1	10BSD040	在地産	カワラケ		口縁部片	(8.0)			にぶい橙色	にぶい橙色	
96	2	10BSD040	在地産	カワラケ		底部片	(8.0)			にぶい橙色	にぶい橙色	
96	3	10BSD040	常滑	片口鉢	12世紀～ 13世紀	底部約15% (13.2)			灰白色	灰白色	灰白色	長石等混入
96	4	10BSD040	常滑	瓶	常滑9型式	口縁部約20% (17.8)				灰色	灰色	長石等混入
96	5	10BSD040	古瀬戸	灰釉尊式花 瓶	後期I・II	底部約50% (9.0)			灰釉	灰オーラー色	灰白色	
96	1	10BSD049	在地産	カワラケ		口縁部～底部 約6%	(6.2)	7.2	1.9	橙色	橙色	
96	2	10BSD049	在地産	カワラケ		口縁部～底部 約10%	(10.6)	7.4	2.6	橙色	橙色	
96	3	10BSD049	瀬戸美濃	灰釉丸瓶	大窯	口縁部片			灰釉	浅黄色	灰黄色	
96	4	10BSD049	瀬戸美濃	志戸丸瓶	17世紀	口縁部片			灰釉	灰白色	灰黄色	
96	5	10BSD049	瀬戸美濃	綠釉瓶	17世紀	体部片			綠釉	外面濃緑色、内面淡 綠色・浅黄色	綠色	

標記	番号	遺構番号	産地	器種	時期	遺存度	法量 (経済付値は推定)			釉薬	色調	胎土	備考	
							口径	底径	器高					
96	6	I10SD049	龜戸美濃	天目茶碗		体部片				鉄釉	黒褐色	灰白色		
96	7	I10SD049	在地産	括鉢		口縁部片					褐色・黒色	褐色		
96	8	I10SD049	在地産	括鉢		体部片					褐色	褐色	緒目5条	
96	9	I10SD049	在地産	内耳玉器		口縁部片					外面黒褐色、内面に ぶい赤褐色	雲母混入		
96	10	I10SD049	在地産	カワラケ	にぶい赤褐色	6.2								
97	1	I10SD051	古瀬(?)	天目茶碗	(後期Ⅰ)	口縁部片					黒褐色	灰白色		
97	2	I10SD051	古瀬	甕		体部片					外面赤褐色、内面に ぶい赤褐色	長石等混入		
97	3	I10SD051	古瀬	甕	常滑 8-9型 式	口縁部片	(10)				外面暗赤褐色	闊灰色	長石等混入	
99	1	I05SH121	在地産	カワラケ	定形	6.2	3.0	1.8			明赤褐色			
99	2	I05SH122	常滑	片口鉢	(常滑 7型 式)	口縁部片					にぶい赤褐色。にぶ い褐色	にぶい褐色		
102	1	I05SH068	在地産	カワラケ		口縁部片約 20 %	(6.0)				にぶい黄褐色	黒褐色		
103	1	I22トレンチ	在地産	カワラケ		口縁部約 50%、 底部完存	(9.0)	2.8	1.6		浅黄褐色	浅黄褐色		
103	2	I22トレンチ	在地産	カワラケ		口縁部約 60%、 底部完存	9.1	2.6	4.3		浅黄褐色	浅黄褐色		
103	3	I22トレンチ	在地産	カワラケ		口縁部約 20%、 底部完存	(10.2)	5.4	2.9		にぶい橙色	にぶい橙色		
103	4	I22トレンチ	在地産	カワラケ		口縁部～底部 約 40%	(11.0)	7.0	2.8		明赤褐色	明赤褐色		
103	5	I22トレンチ	在地産	カワラケ		口縁部約 80%、 底部完存	8.4	4.3	2.4		にぶい褐色	暗褐色		
103	6	I22トレンチ	在地産	カワラケ		口縁部約 55%、 底部完存	9.9	5.0	2.8		褐色	褐色	雲母混入	
103	7	I22トレンチ	在地産	カワラケ		口縁部約 70%、 底部完存	8.3	4.6	2.7		黒褐色	黑色	見込み油煙付着 雲母混入	
103	8	I22トレンチ	龜戸美濃	反り瓶	17世紀前半	口縁部～底部 約 20%					暗オリーブ色、淡黃 色	白色	内面スヌ付着 見込み花柄の鉄輪付高 台	
103	9	I22トレンチ	龜戸美濃	灰釉小皿	17世紀	ほぼ定形	8.2	5.3	1.3	灰釉	オリーブ褐色、灰白 色	白色	削込み高台	
103	10	I22トレンチ	龜戸美濃	折縁皿		口縁部片					外面銀灰色。内面濃 緑灰色	浅黃褐色		
103	11	I22トレンチ	龜戸美濃	鉄輪瓶	17世紀後半	口縁部～底部 約 20%	(12.0)	7.0	1.9	長石釉	灰白色・黒褐色	灰白色	削出し高台 内外面 にトナン瓶	
103	12	I22トレンチ	古瀬	緑小皿	後期Ⅱ・Ⅳ	口縁部片					灰褐色・灰白色	灰白色		
103	13	I22トレンチ	古瀬	折縁小皿	後期Ⅱ・Ⅳ	口縁部片					灰褐色	白色		
103	14	I22トレンチ	龜戸美濃	天目茶碗	(大室1)	口縁部片					鉄釉	黒褐色	白色	
103	15	I22トレンチ	龜戸美濃	志野丸皿	17世紀後半	底部完形					志野	灰白色	淡黃色	
103	16	I22トレンチ	龜戸美濃	志野丸皿	17世紀後半	L1縁部約 5%～ 底部完形	(11.2)	6.2	2.4		志野	灰白色	淡黃色	
103	17	I22トレンチ	中國麗東	青磁楓	13世紀	底部約 60%					緑灰色	灰色		
103	18	I22トレンチ	肥前	白鉢碗	(17世紀)	鉢部約 40%	(4.2)				灰白色	白色		
103	19	I22トレンチ	龜戸美濃	(箱形焼)	17世紀	底部約 45%	(6.0)				志野	灰白色	外側鉄輪 削出し高 台	
103	20	I22トレンチ	龜戸美濃	短頸瓶	16世紀～ 17世紀	口縁部 15%	(12.0)				鉄釉	外面赤黒色、内面赤 黒色、浅黄褐色	灰白色	
103	21	I22トレンチ	龜戸美濃	甕		体部片					鉄釉	外面黒褐色、内面暗 赤褐色		
103	22	I22トレンチ	龜戸美濃	灰釉丸瓶	17世紀～ 18世紀前半	口縁部～体部 約 25%	(11.0)				灰釉	灰オリーブ色	浅黄褐色	
103	23	I22トレンチ	龜戸美濃	染付碗	19世紀前半	L1縁部片					透明釉	灰白色	乳頭釉	
103	24	I22トレンチ	龜戸美濃	染付碗	19世紀前半	口縁部片					透明釉	灰白色	乳頭釉	
103	25	I22トレンチ	龜戸美濃	染付碗	19世紀前半	体部～底部片 約 25%					透明釉	灰白色・褐色	乳頭釉 高台内外面 に鉄輪	
103	26	I22トレンチ	常滑	片口鉢	常滑 8・9 型式	口縁部片					闊灰色	闊灰色		
103	27	I22トレンチ	常滑	片口鉢	常滑 8・9 型式	底部約 25%	(12.0)				にぶい褐色・闊灰色	闊灰色		
103	28	I22トレンチ	常滑	甕	常滑 10型 以降	口縁部～体部片					にぶい赤褐色	灰白色	折返し口縁	
103	29	I22トレンチ	龜戸美濃	括鉢	大室5	口縁部片					緑釉	暗赤褐色	灰白色	
103	30	I22トレンチ	龜戸美濃	括鉢	大室5	底部～体部下 半	10.7				緑釉	暗赤褐色	灰白色 緒目16条	
103	31	I22トレンチ	龜戸美濃	括鉢	17世紀	底部約 30%	(10.0)				緑釉	にぶい赤褐色	にぶい浅褐色 底部同軸条切り痕、 緒目11条	
103	32	I22トレンチ	龜戸美濃	括鉢	16世紀～ 17世紀	底部片					緑釉	黒褐色	浅黄褐色	

排回	番号	遺構番号	産地	器種	時期	遺存度	法量 (括弧付値は推定)			釉薬	色調	胎土	備考
							口径	底径	器高				
103	33	(22)トレンチ	在地産	埴輪		底部片					外面黒褐色。内面暗赤褐色	褐色	雲母混入
103	34	(22)トレンチ	在地産	埴輪		底部約70%	10.8				外面灰褐色。内面明褐色	褐色	雲母混入
103	35	(22)トレンチ	在地産	埴輪		底部約20%		(12.0)			灰色。にぶい橙色	にぶい橙色	白色粒混入 内面摩滅
103	36	(22)トレンチ	在地産	埴輪		口縁部片					黒褐色。橙色	にぶい橙色	雲母混入
104	37	(22)トレンチ	在地産	内耳土器		口縁部～底部(28.2)(24.8)	7.9				外面黒褐色。内面に にぶい赤褐色	褐色	雲母・長石混入 外面スス付着
104	38	(22)トレンチ	在地産	内耳土器		口縁部～底部 片					外面黒褐色。内面褐色	褐色	外面スス付着
104	39	(22)トレンチ	在地産	内耳土器		口縁部～底部 約15%		(28.0)(25.6)	7.1		外面黒褐色。内面褐色	褐色	雲母・長石混入 外面スス付着
104	40	(22)トレンチ	在地産	内耳土器		約70%	32.6	28.7	8.7		外面黒褐色。内面褐色	褐色	外面スス付着 2点
104	41	(22)トレンチ	瓦質土器	(埴輪)		口縁部片					にぶい褐色	にぶい褐色	雲母・白色粒混入
104	42	(22)トレンチ	瓦質土器	(埴輪)		口縁部片					灰色。オリーブ黑色	褐色	
104	43	(22)トレンチ	瓦質土器	(埴輪)		口縁部片					灰色	灰白色	
104	44	(24)トレンチ	瀬戸美濃	鉢輪皿	18世紀中葉	口縁部～底部 約50%	(12.0)	7.6	2.6	灰釉	灰白色。にぶい赤褐色	灰白色	内面に擦痕 刻出し高台 内外面にトサシ痕
106	1	(4)N50-10	古瀬戸	平碗	後期Ⅲ・IV	体部～底部約 25%	(4.8)			灰釉	灰オリーブ色。灰白色	灰白色	高台脇の削込み 高台内の浅い削り出し
106	2	(4)N50-31	古瀬戸	縁缺小皿	後期Ⅳ	口縁部片				灰釉	灰オリーブ色。灰白色	淡黄色	
106	3	(4)N50-10	瀬戸美濃	志野丸皿	17世紀中葉	口縁部～底部 約40%	(12.5)	7.2	2.9	志野釉	灰白色	浅黄色	削出し高台 内外面にトサシ痕
106	4	(4)M50-39	在地産	カワラケ		底部約60%		5.0			橙色。浅黄色	橙色	底部内面中央に指押し痕
106	6	(4)N50	在地産	カワラケ		口縁部～底部 約50%	(7.0)	4.0	2.3		にぶい橙色	にぶい橙色	
106	7	(4)N50	在地産	カワラケ		底部約50%		(4.8)			浅黄色	浅黄色	
106	8	(4)N50-31	在地産	カワラケ		底部約50%		(6.0)			橙色	橙色	
106	9	(46)トレンチ	瀬戸美濃	丸皿(削込)	大窯	口縁部～底部 約15%	(4.4)	2.7	(灰釉)	明黄褐色。にぶい浅黄色	浅黄色	削込み高台	
106	10	(46)トレンチ	瀬戸美濃	天井茶碗(大室)		口縁部約12%	(11.2)			灰釉	暗褐色。黒色。浅灰白色	灰白色	
106	11	(46)トレンチ	古瀬戸	灰釉平碗	後期	口縁部				灰釉	オーバー黄色	浅黄色	
106	12	(46)トレンチ	瀬戸美濃	灰釉菊皿	17世紀初頭	口縁部				灰釉	浅黄色	にぶい黄橙色	
106	13	(46)トレンチ	在地産	内耳土器		口縁部					にぶい黄褐色。にぶい黄橙色	赤褐色	雲母・白色粒混入
106	14	(46)トレンチ	在地産	内耳土器		口縁部～体部					圓灰褐色。にぶい褐色	灰褐色	雲母・白色粒混入
107	1	(10)S50-02	古瀬戸	灰釉平碗	後期Ⅱ～IV	底部約75%	4.7			灰釉	外側淡黄色。内面灰白色	淡黄色	削出し高台
107	2	(10)Q50-63	古瀬戸	縁缺小皿	後期Ⅳ	底部約20%		(7.0)			浅黄色	浅黄色	
107	4	(10)S50-24	古瀬戸	瓶子	後期	体部約15%					外側浅黄色。内面灰白色	灰白色	
107	5	(10)S50-19	在地産	埴輪		体部片					黒褐色	黄褐色	
107	6	(12)S49-48	古瀬戸	邦皿	(後期Ⅳ)	体部～底部約 20%	(7.0)				浅黄色	浅黄色	
107	7	(10)T49-85	在地産	カワラケ		口縁部約12%	(8.6)				橙色	橙色	口縁部に油煙付着

参考文献 岩谷直哉 2008 「中世瀬戸の研究」 青志書院

日本福祉大学加多良典准教授 2012 「シンボジウム中世研究 - 集落をもとめて」

瀬戸市歴史民俗資料館 1986～1989 「瀬戸市歴史民俗資料館V～VI」

静岡県考古学会 2012 「平安・鎌倉・室町時代の考古学シンポジウム資料集 - 志江古墳を考える」

第21表 古代土器一覧

排回	番号	遺構番号	焼成質	器種	遺存度	色調	法量 (括弧付値は推定)			調整内面	調整外側	底部	備考
							口径	底径	器高				
108	1	(42)トレンチ	土器器	环	口縁部約15%	にぶい橙色	(4.6)			ヨコナデ	ヨコナデ		内面黒色処理
108	2	(42)トレンチ	土器器	环	底部約30%	にぶい橙色	(6.2)			ナデ	ヨコナデ	回転系切り	
108	3	(10)S1007	土器器	高台台环	底部約50%	にぶい赤褐色	(6.0)			ヨコナデ	ヨコナデ		足高高台
108	4	(10)S103	土器器	环	底部約15%	橙色	(9.2)			ミガキ	ヘラケズリ		
108	5	(10)Q50-81	埴輪器	环	口縁部	灰色				ヨコナデ	ヨコナデ		

第 22 表 中・近世土製品計測表

持団	番号	遺構番号	産地	種類	色調	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
86	7	(4)SK008	在地産	おはじき	橙色	2.0	1.9	0.55	
86	8	(4)SK008	在地系	おはじき	橙色	2.0	1.8	0.6	
86	9	(4)SK008	在地系	おはじき	橙色	2.1	2.1	0.4	
86	10	(4)SK008	在地系	おはじき	橙色	2.1	2.0	0.7	
86	11	(4)SK008	在地系	おはじき	橙色	2.1	1.9	0.55	
86	12	(4)SK008	在地系	おはじき	橙色	1.7	1.6	0.4	
86	13	(4)SK008	在地系	おはじき	橙色	1.8	1.8	0.45	
106	5	(4)M50-48	常滑	転用砥石	灰赤色・ぶい赤褐色	6.3	5.2	1.2	
106	16	(4)6トレンチ	在地産	(転用おはじき)	黒褐色・暗赤褐色	3.3	3.3	1.3	
106	18	(4)N50-50	不明	丸玉	黒色	1.8	1.7	1.7	
96	6	(10)SD040	常滑	転用砥石	灰色	5.5	7.3	1.3	

第 23 表 中・近世石製品計測表

持団	番号	遺構番号	種類	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
96	12	(10)SD049	砥石	凝灰岩	4.7	2.9	2.1	37.24	
97	4	(10)SD051	砥石	凝灰岩	3.9	2.8	2.6	47.18	
104	46	(2)2トレンチ	砥石	凝灰岩	6.45	2.4	1.95	41.56	
104	47	(2)2トレンチ	砥石	凝灰岩	12.5	2.9	3.1	139.96	
104	48	(2)2トレンチ	砥石	凝灰岩	11.7	4.1	2.6	157.77	
104	49	(2)2トレンチ	砥石	凝灰岩	6.7	2.9	2.65	86.92	
104	50	(2)4トレンチ	砥石	凝灰岩	5.8	2.7	1.75	38.65	
105	51	(2)1トレンチ	板拂	緑泥片岩	16.7	12.7	2.0	600.41	
105	52	(2)2トレンチ	板拂	緑泥片岩	15.2	12.4	2.1	448.52	
105	53	(2)2トレンチ	板拂	緑泥片岩	25.7	12.2	1.7	765.3	
105	54	(2)2トレンチ	板拂	緑泥片岩	21.5	12.7	1.9	609.64	
105	55	(2)2トレンチ	板拂	緑泥片岩	9.4	5.9	1.5	137.77	
105	56	(2)2トレンチ	板拂	緑泥片岩	8.8	5.9	1.8	127.95	
105	57	(2)2トレンチ	板拂	緑泥片岩	13.8	11.6	1.3	256.23	
106	17	(4)N50-64	(碁石)	不明	2.1	1.9	1.2	2.41	
106	19	(4)N50-40	硯	粘板岩	5.8	4.9	0.9	38.29	
106	20	(4)N50-64	砥石	凝灰岩	6.45	2.7	1.6	41.04	
106	21	(4)SF009(M50-58)	砥石	凝灰岩	5.7	3.8	3.2	82.38	

第 24 表 錢貨計測表

持団	番号	遺構番号	錢種	書体	背文	計測値(cm)				重量(g)	年代	備考
						縦径	横径	内徑	横内径			
86	14	(4)SK008	寛永通寶			2.3	2.3	1.9	1.9	0.11	1.87	
86	15	(4)SK008	寛永通寶							0.08	0.51	新寛永: 18世紀代
-	-	(4)SK008	鉄銭			2.4	2.4			0.15	2.4	
-	-	(4)SK008	鉄銭							0.18	1.85	1/2欠損計測不能
99	1	(4)SH120B	皇宋通寶	真書		2.5	2.5	2	1.9	0.11	2.75	初鑄年: 1038 年
99	2	(4)SH120C	無文錢			2.2	2.3			0.08	1.74	
102	2	(4)SH068	皇宋通寶	真書		2.45	2.45	1.9	1.9	0.12	3.13	
106	22	(4)N50-34	寛永通寶			2.4	2.4	2	2	0.1	2.35	新寛永: 18世紀代
106	23	(4)N50-85	文久永宝	玉宝	波	2.65	2.6	2	2	0.11	3.1	文久3年(1863) ~ 藩末
106	24	(4)6トレンチ	寛永通寶			2.5	2.5	1.9	1.9	0.11	2.28	
106	25	(4)6トレンチ	寛永通寶			2.35	2.4	1.9	1.9	0.11	2.25	新寛永: 18世紀代
106	26	(4)6トレンチ	寛永通寶			2.3	2.3	1.9	1.9	0.11	2.03	
-	-	(4)N50-75	鉄銭			2.9	2.9			0.16	2.5	
107	8	(1)Q48-38	寛永通寶			2.3	2.3	1.9	1.9	0.14	2.19	新寛永: 18世紀代
107	9	(9)表採	寛永通寶	不明		2.3	2.35	1.9	1.9	0.15	2.89	新寛永: 18世紀代

第5章　まとめ

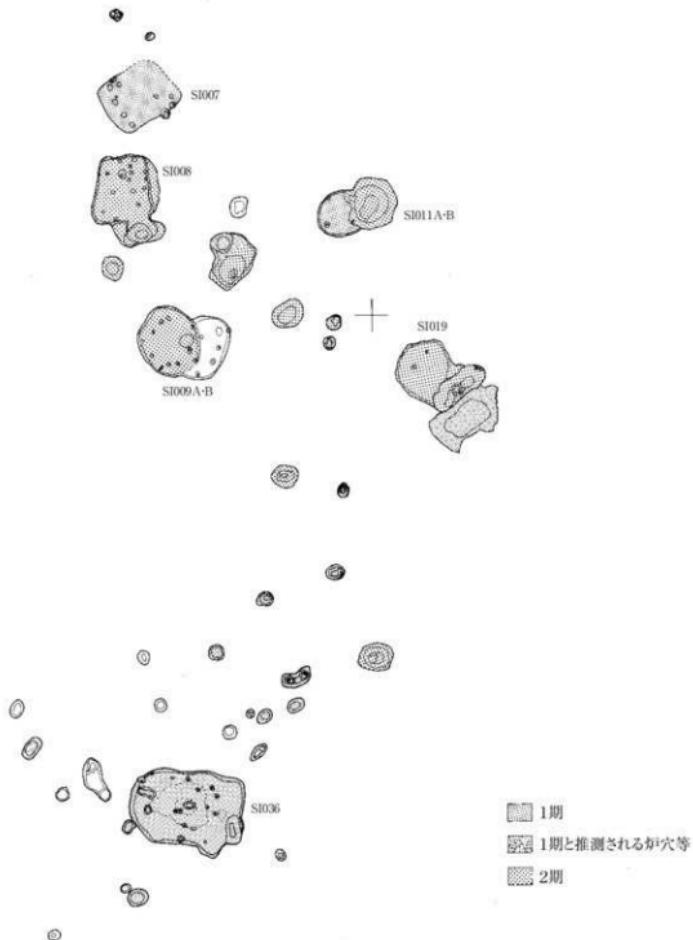
第1節　縄文時代

1　遺構の時期と特徴

中中屋敷遺跡において検出された縄文時代の遺構は、本文中でも説明したとおり遺物の出土がなく時期判別ができなかった遺構が多数を占めている。時期判別ができるものは、ごく一部に中期と思われるもののが存在するものの(9)SX003、大部分は早期から前期に属する。それらを以下の2期に分類した。

1期　早期後葉から前期初頭の花積下層式までを1期とする。(10)SI007・011A・036堅穴住居跡、(9)SF004・(10)SF031・032・034・039・041・044炉穴、(10)SX028焼土遺構、(10)SK010A・014B・022・023土坑、(9)SK002・(10)SK048陥穴が該当する。ほとんどが条痕のみの資料で型式学的特徴に乏しく、型式名で時期を明示するのは難しい。特徴的なものでは(9)SF004から隆帶文系土器が、(10)SI011Aから花積下層式の出土が認められる。それ以外では外面に縄文、内面に条痕を施すいわゆる縄文条痕系土器が各遺構から出土している。ほとんどが異原体によって羽状縄文を構成するものが多いが、(10)SF044からは条痕文土器に供伴して、条が縦位となるように斜め方向に原体を転がしている縄文条痕系土器が出土しており、貝殻条痕を意識したものと思われる。条痕文土器では(10)SI036出土の深鉢はほぼ全て尖底で、器形は外反するものや底部から口縁部に向かって直線的に開くもの、砲弾形を呈するものなどが混在する。一方で鶴ガ島台式以降条痕文土器を特徴づける胴部に屈曲をもつものは存在しない。砲弾形を呈するものは下沼部式や上ノ山式など西関東、東海地方の影響が考えられ、早期末に位置づけられると判断される。

周辺地域における該期の資料としては、加町畠遺跡F地点^(注1)で縄文条痕系土器の良好な出土事例が知られている。器形から当遺跡より古く茅山下層式～茅山上層式と考えられるが、縄文条痕系土器の初現について不明な点が多く今後の検討課題である。こうのす台第Ⅳ遺跡^(注2)や松戸市行人台遺跡^(注3)では隆帶文系土器や貝殻腹縁文土器が出土しており、桐ヶ谷新田遺跡^(注4)、三輪野山八重塚遺跡^(注5)などでは絡条体圧痕文土器が出土している。ただしいずれも量としてはやや不十分で、まとめて編年を考案できるには至っていないのが実情である。当遺跡出土資料は隆帶文系土器や口縁部を肥厚させた土器（第76図9・10）が認められる一方で絡条体圧痕文土器は存在せず、行人台遺跡と類似した構成となっている。ただし隆帶上のキザミの施工具は棒状工具に限られ、行人台遺跡で見られる絡条体圧痕は存在しない。また貝殻腹縁文土器も存在しないなど、より限定された時期の所産と考えられる。近年の編年動向を参照すると下沼部式古段階あるいは上ノ山式～入海I式に相当すると考えられるが^(注6)、異原体羽状縄文土器が供伴するのかどうかなど、検討すべき課題が多い。なお坂川の谷を隔てた対岸の松戸市には幸田貝塚が存在し、前期間山式の貝塚を伴う大集落として知られているが、早期末～前期初頭の資料も存在する。1971年に行われた第2次調査では茅山上層式、下吉井式に類似するもの、花積下層式がまとまって出土し、1976年に行われた第6次調査では茅山上層式と木島式の良好な資料が出土した。いずれも概報のみであるため詳細は不明であるが^(注7)、未報告資料中に良好な資料が多数存在することが期待される。正式報告を待ちたい。また流山市からはやや離れるが、市川市の雷下遺跡では低地に堆積した貝層から該期の良好な資料が多数出土している。現在（公財）千葉県教育振興財團にて整理中であり、こちらも正式報告を待ちたい。



第109図 (10) 調査区縄文時代遺構時期別分布 (S=1/300)

2期 前期中葉の黒浜式を2期とする。(10)SI008・009A・011B・019 竪穴住居跡、(5)SK010、(10)SK010B・014A・015・018・020・021・024・033 土坑が該当する。この時期も特徴が乏しいものが多いが、基本的に単節縄文乃至は無節縄文が施されたものが主で、半截竹管を用いたものが少量認められる。一方でループ文や組紐文は存在しないことから、黒浜式でも中段階から新段階と位置づけられる。なお、関山

式期については遺構だけではなく遺物も全く認められず、空白期となっている。

2 遺構の特徴と変遷

時期別の遺構の立地について俯瞰する。

1期に属する竪穴住居跡3軒のうち、(10)SI036は(10)調査区の南西端部に位置する。ここは第3章冒頭でも説明したとおり当遺跡でも最も標高が高い位置である。早期において標高の高い地点に竪穴住居を構築する事例は、思井上ノ内遺跡でも認められる^(註8)。この3軒を比較すると、(10)SI036は他の2軒に比べ規模が大きいだけでなく、3基の炉が存在し床面の硬化が顕著であるなど、日常的に使用される程度長期的に営まれた痕跡が認められる。やや北側に位置する(10)SI007・011Aの2軒は、台地平坦面上であるものの標高は若干下がった位置になる。これら2軒は規模が小さく、炉も構築されず床面も硬化していないなど、(10)SI036とは状況が大きく異なっている。単純に継続期間が短かったということか、あるいは用途が異なっていたか、いくつかの可能性は指摘できようが確たる判断はできない。炉穴、焼土遺構のうち時期が分かるものは8基を数えるが、うち7基は(10)調査区に位置する。また、出土遺物のなかった炉穴、焼土遺構のうち7基が(10)調査区から検出されており、両者あわせて14基のうち10基が(10)SI036周辺に分布する。これらはかなり狭い範囲に集中して分布しており、配置にも特に規格性は認められない。この点で思井上ノ内遺跡のように環状を呈するような遺構群とは異なっている。遺構の数が少ないことに加え、遺物も明らかに縄文島台式以前に遡るものはないなど時期幅も狭く、思井上ノ内遺跡に比べて短期間営まれた遺構群であると判断される。一方で(10)調査区から約180m東の(9)調査区には、同時期の炉穴である(9)SF004が存在する。周辺の(9)SX001・002焼土遺構も同時期である可能性が強い。西側の(4)調査区からも、遺物の出土はないが炉穴が散在している。こうしたことから、1期の居住の中心は(10)SI036を中心とした台地中央部であったが、台地全体に活動の場を広げていた状況が推測される。なお、今回の調査で唯一貝ブロックが検出された(9)SF004の南側には、坂川へ下る谷が存在する。(9)調査区の炉穴群は水産品採集活動の拠点であったかもしれない。

2期に属する竪穴住居跡は(10)SI008・009A・011B・019の4軒となる。ただしSI011Bは通常の意味での竪穴住居とは言えないでこれ以外の3軒を比較すると、(10)SI008・009Aの2軒はプランの形状は異なるが炉が構築され柱穴も掘られているなど、竪穴住居としての体裁を整えているのに対し、(10)SI019は炉もまともな柱穴もなく、遺物もほとんどない。両者は明らかに差異があるが、その理由は今のところ不明である。周辺の土坑も含めた竪穴住居群は1期に比べ谷に面した台地北側に分布の中心が移る。谷へのアプローチが重視された立地と考えられよう。竪穴住居群から北東側約40mの位置には(5)SK010が構築される。土器が出土しているのはこの1基のみであるが、周辺に存在する22基の土坑は覆土の状況などがほぼ一様であり、(5)SK010とほぼ同時期であると推測される。縄文時代前期に土坑が群をなして構築される事例は数多く、中には土器や石製品などが出土することもあり土坑墓群と解釈されているが、当遺跡の土坑群からは遺物の出土がほとんどなく、性格については不明である。ただし竪穴住居とは明らかに場所を隔てており、居住空間とは異なる場に存在しなければならなかった施設であることを示していると思われる。

第2節 中・近世

1 遺構について

(1) 土坑

本遺跡の土坑・大形土坑50基は、性格が明らかな土壙墓2基を除くと、平面規模・形状から以下の3種類に分類できる(第110図)。

・土坑A…長軸236cm～550cm、短軸115cm～280cmの整形もしくは一部不整形の長方形土坑

・土坑B…長軸123cm～245cm、短軸60cm～133cmの長方形土坑

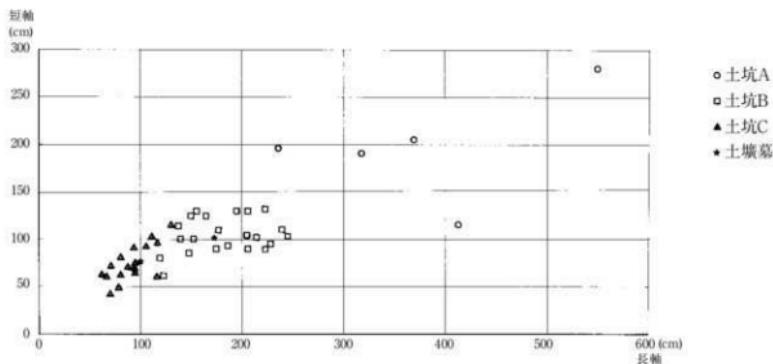
・土坑C…長軸62cm～140cm、短軸42cm～114cmの楕円形・長楕円形・長方形・円形・T字形土坑

土坑Aは(2)SK002、(4)SK117、(9)SK002、(4)SK108、(9)SK001の5基である。この5基は、各土坑間の平面規模にバラツキがあり、形状も様々で、分布も点在し、各々が個性的な土坑である。

土坑Bは、(2)SK001、(4)SK008A・008B・008C・010・011・012・013A・013B・046・087・090・091・092・093・094・096・106・107・109・110・111・112・118の24基である。このうち(2)SK001・(4)SK118を除く22基は(4)本調査区の南側に位置し、向きが東西もしくは南北方向ではば揃い、平面形が単純で比較的整っている。深さは8cm～80cmと様々であるが、各土坑間の平面規模は第110図のとおり、ひとつのまとまりを示している。

土坑Cは(4)SK007・016・017・019・020・021・024・027・064・069・070・071・073・084・095・100・101・113・119の19基である。第110図のとおり、平面規模は小規模で、各土坑間の差異は少ない。平面形は楕円形や長楕円形のものが多いが、長方形・円形・T字形もあり、深さも7cm～73cmと様々である。分布域は(4)SB001・002の建物跡周辺に集中する他は、地下式坑・方形堅穴遺構や土坑Bの周辺に若干分布する。

これら3分類した土坑の他に、骨等の出土から土壙墓と考えられる(10)SK017・042がある。(10)SK017は長軸173cm、短軸60cmの平面長方形で、土坑Bと類似する。(10)SK042は長軸100cm、短軸76cmの平面長方形で、やや小形であるが平面形は土坑Bと類似する。このように土坑Bは土壙墓と平面形が類似する。ただし、土坑Bから骨等は出土せず、その周辺も含めて銭貨等の遺物の出土も少ないとから、土坑



第110図 中・近世土坑平面規模散布図

Bを大規模な土壙墓群とは考え難い。屋敷墓のような土壙墓を含む可能性はあるが、長軸2mを超すものや、長軸4.13mの土坑Aの(4)SK108と軸を揃えて配列された状況から、土坑Bにはいわゆるイモ穴と呼ばれる貯蔵穴^(注9)が多く含まれる可能性が高いと考える。なお、出土遺物から時期がわかるものとして、16世紀～17世紀の(2)SK001と、18世紀～19世紀前半の(4)SK008A・008B・008Cがある。(4)SK008A・008B・008Cからは銭貨4枚が出土したが、陶器片も多く出土し、土壙墓と廃棄に二次利用された貯蔵穴が重複している可能性も考えられる。

次に土坑Aであるが、(2)SK002は板片や陶器類が多く出土し、廃棄に利用されている。(4)SK108は先に指摘した通り、貯蔵穴の可能性がある。(4)SK117は他の土坑と比べると深さが115cmと深く、地下式坑3基が集中する場所に位置することから、地下式坑との類似性がある。そして(9)SK001と(9)SK002はそれぞれ単独で出土し、平面形が整い平面規模も大きく、底面に段があり、100cmと67cmと深く水が溜まりやすい共通性があることから、水溜等の用途が推測される。

最後に土坑Cであるが、(4)SB001・SB002周辺に集中する一群のうち、(4)SK021・024からは近世後半の陶磁器片が出土した。また、これらが位置する(4)SD006の東側からは18世紀～19世紀前半の遺物が主体的に出土する。掘立柱建物跡とそれに隣接・重複する土坑群はこの時期と考えられる。建物は建替えをし、比較的安定的に営まれている。多様な形態であることから土坑Cの用途は様々であろうが、小規模遺構であり、いずれも隣接遺構と関わりが深いものであろう。

(2) 地下式坑

本遺跡で調査した地下式坑9基は、分布状況から以下の2種に大きく分類できる。

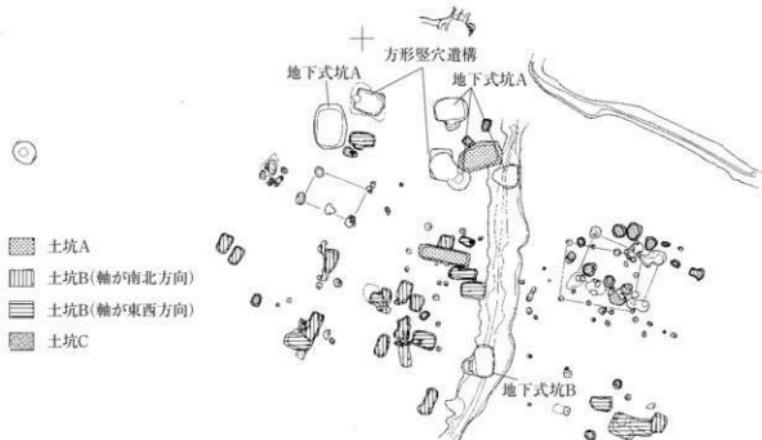
- ・ 地下式坑A…地下式坑が集中して検出された(4)本調査区北西部の(4)SK102・103・105・115の4基で、方形堅穴遺構と近接して位置する共通性がある。
- ・ 地下式坑B…地下式坑としては単独で立地する(4)SK080、(10)SK030・035の3基で、掘立柱建物跡や方形堅穴遺構からは9m～23m離れる一方で、これら遺構付近から延びる溝状遺構と重複もしくは近接する共通性がある。

この他の(10)SK050はトレント調査地点であるため、溝状遺構が近接する可能性がある。(10)SK050の北側には中・近世の(10)SD049が位置し、その一部が(10)SK050に向かって伸びている。また(10)SK006は風倒木の可能性があり、地下式坑としても未完成である。

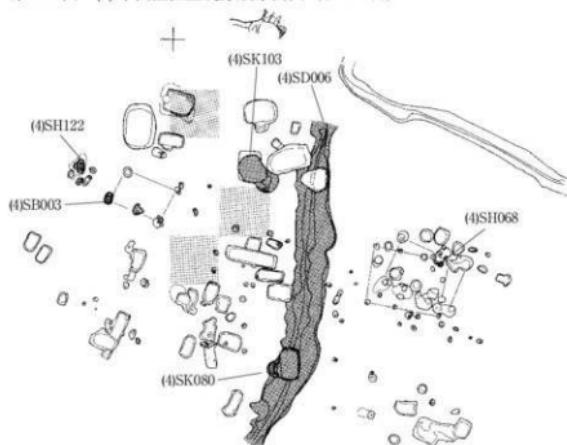
次に地下式坑の時期であるが、覆土中から(4)SK080からは16世紀頃、(4)SK103は15世紀～16世紀、(4)SK115は17世紀頃、(10)SK050は15世紀等の遺物が出土した。いずれも覆土中の小片であるが、関東地方の地下式坑の年代幅の中におさまる^(注10)。また、地下式坑Aの用途であるが、墓を示す出土遺物はなく、方形堅穴遺構や掘立柱建物跡が分布する居住域に立地する点から、県内の他事例同様貯蔵施設と考えられる。地下式坑Bのうち(10)SK035については、土壙墓(10)SK042が近接し、約9m離れた(9)SD040から古瀬戸後期I・IIの灰釉尊式花瓶片が出土した。その他の2基は、周辺も含め墓を示す遺物は出土しなかった。(10)SK035は墓の可能性は残るもの、地下式坑から墓を示す資料が出土していないことから、地下式坑Bも貯蔵施設の可能性が高いであろう。また、地下式坑Aとやや異なり、居住域からやや離れた溝状遺構に接した位置から、屋敷畠際の施設と考えられる。

2 遺物について

全体で最も出土量が多いのは在地産土器である。(2)調査区2トレントと、(4)本調査区西側を中心にカ



第111図 (4) 本調査区土坑分類平面図 ($S=1/400$)



第112図 (4) 本調査区中世遺物出土遺構・グリッド分布 ($S=1/400$)



第113図 (10)O50・P50 ~ (10)T 49 調査区土坑分類平面図 ($S=1/1,000$)

ワラケ・擂鉢・内耳土器が出土した。共伴する常滑・古瀬戸・瀬戸美濃製品から15世紀～17世紀が主体の遺物と考えられる。15世紀主体の(10)O 50・P 50調査区から出土した在地産土器はカワラケが多く、内耳土器は出土していない。また18世紀～19世紀前半主体の(4)本調査区東側からは、在地産土器の出土量が少ない。本遺跡出土の在地産擂鉢・内耳土器は、共伴遺物から16世紀～17世紀を主体とした時期と考えられる。

次に多いのが瀬戸美濃製品である。大窯期から19世紀前半にかけて出土した。大窯期は擂鉢・天目茶碗・皿・壺等、17世紀は皿・擂鉢等、18世紀は皿等、19世紀は染付碗等が出土した。

古瀬戸製品は少量ながら、後期の尊式花瓶、鉢皿、天目茶碗・瓶子・平碗、大小皿類が出土した。常滑製品も少量であるが、8型式～9型式を中心にして片口鉢・壺が出土した。その他は少量であるが、中国産青磁・瓦質土器・志戸呂製品や、非掲載であるが肥前磁器や京焼製品等が出土した。

板碑片と考えられる縁泥片岩は、本遺跡から15.909kg出土した。そのうちの95.4%にあたる15.177kgが(2)調査区からの出土で、2トレンチからはそのうちの14.422kgが出土し、本遺跡全体の90.2%が2トレンチに集中していた。また五輪塔については、長福寺墓地から元和10(1624)年と寛永12(1635)年の銘文が残る製品が発見されている^(注11)。本遺跡出土の3点についてもその形態から17世紀代と考えられる。

3 遺構群の性格について

(1) (2)調査区

(2)調査区の2トレンチからは、応仁2(1468)年の銘文を残す板碑片、17世紀の五輪塔、15世紀の常滑産片口鉢・古瀬戸後期IV(古)の折縁深皿・瀬戸美濃産大窯期の天目茶碗・擂鉢、17世紀の瀬戸美濃産皿・擂鉢の他に、在地産カワラケ・擂鉢・内耳土器・石臼・砥石・鉄製品等が出土した。19世紀前半の遺物が少量確認できるが、これら遺物の主体的な時期は15世紀～17世紀と捉えられる。この多くが(2)SK002から出土した廃棄資料である。板碑・五輪塔と共に、カワラケ・石臼・擂鉢・内耳土器等が多く出土しており、他調査区の様相とは異なっている。大正9(1920)年に廃寺となった長福寺跡^(注12)が西に隣接することから、その関連が考えられる。長福寺については、4項で概観する。

(2) (4)本調査区

この調査区の遺構群は、溝状遺構(4)SD006から西側とその東側で、遺構・遺物の様相が異なる。

(4)SD006から西側は、北側に地下式坑・方形竪穴遺構等が分布し、掘立柱建物跡を挟んで南側に土坑Bが多く分布する。西側の地下式坑・掘立柱建物跡・溝状遺構やグリッドからの出土遺物としては、在地産カワラケ・内耳土器・擂鉢や、古瀬戸後期・瀬戸美濃大窯皿・擂鉢・中国錢等があるが、その主体は15世紀～16世紀で一部17世紀も含まれる。また(4)SD006は台地整形遺構を伴い、西側検出面は東側に比べ40cm～60cm低く、屋敷地として東側と区切っている。屋敷地は、(4)SD006東側の台地整形遺構が明瞭に見られる南北約23m、これら遺構群が分布する東西約25mと推測できる。なお、南側の土坑Bからは出土遺物がなく、この屋敷地に伴う積極的な根拠はないが、長軸が南北方向の土坑Bについては12基がここに集中しており、屋敷地に伴う可能性もある。出土遺物に年代幅があり、地下式坑や土坑の基数も多いことから、少ない基数の遺構群を造り変えながら、一部は17世紀頃まで続いたのであろうか。

一方、(4)SD006の東側は、北側に東西溝の(4)SD001が、中央に掘立柱建物跡と土坑Cが、南側に土坑B等が位置する。これらの遺構や東側のグリッドからは、非掲載遺物も含め、瀬戸美濃皿・鉢類や、志戸

呂産灯明皿、京焼陶器や寛永通寶等が出土した。その主体は18世紀～19世紀前半である。カワラケや内耳土器等の在地産土器の出土は少ない。この東側は、1度の建替えが確認できる掘立柱建物を中心とした、この時期の屋敷地と考えられる。南側に位置する(4)SK008A・B・Cからも、同時期の遺物が出土している。(4)SK008A・B・Cの主体は東西方向に軸をもつ土坑Bであることから、同じく東西方向に軸をもつ土坑Bはこの時期の遺構の可能性があり、これら土坑は(4)SD006より南西側にも分布している。

なお、井戸(4)SE015は時期不明で、どちらの屋敷に伴うか不明である。ただし、次に触れる(10)O 50・P 50調査区で15世紀の屋敷地と井戸が伴う可能性があることから、(4)SE015も15世紀～16世紀を主体とする西側屋敷地に伴う可能性も考えられるであろう。

(3) (10) O 50・P 50調査区

この調査区の溝状遺構・グリッドからは、常滑9型式の壺や、古瀬戸後期の尊式花瓶・平碗・縁軸小皿・瓶子、在地産カワラケ・擂鉢等が出土した。出土量は少なく、その多くは小片で時期を絞ることが難しく、また溝状遺構の遺物はやや前後に時期幅があるが、(4)本調査区西側屋敷地資料と比較すると古い様相があり、全体としては15世紀を主体とした遺物群と捉えられる。この調査区の掘立柱建物跡・地下式坑・溝状遺構・土壤墓・ピット群は15世紀代と捉え、建物跡に建替え痕跡がないことから、短期間の屋敷地と考えられる。また、建物跡からやや離れ、溝状遺構沿いに地下式坑が位置する状況は、これら周辺に屋敷畠があったとも推測できる。井戸(10)SE015からの出土遺物はないが、位置関係からこの屋敷地に伴う可能性も考えられるであろう。

(4) その他の調査区

(10)調査のN 48・N 49調査区からは地下式坑1基・溝状遺構1条と共に16世紀～17世紀主体の遺物が出土した。(10)調査のQ 50・R 50調査区からは溝状遺構1条等と共に14世紀後半～15世紀前半の遺物が出土した。(9)調査のR 49・S 49調査区から水溜遺構と推定した土坑A 2基と溝状遺構1基を検出した。(12)調査のS 49・T 49調査区からは溝状遺構2条と共に15世紀等の遺物が出土した。(10)T 49調査区からは溝状遺構1条が検出された。地下式坑や土坑、溝状遺構が点在するこれら地区については、14世紀後半に遡る遺物も若干出土しているが、15世紀～16世紀頃が主体的には上限で、17世紀以降に統くと考えられる。このように、(4)本調査区西側や(10)O 50・P 50調査区の屋敷地が営まれた時期頃から部分的に台地上の開墾が行われ、江戸時代以降に引き継がれたと推測できる。

4 地域史のなかでの位置づけ

(1) 13世紀～14世紀

本遺跡は、中世「矢木郷」「矢木庄」「八木村」^(注13)に位置する。文永年間(1264～1275)の「造営記録断簡」(香取神宮文書)^(注14)により、当時矢木郷の地頭は、相馬御厨を支配した相馬次郎師常の孫「矢木式部大夫胤家」とわかる^(注15)。本遺跡から南南西に約500m離れた思井堀ノ内遺跡からは、その居館跡(13世紀中頃～後半)と考えられる遺構群等が検出されている^(注16)。

康永4(1345)年3月日の「造営所役注文」(香取神宮文書)^(注17)に「矢木庄役所」の記載があることから、「矢木郷」がこれ以前に莊園化したことがわかるが、莊園領家や在地領主は不明である。13世紀後半から14世紀前半にかけて、他の下総国内でも、公領が莊園化する事例があり、同様の事象と考えられる^(注18)。なお、相馬御厨の在地領主相馬氏は、得宗北条氏の圧迫により南北朝期までに奥州に移住したと考えられる^(注19)。また、応永2(1395)年閏7月5日「岩松満国所領注文」の記載から、「相馬御厨」のうち藤井

郷と手賀郷内布施村はこの時期、鎌倉府奉行衆の山名氏と二階堂氏の所領と指摘されており^(注20)、相馬氏移住後の矢木庄の在地領主も、北条氏滅亡を経て、鎌倉府関連の所領となった可能性がある。

また中中屋敷遺跡に隣接する長福寺墓地からは、永和3（1377）年と応永3（1396）年の以下の銘文を刻む宝篋印塔の基礎2点と、室町時代の宝篋印塔反花座3点が発見されている^(注21)。

- ・宝篋印塔（基礎）「一結衆等各逆衆善根塔 永和第三丁巳孟夏天敬白」ほかの三面は光明真言
- ・宝篋印塔（基礎）「大阿闍梨善海 応永第三丙子霜月日」ほかの三面は光明真言

この時期、真言僧侶が引率し周辺住民の結衆による造塔供養があったことがわかる。ただし、本調査区からはこの時期の造構は検出されていない。この時期の「矢木郷」「矢木庄」の郷民・庄民の暮らしの中心は水田により近い台地縁辺部で、本調査区が位置する台地中央部は山林等の未開墾地と推測される。

（2）長福寺と（2）調査区2トレンチ一括資料

（2）調査区2トレンチから、寺院関連と考えられる廃棄資料が出土した。本遺跡の西側に隣接する長福寺跡は、中中ノ台遺跡として現在発掘調査が進められているが、未整理であるので、ここでは文献資料を元に概観する。

大正6（1917）年の「八木村誌」には、「弘誓山長福寺は、中区にあり。鰐ヶ崎守龍山東福寺の末派にして、真言宗新義派に属し、本尊は不動明王なり。延徳年間（1489～1492）の創立と称すれどもつまびらかならず。」とある^(注22)。また明治12年～15年の『寺院明細帳』にも「延徳年中創立ト古老ノ口碑ニ候」と記されている^(注23)。

慶長17（1611）年の「閬八州真言宗連判留書」には、「下總国小金領之内八木村」として「長福寺」「東福院（寺）」「大勝院」「西円寺」の4寺の記載がある。この文書は、この時期の醍醐三宝院配下寺院を示している^(注24)。東福寺は流山市鰐ヶ崎、大勝院は松戸市根本内、西円寺は流山市桐ヶ谷で、それぞれ現在も法灯をつなぐ真言宗新義派寺院である。また、寛政7（1795）年の「下總国新義真言宗本末帳」には、東福寺は江戸護寺院を本寺とし末寺9寺、門徒寺11寺を記し、西円寺は東福寺を本寺とし末寺5寺、門徒寺16寺を記し、大勝院も東福寺を本寺とし末寺3寺、門徒寺21寺を記している。そして長福寺も東福寺を本寺とし末寺1寺、門徒寺4寺を記しており^(注25)、この4寺が寛政期におけるこの周辺での真言宗新義派の田舎本寺である東福寺を筆頭とした中核寺院とわかる。松下邦夫氏によると、東福寺開創は「文明初期か？（1470？）」、大勝院開創は文明12（1480）年、西円寺開創は不明ながらも初代「亮範」は永正12（1515）年没とし、長福寺初代「宥永」は永正2（1505）年没と指摘している^(注26)。これらの資料的根拠が明らかにされていないが、慶長17（1611）年の「閬八州真言宗連判留書」に記された同村4寺の開創がほぼ同時期と伝える資料が存在するとすれば、長福寺の延徳年間（1489～1492）という口伝も信憑性が高いと考えられる。

また、先に挙げた寛政7（1795）年「下總国新義真言宗本末帳」には、長福寺と同じ中村に門徒寺の寶珠院があったことを記している。寶珠院については、享保7（1722）年の旧長福寺蔵木造愛染明王坐像胎内銘札や「安政7年（1860）御用留」（芝崎村吉野家文書）等でも寺名が確認できる^(注27)。ただし管見のかぎりその後の記録が不明で、明治12年～15年の『寺院明細帳』以前に廃寺となった可能性があり、現在はその位置も定かでない。一方で長福寺跡に所在した愛染堂近くには、「ほうしょう院道」と呼ばれた小道があったと伝えられている^(注28)。また、中中屋敷遺跡の流山市教育委員会調査区は東西約37m、南北約32mの規模で、周囲より一段高く方形に造成された土地で、以前稲荷様と呼ばれた塚があり長福寺

中中屋敷遺跡

中世矢木郷の
中核村落範囲^(注26)



第114図 市野谷々津周辺村落と関連寺院

()は寛政7年「下総国新義真言宗 本末帳」記載の長福寺門徒寺

別院があったと伝えられている^(注29)。調査では、地下式坑1基の他、中・近世陶磁器・銭貨・板碑片等が出土した。今回、この伝承地の北西隅付近に位置する(2)調査区2トレンチから寺院関連遺物が出土し、伝承の長福寺別院が付近にあった可能性が考えられた。ところで別院とは、長福寺の末寺門徒寺の中で唯一所在地不明の寶珠院の可能性が考えられるであろう。なお「文久3年(1863)御用留」(芝崎村吉野家文書)に、「下総国新義真言宗本末帳」で寶珠院とともに長福寺の門徒寺と記載された芝崎村円徳寺の境内図が残されている^(注30)。その本堂は2室×3室+土間・勝手という間取りで、その規模は70m以上と想定できる。(4)本調査区の掘立柱建物跡は13m²~27.6m²であり、長福寺の門徒寺本堂と想定することは困難であろう。また(4)本調査区からは寺院跡と想定できる遺物も出土していない。以上、15世紀~17世紀主体の(2)本調査区2トレンチ一括出土資料については、長福寺やその門徒寺寶珠院との関連が指摘できるであろう。

なお、長福寺墓地からは永和3(1377)年と応永3(1396)年の宝鏡印塔が発見されている。この他にも長福寺には、13世紀半ば~後半頃の木造菩薩形坐像の旧蔵品が伝えられ、先に記した愛染明王坐像も鎌倉~南北朝期造像の可能性が指摘されている^(注31)。つまり延徳年間(1489~1492)開創と伝わる長福寺には、それを廻る寺院もしくは堂を引き継いだ前史があったと考えられる。(2)調査区2トレンチ出土の応仁2(1468)年の板碑も、その前史に由来するものであろう。今後、長福寺跡の発掘成果をふまえて、あらためて検討する必要がある。

(3) 15世紀~16世紀と18世紀~19世紀前半の屋敷地について

次に(10)O 50・P 50の15世紀の屋敷地と、(4)本調査区西側の15世紀~16世紀の屋敷地、そして(4)調査区東側の18世紀~19世紀前半の屋敷地等を地域史の中に位置づけてみたい。中世末の当地域の状況を示す文献資料として、天正19・20(1591・92)年の野々下村・芝崎村の検地帳がある^(注32)。原田信男氏はその分析から両村の村落景観を復原している^(注33)。なお天正検地帳と現在の字名比較から、天正19・20年においてはまだ野々下村にその後の長崎村が含まれ、芝崎村にその後の古間木村が含まれることを指摘している。つまりこの検地帳が示す景観は、本遺跡北側の市野谷々津に向かいの野々下村と長崎村と、本遺跡の東に隣接する芝崎村と古間木村のものである。原田氏の分析は以下のとおりである。当時両村は全耕地の80%前後が水田、15%~20%が畠地で水田耕作中心の村落であること、中世以来の貴重な水田である上田・中田は台地に近接した市野谷々津や小谷部分にあること、坂川沿いの広い谷には下田が広がっていたこと、台地上には一筆あたり6畝程度(約600m²)の狭い畠が集落近辺や山林中に散在していたこと、屋敷地は台地南端にあったこと等を指摘している。当遺跡では、台地上を広く発掘調査し、台地南側の(4)本調査区と(10)O 50・P 50調査区から15世紀~16世紀の屋敷地が検出された。また(10)N 48・N 49調査区や(9)R 49・S 49調査区などから、同時期を上限とする溝状構造や地下式坑などが検出された。これらは原田氏が指摘した台地上の畠の散在状況と符合するのではないだろうか。天正19・20年の検地帳に記載された台地上での部分的な畠開発は、本遺跡においては15世紀頃から始まったと考えられる。

また本遺跡の成果は、こうした台地上の在り方が18世紀~19世紀前半に引き継がれていくことを示している。文献資料から、17世紀に入ると本遺跡が位置する中村の成立も確認できる。中村は、東隣りの芝崎村と西隣の思井村と共に、台地南端から坂川までの広い水田を有した村と位置づけられ^(注34)、村高は慶安年間(1648~51年)204石、元禄年間(1688~1703年)から元治元(1861)年は220石~224石

とほぼ一定に推移している^(注35)。また、明治 17(1884) 年の迅速図に描かれた本遺跡が所在する台地上は、2軒程度の家屋が描かれる程度であり、本遺跡で明らかとなった 15 世紀～19 世紀前半の景観と大きな違いがないように見える。本遺跡のこうした台地上の景観の端緒が、15 世紀頃にあったことが窺えるであろう。

(4) まとめ

本遺跡では、15 世紀から屋敷 1 軒～2 軒と畠が局的に営まれ、こうした景観が江戸時代に引き継がれていく状況が明らかとなった。また長福寺、もしくは門徒寺寶珠院関連の 15 世紀以降の遺物が出土し、15 世紀後半の板碑供養や、17 世紀の五輪塔供養を確認することができた。なお、台地開発と寺院関連の遺物の端緒が符合する状況は、集落の成長と寺院との関わりを示すものであろう。先に示した芝崎村検地帳にも、分付主として長福寺が記載されている^(注36)。

また、こうした場合は、長福寺墓地の永和 3(1377) 年宝篋印塔に見られる「結衆」との関わりも想起される。さらに、本調査区南東端付近の道際に所在した古間木山王塚からは、「庚申待供養」と刻まれた弘治 3(1557) 年の山王二十一仏種子板碑等が出土している^(注37)。これも周辺住民と僧侶とが関わった講の存在を示すものである。これ以降、中世村落は自立の道を進み、「本土寺過去帳」等の文献資料上にも次第に「シハサキ」(初出 1504 年?)・「ノノ下」(初出 1512 年)などの周辺村名が現れ初め、近世村落へと発展していくことが明らかとなっている^(注38)。

注

- 1 流山市教育委員会編 2000 「II. 町畠遺跡 F 地点」「加地区遺跡群 IV」流山市教育委員会
- 2 流山市遺跡調査会編 1983 「千葉県流山市こうのす台第Ⅳ遺跡」流山市遺跡調査会、流山市教育委員会編 1988 「千葉県流山市こうのす台第Ⅳ遺跡 B 地点」流山市教育委員会
- 3 松戸市遺跡調査会編 2005 「行人台遺跡発掘調査報告書」松戸市遺跡調査会
- 4 流山市桐ヶ谷新田遺跡調査会編 1979 「流山市桐ヶ谷新田遺跡」流山市桐ヶ谷新田遺跡調査会編
- 5 三輪野山八重塚遺跡調査会 1982 「千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡」三輪野山八重塚遺跡調査会、流山市遺跡調査会 1985 「千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡 B 地点」流山市遺跡調査会
- 6 早坂広人 2000 「埼玉県における鶴ヶ島台式～打越式の様相」「第 13 回繩文セミナー 早期後半の再検討」繩文セミナーの会、金子直行 2000 「早期後葉土器群における広域編年の可能性について」同、谷藤保彦・関根慎二編 2000 「第 13 回繩文セミナー 早期後半の再検討～記録集一～」繩文セミナーの会
- 7 幸田地区埋蔵文化財発掘調査団編 1972 「幸田貝塚 第 2 次(昭和 46 年度)調査概報」松戸市教育委員会、幸田貝塚発掘調査団編 1977 「幸田貝塚 第 6 次(昭和 51 年度)調査概報」松戸市教育委員会
- 8 千葉県教育委員会 2016 「流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書 3 - 流山市恩井上ノ内遺跡 -」千葉県教育委員会
- 9 「千葉県野菜園芸発達史」編さん会 1985 「千葉県野菜園芸発達史」 P.720 - P.723
- 10 東国中世考古学研究会編 2009 「中世の地下室」高志書院 P.191
- 11 流山市教育委員会 1971 「流山市金石文記録集上巻」 P.74、流山市教育委員会 1971 「流山市金石文記録集中巻」 P.121
- 12 千葉県文書館蔵 「寺院明細帳」付箋箇所等

- 13 松下邦夫 1994「矢木・八木の中近世」『流山市史研究第11号』
- 14 千葉県史編纂審議會 1957『千葉縣史料 中世篇 香取文書』P.11
- 15 注12と同じ
- 16(財)千葉県教育振興財團 2006「流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1 -流山市思井掘ノ内遺跡(中世編)-」
(財)千葉県教育振興財團
- 17(財)千葉県史料研究財團 1997『千葉県の歴史 資料編 中世2』千葉県 P.205
- 18(財)千葉県史料研究財團 2007『千葉県の歴史 通史編 中世』千葉県 P.572
- 19(財)千葉県史料研究財團 2007『千葉県の歴史 通史編 中世』千葉県 P.575
- 20 山田邦明 1995『鎌倉府と関東－中世の政治秩序と在地社会－』校倉書房 P.233
- 21 一色勝正 1992「長福寺の宝鏡印塔」『流山市史研究第9号』、流山市教育委員会 2009『中世の流山を探る 附、流山市内板碑集成』流山市立博物館調査研究報告書 26 P.16
- 22 流山市教育委員会市史編さん室 1982「流山市史 近代資料編 八木村誌』P.515 ※西暦表記は本書追記
- 23 千葉県文書館蔵『寺院明細帳、千葉県文書館蔵 1879・1882『寺院明細帳関係』
- 24 柳田良洪 1964『真言密教成立過程の研究』山喜房佛書林 P.516 - P.521
- 25 寺院本末帳研究会 1981『江戸幕府寺院本末帳集成 上』P.1715 - P.1717
- 26 松下邦夫 1991「名都僧の集落と寺院」『流山市史研究第8号』
- 27 増崎勝仁 2012「木造愛染明王坐像船内銘札」『流山市史研究第21号』口絵2、流山市教育委員会 1972『流山市史料第三集』P.119
- 28 増崎勝仁 2014「流山市旧長福寺愛染明王坐像の奉納物について」『流山市史研究第22号』
- 29 流山市教育委員会 1998「平成9年度流山市市内遺跡発掘調査報告書 I、中中屋敷遺跡」
- 30 流山市教育委員会 1972『流山市史料集第三集』P.132 - 134
- 31 流山市教育委員会 2009『中世の流山を探る 附、流山市内板碑集成』P.15、増崎勝仁 2012「旧長福寺木造愛染明王坐像」『流山市史研究第21号』口絵1
- 32 流山市立博物館 1987『流山市史近世資料編I』 P.115 - 128、138 - 147
- 33 原田信男 1999「中世村落の景観と生活－関東平野東部を中心として－」思文閣出版 P.96 - P.110
- 34 注12と同じ
- 35 松下邦夫 1983「市域村落の成立を考える」『流山市史研究創刊号』
- 36 流山市立博物館 1987『流山市史近世資料編I』 P.142
- 37 注28と同じ、流山市教育委員会 2009『中世の流山を探る 附、流山市内板碑集成』P.102
- 38 注12と同じ

写 真 図 版



中中屋敷遺跡

遺跡周辺航空写真



(4) 調査前状況



(5) 調査前状況



(6) 調査前状況



(7) 調査前状況



(8) 下層本調査状況



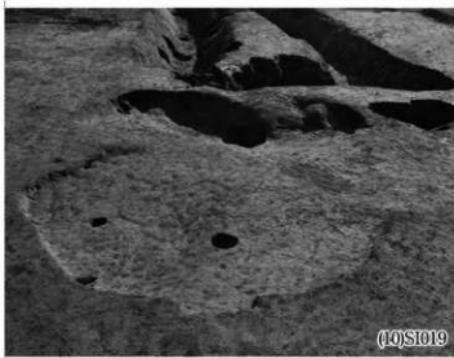
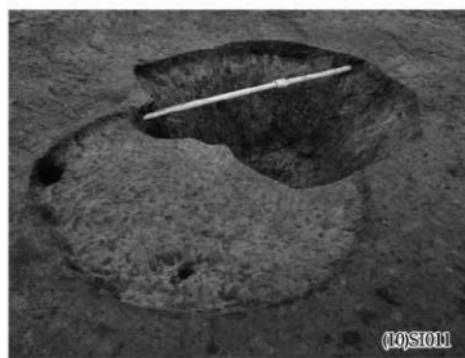
(9) 下層本調査状況

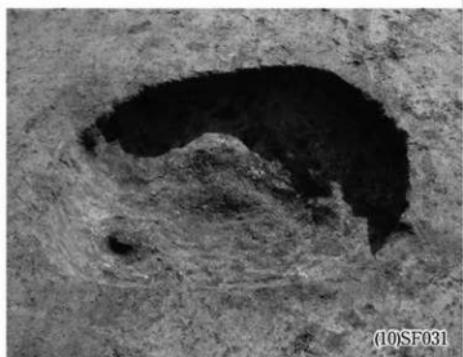
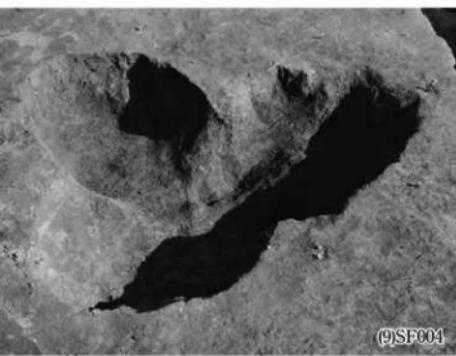
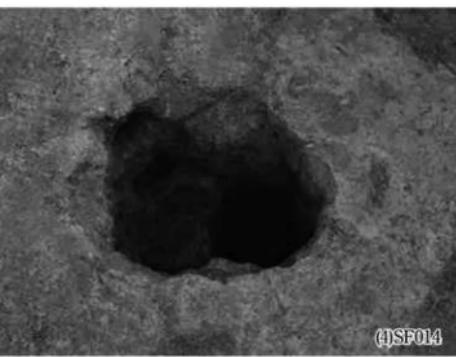
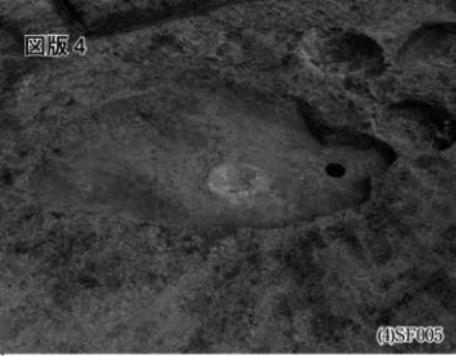


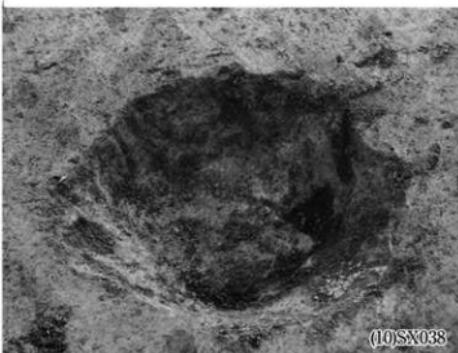
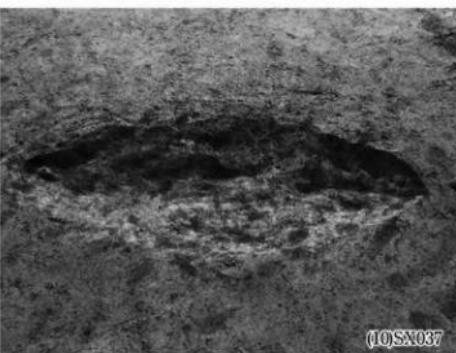
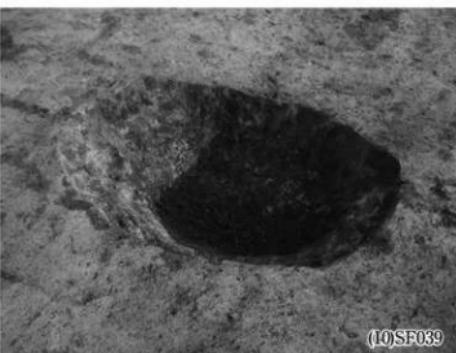
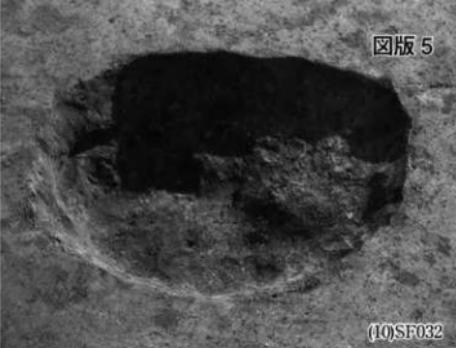
(10) 上層構造検出状況

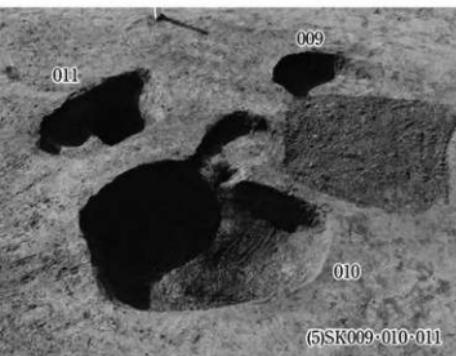
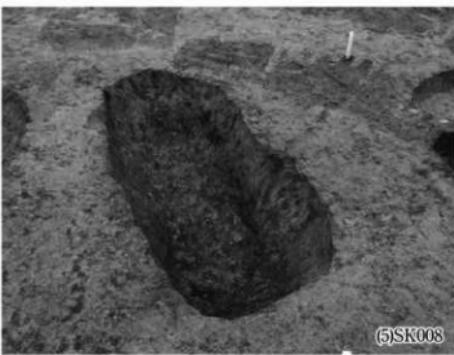
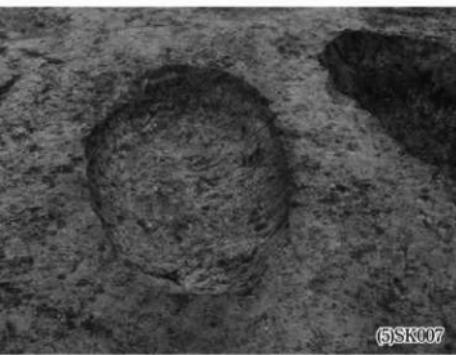
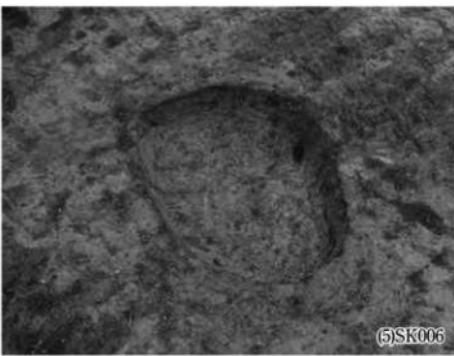
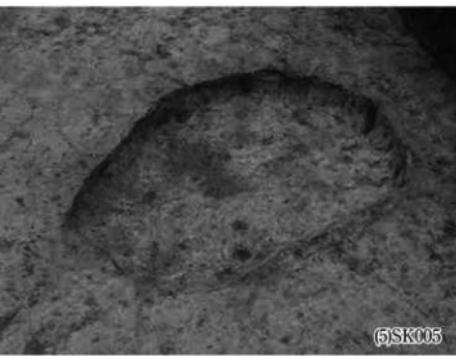
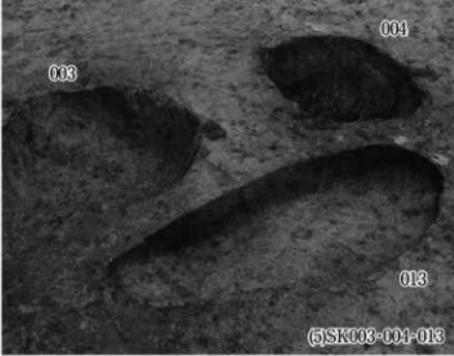


(11) 上層構造検出状況









015

014

(5)SK014·015

017

018

(5)SK017·018

022

021

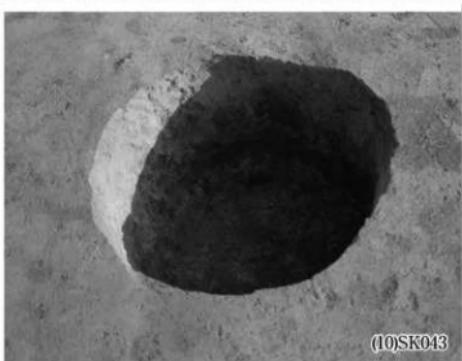
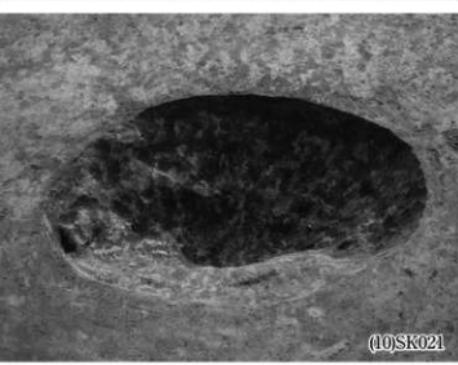
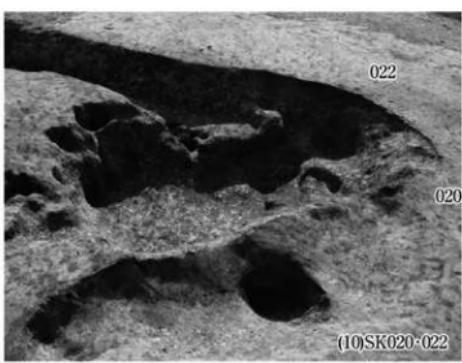
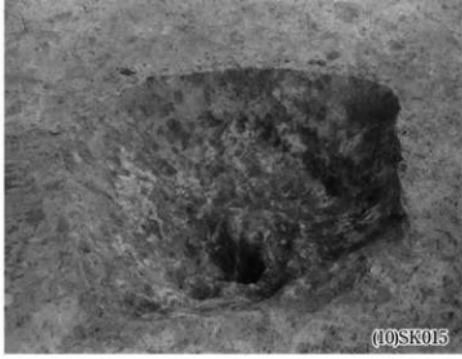
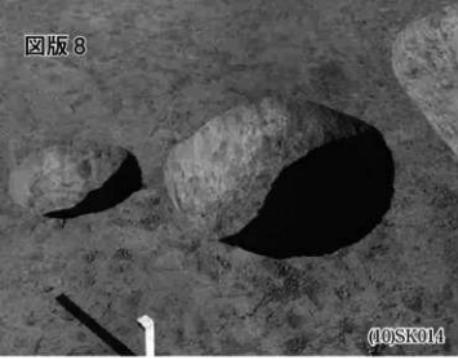
(5)SK021·022

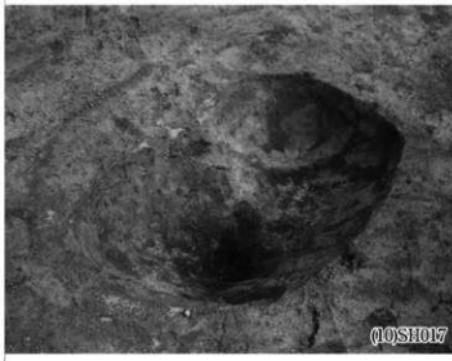
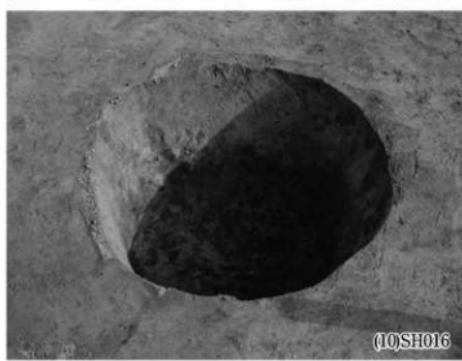
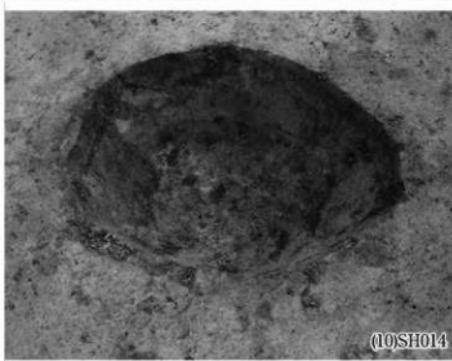
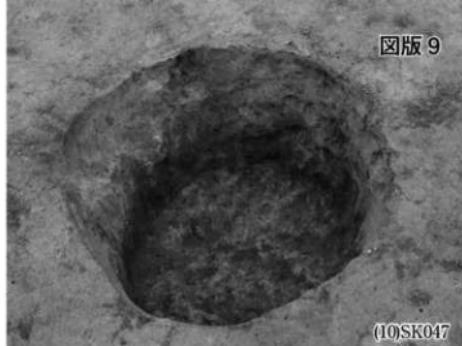
(5)SK026

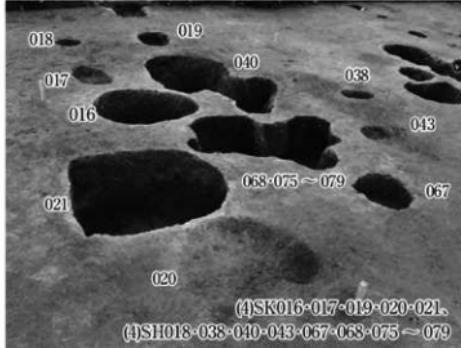
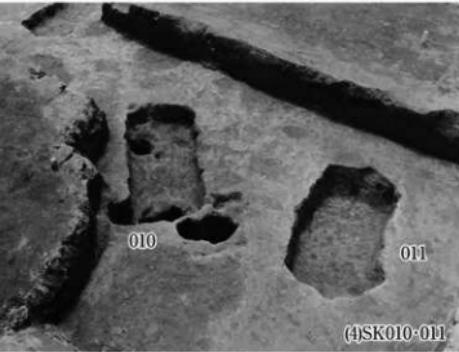
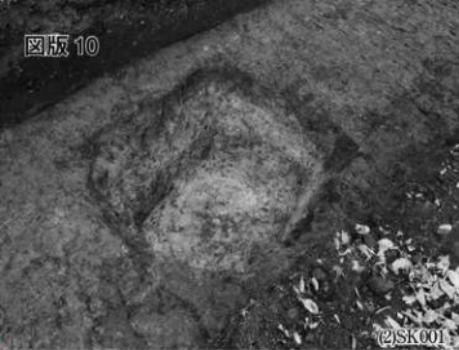
(9)SK003

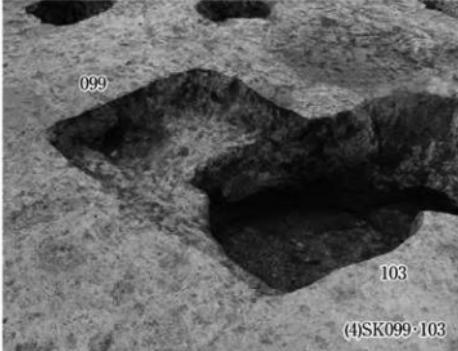
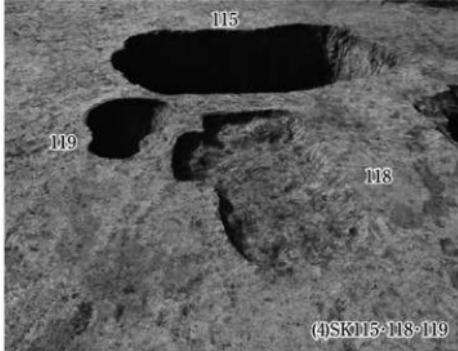
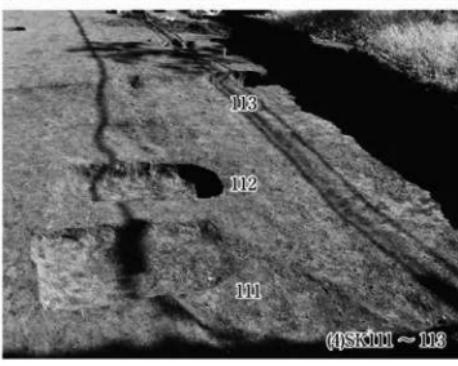
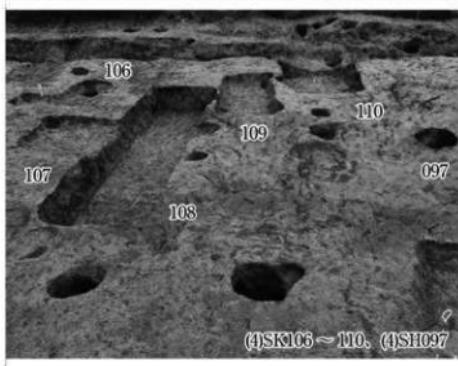
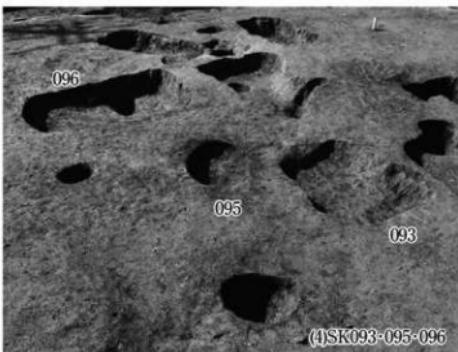
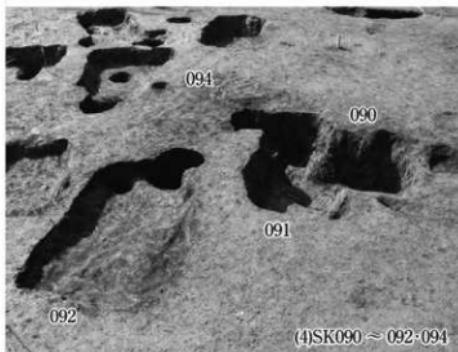
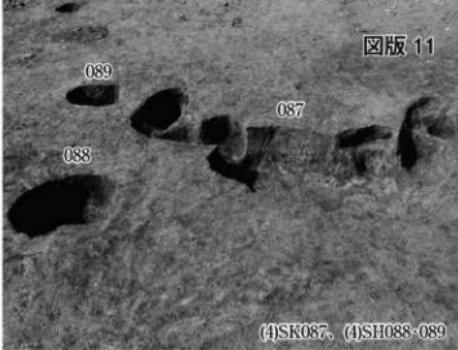
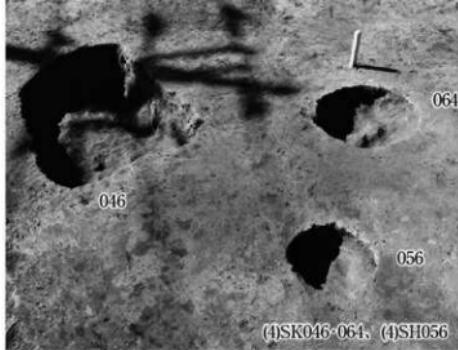
(9)SK005

(10)SK010



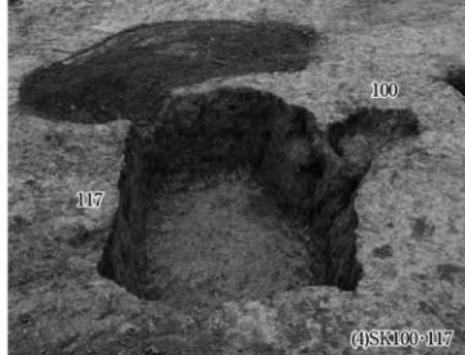








(4)SK114



100

(4)SK100-117



(4)SK080



(4)SK102



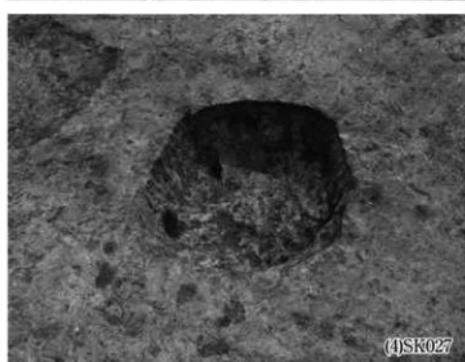
(4)SK103



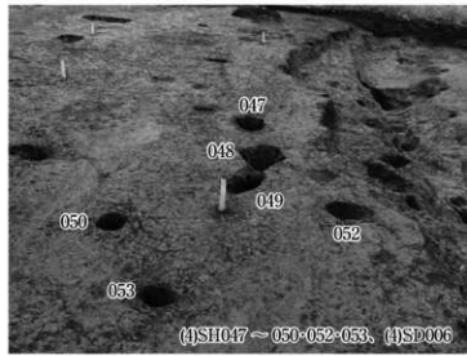
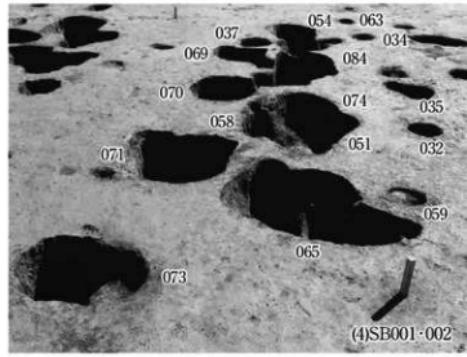
(4)SK105



(4)SK115



(4)SK027



図版 14



(9)SK001



(9)SK002



(9)SD001



(10)SK017



(10)SK042



(10)SK006



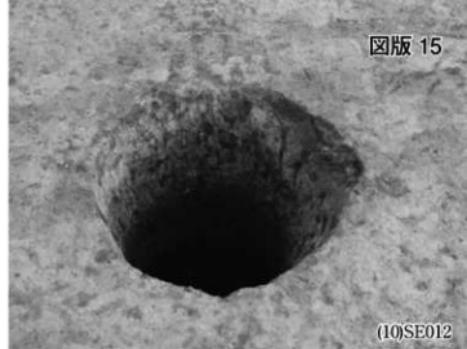
(10)SK030



(10)SK035



(10)SK050



(10)SE012



(10)SB001



(10)SD013



(10)SD040



(10)SD040 遺物出土状況



(10)SD049



(10)SD051



旧石器時代出土遺物（1）

第4文化層第2ブロック

チャート



38 (a~d)



39 (a~c)



40 (a+b)

凝灰岩



41



42



43



44



45



46 (a~h)



47 (a+b)

ホルンフェルス



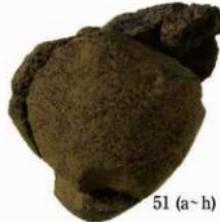
48



49



50



51 (a-h)

第4文化層
単独出土

1

第4文化層単独出土



1



2



1

時期不明出土遺物



2



3



4



5



6



7



8





安山岩



石英斑岩



安山岩



砂岩



チャート



玉髓

ホルンフェルス
凝灰岩

片麻岩

第4文化層第2ブロック 融

旧石器時代出土遺物 (4)



(10)SI008-4



(10)SI036-2



(10)SI036-5



(10)SI008-5



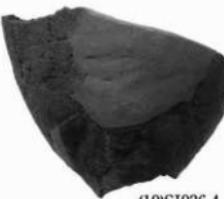
(10)SI036-3



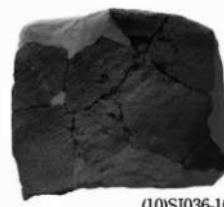
(10)SI036-9



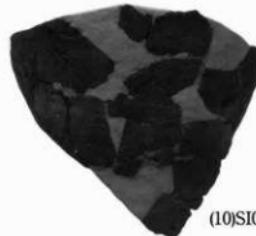
(10)SI036-1



(10)SI036-4



(10)SI036-10



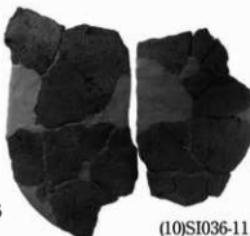
(10)SI036-6



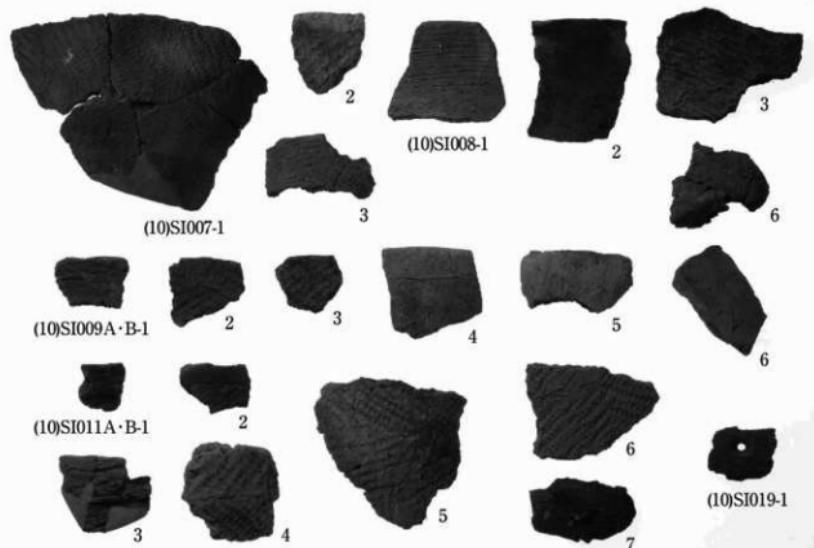
(10)SI036-7



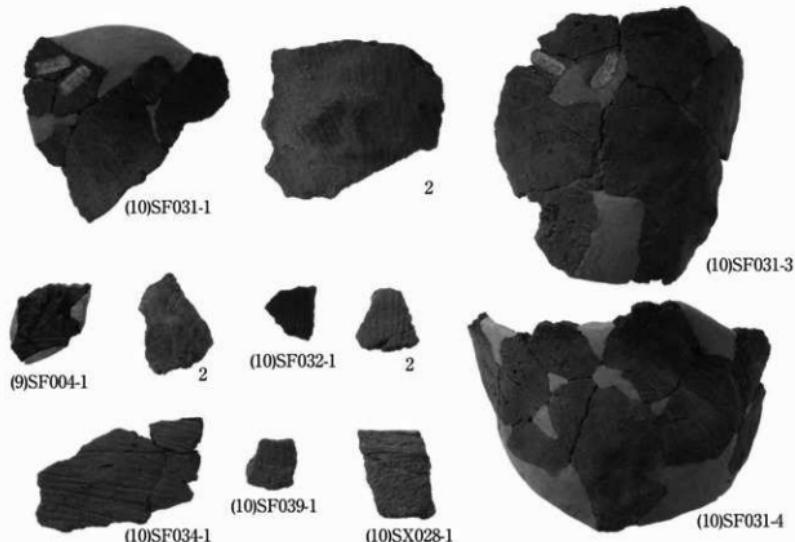
8



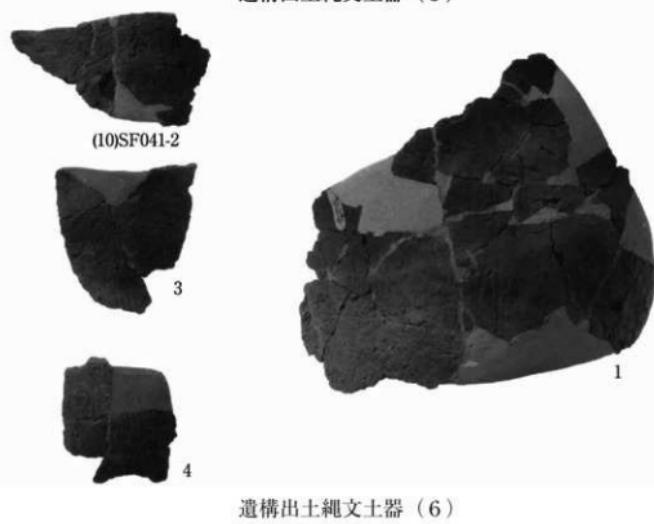
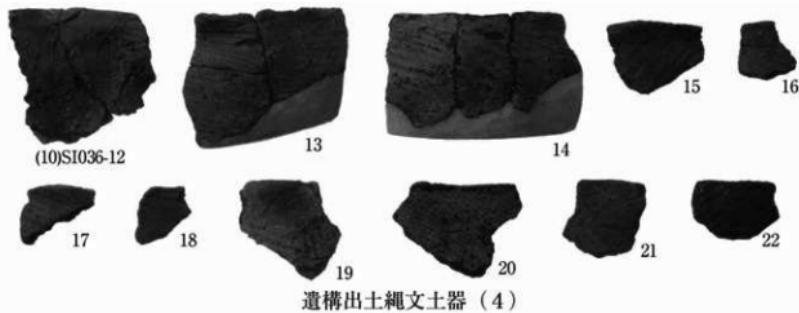
(10)SI036-11

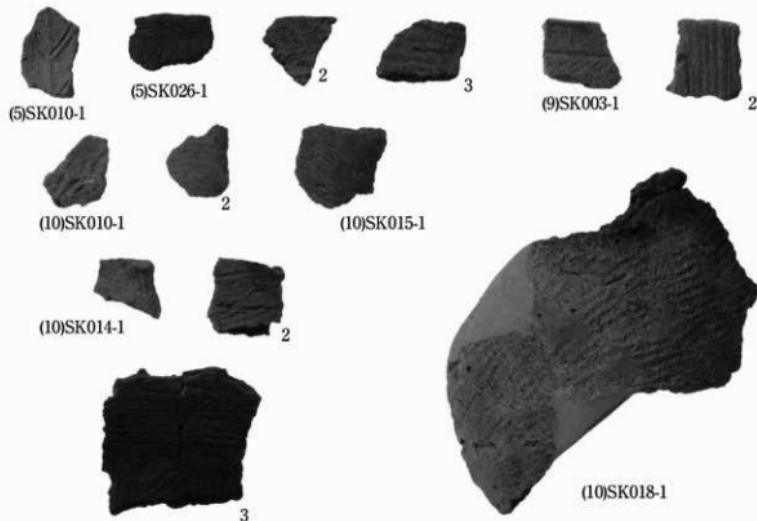


遺構出土縄文土器（2）

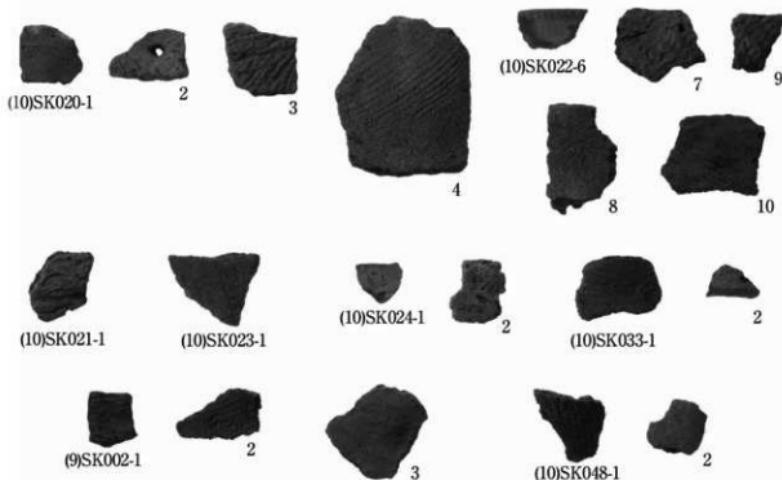


遺構出土縄文土器（3）

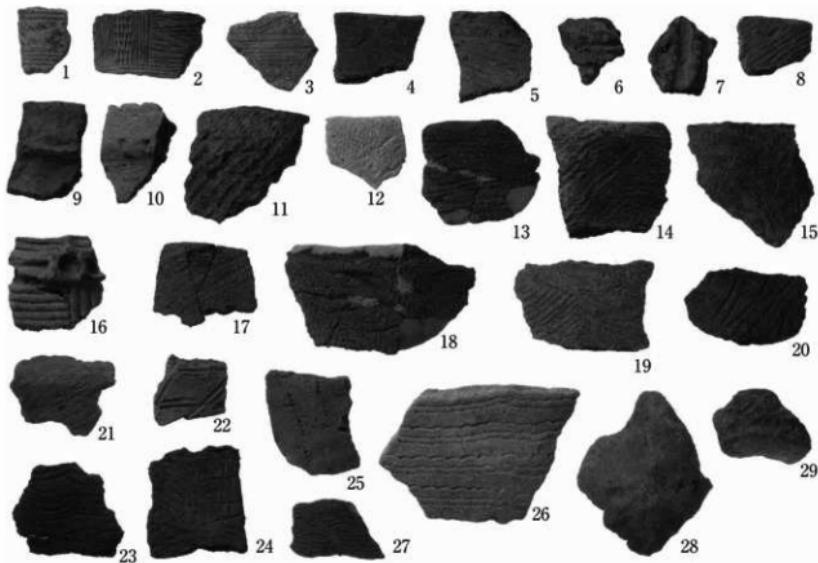




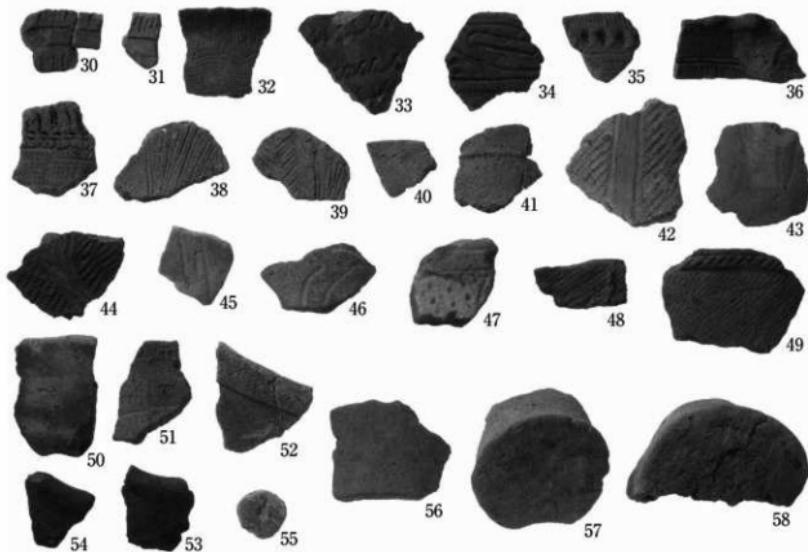
遺構出土縄文土器（7）



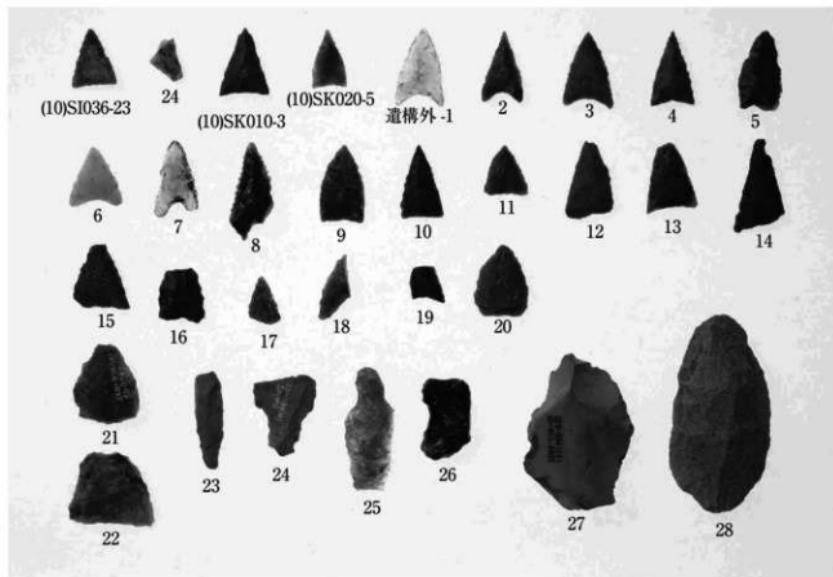
遺構出土縄文土器（8）



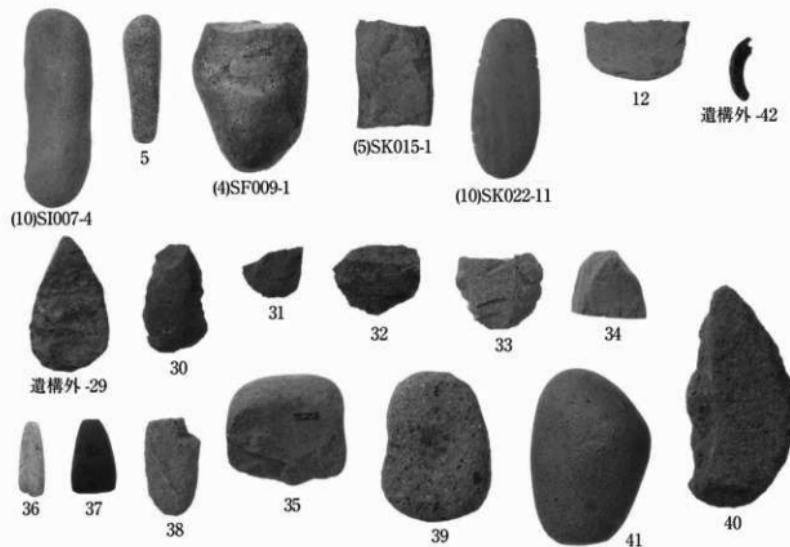
遺構外出土縄文土器（1）



遺構外出土縄文土器（2）、土製品



縄文時代石器（1）



縄文時代石器（2）、石製品



(10)SF032-3

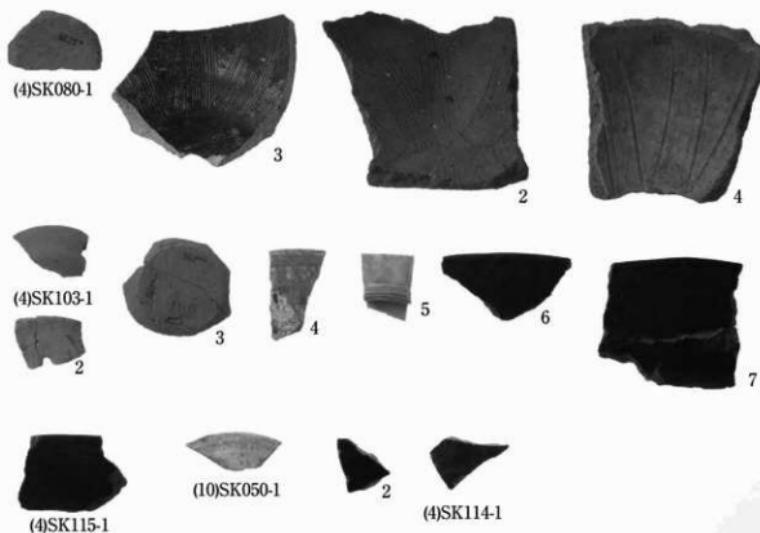
縄文時代石器（3）



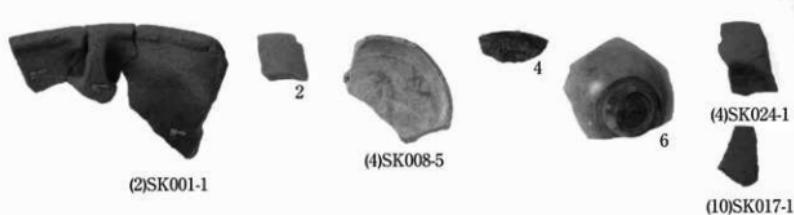
(9)SF004 出土貝類



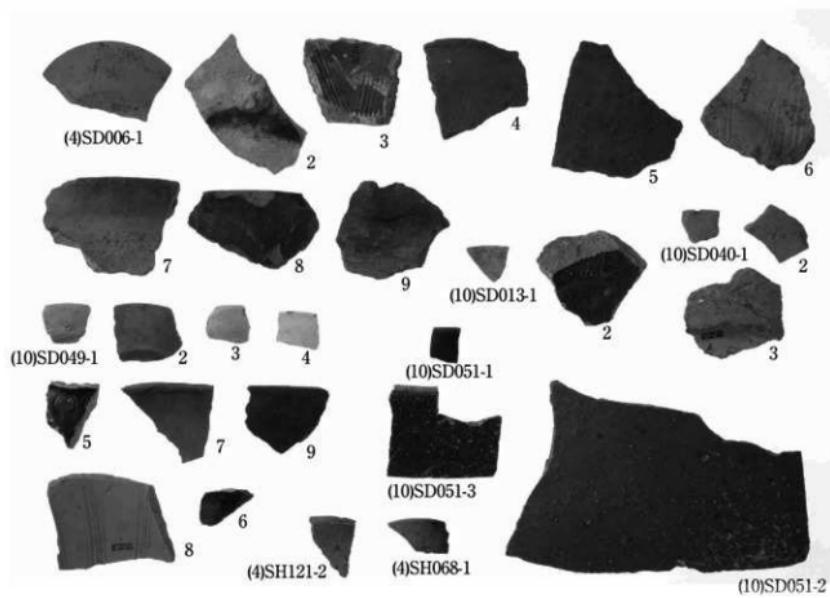
出土中・近世陶磁器・土器類（1）



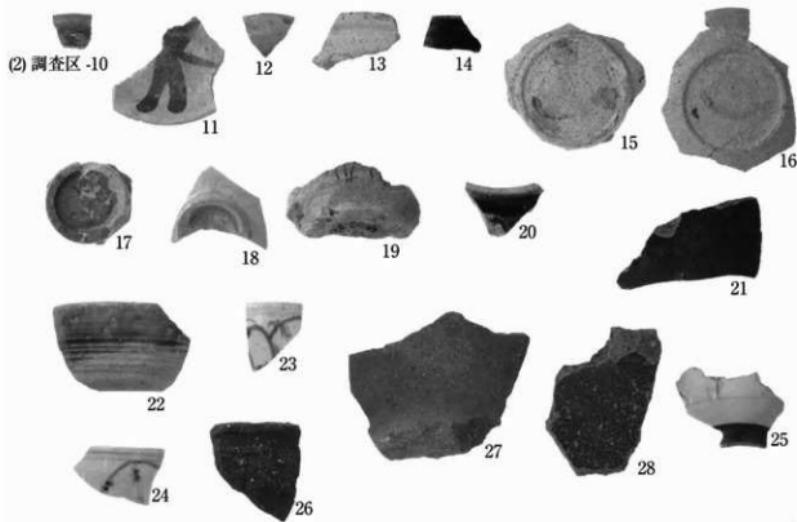
出土中・近世陶磁器・土器類（2）



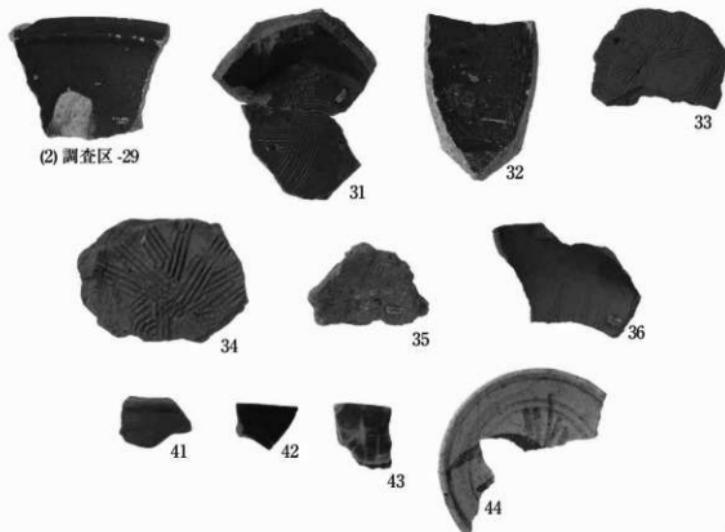
出土中・近世陶磁器・土器類（3）



出土中・近世陶磁器・土器類（4）



出土中・近世陶磁器・土器類（5）



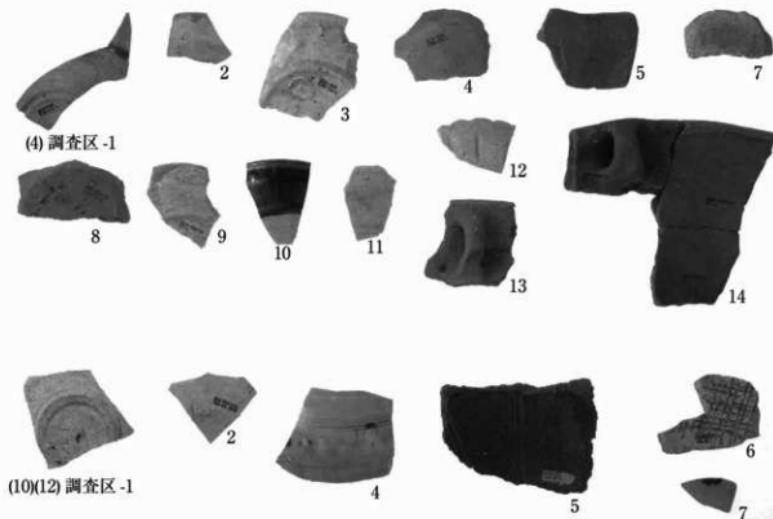
出土中・近世陶磁器・土器類（6）



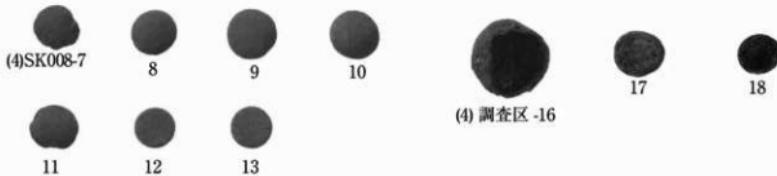
(2) 調査区 -37



出土中・近世陶磁器・土器類（7）



出土中・近世陶磁器・土器類（8）



出土中・近世土製品



出土古代遺物



(2) 調査区 -51



52



53



55



56



57



54



58



60



(2) 調査区 -62



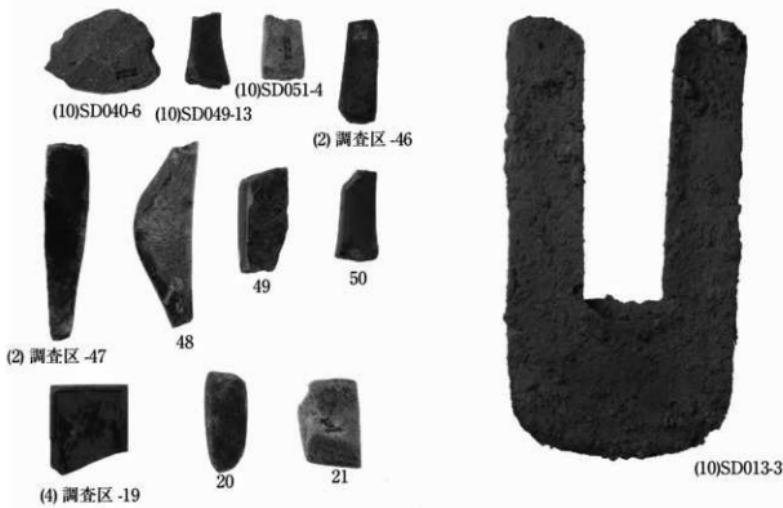
59



(2) 調査区 -61

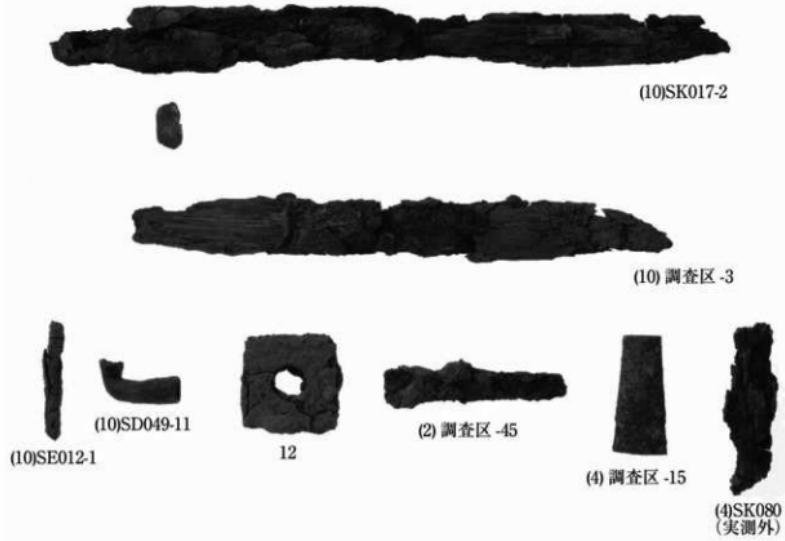


出土中・近世石製品（1）

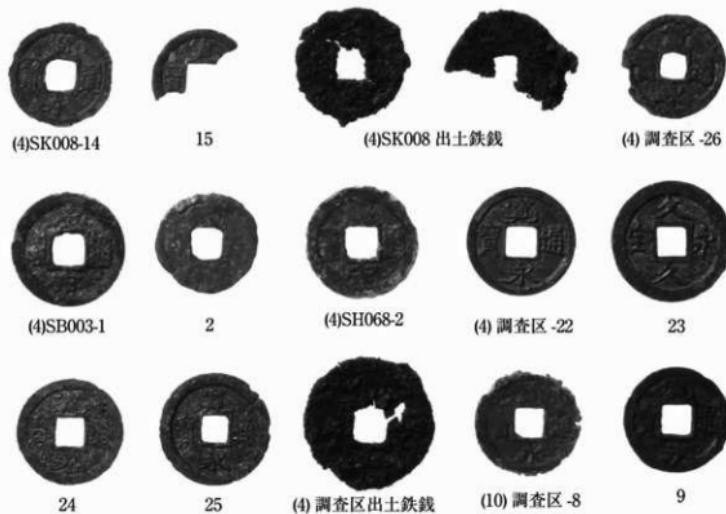


出土中・近世石製品（2）

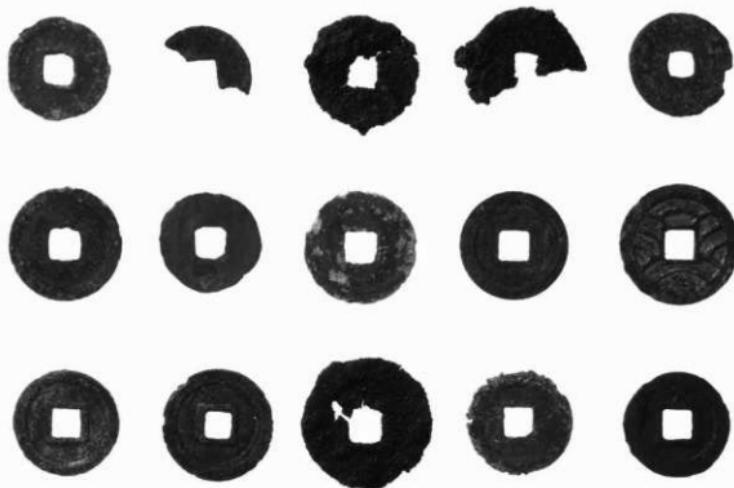
出土中・近世金属製品（1）



出土中・近世金属製品（2）



出土錢貨（表）



出土錢貨（裏）

報告書抄録

ふりがな	ながれやまうんどうこうえんしゅうへんくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書							
副題名	流山市中中屋敷遺跡							
卷次	4							
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	安井健一、田島新、糸原清、渡辺新							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦 2017年3月27日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 (日本測度系)	東経 (日本測度系)	調査期間	調査面積等	調査原因	
なかなかやしょ 中中屋敷	流山市中中屋敷 82ほか	12220	034	35度 50分 55秒	139度 55分 10秒	19980223 ~ 20110729	37.964m ²	土地区画整理事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中中屋敷	包蔵地	旧石器	石器集中地點 2か所 石器出土地點 11か所	ナイフ形石器、尖頭器、搔器、削器、石刃、剥片、RF、石核、敲石、接合資料等				
	集落跡	縄文	竪穴住居跡 7軒 炉穴・焼土遺構 24基 土坑・ピット 42基 陥穴 3基 貝プロック 1地点	縄文土器(早期～晩期)、 縄文時代石器(石錐、石匙、石錐、削器、打製石斧、磨製石斧、磨石類、石皿)、土製品(土器片、円盤)、石製品(勾玉)				
	包蔵地	奈良・平安		土師器、須恵器				
	集落跡	中・近世	地下式坑 9基 方形堅穴遺構 2基 大型土坑 3基 土坑 47基 (うち土坑墓 2基) 井戸 2基 溝状遺構 10条 獨立柱建物跡 4棟 ピット群 1箇所 単独ピット 78基	陶磁器、カワラケ、燈籠、土製品(土製円盤・転用砥石)、石製品(板碑、石塔類、石臼、砥石)、金属製品(刀子、煙管・釘)、錢貨				
要約								

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第20集
流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書4
—流山市中中屋敷遺跡—

平成29年3月27日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町1-1
印 刷 株式会社白樺写真工芸
千葉市稲毛区山王町102-5
